九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—4—

甘木市所在柿原古墳群の調査　I

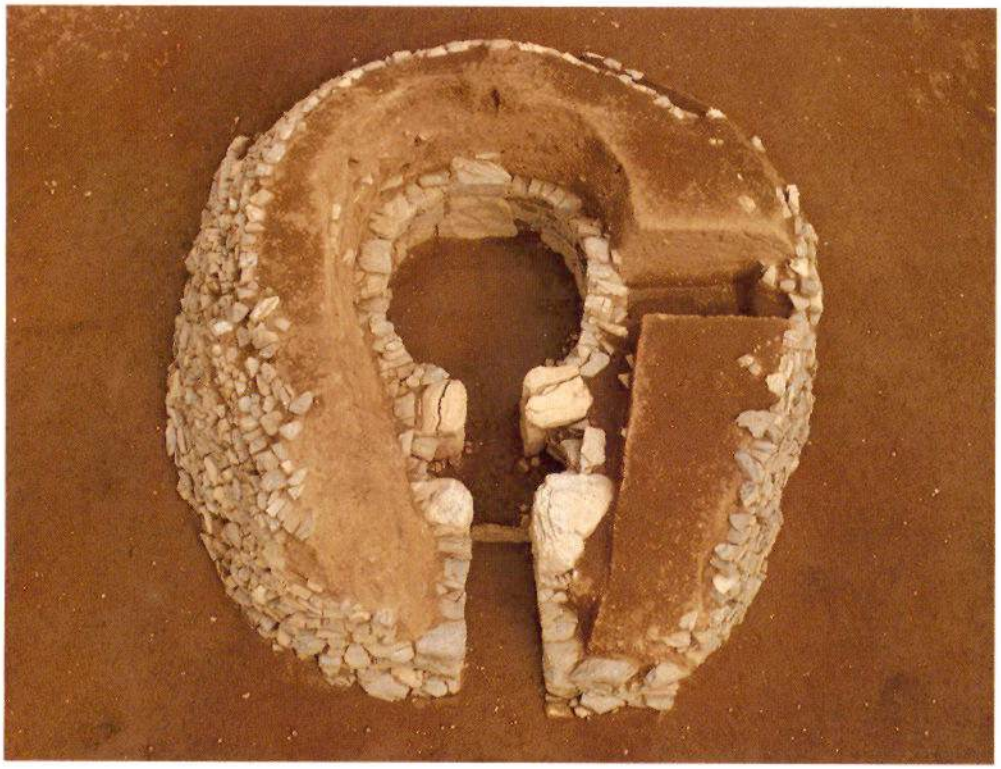
1984

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—4—

甘木市所在柿原古墳群の調査 I



G・1号墳石室全景

柿原古墳群周辺航空写真

序

本書は，福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告であります。

今回の報告は，昭和56・57年度に行った甘木市所在の柿原古墳群についてのもので，その第1冊目にあたります。

柿原古墳群の調査は，現在も継続して行われておりますが，順次その後の調査成果を刊行していく予定であります。

調査に際しましては，地元の方々を始め，多くの皆様方のご協力をいただき，多大な成果をあげることができました。

本書の刊行にあたり，種々のご協力をいただきました関係各位に深く感謝いたします。

昭和59年3月31日

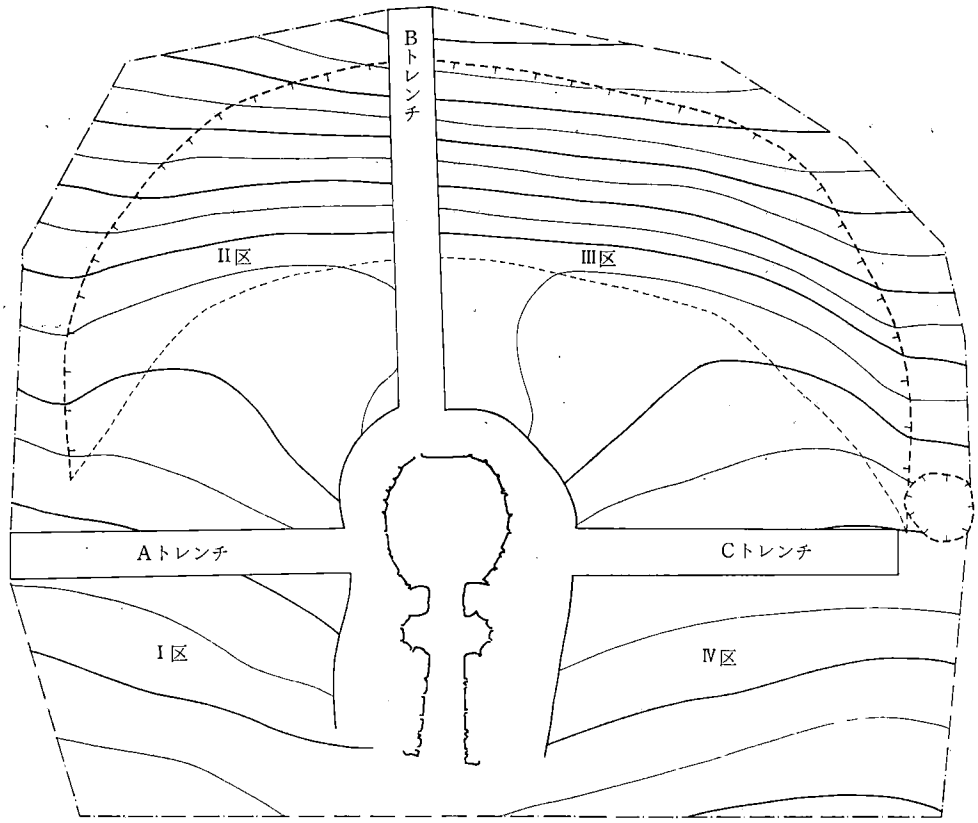
福岡県教育委員会

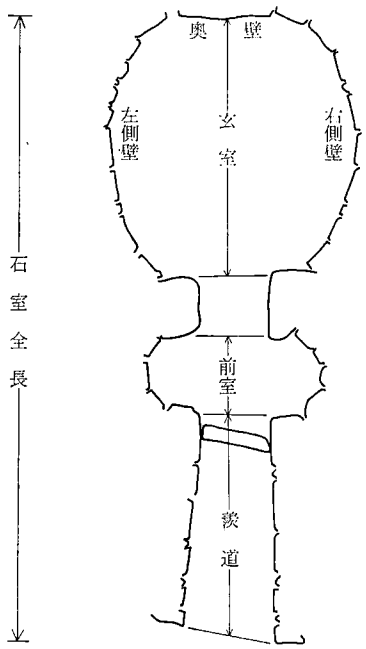
教育長　友　野　　隆

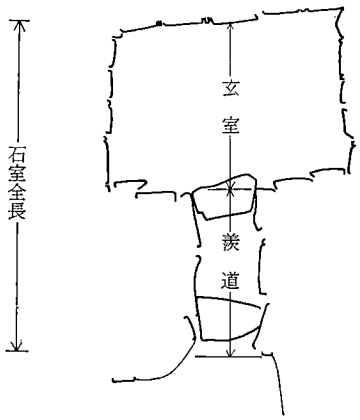
例　言

1. 本書は，福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて実施した，埋蔵文化財発掘調査の報告書で，第4集目にあたる。
2. 本書に収録した遺跡は，甘木市大字柿原所在の柿原古墳群についてのもので，その第1冊にあたる。
3. 柿原古墳群の発掘調査は，福岡県教育委員会文化課が担当し，遺構の実測及び写真の撮影は，調査補助員の協力を得て，調査担当者が行った。
4. 報告書の作成に際し，遺構と遺物の実測，及び製図は各調査担当者の他，調査補助員並びに手柴淳子・塩足里美・本田ひろみ各氏の協力を得た。
5. 遺物写真は，九州歴史資料館石丸洋主任技師指導のもとに平島美代子氏，および調査補助員の平嶋文博氏の撮影によるものである。

   なお，巻頭図版2に使用の航空写真は，日本道路公団の提供によるものである。
6. 出土遺物の整理は，岩瀬正信氏指導のもとに，福岡県教育庁管理部文化課甘木発掘事務所にて行ない，鉄器の処理は，九州歴史資料館横田義章技術主査指導のもとに九州歴史資料館にて行った。
7. 本文中の遺構標記に際しては，最初のアルファベットは地区名を，次のアルファベットは遺構の種類を示した。Cは石棺墓および石棺系石室，Dは土壙墓，Pは土壙を現わす。
8. 本文中に使用した古墳石室各部の名称は，次頁挿図に準拠し，本文中の遺物番号と図版写真番号は共通する。
9. 本書の執筆は，新原正典，中間研志，池辺元明及び平嶋文博が分担し，文末に氏名を明記した。
10. 本書の編集は，新原正典が担当したが，平嶋文博の協力によるところが大きい。


Bトレンチ
II区
III区
Aトレンチ
Cトレンチ
I区
IV区


奥壁
左側壁
玄室
右側壁
石室全長
前室
羨道


石室全長
玄室
羨道

古墳石室各部の名称

本 文 目 次

頁
Ⅰ はじめに……1
Ⅱ 調査に至る経過……3
Ⅲ 位置と環境……6
Ⅳ G地区の調査……11
1．調査の概要……11
2．1 号 墳……11
3．C — 1……36
4．C — 2……41
5．D — 1……42
Ⅴ H地区の調査……44
1．調査の概要……44
2．1 号 墳……44
3．2 号 墳……50
4．3 号 墳……63
5．C — 1……83
6．C — 2……84
7．C — 3……85
8．C — 4……86
9．D — 1……89
10．D — 2……91
11．P — 1……99
12．G・H地区表採遺物……99
Ⅵ S地区の調査……101
1．調査の概要……101
2．1 号 墳……101
3．C — 1……104
4．P — 1……106
Ⅶ おわりに……107

図　版　目　次

本文対照頁

巻頭図版　1　G・1号墳石室全景……11
　　2　柿原古墳群周辺航空写真……6
図版1　(1)　古墳群全景航空写真（南から）……3
　　(2)　古墳群全景航空写真（西から）……3
図版2　(1)　古墳群全景（南から）……3
　　(2)　G・H地区航空写真（東から）……11
図版3　(1)　1号墳墳丘（調査前）……11
　　(2)　1号墳石室全景……11
図版4　(1)　1号墳石室全景……11
　　(2)　1号墳Aトレンチ土層……13
図版5　(1)　1号墳Bトレンチ土層……13
　　(2)　1号墳Cトレンチ土層……13
図版6　(1)　1号墳Ⅰ・Ⅳ区内護列石……14
　　(2)　1号墳Ⅱ・Ⅲ区内護列石……14
図版7　(1)　1号墳Ⅰ・Ⅱ区内護列石……14
　　(2)　1号墳Ⅲ・Ⅳ区内護列石……14
図版8　(1)　1号墳玄室……14
　　(2)　1号墳玄室右側壁……14
図版9　(1)　1号墳石室全景（墳丘除去後）……14
　　(2)　1号墳Ⅰ区祭祀土器群出土状況……15
図版10　1号墳出土須恵器……11～19
図版11　1号墳出土須恵器……19～21
図版12　1号墳出土須恵器……21～22
図版13　1号墳出土須恵器……22～25
図版14　1号墳出土須恵器……27～28
図版15　1号墳出土須恵器・土師器……25～29
図版16　1号墳出土土師器……29～31
図版17　1号墳出土土師器・鉄器……31・32
図版18　(1)　C－1，C－2遠景（西から）……36
　　(2)　C－1全景……36

本文対照頁

図版19 (1) C－1……36
(2) C－1……36
(3) 棺内出土鉄刀・鉄刀子……39
(4) 棺内出土櫛……40
図版20 (1) C－2……41
(2) C－2……41
(3) 棺内出土鉄刀子……41
図版21 (1) D－1……42
(2) D－1……42
図版22 (1) H地区全景（北から）……44
(2) H地区全景（南から）……44
図版23 (1) 1号墳全景……44
(2) 1号墳玄室左側壁……46
図版24 (1) 1号墳羨道部左壁……47
(2) 1号墳出土遺物……47
図版25 (1) 2号墳，C－4遠景南から……50
(2) 2号墳全景……50
図版26 (1) 2号墳石室前面……52
(2) 2号墳玄室奥壁……52
図版27 (1) 2号墳玄室右側壁……52
(2) 2号墳羨道部右壁……53
図版28 (1) 2号墳前庭部右壁……53
(2) 2号墳前庭部遺物出土状況……53
図版29 (1) 2号墳閉塞・遺物出土状況……53
(2) 2号墳閉塞状況（玄室より）……53
図版30 2号墳出土須恵器……55～57
図版31 2号墳出土須恵器……57～59
図版32 2号墳出土須恵器・土師器……61
図版33 (1) 3号墳全景（調査前，北から）……64
(2) 3号墳全景……64
図版34 (1) 3号墳内護列石全景……64
(2) 3号墳内護列石全景……64
図版35 (1) 3号墳内護列石全景……64

本文対照頁

(2) 3号墳石室全景……64
図版36 (1) 3号墳玄室右側壁……65
(2) 3号墳羨道部右壁……65
図版37 (1) 3号墳玄室奥壁……65
(2) 3号墳玄室玄門……65
図版38 (1) 3号墳玄門部仕切石……65
(2) 3号墳前室遺物出土状況……66
図版39 (1) 3号墳閉塞状況（墓道より）……65
(2) 3号墳閉塞状況（玄室内より）……65
図版40 3号墳出土須恵器……67～69
図版41 3号墳出土須恵器……69～71
図版42 3号墳出土須恵器……71～73
図版43 3号墳出土須恵器……74
図版44 3号墳出土土師器・弥生式土器……75・79
図版45 3号墳出土耳環・鉄器・馬具……76～79
図版46 3号墳出土馬具……77
図版47 (1) C－1……83
(2) C－1……83
図版48 (1) C－3……85
(2) C－3……85
図版49 (1) C－3……85
(2) 棺内出土遺物……86
(3) C－2……84
図版50 (1) C－4……86
(2) C－4……86
図版51 (1) D－1……89
(2) D－1……89
図版52 (1) D－1内遺物出土状況……91
(2) D－1出土遺物……91
図版53 (1) D－2……91
(2) D－2……91
図版54 (1) D－2棺内遺物出土状況……92
(2) D－2棺外遺物出土状況……92

本文対照頁

図版55　D－2出土鉄器……93
図版56　(1)　2号墳周溝とC－4の切合状況……86
　　(2)　P－1……99
図版57　(1)　G地区出土陶質土器……40
　　(2)　H地区C－4付近出土須恵器……87
　　(3)　G・H地区表採遺物……100
図版58　(1)　S地区遠景（北から）……101
　　(2)　S地区全景（南から）……101
　　(3)　1号墳……101
図版59　(1)　1号墳石室全景……102
　　(2)　1号墳玄室……102
図版60　(1)　1号墳玄室左側壁……102
　　(2)　1号墳出土遺物……102
図版61　(1)　C－1……104
　　(2)　P－1……106

挿　図　目　次

頁

第1図　九州横断自動車道路線図……4
第2図　柿原古墳群内字図（1/4,000）……5
第3図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……折り込み
第4図　柿原古墳群G・H地区地形図（1/600）……折り込み
第5図　発掘風景……9
第6図　G地区遺構配置図（1/600）……10
第7図　G・1号墳丘実測図（1/200）……12
第8図　G・1号墳墳丘除去後実測図（1/200）……13
第9図　G・1号墳土層図……折り込み
第10図　G・1号墳石室実測図（1/60）……折り込み
第11図　G・1号墳I区遺物出土状況実測図（1/30）……16
第12図　G・1号墳出土須恵器実測図①（1/3）……18
第13図　G・1号墳出土須恵器実測図②（1/3）……20
第14図　G・1号墳出土須恵器実測図③（1/3）……23

第15図　G・1号墳出土須恵器実測図④（1/3）……24
第16図　G・1号墳出土須恵器実測図⑤（1/3）……26
第17図　G・1号墳出土須恵器実測図⑥（1/3）……27
第18図　G・1号墳出土須恵器実測図⑦（1/6）……折り込み
第19図　G・1号墳出土土師器実測図①（1/3）……30
第20図　G・1号墳出土土師器実測図②（1/3）……31
第21図　G・1号墳出土鉄器実測図（1/2）……32
第22図　G・1号墳玄室内埋土出土土師器（1/2）……32
第23図　G・1号墳出土弥生式土器実測図（1/4）……33
第24図　G・1号墳出土杯蓋法量分布図……34
第25図　G・1号墳出土杯身法量分布図……35
第26図　G・C―1実測図（1/60）……37
第27図　G・C―1主体部実測図（1/30）……折り込み
第28図　G・C―1副葬品出土状況実測図（1/20）……38
第29図　G・C―1副葬鉄剣実測図（1/4）……39
第30図　G・C―1副葬鹿角装刀子実測図（1/2）……39
第31図　G・C―1出土櫛実測図（実大）……40
第32図　G地区出土陶質土器実測図（1/3）……41
第33図　G・C―2実測図（1/30）……折り込み
第34図　G・C―2副葬刀子実測図（1/2）……41
第35図　G・D―1実測図（1/30）……42
第36図　G・D―1付近出土須恵器実測図（1/3）……43
第37図　H地区遺構配置図（1/600）……45
第38図　H・1号墳墳丘実測図（右 調査前，左 地山整形面）（1/200）……46
第39図　H・1号墳実測図（1/60）……折り込み
第40図　H・1号墳出土須恵器実測図（1/4）……48
第41図　H・1号墳出土土師器実測図（1/3）……49
第42図　H・1号墳出土耳環実測図（実大）……50
第43図　H・2号墳墳丘実測図（左 調査前　右 地山整形面）（1/200）……51
第44図　H・2号墳実測図（1/60）……折り込み
第45図　H・2号墳出土須恵器実測図①（1/3）……54
第46図　H・2号墳出土須恵器実測図②（1/3）……56
第47図　H・2号墳出土須恵器実測図③（1/3）……58

第48図　H・2号墳出土土師器実測図（1/3）……60
第49図　H・3号墳墳丘実測図（1/200）……63
第50図　H・3号墳実測図（1/60）……折り込み
第51図　H・3号墳遺物出土状況実測図（1/40）……66
第52図　H・3号墳出土須恵器実測図①（1/3）……68
第53図　H・3号墳出土須恵器実測図②（1/3）……69
第54図　H・3号墳出土須恵器実測図③（1/3）……70
第55図　H・3号墳出土須恵器実測図④（1/3）……72
第56図　H・3号墳出土須恵器実測図⑤（1/3）……74
第57図　H・3号墳出土須恵器実測図⑥（1/6）……折り込み
第58図　H・3号墳出土土師器実測図（1/3）……75
第59図　H・3号墳出土土装身具・鉄器実測図（1/2）……76
第60図　H・3号墳出土馬具実測図（1/2）……78
第61図　H・3号墳出土弥生式土器実測図①（1/3）……79
第62図　H・3号墳出土弥生式土器実測図②（1/4）……80
第63図　H・3号墳出土杯蓋法量分布図……80
第64図　H・3号墳出土杯身法量分布図……81
第65図　H・C－1実測図（1/30）……83
第66図　H・C－2実測図（1/30）……84
第67図　H・C－3実測図（1/30）……折り込み
第68図　H・C－3副葬鉄剣実測図（1/4）……85
第69図　H・C－4実測図（1/30）……87
第70図　H・C－4付近出土須恵器実測図（1/3）……88
第71図　H・D－1実測図（1/30）……89
第72図　H・D－1副葬鉄器実測図（1～5は1/2，6は1/4）……90
第73図　H・D－2実測図（1/30）……折り込み
第74図　H・D－2棺内副葬太刀実測図（1/4）……93
第75図　H・D－2副葬鉄矛実測図（1/3）……94
第76図　H・D－2副葬鉄器実測図（1/2）……96
第77図　H・P－1実測図（1/30）……99
第78図　H地区出土打製石鏃実測図（実大）……99
第79図　G地区出土スクレイパー実測図（2/3）……100
第80図　S地区遺構配置図（1/200）……101

第81図　S・1号墳石室実測図（1/30）……折り込み
第82図　S・1号墳出土玉類実測図（実大）…… 102
第83図　S・1号墳出土鉄器実測図（1/2）…… 103
第84図　S・1号墳出土弥生式土器実測図（1/3）…… 104
第85図　S・C－1実測図（1/30）…… 105
第86図　S・P－1実測図（1/30）…… 107

表　目　次

第1表　九州横断道路関係遺跡一覧表……折り込み
第2表　柿原古墳群調査工程表…… 4
第3表　古墳計測表……折り込み
第4表　石棺系竪穴式石室・土壙墓計測表……折り込み

付　図　目　次

付　図　　柿原古墳群地形図（1/2,000）

I　はじめに

昭和54年度に開始された九州横断自動車道（横断道）の建設工事に伴なう埋蔵文化財の発掘調査は，昭和58年度で5年目を迎えた。

本線盛土のための土取場となる柿原地区―柿原古墳群―の発掘調査は，それに2年遅れる昭和56年度から開始した。

調査対象地となる柿原古墳群内には，朝倉地方の特産品である富有柿やブドウの樹園地が散在し，またほとんどが檜の植樹林で，発掘調査はその立木の伐採・搬出の後に入らねばならなかった。そのため，予定より大幅に調査開始時期がずれ込んだが，昭和56年度にはG地区，昭和57年度にはH・S地区の調査を完了することができた。

なお，発掘調査にあたり，柿原地区地権者協議会の山下利雄委員長には，佐業員の方々の斡旋や，地元との調整など，調査に際しての種々のご協力をいただいた。また，終始作業員として参加された柿原・相窪・堤地区の皆様の援助に対し，厚く御礼申し上げます。

昭和56年度から昭和58年度におよぶ調査関係者は，下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　　長	竹原　清隆（前任）	持丸竜一郎（前任）	今村　浩三
総務部長	田代　勝重（前任）	落合　一彦	
管理課長	布川　　堯（前任）	梅田　道人	
管理課長代理	野口　利夫		

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	江口　正一（前任）	乗松　紀三
副 所 長	矢野　浩司（前任）	西田　　功
副所長（技術担当）	中村　義治	
庶務課長	森本　太助（前任）	松下　幸男
用地課長	溝口　萩男（前任）	岩下　　剛
工務課長	深町　貞光（前任）	山口　宗雄
小郡工事区工事長	田口　　裕（前任）	友田　義則
甘木工事区工事長	瀬戸山邦雄（前任）	猪狩　宗雄
朝倉工事区工事長	吉永　英一（前任）	平沢　　正
杷木工事区工事長	前田　雄一	

福岡県教育委員会

総　　括

教 育 長	浦山　太郎（前任）	友野　　隆
教育次長	守屋　　尚（前任）	阿部　　徹
管理部長	森　　英俊（前任）	伊藤　博之
管理部文化課課長	藤井　　功	
〃　　課長補佐	蓮生　謙吉（前任）	中村　一世

庶　　務

管理部文化課庶務係長	大渕　幸夫・内山　孝之（前任）	松尾　　満
管理部文化課事務主査	平尾　敏映・三島　洋輝（前任）	
〃　　主任主事	長谷川伸弘	

調　　査

管理部文化課調査第２係長	栗原　和彦
〃　　主任技師	石山　　勲（現北筑後教育事務所技術主査）
〃	浜田　信也（現福岡教育事務所技術主査）
〃	木下　　修
〃	児玉　真一
〃	新原　正典
〃	中間　研志
〃	佐々木隆彦（前任）
〃	小池　史哲
〃	池辺　元明（前任）
技師	伊崎　俊秋
調査補助員	高田　一弘
〃	武田　光正
〃	日高　正幸
〃	平嶋　文博

第1表 九州横断道路関係遺跡一覧表 (単位㎡)

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査地区と面積 54年度	55	56	57	58	備考	報告書
1	小郡正尻遺跡	小郡市小郡	弥生集落・歴史溝	11,200					5,000	完了	
2		〃	弥生・古墳散布地	10,400							
3		〃 大板井	弥・古，小郡官衙隣接	910							
4		〃	大板井城跡	9,200							
5		〃 井上	散布地	3,600							
6		〃 薬師町	弥生・古墳散布地(首切塚)	32,000					500		
7		〃 今隈	弥生散布地	7,200					200		
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	中世散布地	4,000					3,600	完了	
9	春園遺跡	〃 〃	弥生・古墳・甕棺	10,800					100		
10		〃 甲条本郷	〃	34,400			700		300	遺構なし，完了	
11	宮原，立野遺跡	甘木市大字中原	弥生・古墳・奈良・平安集落	33,800			13,860	13,500	10,000		2集
12	小石原川西条里	〃 上浦	中世	48,000			810			完了	
13	〃 東条里	〃 上浦馬田	〃	56,000	200	7,600				完了	1集
14	上々浦遺跡	〃 上浦	弥生・古墳集落	18,400	200					完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃 一ツ木・屋永	弥生・古墳集落	54,800	A,B地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400		完了	1·2·3集
16	高原遺跡	〃 屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400		
17		〃 牛鶴	墳墓	100							
18		〃 〃	散布地	2,550					300	遺構なし，完了	
19		甘木市大字中島田 朝倉町石成	古墳集落	70,000					700		
20		朝倉町大庭	散布地	8,400					300		
21		〃 大庭(乙王丸)	弥生・古墳集落	34,800				800	600		
22	狐塚南遺跡	〃 入地	古墳集落	10,400					300		
23		〃 鳥集院	散布地	2,600							
24		〃 〃	中世散布地・歳田廃寺	2,490							
25		〃 〃	〃 〃	2,400							
26		〃 須川	散布地	1,600				70		遺構なし，完了	
27	長島遺跡	〃 〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落跡	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640		
28	中妙見遺跡	〃 〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458	完了	
29	原の東遺跡	〃 菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600		
30		〃 〃	箱式石棺	4,000							
31		〃 〃	〃	2,000							
32		〃 〃		2,400				300		遺構なし，完了	
33		〃 山田	古墳	2,000							
34		〃 〃	散布地	3,600							
35		〃 〃	弥生・散布地	2,600							
36		〃 〃	古墳散布地	2,000							
37		〃 〃	〃	2,400							
38		〃 〃	弥生・中世・箱式石棺	125							
39		杷木町大字志波	弥生・古墳・中世散布地	22,000							
40		〃 〃	中世・散布地	2,500							
41		〃 〃	〃 〃	18,000							
42		〃 〃	〃 ・一字一石経	8,000							
43		〃 久喜宮	古墳群	12,000							
44		〃 〃	古墳4～5基	1,800							
45		〃 〃	散布地	2,400							
46		〃 〃	〃	1,800							
47		〃 林田	弥生・古墳・中世散布地	4,000							
48		〃 〃	散布地	1,800							
49		〃 〃	〃	3,200							
50		〃 〃	〃	2,400							
51		〃 〃	〃	5,200							
52		〃 〃	〃	2,000							
53		〃 〃	〃	3,500							
54		〃 〃	〃	1,800							
55		〃 〃	古墳	1,600							
56		〃 〃	散布地	2,400							
57	柿原古墳群	甘木市大字柿原	古墳群，縄文集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	土取場	4集
58		朝倉町大字山田	〃	40,000	測量 4,435				2,500	〃	

Ⅱ　調査にいたる経過

九州横断自動車道は，甘木市内において山麓地帯より西の低台地をほとんど盛土高架で通過する。その盛土に必要な土を確保するために選ばれたのが甘木市柿原地区である。その理由としては，本線に最も近い丘陵地帯であるという地理的条件の他に，地元の人々が通称「柿原石」と呼びならわしている緑色片岩や，それに伴なう雲母片岩などが路体埋土として適合するという物理的な側面もあったものと考えられる。

横断道本線予定地内の埋蔵文化財の分布調査は，昭和44年度に当教育委員会文化課が実施したが，道路公団より土取場予定地内の埋蔵文化財分布調査の依頼があったのは，ずっと遅れた昭和53年度になってからのことである。

依頼を受けた文化課は，土取場予定地内の分布調査を実施し，予定地内のほとんどの地区において古墳や遺物の散布地を確認し，その旨を回答したが，その時点では未だ公団側の土取場としての決定はなされず，最終的に決定したのは55年度になってからのことであった。そして柿原土取場―文化財サイドから言えば柿原古墳群であるが―に調査の第一歩を入れたのは昭和55年4月26日からである。

柿原古墳群という名称は，甘木市大字柿原地区内に散在する古墳群の総称であるが，今回調査対象となったものは土取場内（総面積約20万m^2にも及ぶ広大なもの）に所在する古墳のみについてである。

調査対象となった土取場は，行政区上ではほとんどが大字柿原に属し，字では城・若山・大谷地区が含まれ，一部には大字板屋字城ノ下地区をも含んでいる（第2図）。そしてその各小字地区に古墳が所在しており，これまでは字名を古墳群の前につけて柿原野田古墳群などと呼ばれていたが，今回使用する柿原古墳群という名称は，土取場内に所在する古墳の総称として使用することにした。

柿原古墳群の範囲は，最奥部に位置する標高155.6mの山頂を頂点として，それからほぼ扇形に拡がる平面形をなし，その内に7つの尾根が南へ派生している。そしてその各尾根線上，あるいは斜面に古墳が所在しているため，調査に際しては各尾根ごとにD～I及びLのアルファベットの地点名を付した（註）。

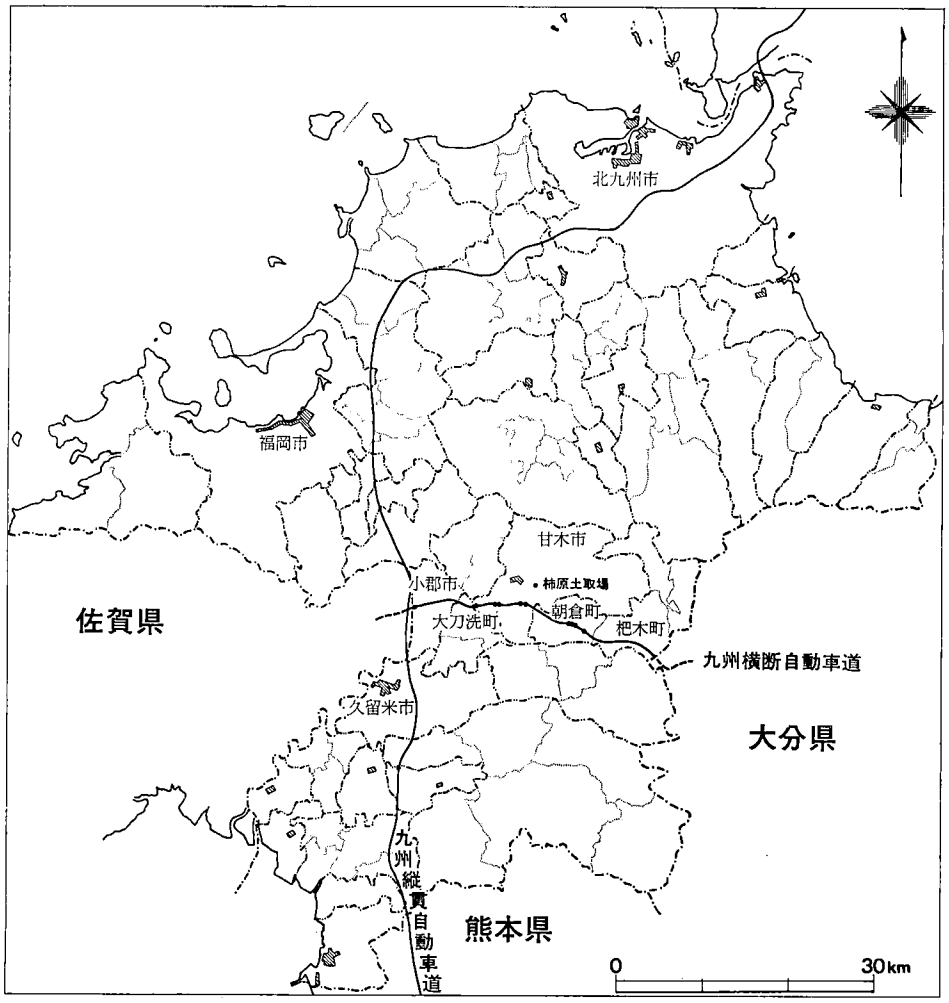
すなわち，最も東端に位置する尾根をD地区とし，順次西へE・F・G・H・I地区とし，西端の尾根はとんでL地区となる。また，土取場への進入路として既存の農道が拡幅されたが，事前の調査でここにも横穴式石室などを確認した。よってこの地区を当初進入路地区と呼んでいたが，報告書の段階でS地区と変更した。

前述したように，柿原古墳群の調査は昭和55年4月26日より開始し，以来数次に及ぶ調査を一時中断しつつも継続しているが，昭和58年度末までの調査工程表は下記の通りである。

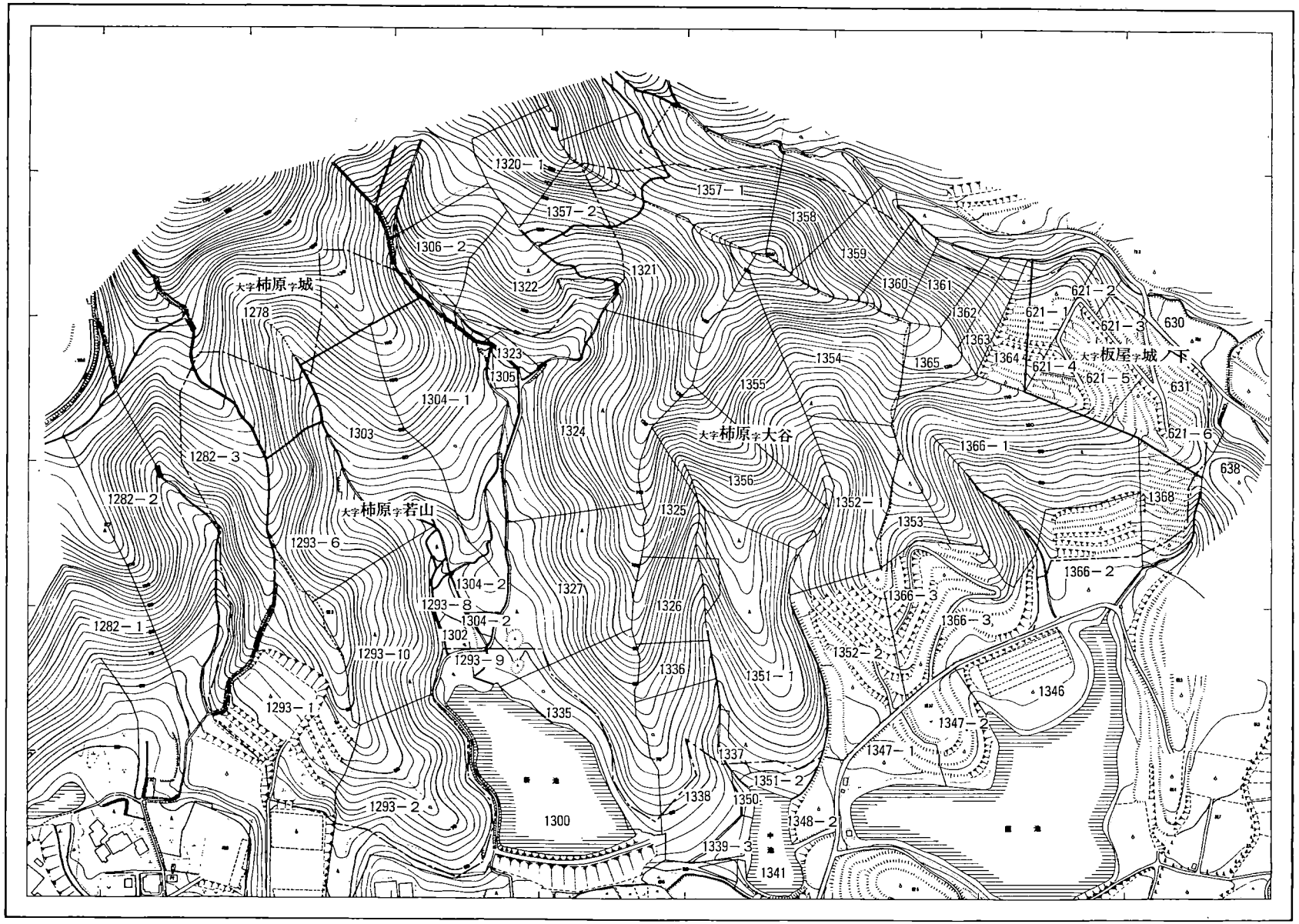
第2表　柿原古墳群調査工程表

年度	調査地区	調査期間	調査担当者	調査内容	調査面積	調査概要	備考
昭和55年度	D・I・L	S55.4.26～7.24 S55.12.15～S56.1.10	栗原・石山 新原・佐々木	地形測量	14,700㎡		
〃 56年度	G	S56.10.12～S57.2.19	新原・池辺	発掘調査	900㎡	横穴式石室	報告書第4集
〃 57年度	G・H・S	S57.5.10～S58.3.29	浜田・新原 中間	〃	8,300㎡	横穴式石室，土坑墓 石棺系石室	〃
〃 58年度	I	S58.4.4～12.28 S59.3.1～3.23	新原・中間 小池	〃	15,000㎡	横穴式石室，石棺系石室 土坑墓，住居跡，縄文	

註　この調査地点名は，道路公団に対し土取場予定地内の埋蔵文化財についての回答を行った時につけた地点名である。その時点ではA～M地区の計13ケ所であったが，最終的に土取場内の調査地点として決定したものはD・E・F・G・H・I・L地区の計7地点であり，発掘調査に際してもその地点名称を踏襲したものである。



第1図　九州横断自動車道路線図



第 2 図　柿原古墳群内字図（1/4,000）

Ⅲ 位置と環境

柿原古墳群の所在する甘木市は，福岡県のほぼ中央部に位置し，県の南部地域を南北に２分して西流する九州第一の川，筑後川北岸にあたる。古墳群はその甘木市東部の甘木市大字柿原に所在する。

甘木市域は，筑後川の支流小石原川と佐田川により南北に細長く３分割される。その両河川に狭まれた中部連峰西端の大平山（標高315m）が筑後川へ向かって南へ多くの尾根を派生するが，その尾根先端部上に古墳群は展開している。

ここからの展望はすばらしく，眼下には九州の一大穀草地帯である筑後平野が拡がり，その背後には，山麓に多くの装飾古墳文化が花開いた耳納連山が大空を遮っている。

柿原地区を含む甘木市東部地域の地質については，道路公団の調査による詳細な資料がある（註１）。

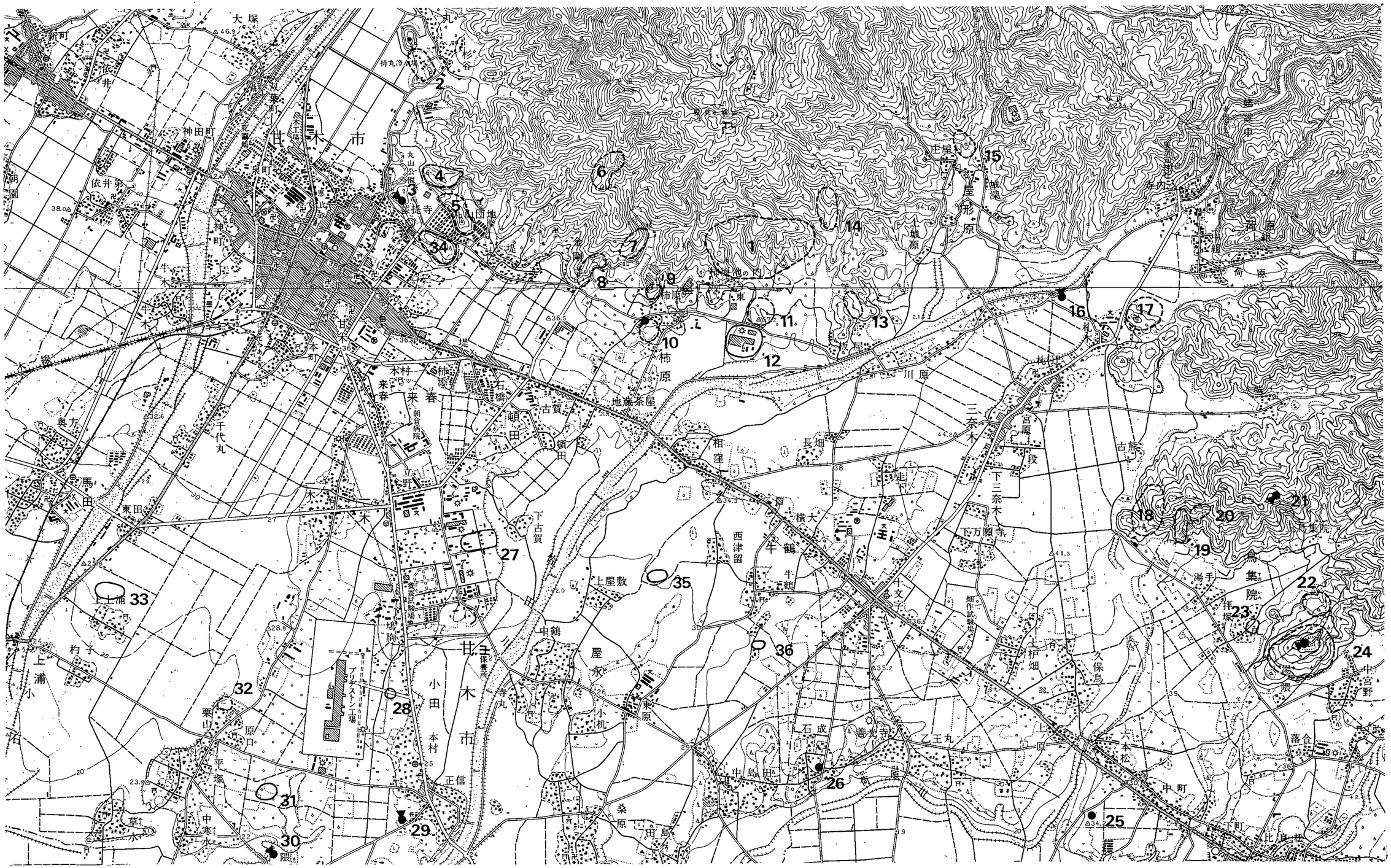
それによると，「柿原周辺の地質は，古生代の結晶片岩類が基盤をなしている。地形はＶ字溪谷の開析が進んだ壮年期の地形を呈する丘陵性山地（尾根の一部）である。甘木・朝倉地区に分布する結晶片岩は，田川変成岩類で，褶曲・断層ともにはなはだしく，部分的に古生代末ないし白亜紀末のさまざまな火成岩類の貫入を受けている。今回の調査地域のほぼ全体を占めるのが，黒色片岩類で，ここでは泥質・千枚岩質・石墨質・雲母片等を一括して黒色片岩とする。調査地内では緑色片岩を一部介在するのみである。

これら片岩表層部は全体に風化が進み，上述した岩質の比較的弱い石墨質・雲母質の片岩は殆んど固結土状に変り，その中に砂質・珪質・緑色等の硬岩部が取り残されて岩塊状に認められる。この為，風化層厚は岩質自身に弱い個所の多く集った付近が比較的厚く，逆に岩質の硬い所は浅くなる傾向がある。風化帯の厚いのは柿原地区の丘陵部が顕著である。」という結果が報告されている。

以上の事から，柿原地区において産出する石材は結晶片岩で，地元で「みそ岩」と呼ばれている雲母片岩系の石は黒色片岩の風化したものであり，「柿原石」と言われるものは緑色片岩をさすものである。柿原古墳群内において，黒色片岩は薄く剝離する性質があるため，その層がある地域では石蓋土壙墓の墓壙として穿たれ，緑色片岩は硬質で容易に割れない性質があるため，石棺材や，古墳の壁材として使用されている。

現在でも，柿原地区の民家の石垣は，ほとんどが緑色の柿原石で築かれており，集落背後の尾根地には，戦後まで行われていた採掘壙の跡が随所に散見される。これらについての詳細な探索は行ってないが，古墳時代の採掘壙跡もどこかに埋れているかもしれない。

甘木・朝倉地方の古墳時代の概要については，古くは県立朝倉高校史学部による業績があり（註２），また，近年刊行された『甘木市史・上巻』には詳細，かつ高水準の内容で記されて



1 柿原古墳群
2 持丸古墳群
3 鬼枕古墳
4 池の上墳墓群
5 古寺墳墓群
6 迫谷古墳群
7 大岩東部古墳群
8 大岩南部古墳群
9 原古墳群
10 柿原堂ノ前古墳群
11 野田東部古墳群
12 柿原野田遺跡
13 板屋大郷古墳群
14 城ノ下古墳群
15 城深古墳群
16 ヤツエ塚古墳
17 鳥越古墳群
18 古熊古墳群
19 曲谷古墳群
20 上梨木古墳群
21 宮地獄古墳
22 宮地獄北方古墳群
23 江古神社古墳群
24 宮地獄古墳群
25 狐塚古墳
26 石成古墳
27 西原遺跡
28 小田遺跡
29 小田茶臼塚古墳
30 神蔵古墳
31 小田道遺跡
32 平塚大願寺古墳群
33 上々浦遺跡
34 宗原古墳群
35 高原遺跡
36 塔ノ上遺跡

第 3 図　周辺遺跡分布図 (1/25,000)

おり，それを参照して頂くとして（註3），ここでは古墳時代の代表的な遺跡と，後期群集墳についての大略を記すことにする。

前期の代表的な遺跡としては柿原古墳群に最も近い池の上墳墓群があり，西約2㎞の所に位置する（註4）。柿原古墳群と同様に大平山から派生した標高70mの尾根上に所在し，4世紀後半から5世紀中頃の方形周溝墓・円形周溝墓・石蓋土壙墓・箱式石棺墓群が検出されている。特に，これらの墳墓群から多数の陶質土器が出土したことから，朝鮮半島との関係が重視され，渡来人との関連が云々された遺跡である。柿原古墳群でも，この期に属する墳墓群が確認されつつあり，両者の関係は，今後大いに論議されるものとなろう。

池の上墳墓群と続く尾根上には，古寺墳墓群が所在する（註5）。この墳墓群は池の上墳墓群よりやや遅れる4世紀末から造営が始まり，石蓋土壙墓・土壙墓・前方後円墳・竪穴系横口式刳貫石室などが築かれ，5世紀中頃にてその終焉を迎えている。特に，今回始めて発掘された竪穴系横口式刳貫石室は，初期の横穴式石室を模したものと目され，5世紀前半代の後半の時期が与えられているが，今後の横穴式石室や横穴の研究に与える影響は少なくない。

池の上・古寺墳墓群と対峙する丘陵に，鬼の枕前方後円墳がある（註6）。後円部の大半は欠損するが，全長約64m，後円部径約37m，前方部推定幅28mを測り，三段築成に葺石，埴輪列をめぐらす。主体部は不明であるが，円筒埴輪や馬形埴輪が伝えられている。時期については，主体部が不明な事や，出土遺物も少ないところから諸説があり，5世紀中頃から6世紀前半頃と幅のある時期が与えられている。

柿原古墳群より南西約5㎞離れた洪積台地先端，小田地区には2基の前方後円墳が対をなして所在している。神蔵古墳と小田茶臼塚古墳である。神蔵古墳は，帆立貝式の墳丘を有する前方後円墳で，全長40m以上を測る。主体部は，緑泥片岩を小口積みした竪穴式石室であるが，石室両小口は隅のない特異なU字状を呈している。石室内には木棺が納められ，盗掘を免れた「三角縁天王日月・獣文帯四神四獣鏡」が1面と鉄器などが多数出土している。古墳築造の年代は4世紀後半に位置づけられ，畿内型の色彩の強い古墳である（註7）。

神蔵古墳から東800m のところに小田茶臼塚古墳が位置する。本墳は古くから存在を知られており，昭和初期には道路工事により後円部が削平され，その際に短甲・衝角付冑・肩鎧・馬具・四環鈴など第一級の遺物が出土している。石室・墳丘は，後年の調査で，古式の単室横穴式石室を主体部とし，全長54.5m，後円部径39.7m，前方部幅25mの帆立貝式前方後円墳であることが判明した。墳丘からは多くの古式須恵器と埴輪が出土し，古墳の年代は須恵器から5世紀中頃とされている（註8）。

以上が古墳時代の代表的な遺跡であるが，今のところ定形化した古墳では神蔵古墳が当地方では最古の古墳といえよう。

一方，古墳時代後期の群集墳について目を移すと，柿原古墳群を含む大平山南山麓には，多

くの尾根が派生するが，そのほとんどのものに群集墳の営造が行われている。甘木市内における群集墳はこの山麓地帯にしかないと言ってもよく，その分布も広範囲に及ぶ。

柿原を中心として，佐田川に面する板屋地区では板屋古墳群や洗田古墳群などがあり，西の堤地区には大岩東部古墳群・大岩西部古墳群・大岩南部古墳群・迫谷古墳群などが所在する。更に北西の小石原川を臨む西麓持丸地区では持丸古墳群・持丸中小路古墳群などがある。これら群集墳のあるものについては，昭和30～40年代に実施された広範囲に及ぶ樹園地造成工事のため未調査のまますっかり破壊されたものが多く，あるいは小規模開発により姿を消したものも少なくない。

堤地区の背後に所在する大岩古墳群は比較的実態が把握されている。古墳群は4つの支群に分れ，西部古墳群では6世紀後半の方形単室横穴式石室が2基確認され，1号墳からは銅釧や皮袋形土器などの副葬品が豊富に出土している。南部古墳群では，破壊に伴なう遺物の出土から6世紀後半の時期の石室が，東部古墳群では6世紀末の胴張りを有する石室が確認されている。

以上のことから，大岩古墳群は，6世紀中ごろに西部地区のものが，次に南部・東部の順に造営され，東部では終末期まで営まれていたことが知られており，群集墳の変遷を知る上で重要である。

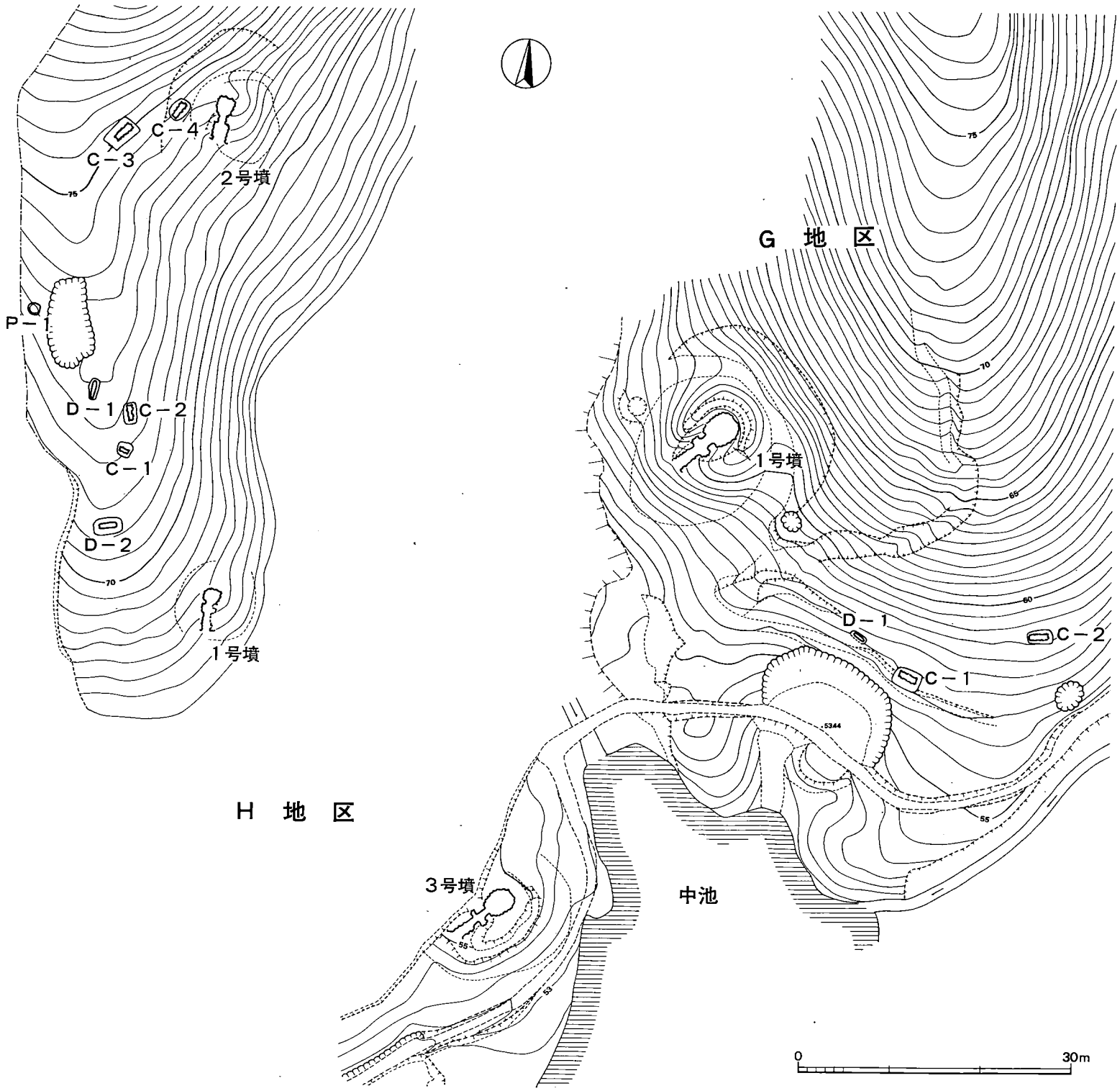
大岩古墳群の北，標高150m の高所に位置するのが迫谷古墳群である。柿原古墳群でもD地区では120mの個所に築かれたものがあり，低地の古墳との比較も興味深い。この迫谷古墳は6基の円墳が在り，複室の横穴式石室や，6世紀末の単室胴張り石室が知られている。

前述した池の上墳墓群では，8世紀前半，奈良時代にまで下る最終末の横穴式石室が確認されている。玄室は正方形に近く，単室の横穴式石室で，石室の西側では方形に石列が巡っている。池の上墳墓群では，横穴式石室はこの1基のみで，この古墳に続く8世紀中頃からは火葬墓にとってかわられている。

池の上墳墓群と対峙する鬼枕前方後円墳の所在する尾根には丸山2号墳がある。円墳で横穴式石室であるが，プランは長方形を呈し，6世紀前半の須恵器を伴出している。横穴式石室の変遷をたどる上で見のがせない古墳群である。

丸山古墳群より北1kmのところに，持丸古墳群が所在する（註9）。昭和48年にその一部が調査され箱式石棺とともに，4基の横穴式石室が発掘されている。石室は長方形ないし，胴張りを呈するが，最も状況のわかる2号墳は，単室方形の石室で，6世紀後半の須恵器を出土している。丸山古墳群周辺の石室に類似しているという。

以上，柿原古墳群周辺の古墳時代の代表的な遺跡について，古墳時代前期のものと後期のものに分けて概観した。しかしそのほとんどが墳墓で，古墳を営んだ人々の生活の場となる集落跡の調査例は少なく，まったく不明と言はざるを得ない。古くは柿原野田遺跡を始め，近年で



第 4 図　柿原古墳群G・H地区地形図（1/600）

は小田道遺跡（註10）の調査が知られるのみである。しかるに，九州横断自動車道本線は，甘木市内においては，これまで集落跡の存在が予想されながらも調査のメスが加えられていなかった洪積台地や沖積平野部分を通過する。現在，この本線内にかかる所々の遺跡の発掘調査が継続的に行なわれており，次第に生活遺構の実態が明らかになりつつある。今後の調査の進展がまたれる。（新原正典）

註1　資料は日本道路公団甘木工事事務所の提供による。

註2　福岡県立朝倉高等学校『埋もれていた朝倉文化』　昭和44年

註3　柳田康雄「原始」『甘木市史上巻』甘木市史編さん委員会　昭和57年

註4　橋口達也編「池の上墳墓群」（甘木市文化財調査報告第5集）甘木市教育委員会　1982

註5　橋口達也編「古寺墳墓群」（甘木市文化財調査報告第14集）甘木市教育委員会　昭和54年
　　橋口達也編「古寺墳墓群Ⅱ」（甘木市文化財調査報告第15集）甘木市教育委員会　1983

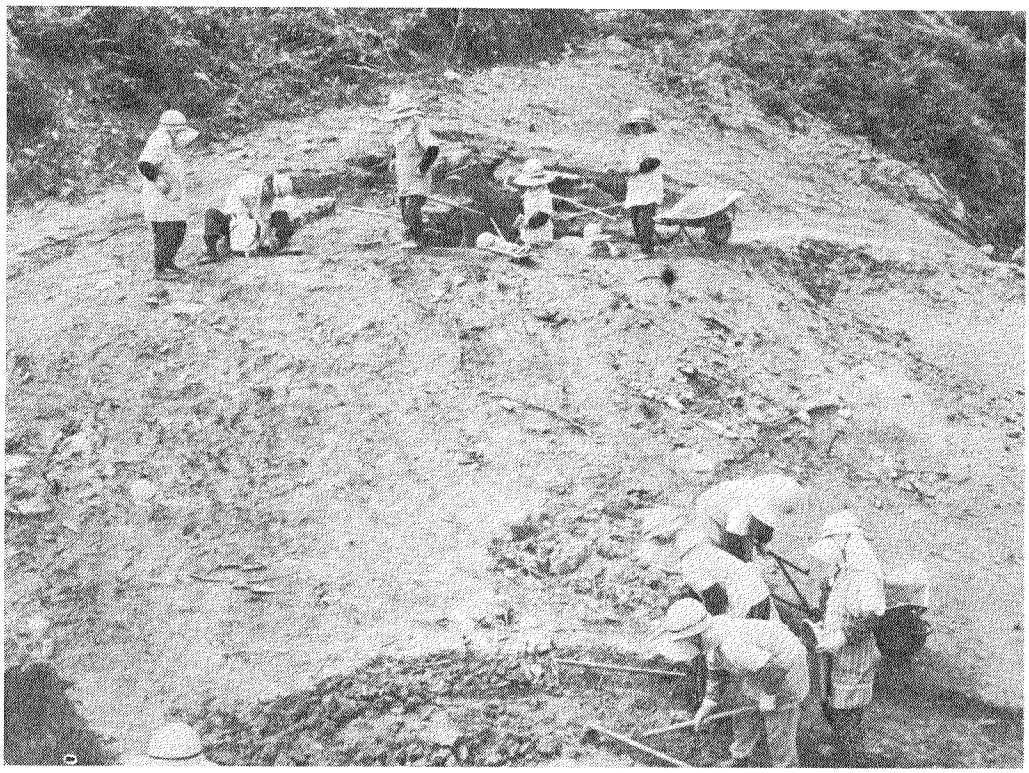
註6　古墳の計測値は『甘木市史』による。

註7　木下修編「神蔵古墳」（甘木市文化財調査報告第3集）甘木市教育委員会　昭和53年

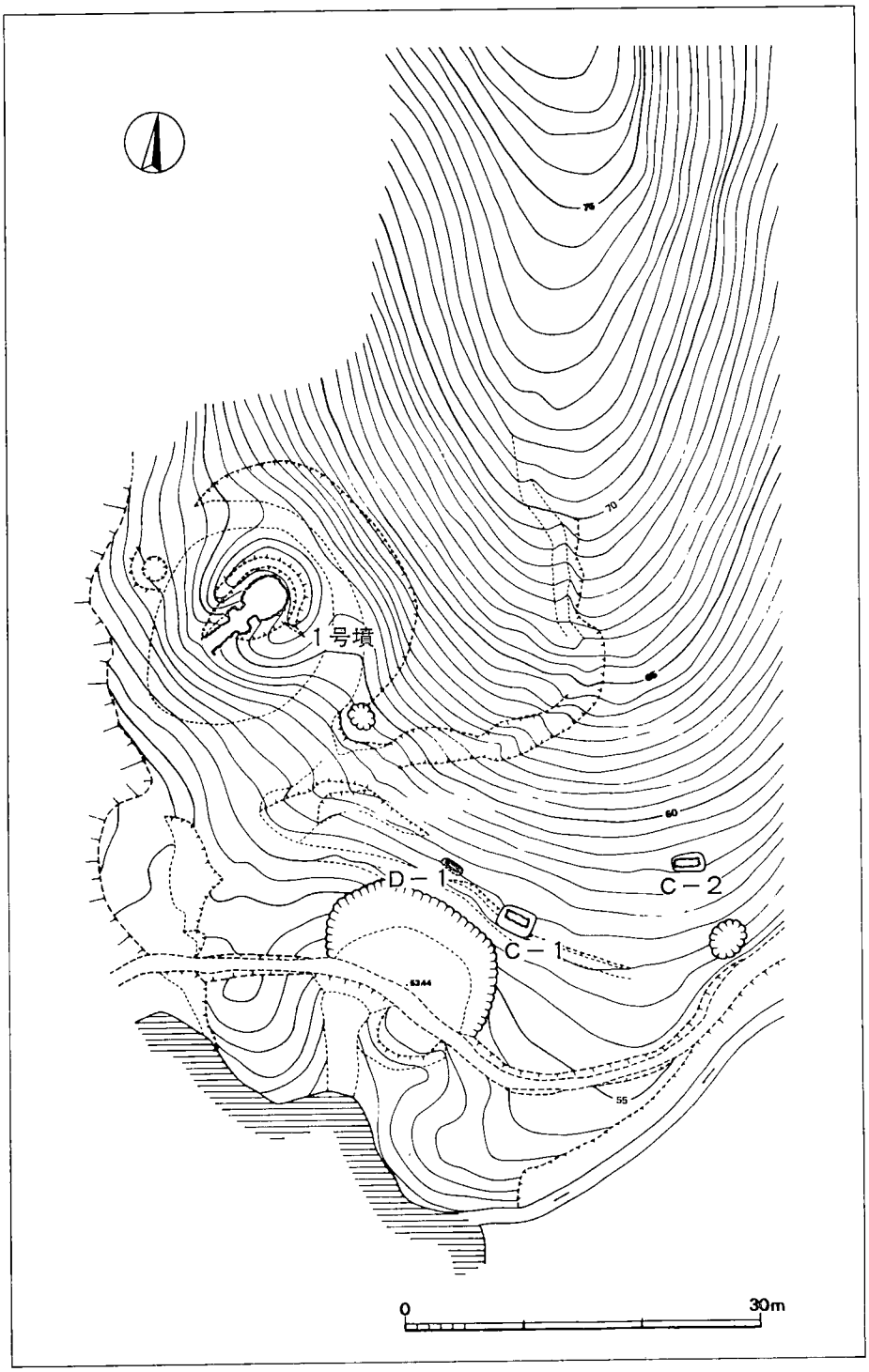
註8　柳田康雄編「小田茶臼塚古墳」（甘木市文化財調査報告第4集）甘木市教育委員会　1979

註9　「持丸古墳群」（甘木市文化財調査報告第1集）甘木市教育委員会　1974

註10　副島邦弘「小田道遺跡」（甘木市文化財調査報告第8集）甘木市教育委員会　昭和56年



第5図　発　掘　風　景



第 6 図　G地区遺構配置図（1/600）

Ⅳ　G地区の調査

1　調査の概要

G地区は，扇形に拡がる柿原土取場内のほぼ中央部を北から南へと延びる尾根で，裾部は60mの，尾根上は75～85mの標高の間に位置する。字名では大字柿原字大谷1351―1がほとんどを占めており，尾根先端部は中池により限られているが，この中池も1341番地であり，比較的新しい溜池であろうことが知られる（第2図）。

発掘調査は，当初の分布調査で確認されていた1号墳より開始したが，既存の農道から1号墳へ至る進入路を重機により掘削中，D―1土壙墓を確認し，更には表土下の堆積土から陶質土器の完形品を検出し，尾根上にも遺構の存在が予想された。

1号墳の調査終了後，進入路の拡幅に伴って改めて遺構検出を行ない，C―1・C―2号墓を発見した。この進入路から中池へかけては土取場用地外であるが緩斜面となっており，他にもまだ石棺系石室や土壙墓等がつづいているものと思われる。

遺構の存在を予想していた尾根上の平坦地ではトレンチによる試掘調査を行ったが，表土直下は片岩の岩盤で，遺構は何ら確認されなかった。

また，1号墳の墳丘中に，弥生土器片が含まれていたため，1号墳々丘下や付近の遺構検出を行ったが，この土器に伴なう遺構も存在しなかった。（新原正典）

2　G・1号墳

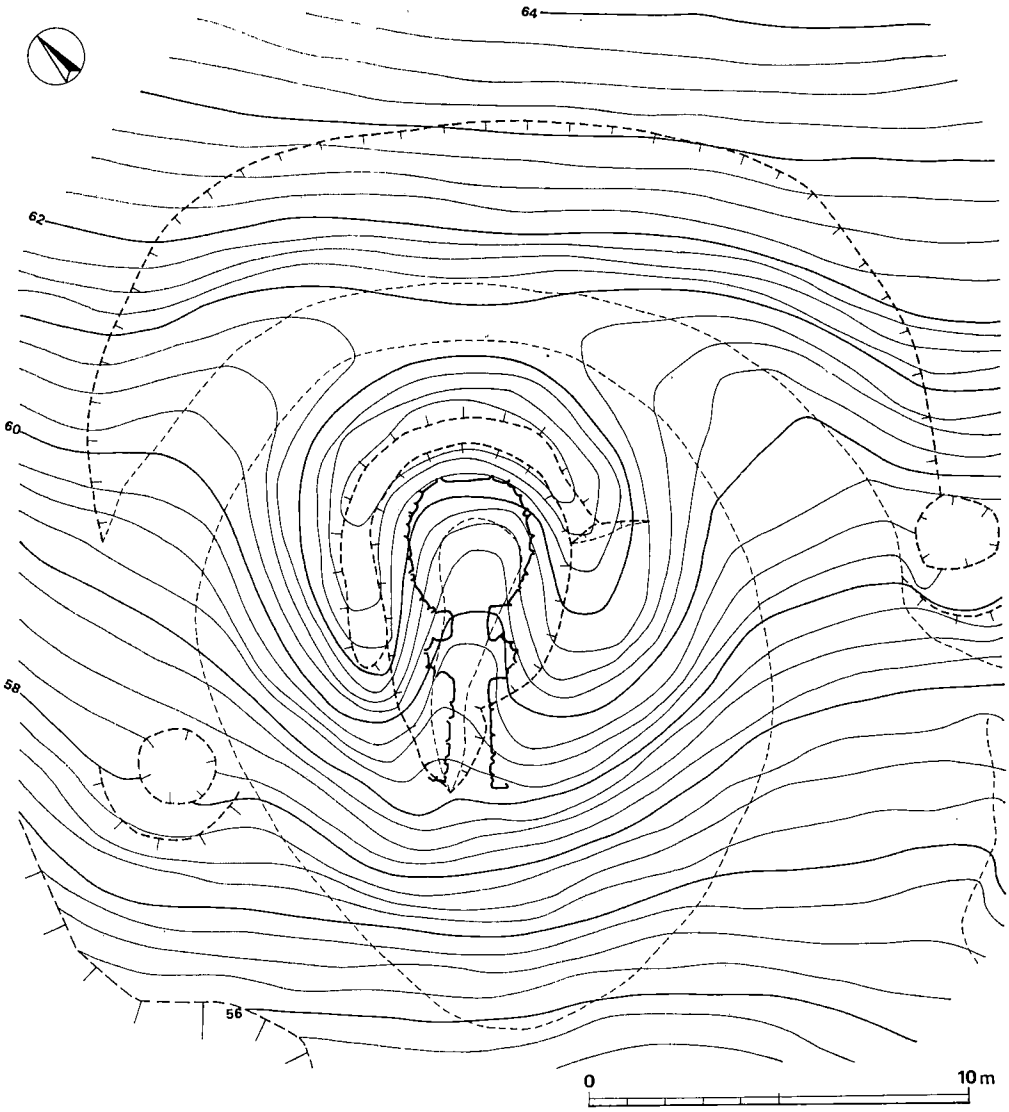
墳　　丘　（図版3～7，第7～9図）

本墳は，北から南に延びる舌状尾根突端の南西斜面上に立地する。

調査前の観察では，墳丘は北東から南西方向が約15m，東北から西南方向が約18mで，標高の高い方が膨らむ卵型の楕円形プランを呈し，北東側斜面の馬蹄形溝を含めると長軸24.5m，短軸22mになる。墳丘高は現状で約2.1m を測る。墳頂部は大きく抉られており，石室天井部及び周壁はかなり破壊されていることが推測できた。しかし墳丘の他の部分の残存状態はよく，立地から考えて最も盛土が流出しやすい谷側の西南部もよく原形を保っていた。

地形実測終了後，中央の抉れた部分の発掘を行ない，玄室を確認後，石室の主軸に合わせてA・B・Cの各トレンチを設定し，墳丘の構築状態の観察を行った。

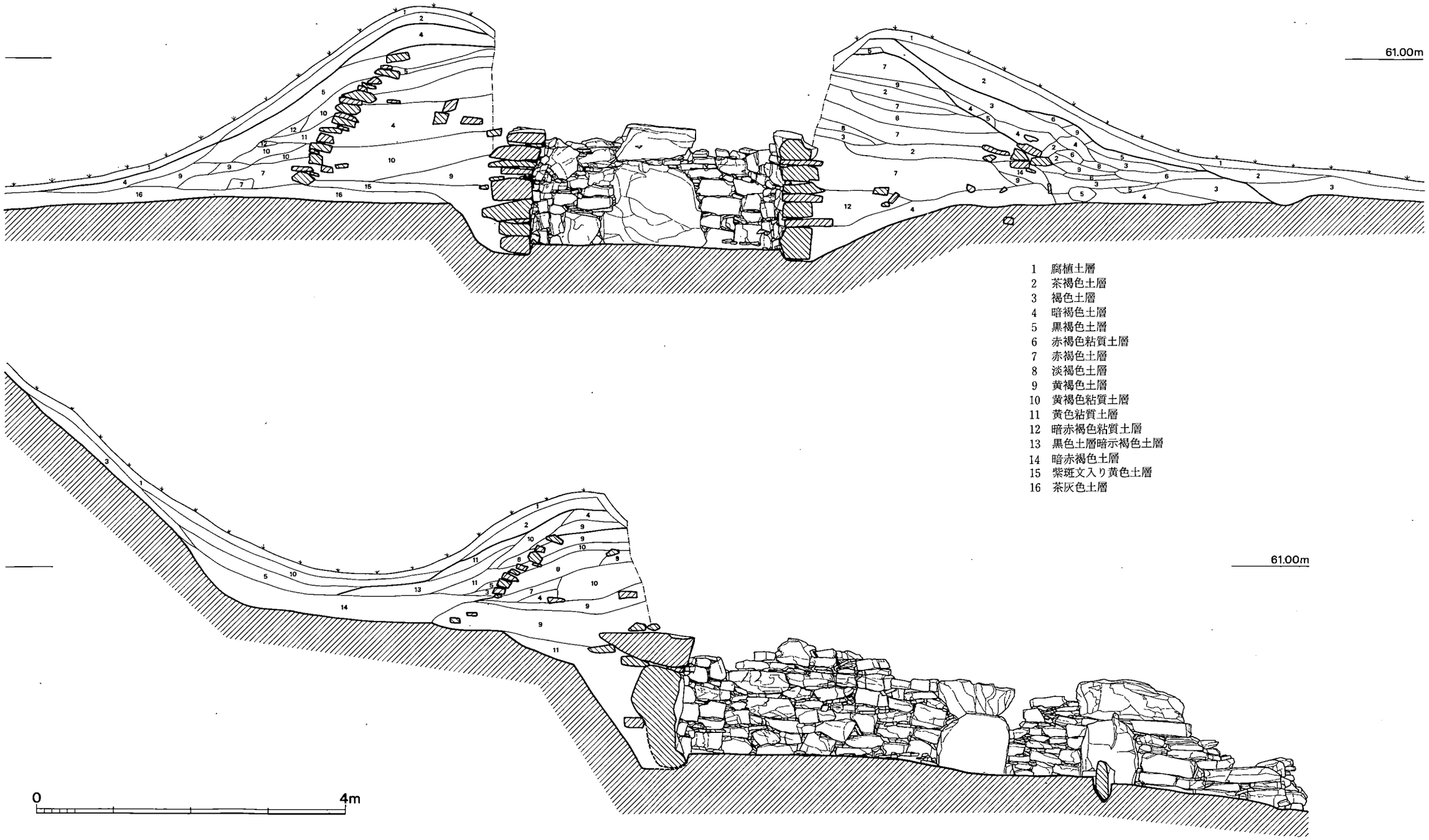
本墳は尾根突端の南西側斜面上に，等高線に直行させて石室を構築している。このため北東側が高く，南西側が低い地形を呈し，墳丘基底面を作るため地山整形はきわめて大がかりなも



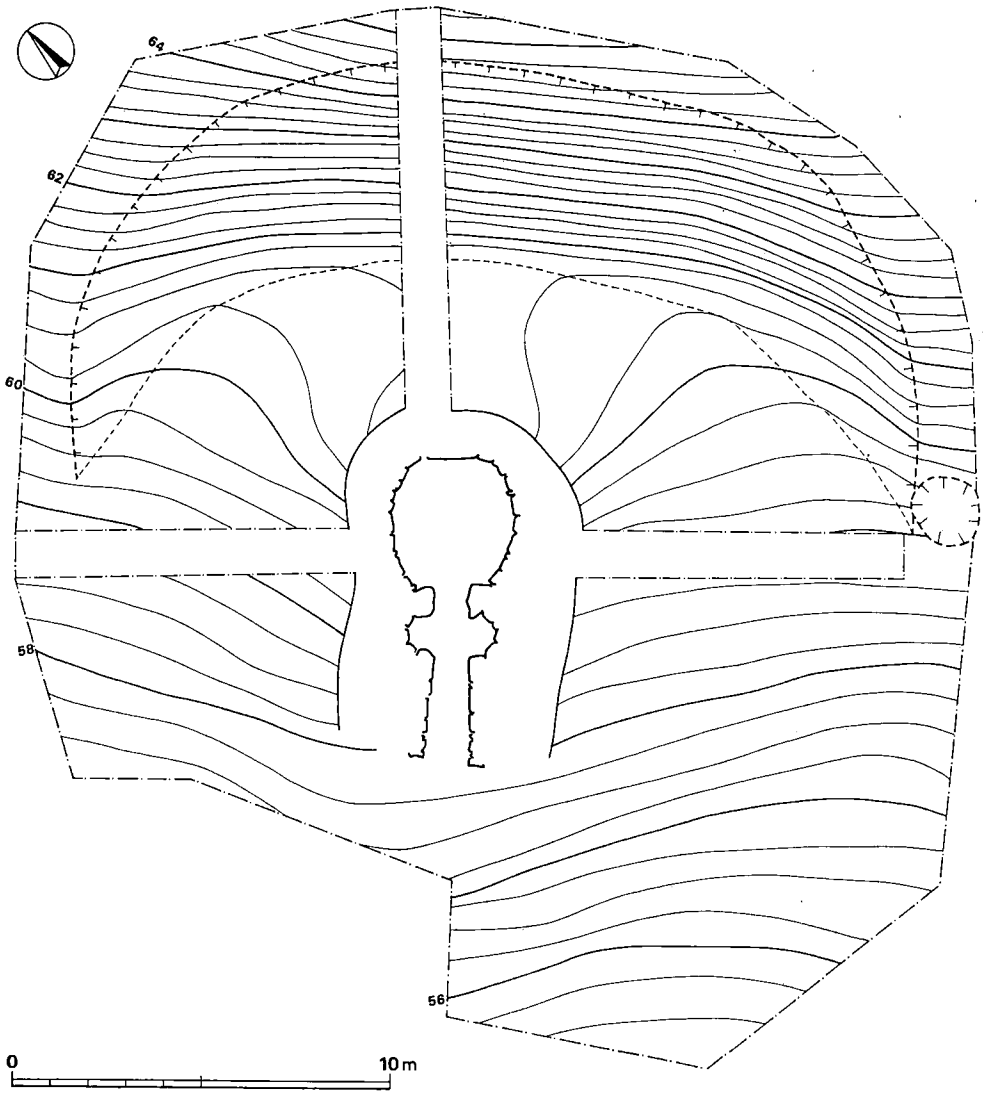
第 7 図　G・1号墳墳丘実測図 (1/200)

のとなっている。

まず北東部のⅡ・Ⅲ区の斜面を，石室中軸線から10m付近，標高64mほどを上端として等高線に平行に削り初め，次第に馬蹄形溝を削り出している。掘削は標高61m付近で平坦部を作り標高60mの石室奥壁にあたる部分でやや高まりを残しながら墳丘基底面を整地している。Ⅰ・Ⅳ区の羨道部付近の標高58mから低いところは削り出された土を埋めてテラス状に整地されている。この段階では溝は明確ではないが，墳丘の築造によって墳丘面と斜面掘削面との間に結



第 9 図　G・1号墳土層図 (1/60)



第 8 図　G・1号墳地山整形面実測図（1/200）

果的には馬蹄形状の溝が生みだされている。

墳丘は溝内側の整地面を基底として盛土が行なわれている。墳丘規模は地表でのみかけの観察よりAトレンチで80㎝，Bトレンチで70㎝，Cトレンチで1㎡ほど大きくなる。

墳丘の形成過程は大きく3段階に分けることができる。第1段階は，石室構築の裏込め的なもので，この盛土の流出を防ぐ内護列石が平行して組まれる。腰石付近の下層はかたく叩きしめられている（註）。内護列石の構築は大きく2段階に分けて行なわれ，1段階目は，羨門の

左側1.6m から西側の谷に面するⅠ区からⅡ区にかけての部分と，羨門右側2mから墳丘南側のⅣ区部分である(第10図スクリートン部)。ともに弧を描き基底部に長さ50cm，幅30cm，厚さ10cm前後の転石を使用し横位に固定し,上段にはやや小ぶりな石材を使用し,石室側へずらしながら，盛土と平行して横積みされる。Ⅰ～Ⅱ区の傾斜角度は約60°で，Ⅳ区の傾斜角度は約65°を測る。高さは1m前後を測る。この段階で墳丘，石室の基礎工事は終了し墳形もほぼ確定される。2段階目の石積は，Ⅰ区の石積の上層から重ねられ墳丘の北側・東側のⅡ・Ⅲ区まで続く。一気にこの段階まで構築されなかったのは，壁体の構築と墳丘基底部の高低差によるものと思われる。この段階の傾斜角度は45° 前後で上部に行くにしたがって緩やかになる。この段階で最っとも列石が高く積まれたのは墳丘南西側の谷に面した部分で約2mを測る。これが墳丘の原形を保つ大きな要因となっている。

第2段階の盛土はこの石積を覆うもので，石組の外側をたたきしめている。第3段階の盛土は，墳丘整形の為の最終盛土である。

墳丘の高さは，石室の状態，内護列石の最上段等から復原して約3.5m ほどになるものと考えられる。

墳丘内の出土遺物は，Ⅰ区内護列石の前面にて須恵器杯・身，土師器高杯，鉄鏃等が検出された。

(註)　内護列石は，Aトレンチで石室中軸から4.64m，Bトレンチで5.25m，Cトレンチで4mのところで確認した。

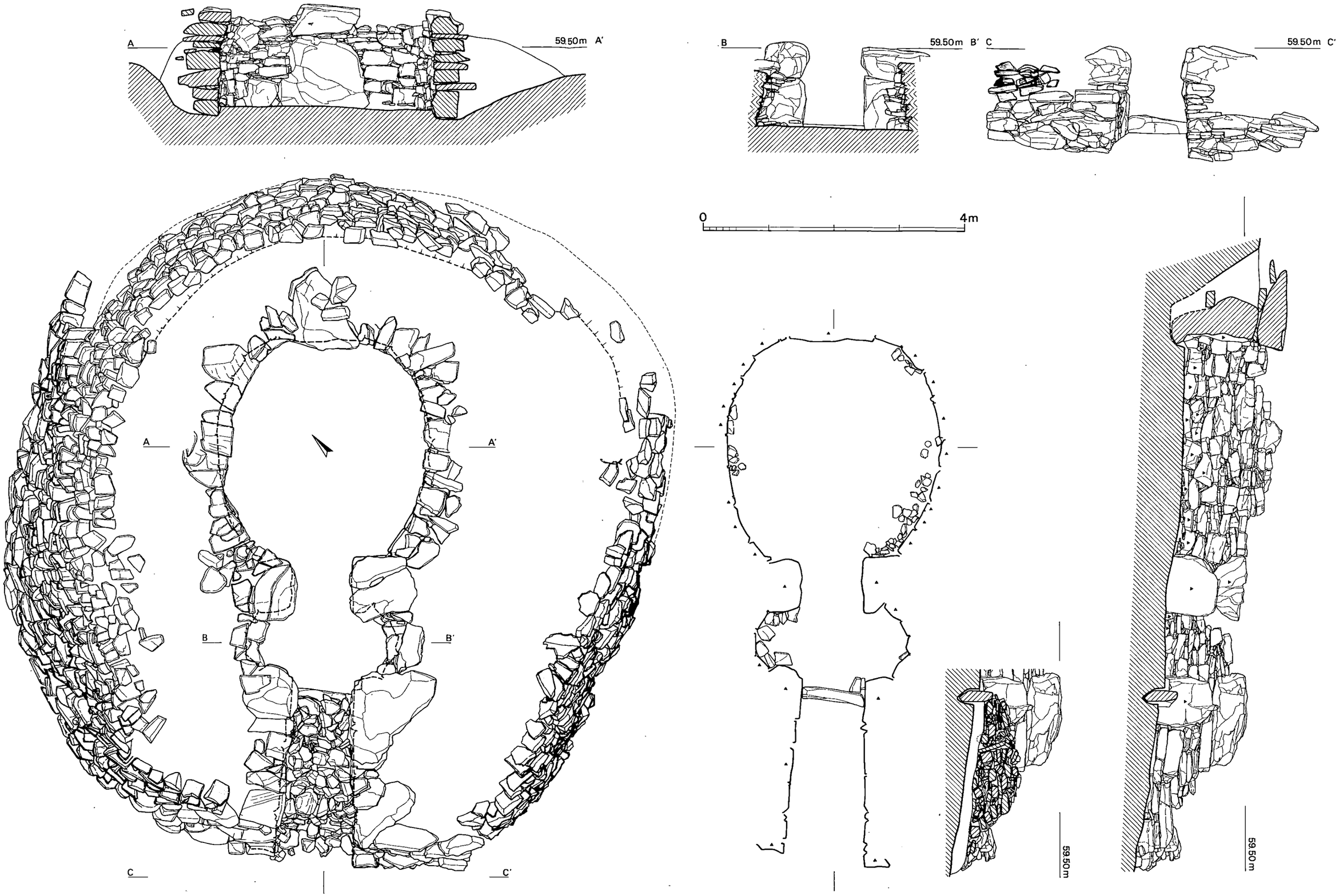
主　体　部 (図版8～9，第10図)

本墳の埋葬施設は主軸を，N42°30′Eにとり，西南の谷に向って開口する複室の両袖型横穴式石室である。石室の掘方は，9m×6m程の不整長方形プランを呈し，奥壁部で深さ 1.3mを測るが，羨門付近で掘込がなくなる。石室は，天井部，壁体の上部を欠く。玄室・前室はすでに盗掘を受け，床面の敷石は原位置に数個残るのみで大部分は攪乱した状態で詳細は不明である。

石室の全長は，左壁側で7.8m，右壁側で8.1mを測る。

玄室の長さは，両側壁で3.35m，中軸線で3.32m，幅は奥壁で1.35m，玄門側で 1.9m，中心で最大幅3.25mを測り，所謂，三味線胴張プランを示す。残存する壁体は，奥壁2段，左側壁8段，右側壁9段で，床面からの高さは 1.5m程である。

基部は壙底を10～20cm程度掘り下げて，奥壁1個，左側壁10個，右側壁10個の長方体に近い石材を用いて腰石としている。腰石は他の壁体に用いられた片岩系（柿原石）の石とは異なり暗黄色をおびた砂質系の石材を用いている（第10図▲印）。両側壁は5段目まではほぼ垂直に横積され，それより上は次第にせり出す構築法をとっている。奥壁は2段目からせり出す。



第 10 図　G・1号墳石室実測図（1/60）

玄室からの出土遺物は，盗掘に伴なう糸切り土師器杯1点のみである。

玄門部は，素型の両袖で特別な施設はない。左右袖幅は各0.45mを測る。石材は玄室の腰石と同様の砂質系のものを使用し，縦位に立てて据えられている。框石は確認できなかった。

前室は，主軸長1m，最大幅2.3m を測る。玄室と同じ胴張のプランを呈する。壁体は左右壁ともに9段残存し，床面からの高さは約1mを測る。石材は玄室のものよりひとまわり小ぶりのものが使用され，2段目から次第にせり出す構築法をとっている。敷石は全面にあったと考えられるが詳細は不明。前室からの出土遺物はない。

前門は，左袖で50cm，右袖で42cm前室側壁より張り出して立てられ，幅を71cmとしている。前門には半分埋め込まれた框石がある。

羨道部の長さは，左壁側で2.35m，右壁側で2.5mを測る。幅は奥で0.95m，羨門で1.25mである。側壁には，細長い石材を用いてレンガ積方式でやや内傾して構築されている。右壁の最上段の壁石は，同時に袖石の上段に載せられたものでこの上部に天井石があったものと思われる。床面から最上段端部までは1.3m を測る。床面は羨門に向って傾斜している。

羨門部は，左壁側で1.85m，右壁側で1.7m 外側まで側壁と同時に構築された石積みがあり，墳丘内部の内護列石へとつづく。

閉塞は前門の框石から羨道部全体に行なわれている。30～40cm大の石を使用して4～5段積みしている。框石から約70cmのところに斜めに立てられた石があり，その前後で積み方に若干の変化が認められる。

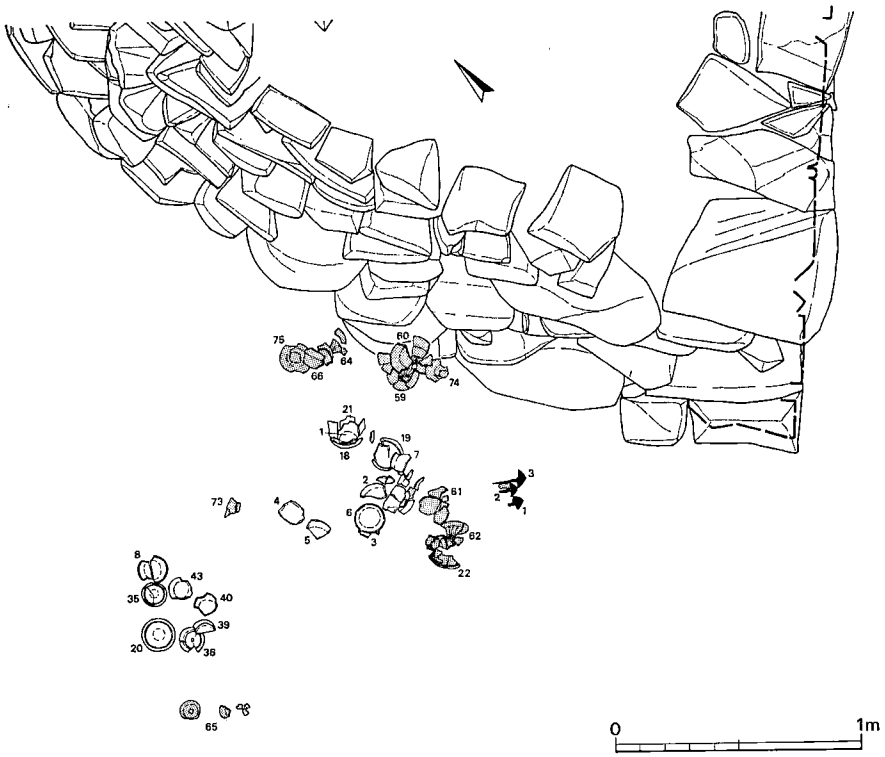
墓道はやわらかい埋土のため確認はできなかった。（池辺元明）

遺物出土状況 （図版9－2，第11図）

G・1号墳は即に盗掘をうけていて，玄室及び前室床面の敷石まですっかり剝がれてしまっており， 両石室内からの出土遺物は少量の須恵器と土師器の小片が出土したに過ぎない。 ただ，玄室内奥壁前面にて，床面近くの攪乱土中より糸切り底土師器杯の完形品が1点出土している（第22図）。この土師器杯は室町時代の頃のものと思われ，G・1号墳はこの時期に盗掘されたものであろう。

羨道からの遺物の出土はない。遺物が最も集中して出土したのは，墓道左脇のⅠ区内護石列前面と，古墳前面の表土下からである。Ⅰ区列石前面からは須恵器約20個，土師器約10個，それに鉄鏃3本が一括出土し，一部の土師器は列石基底部の石にかかっている（図版9－2，第11図)。内護列石構築終了後の祭祀行為に伴った遺物と考えられ，これら一括出土の土器群は一応Ⅰ区列石前面祭祀土器として取り扱ったが，他にも発掘の途中で取り上げたものも多い。

祭祀土器群以外に出土した個所としては，前庭部と，整地層からのものがある。
整地層は斜面を地ならしするために旧地表の上に盛土したもので，遺物はその中に含まれてお



第 11 図　G・1号墳Ⅰ区遺物出土状況実測図（1/30，数字は土器実測図の番号と対応する）

り，とくに斜面側のⅠ区にて出土をみたが，一括・集中的に出土したものは少ない。

墳丘内からの出土はほとんどないが，Ⅳ区墳丘裾の表土下層からは須恵器大甕が数個体分出土している。原位置を保ったものかどうかは不明である。

なお，墳丘盛土内や石室前面の整地層中から少量の弥生式土器片が出土した。そこで，この期の遺構の存在を予想し，墳丘盛土を全て除去し，遺構の検出を行なったが，何ら遺構を検出できなかった。また古墳より斜面上方の丘陵尾根の平坦部にもトレンチを設定したが，遺構・遺物の出土もなかった。

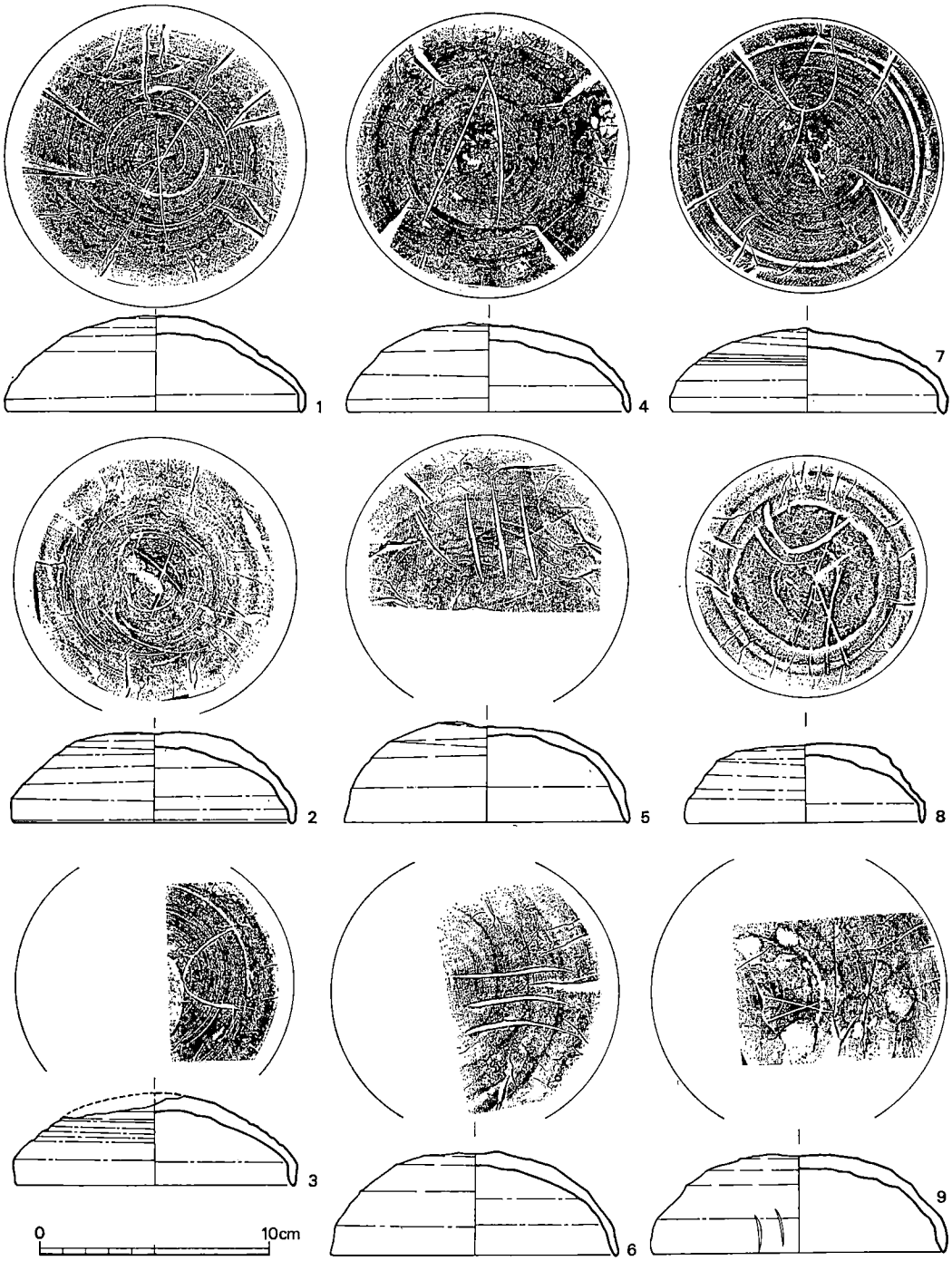
出土遺物は，土器類がほとんどで，石室が盗掘にあっていた関係からか装身具や武器・馬具・工具などの副葬品はほとんどなく，鉄鏃がⅠ区内護列石前面の祭祀土器群に伴ってわずか3本出土したのみである。土器類は，復元可能な小片も1個体として数えると，須恵器が約 60 個体，土師器がその4分の1の約20個体ほどの数量である。（新原正典）

出 土 遺 物

須 恵 器 （図版10～15，第12～18図）

杯蓋（第12・13図１～18）１～８はＩ区内護列石前面出土の祭祀土器群のものである。１は口径 12.8㎝，器高 4.2㎝で，口縁部は８㎜長ほどで直立する。天井部外面は円球状に丸くなり，体部との境は沈線状の凹みを有する。凹みより天井部にかけての外面は回転ヘラケズリ（以下ヘラケズリと略す）で，それ以下から体部内面にかけてはヨコナデ仕上げである。胎土，焼成とも良好で灰色を呈する。杯身18とセットである。２は口径12.5㎝，器高４㎝を測る。天井部外面は平坦面を有し，口縁部はやや内傾しながら直立する。砂粒多く含み，焼成は良好，灰色を呈する。３は口径 12.4㎝，天井部外面の一部が剝落するが復元器高 4.1㎝を測る。天井部外面は丸味を帯び体部との境付近では浅く凹む。口縁部は１㎝の長さで直立し，端部はすぼまる。胎土，焼成とも良好で灰色を呈する。４は口径12.5㎝，器高3.9㎝を測る。天井部から体部にかけては円球状で，やや扁平なつくりである。口縁部との境で浅い凹みをつくる。口縁部は，肉厚となりやや外へ開く。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で，内外面ともに黒灰色を呈する。５は口径12.5㎝，器高 4.4㎝を測る。天井部外面は不整形なヘラケズリで平坦面をつくる。体部からのびる口縁部は一たん折れ，端部は外へ張る。胎土，焼成とも良好で内外面とも紫灰色を呈する。６は，口径12.5㎝，器高4.4㎝。天井部外面のヘラケズリは丁寧で，器高の中位まで及ぶ。天井部と体部との境は明瞭ではないが，体部と口縁部との境は浅い凹みをつくる。口縁部は外へ張る。胎土，焼成ともに良好で，内外面紫灰色をなす。５と焼成，つくり，ヘラ記号は全く同一である。７は口径11.8㎝，器高3.7㎝を測る。天井部外面は丸く仕上げ，体部との境には累線状に沈線が入る。口縁部は肥厚し，直立する。胎土，焼成ともに良好で，色調は灰色を呈す。８は口径10.6㎝，器高3.5㎝を測り，１～７に比し格段に小形品である。天井部外面は平坦で，その部分は粗いヘラケズリである。体部外面はヨコナデしてあるが明瞭な稜が入る。口縁部は直立する。砂粒多く含み，焼成は良い。外面は灰色，内面は茶灰色を呈す。天井部外面にみられるヘラ記号は太・細２種類の線により画き分けられている。天地逆転して杯身となるのかもしれない。

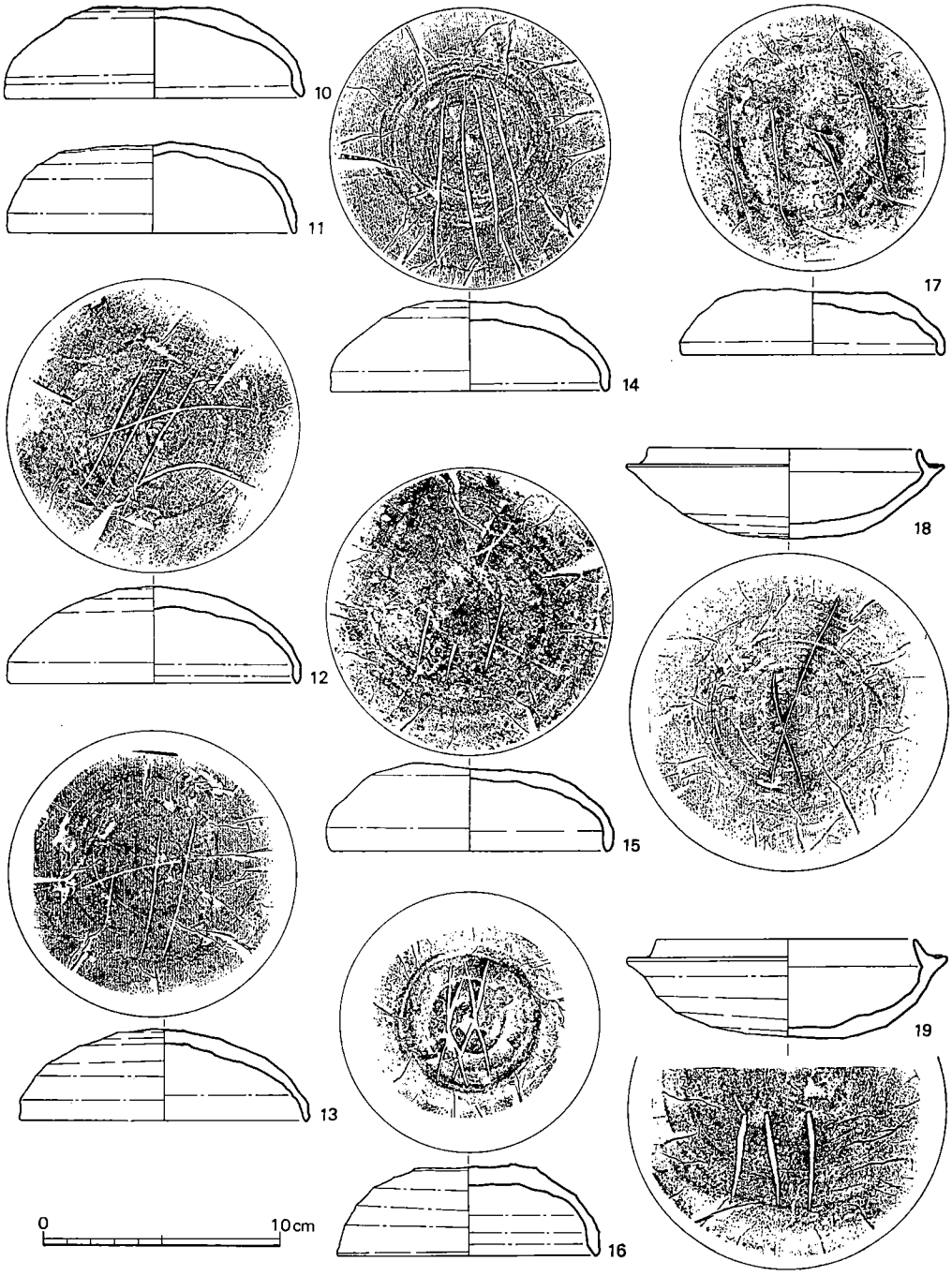
これから述べる杯蓋類は，出土地点別に分けることなく，法量により大から小の序列で図示したものである。９は半損品であるが，復元口径12.8㎝，器高4.3㎝を測る。天井部は円球状に丸味を有し，体部は広く浅く凹んで口縁部へと続く。口縁部は肉厚で直立する。胎土は精選されたものであるが大粒の砂粒を含んでいる。焼成は良好で黒灰色を呈する。Ｉ区祭祀土器群出土。口縁外面にも鋭い切口のヘラ記号が印されている。10は口径12.8㎝，器高3.9㎝を測る。天井部外面は凹み，ヘラケズリはわずかしかなされない。口縁部は肉厚で端部は外へ張る。胎土は精選されているが大粒の砂粒を含む。11は口径12.3㎝，器高3.9㎝を測る。焼成は良好で



第 12 図　G・1号墳出土須恵器実測図①（1/3）

内外面ともに灰白色を呈する。これも10と同様に天井部外面はわずかに凹み,平坦部をつくる。丸味を帯びた体部からつづく口縁部は外へ張る。胎土，焼成ともに良好で，外面は灰黒色，内面は紫灰色を呈する。ヘラ記号はない。Ⅰ区出土。12は口径12.4㎝，器高4.1㎝を測る。天井部から体部にかけてはほとんど凹凸がなく端正な円球状で，口縁部は短かく直立する。胎土には砂粒多く含むが焼成は良好である。外面は黒灰色，内面は暗黄灰色を呈する。天井部面にみられるヘラ記号は太細２種で印されている。Ⅰ区整地層出土。 13は口径12.2㎝，器高3.8㎝を測る。天井部は丸く,器高の半分ほどの高さまでヘラケズリがなされている。口縁端部はやや膨らみ,外へ張る。胎土は粗く大粒の砂粒を含んでいる。 焼成は良好で外面は黒灰色，内面は灰白色を呈す。Ⅰ区整地層出土。14は口径11.6㎝，器高3.8㎝で，天井部外面やや平坦面となる。口縁部は肉厚となりわずかに内傾する。胎土は大粒の砂粒を含むが焼成は良い。外面灰白色，内面黄灰色を呈す。Ⅰ区整地層出土。15は口径11.9㎝，器高3.8㎝を測る。 天井部外面はヘラケズリがなされず未調整のままである。口縁部は肥厚し内傾する。胎土は粗であるが焼成は良い。黒灰色を呈す。Ⅰ区出土。16は口径11㎝，器高3.8㎝を測る小形品である。 天井部外面は未調整で，径5.3㎝の平坦面をつくる。 口縁部は分厚く，やや外へ張る。胎土，焼成ともに良好で，外面は紫灰色，内面は灰色を呈する。Ⅰ区墳丘内出土。 17は口径10.9㎝，器高2.8㎝の扁平なものである。天井部外面は未調整で径6.1㎝ほどの平坦面をつくる。 口縁部は肉厚で短かく直立する。胎土は大粒の砂粒を多く含む。内外面ともに灰色で焼成も良い。Ⅰ区出土。天地逆転して身となるのかもしれない。

杯身（第12・13図１～18） 18～22はⅠ区祭祀土器一括出土品である。18は口径 11.4㎝，受け部径13.5㎝，器高 3.9㎝，立上り高８㎜を測る。立上りはやや内傾し，先端部は直立する。受け部は内傾し，上面には沈線が巡る。受け部と体部との境は明瞭ではない。底部はやや丸味をもつ。胎土には少量の砂粒を含むが焼成は良好である。内外面とも灰色を呈す。１の杯蓋とセットである。19は口径11㎝，受け部径13.6㎝，器高4.2㎝，立上り高８㎜を測る。 立上りは先端まで直に内傾し，受け部側の基部は段がつく。受け部は内傾し，上面には沈線が１条巡る。体部と底部との境は明瞭で底部はやや平坦面となる。砂粒少量含み，焼成良好である。外面黄灰色で一部黒灰色，内面灰黒色である。20は口径10.7㎝，受け部径13.2㎝，器高3.7㎝，立上り高７㎜を測り，径に比べて浅い造りのものである。受け部の内傾はきつく，上面には沈線が１条巡る。受け部から体部，底部への境は明瞭でなく，底部は丸味をもつ。胎土，焼成ともに良好で外面は黄灰色，内面は紫灰色を呈する。21は半損品であるが，復元口径11.6㎝，復元受け部径14㎝，器高4.1㎝,立上り高６㎜を測る。立上りは強く内傾し，先端部は直立気味である。受け部は内傾し，上面には沈線が１条巡る。受け部から体部にかけての境は明瞭ではないが，体部と底部との境には浅い凹みが入る。底部は丸くなる。砂粒多く含み，焼成は良好である。外面黄灰色，内面灰色を呈す。22は口径10.1㎝，受け部径12㎝，器高3.7㎝， 立上り高５㎜と



第 13 図　G・1号墳出土須恵器実測図②（1/3）

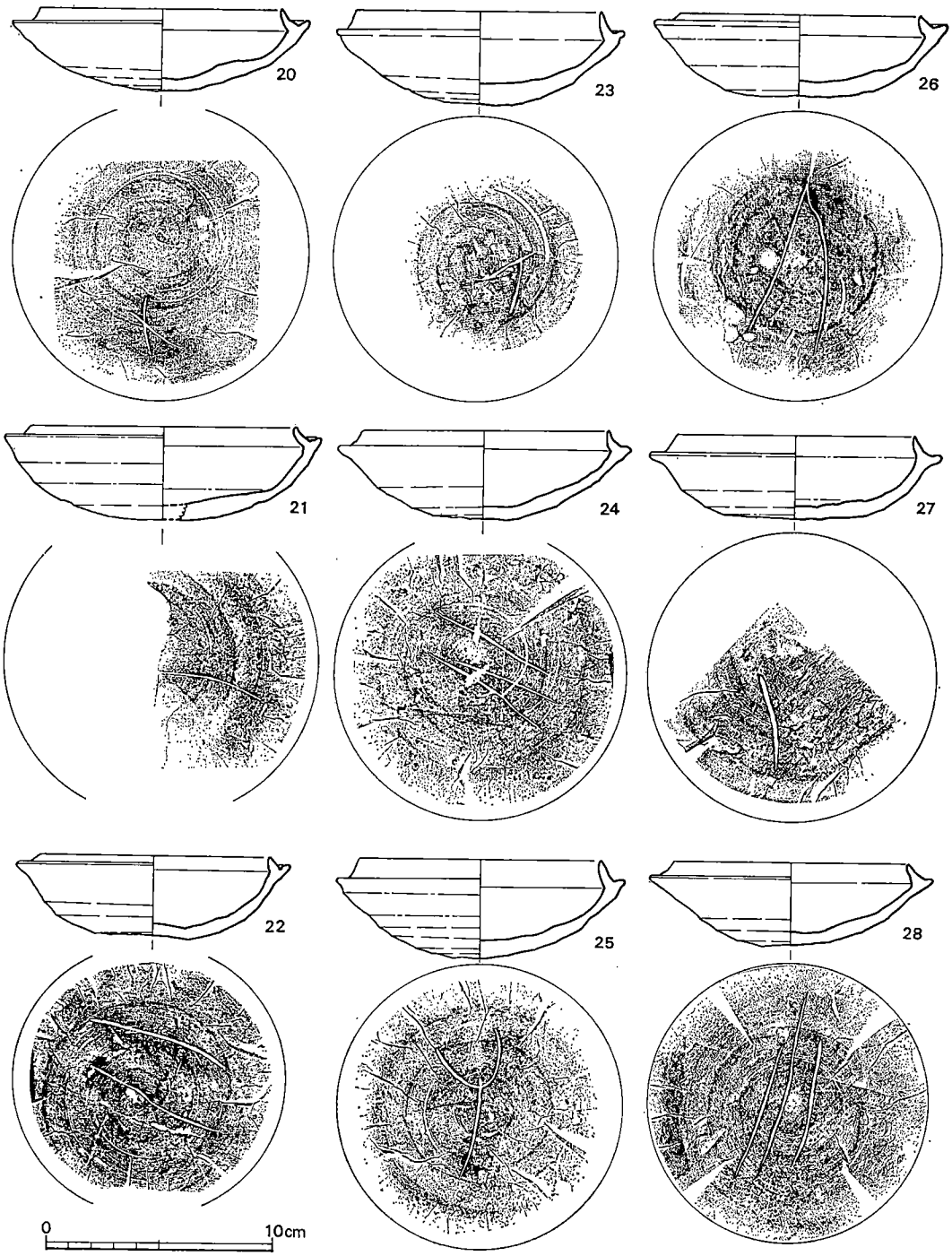
上記のものに比しやや小形となる。立上りは短かくて太く，受け部も短かいが，上面には沈線が1条巡る。底部は凹む。胎土には砂粒多く含むが焼成は良好である。外面灰黒色，内面灰色を呈する。以上18～22は一括出土品である。

23は口径10.7㎝，受け部径12.7㎝，器高4.2㎝で立上り高9㎜と長い。立上りは強くたちあがり，先端は尖る。受け部は短かく肉厚である。体部と底部との境は明瞭で，底部はわずかではあるが平坦面をつくる。砂粒多いが焼成は良い。内外面灰色である。Ⅰ区整地層出土。24は口径10.7㎝，受け部径13㎝，器高4㎝，立上り高7㎜を測る。立上りは先端部は尖がり直立する。受け部はあまり張らずに肉厚で，上面は水平に近くなる。胎土には大粒の砂粒を多く含むが焼成はよい。内外面とも灰白色を呈する。Ⅰ区墳丘内裾部出土。25は口径10.6㎝，受け部径12.8㎝，器高4.4㎝を測り，口径に比し深く，高上り高も9㎜と長い。受け部は短かいが上面はわずかに内傾し，体部との境は肥厚する。体部と底部との境は浅く凹み底部は強い丸味をもつ。砂粒少量を含み,焼成もよい。外面黄灰色,内面黒灰色を呈する。Ⅰ区墳丘下整地層出土。26は口縁部の3分の1ほどを欠損するが，復元口径10.6㎝，復元受け部径13㎝，器高3.7㎝，立上り高5㎜を測る。器壁は全体的に肉厚で，立上り先端部は尖る。受け部上面はわずかに内傾する。底部は粗いヘラケズリで平坦面をつくる。砂粒少量含み,焼成も良。灰黒色を呈する。Ⅰ区整地層出土。27は3分の1ほどしか残っていない。復元口径10.5㎝，復元受け部径13㎝，器高3.7㎝,立上り高8㎜を測る。立上りは薄くて尖り，内面には鋭い稜はつかない。受け部も肉薄で強く張り出し,立上りとの境はなめらかである。底部は粗いヘラケズリで平坦面をつくる。胎土，焼成とも良好で，外面灰白色，内面紫灰色を呈する。Ⅰ区出土。28は口径10.3㎝，受け部径12.5㎝，器高3.6㎝，立上り高7㎜を測る。立上りと受け部との境はあまり明瞭ではなく，受け部上面はほぼ水平となる。体部から底部にかけてはあまり変化はなく尖り気味の底部へと続く。大粒の砂粒を多く含み，器面に浮き出ている。外面黄灰色，内面灰白色を呈する。Ⅰ区整地層出土。

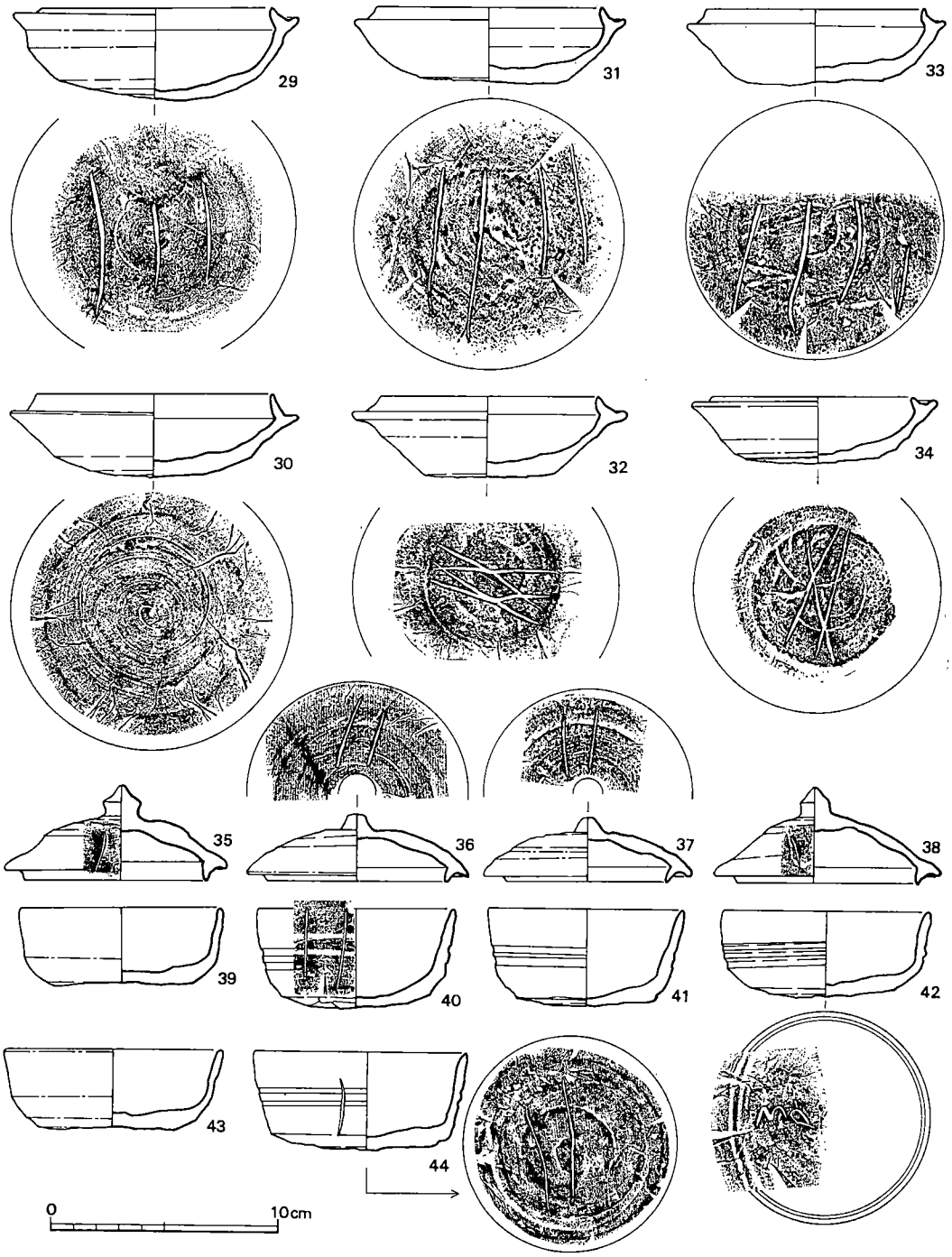
29は口径10.1㎝，受け部径12.6㎝，器高4.1㎝，立上り高6㎜を測る。立上りは先端部が尖り基部は肉厚となる。受け部は強く張り，上面立上りとの境には鋭い1条の沈線が巡る。受け部と体部とは強く屈折し，平底気味の底部へと続く。全体の器形は箱形に近い。大粒の砂粒少量含むが焼成は良い。内外面灰白色である。Ⅰ区整地層出土。30は口径10.3㎝,受け部径12.6㎝器高3.7㎝，立上り高1㎝を測る。立上りは肉薄で内傾しながら直に延び，受け部との境は1条の線が巡る。受け部上面はほぼ水平で強く外へ張る。体部は内湾しながら平底気味の底部へと続く。胎土もよく精選されており，造りも丁寧である。内外面とも灰色を呈し焼成も良好。ヘラ記号はない。31は口径9.8㎝，受け部径12㎝，器高3.3㎝，立上り高6㎜を測る。立上りは肉厚で低く，受け部との境は不明瞭である。受け部はわずかに凹む程度である。体部と底部との境は明瞭で，底部は未調整のままで平坦面をつくる。その径は6㎝である。胎土には大粒の砂粒を多く含み，雑な造りである。内外面とも灰色をなす。Ⅰ区墳丘下整地層出土。32は半損

品である。復元口径9.5㎝，復元受け部径12.1㎝，器高3.6㎝，立上り高7㎜を測る。立上りは内傾が強く先端は直立気味に尖る。受け部はわずかに凹み肉厚である。体部はほぼストレートで，明らかに平底をなす底部へと続く。この部分は未調整のままである。砂粒多く含むが焼成は良い。内外面とも紫灰色を呈する。33は口径9.4㎝，受け部径11.4㎝，器高3.3㎝，立上り高5㎜を測る。器壁は肉厚で，立上りと受け部との境は明瞭ではない。体部は内湾しながら平底の底部へと続く。底部は未調整で径6㎝を測る。径5㎜ほどの大粒の砂粒を含み雑な造りである。内外面とも灰色を呈する。前庭部出土。34は口径8.8㎝，受け部径10.8㎝，器高2.9㎝，立上り高3㎜と最も小形品である。器壁は肉厚で，立上りと受け部との境は1条の線が入る。体部は内湾しながら未調整の底部へと続く。底部は平底で径6㎝を測る。胎土には砂粒多く含み，雑な造りである。内面紫灰色，外面灰色を呈す。Ⅰ区出土。

つまみ付蓋杯（第15図35～42）　35～38はつまみ付蓋，39～42はその身である。35～36と39・40・43はⅠ区祭祀土器群出土品である。35は口径8㎝，最大径9.8㎝，器高3.2㎝，かえり高6㎜を測る。つまみは高いつくりの宝珠つまみがつき，天井部と体部の境いは明瞭な段がつく。天井部はヘラケズリである。かえりは肉厚で，端部は直立する。胎土，焼成ともに良好で，灰色を呈する。39とセットをなすものと思われる。ヘラ記号が一部残存する。36は口径7.8㎝，最大径9.8㎝，器高3㎝，かえり高4㎜を測る。つまみは半球形で，ヘラケズリの天井部と体部との境は浅い凹みができる。かえりは短かく内に張る。胎土は良好であるが焼成はやや不十分である。内外面ともに灰白色となる。40とセットをなすものと思われ，ヘラ記号も同種である。37は口径7㎝，最大径9.2㎝，器高2.9㎝，かえり高5㎜を測る。つまみは半球形で，天井部と体部との境は浅い凹みをつくる。かえりは肉薄で先端は尖る。砂粒多く含み灰白色を呈し焼成は不十分である。41とセットであろう。38は口径7.9㎝，最大径10㎝，器高4,3㎝，かえり高5㎜を測る。つまみは高い宝珠形で，体部は直に口縁部へと続く。かえりは肉厚で先端部上る。砂粒多いが焼成は良好で灰色を呈す。Ⅰ区整地層出土，42とセットであろう。39は立ちは口径8.8㎝，底径6㎝，器高3.5㎝を測る。口縁部と体部との境はゆるく屈曲し，口縁部は丸く仕上げる。体部と底部との境付近はヘラケズリされ底部は未調整のままである。砂粒を少量含むが焼成よく，灰色を呈する。体部を半分ほど欠損する。40は口径8.5㎝，底径6.5㎝，器高4.4㎝を測る。口縁部から体部はほぼ直で，体部には2条の沈線を施す。底部は手持ちヘラケズリでやや丸味を帯びる。砂粒を少量含み，やや軟質の焼成である。灰白色を呈する。41は口径8.5㎝底径6㎝，器高4.3㎝を測る。体部から口縁部にかけては直に外へ延びる。体部には2条の浅い沈線を巡らす。底部はヘラケズリで丸味をもつが，砂粒多くやや軟質の灰白色を呈するものである。Ⅰ区整地層裾出土。42は口径9㎝，底径5.5㎝，器高3.8㎝を測る。体部からのびた口縁部はやや外湾気味に開く。体部には累線状に沈線を2～3条施す。体部と底部の間はヘラケズリで底部は未調整のままである。胎土，焼成ともに良く灰色を呈する。Ⅰ区整地層裾部出土。



第 14 図　G・1号墳出土須恵器実測図③（1/3）



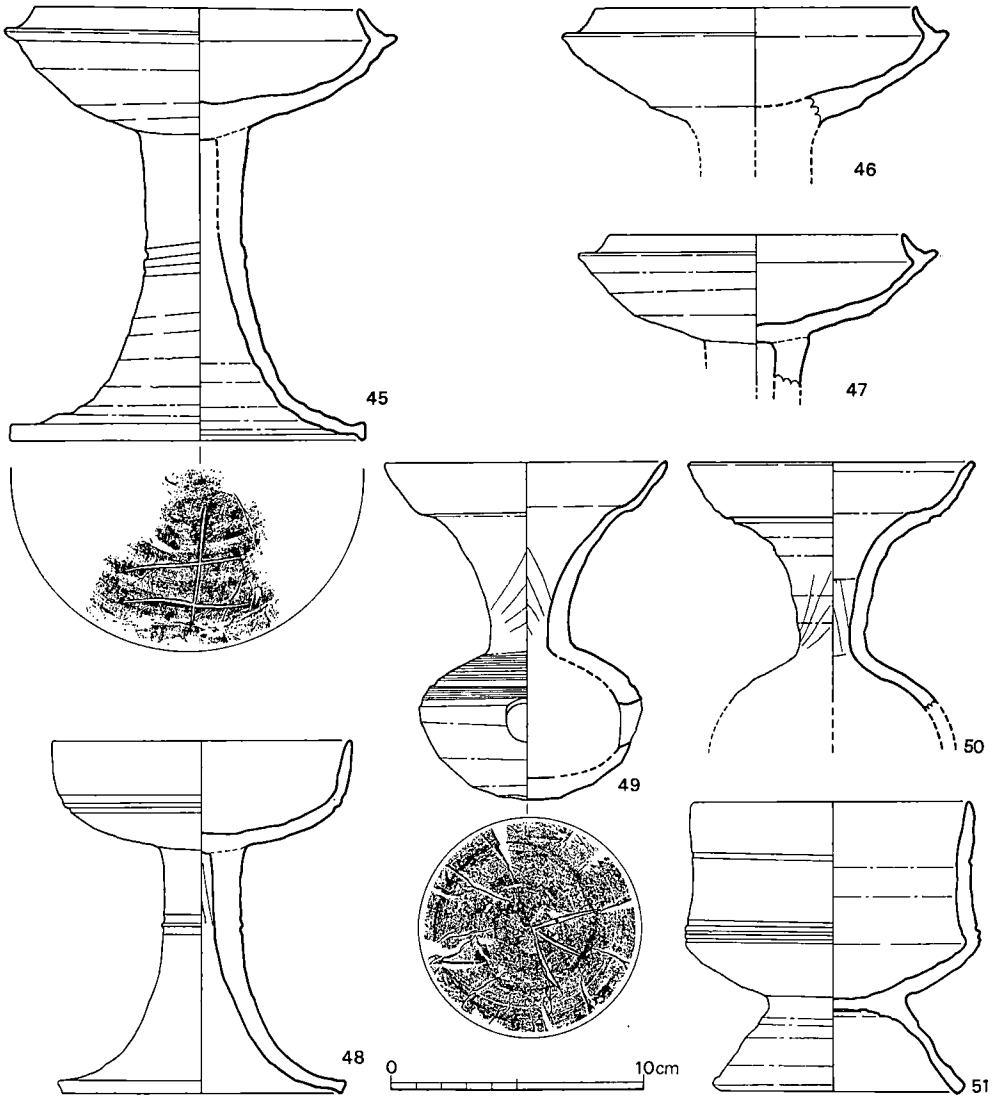
第 15 図　G・1号墳出土須恵器実測図④ (1/3)

体部下半から底部にかけて通常のヘラ記号とは異った文字状のヘラ記号が印されている。43・44は他の身に比し口径は大きくなる。43は口径9.4㎝，底径5.9㎝，器高3.5㎝を測る。体部から口縁部にかけては強く屈折する。底部は未調整のままで，雑な造りである。胎土には5㎜ほどの大粒砂粒を含み，焼成も甘い。両面ともに灰白色を呈する。ヘラ記号はない。44は口径9.3㎝，底径6㎝，器高4.3㎝を測る。体部から口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がり，体部には2条の沈線を入れる。底部は雑なヘラケズリである。底部とともに体部側面にもヘラ記号を施している。胎土，焼成とも良好で灰白色を呈する。

高杯（第16図45～48）　高杯には45～46のような有蓋高杯と，47・48の無蓋高杯とがある。45は口径12.7㎝，受け部径15.4㎝，底径5㎝，器高17.2㎝を測る。立上り高は1㎝で肉薄，強く内傾する。受け部はあまり張らずに上面も水平よりわずかに凹む程度である。体部から底部にかけては浅い沈線状の凹みが入る。脚柱中央部には斜方向の2条の沈線が入る。脚柱下半はヘラケズリの痕跡が累線状に入り，脚端部は上下方へ小さくはね，段をつくる。脚柱上部内面にはしぼり痕がみられ，裾部近くの内面にはヘラ記号が印される。胎土，焼成ともに良好で，灰白色を呈している。63は杯部の一部と脚柱部以下を欠損し，復元口径12.7㎝，復元受け部径15.2㎝を測る。立上り高は1㎝で肉薄である。受け部と底部をつなぐ体部は薄くつくられ，厚手の底部へと続く。胎土，焼成ともに良好で焼成はやや軟質である。47も脚柱部以下を欠損する。口径11.7㎝，受け部径14.2㎝，立上り高7㎜で45・46に比しやや小形である。立上りの先端は尖り，受け部との境には1条の沈線が巡る。体部と底部との境は強く屈折する。大粒の砂粒を含むが精選されており焼成も良好である。灰色を呈する。なお，この他にも同器種の高杯片が1個ある。48は杯部を半分欠損するが，復元口径11.8㎝，器高14.1㎝，底径4.3㎝を測る。体部には2条の沈線を巡らし，それから延びる口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸く仕上げる。沈線から底部にかけてはヘラケズリの後ナデ仕上げである。脚柱上位には2条の沈線を入れ2分している。脚裾部はゆるくラッパ状に開き，端部は上下方にはね，段をつくる。脚柱内面上部にはしぼり痕が観察される。

瓿（第16図49）　口径11.2㎝，胴最大径8.9㎝，器高13.4㎝を測る。口縁部はラッパ状に大きく開き，下方に段をもつ。頸部は小さくすぼまり，扁球形の胴部へとつづく。胴部上半はカキ目と2条の沈線が入る。胴下半はヘラケズリであるが，底部付近は手持ちヘラケズリがなされている。頸部内外面にしぼり痕が観察される。孔径1.3㎝，胎土・焼成ともに良好で，灰黒色から茶灰色を呈す。I区祭祀土器群に伴出したものであろうが原位置は不明である。50は胴下半部以下を欠損するが，口径11.4㎝を測る。口縁部は深く，頸部との段はきつく，外面にはこの部分に沈線を巡らしている。頸部は小さくすぼまり内外面にはしぼり痕を残す。胎土，焼成ともに良好で，灰色を呈す。

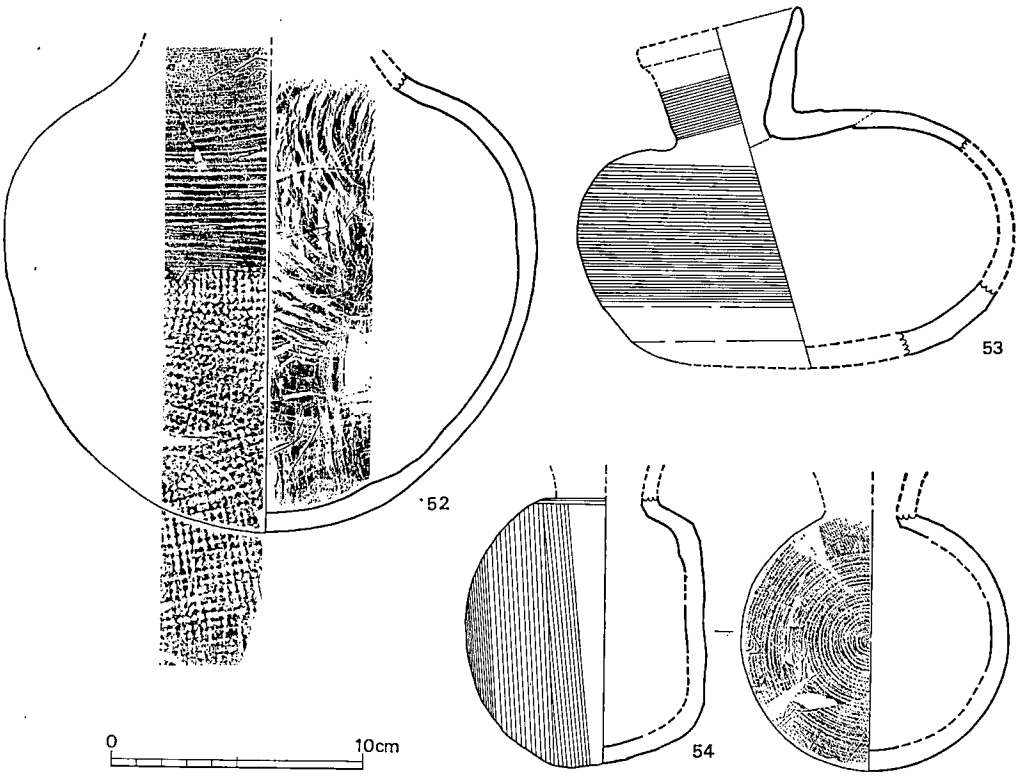
脚台付椀（第16図51）　高い台が付く椀で，口径10.9㎝，高さ8.3㎝の深い椀に，高さ3.7㎝，底径10㎝の脚台がつくもので全器高は11.3㎝を測る。体部から口縁部にかけてはやや内湾しなが



第 16 図　G・1号墳出土須恵器実測図⑤ (1/3)

ら直に立ち上り，口縁部よりやや下位に1条の沈線を入れる。体部と底部との境は最大径をつくり，この部分にも3条の沈線を巡らしている。脚台部は数条の甘い稜が入り，端部は肥厚する。

短頸壺（第17図52）　口縁部を欠損するが短頸壺であろう。現存高18.2㎝，胴最大径21.1㎝を測る。やや張り気味の肩部に円球形の胴部がつき，最大径は器高の中位にくる。胴下半はゆるやかなカーブを描いて底部へと続くが，底部はやや膨らむ。肩より頸部にかけてはヨコナデ，肩部より胴中位にかけては荒いカキ目，胴下半より底部にかけては格子目のタタキが施さ



第 17 図　G・1号墳出土須恵器実測図⑥ (1/3)

れ，内面も胴下半以下は青海波のタタキ痕が残る。胎土は精選されているが焼成は不十分で甘い。黒灰色を呈するが底部近くでは灰白色となる。

平瓶（第17図53）　平瓶で口縁部の大半と胴及び底部の一部を欠損する。復元口径6.8cm，復元胴最大径17.4cm，復元器高14.3cmを測る。口縁部はいったん膨らんで端部で尖っている。口頸部と胴上半部はカキ目調整がなされているが，肩部付近は消されている。胴下半はヘラケズリである。胎土，焼成ともに良く，灰白色を呈する。

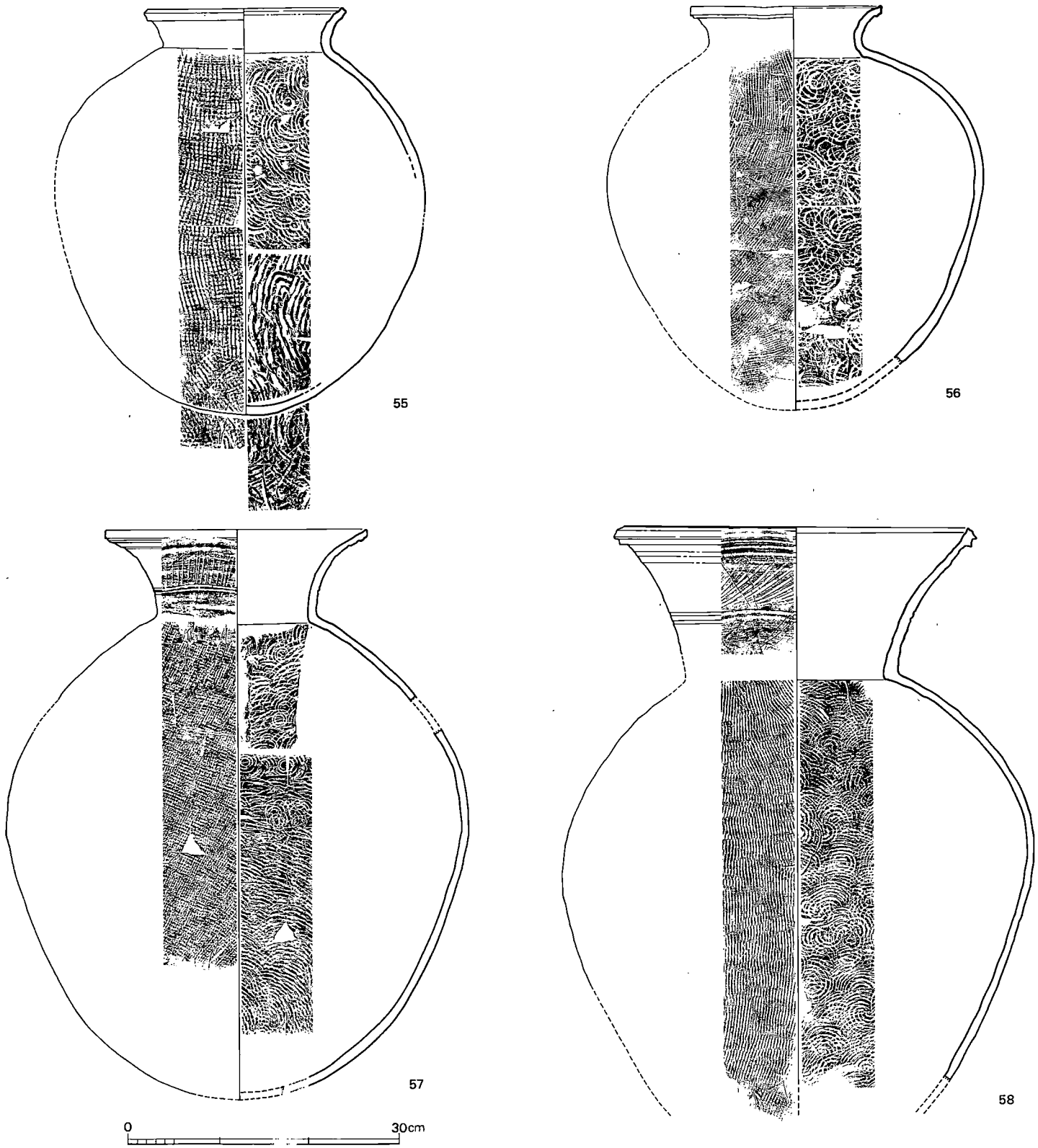
提瓶（第17図54）　口頸部を欠損するが，胴最大径10.7cm，側面最大幅9.5cm，現存高10.7cmを測る。胴部側面は大きく膨らむが背面は扁平となる。胴部は逆時計廻りのカキ目調整がなされているが，頸部下位ではそれと直行するカキ目調整である。胎土，焼成も良く灰色を呈する。

甕（第18図55～58）　甕には55・56の小形品と57・58の大形品とがある。55は胴の一部を欠損するがほぼ完形品である。 口径22.4cm，復元胴最大径41cm，頸部高4.4cm，器高45cmを測る。短かくて太い頸部に端部があまり突出しない口縁部がつき，口縁部側面と下面はわずかに凹む。肩部はなで肩で，胴もあまり張らずに底部へと続き，長球形の体部をつくる。最大径は体部中位にくる。体部外面は，肩部付近は縦位の格子目タタキ，それ以下底部までは斜位の格子目の

タタキである。内面は肩部から胴中位までは同心円文の，それ以下は青海波文のタタキ痕が残る。胎土には砂粒多く含み，灰色を呈する。焼成はやや軟質である。Ⅳ区墳丘裾出土。56は口縁部と体部を3分の1ほどと,底部を欠損する。口径21㎝，胴最大径41.5㎝，現存高39.5㎝を測る。強く外反する頸部に端部が上下方に突出する口縁部がつく。やや張り気味の肩部に長胴の体部がつづく。最大径は中位よりやや上にくる。口縁部内外面はヨコナデ，頸から肩部にかけての外面は縦位の平行条線タタキがなされているが，頸部付近ではナデにより消されている。肩部より下半の体部外面は斜位の平行条線タタキ目が施されている。体部外面は間隔をおいて帯状にカキ目調整が胴下半部まで行われている。体部内面は同心円文タタキ痕が残る。胎土，焼成ともよく，外面は淡紫灰色，内面は濃灰色を呈する。Ⅳ区墳丘裾出土。57は口頸部と胴部は接合しないが，同一個体と思われるので図面上復元したものである。それによると復元口径29㎝，復元胴最大径51㎝，復元器高63㎝を推定できる大甕であるが体部のわりには口頸部が小さい。長めの頸部はゆるく外反し，口縁部近くにてより強く開く。口縁端部はあまり張り出さない。口縁部外面には3条の沈線を巡らし，頸部にも平行斜行文の上に，2条の沈線を施している。肩部は張らず器高の中位にて最大径となり体部は長円形を呈する。体部外面は斜方向の格子目文タタキであるが，肩部付近では間隔をおいて帯状にカキ目調整が施されている。体部内面上半部は同心円の，それ以下は青海波のタタキ痕が残されている。胎土は砂粒多く含むが焼成はよい。内面黄灰色，外面黒灰色を呈す。Ⅰ区整地層内出土。58は口径38㎝，胴最大径52㎝，現存高61.5㎝を測る。57より1回り大きく特に体部に比し口頸部の発達が目立つ。まっすぐ外反する頸部に肥厚した口縁部がつく。口縁の両端部は上下に強く突出し,口縁下面には三角凸帯を一条貼り付けている。肩から胴部にかけてのカーブはゆるやかで,体部中位より上に最大径がくる。頸部外面は2本の沈線により上下2段に分けられ，上段はヘラ描き斜行文が施され下段には荒いカキ目調整がなされている。体部外面は平行条線文のタタキで，内面は同心円文のタタキ目が残る。胎土には砂粒多く含むが焼成は良好で黒灰色を呈する。Ⅳ区墳丘裾出土。

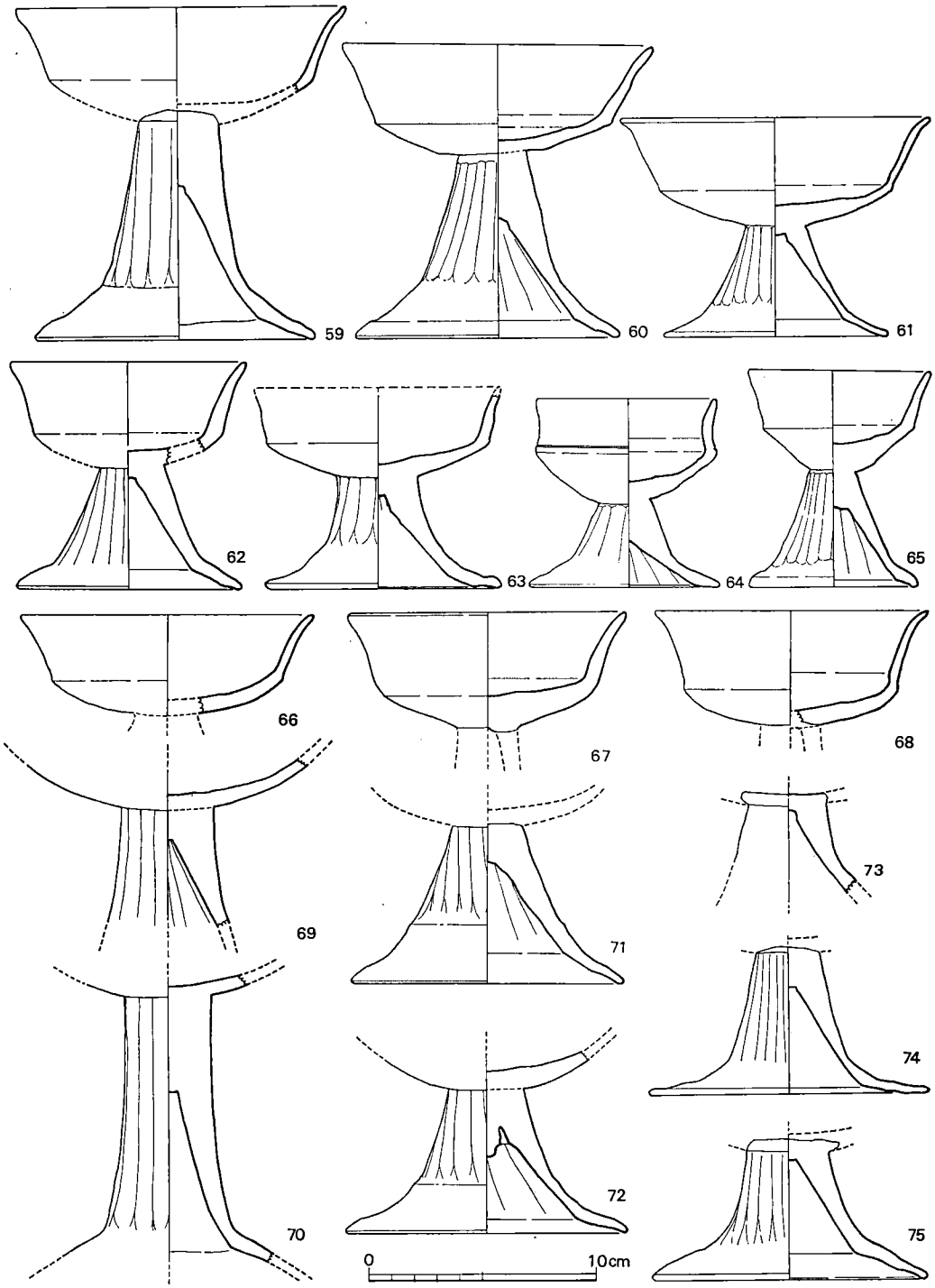
土　師　器　(図版15～17，第19～20図)

高杯（第19図59～第20図80）　高杯は，大・中・小の3種に分けられる。器高により59・60は大形に含まれるもので，59は復元口径14.4㎝，復元器高14.6㎝，底径は12.3㎝を測る。杯部下半を欠損するが，体部から外反した口縁部端を内へ軽くつまんでいる。脚柱部は長くて太く，裾部との境は強く屈曲する。杯部と脚裾部の内外面はヨコナデ，脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ，内面は回転ヘラケズリである。胎土は良好であるが焼成は軟質，暗褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。60は口径13.5㎝，杯部高4.8㎝，器高13㎝，底径11.6㎝を測る。杯の底部と体部との境は明瞭な稜が入り，体部からのびた口縁部はゆるく外へ屈曲させている。脚柱は太いが短かく，杯口縁とほぼ同径の大きく開く裾部へと続く。裾端部の内面はわずかに凹む。杯部内外面は横ナデ，脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ，削り内面は回転ヘラケズリである。胎



第 18 図　G・1号墳出土須恵器実測図⑦ (1/6)

土，焼成ともに良好で黄褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。61～65は中形に含まれる。61は復元口径13.6cm，杯部高4.7cm，復元器高9.6cm，底径9.8cmを測る。口径の割には，器高が低く，杯部と脚柱部との高さがほぼ1対1になる。杯の体部と底部との境は明瞭で，口縁端は強く外反する。脚柱と裾部との境は明瞭である。胎土，焼成とも良好で，明褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。28は復元口径10.4cm，復元器高10cm，底径9.9cmを測る。口縁部端の外反は少なく，杯体部と底部との境は明瞭である。胎土，焼成ともに良好で淡黄褐色をなす。Ⅰ区祭祀土器群伴出。63は復元口径10.9cm，復元器高8.9cm，底径10.3cmを測る。口縁部端を欠損するが，杯体部と底部との境は強く屈折する。脚柱は短かくて太く裾部端は外に強く張り出し内面は凹む。胎土，焼成とも良好で明褐色を呈す。Ⅰ区前庭部出土。64は口径 7.9cm，器高8.4cm，底径8.4cmを測り杯部は深い。杯体部から口縁部にかけては内湾しながら直立し，底部との境は強く張り出して最大径8cmとなる。細い沈線が入る脚柱部の裾は大きく開き，内面は底面近くまでヘラケズリされている。胎土は精選されているが焼成は甘い。暗褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。65も杯部が深く口径8.1cm，杯部高4.3cm，器高9.6cm，底径7.4cmを測る。杯体部と底部との境は強く屈折し，底部は尖底気味で脚柱部と接合する。脚裾部はあまり開かず裾端部は下方へ張る。胎土，焼成とも良好で黄褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。66から68は脚柱部を欠損する杯部だけのものである。66は杯部のみで3分の2を欠損する。復元口径13cm，復元杯部高4.4cmを測る。杯体部の反りは強く口縁端部は丸くおさめる。胎土は精選されているが焼成は甘い。黄褐色を呈す。Ⅰ区祭祀土器群伴出。67は復元口径 12.2cm，杯部高5.1cmを測る。他に比し肉厚で杯体部と底部との境は不明瞭である。胎土，焼成とも良好で黄褐色を呈す。Ⅰ区墳丘下出土。68は復元口径約12cm，杯部高 5.1cmを測る。杯体部と底部との境は明瞭で角張る。胎土，焼成ともによく，黄褐色を呈する。Ⅰ区墳丘内裾部出土。69～75は脚柱部のみである。69は杯部上半と脚柱下半を欠損するが59に似たものであろう。脚柱部外面は下から上方向の丁寧なヘラケズリがなされている。胎土，焼成とも良く黄褐色を呈する。Ⅰ区墳丘内出土。70は脚柱部が現存高で11.3cmを測る長脚の高杯である。脚柱外面のヘラケズリは下から上方向に丁寧に面取りされている。胎土，焼成ともに良好で淡褐色を呈する。69とともに大形品である。Ⅰ区墳丘下出土。71～74は中形品の脚柱部である。71は現存高 7.1cm，復元底径12cmを測る。脚柱中位よりやや下に甘い稜が入る。裾部はやや内湾気味に広がる。胎土，焼成ともに良好で褐色を呈する。Ⅰ区前庭部出土。72は杯上半部を欠損し，現存高8cm，復元底径12.4cmを測る。71と似通った手法で造られ，焼成も似ている。前庭部出土。73は残存状態の悪いもので，器面も荒れている。Ⅰ区祭祀土器群伴出。74は現存高 6.4cm，復元底径12.4cmを測る。脚柱部から続く裾部は急に開き，幅広い底部をつくる。胎土，焼成も良好で，褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。75は現存高5.6cm，底径12cmを測る。裾端部は内側にはねている。胎土，焼成も良好で褐色を呈する。Ⅰ区祭祀土器群伴出。

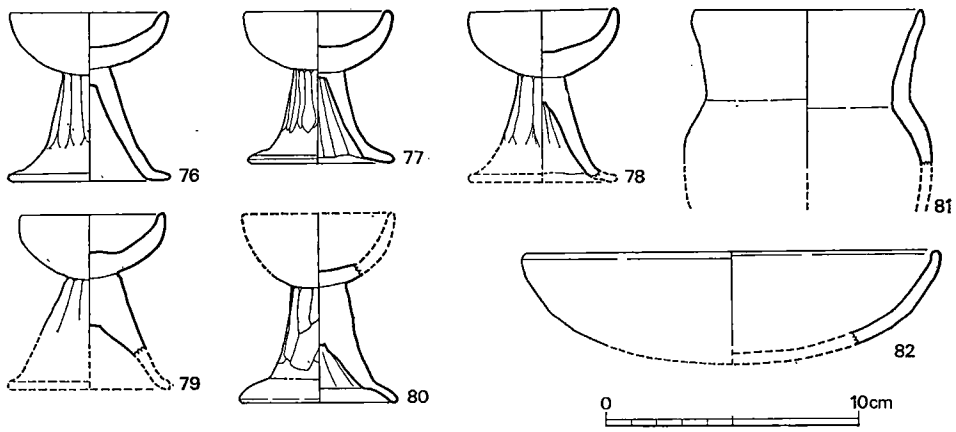


第 19 図　G・1号墳出土土師器実測図①（1/3）

76～80は小形の高杯で半球状の杯に裾端部があまり開かない脚柱部をつけたものである。いずれも整形手法は同じで，杯部は内外面ともヨコナデであるが外底面近くはヘラケズリしたものもある。脚柱部外面はヘラケズリ，内面は回転ヘラケズリ，裾端部は横ナデ仕上げである。76は口径 6.3㎝，器高6.8㎝，底径6.4㎝，胎土，焼成とも良好で褐色を呈する。Ⅰ前庭部出土。77は口径6㎝，器高6.1㎝，底径5.8㎝，胎土，焼成とも良好で明褐色を呈する。Ⅰ区墳丘下出土。78は底部端を欠損するが口径6㎝，復元器高7㎝を測る。胎土，焼成とも良好で，明褐色を呈す。Ⅳ区墳丘裾表土下出土。79も脚柱部下半を欠く。口径5.8㎝。胎土は精選されており焼成もよく褐色を呈する。Ⅰ区墳丘内裾部出土。80は杯部上半を欠損する。底径 6.3㎝。裾端部は内反りに開き，他の高杯と異なる。胎土，焼成ともに良好で明褐色を呈する。前庭部出土。

壺（第20図81）　復元口径9㎝，現存高6.2㎝を測る。器壁は肉厚で凹凸が多く，手づくね風の壺である。外反した体部につづく口縁端は内につままれている。胎土は精選されているが焼成は軟質である。褐色を呈する。Ⅰ区墳丘下出土。

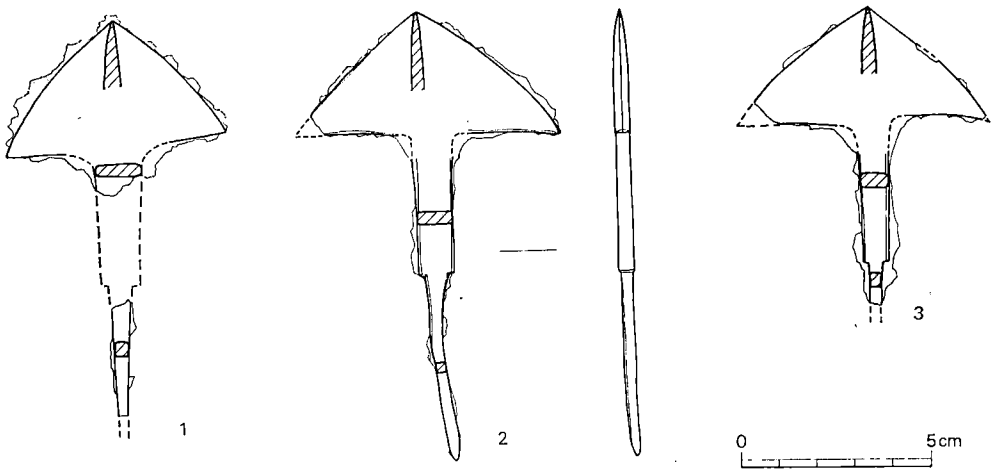
盤（第20図82）⅔を欠損し，復元口径16.6㎝を測る。体部は内湾しながら立上り，口縁部端は内へつまんでいる。内外面とも横ナデされている。胎土，焼成とも良好で褐色を呈す。前庭部出土。



第 20 図　G・1号墳出土土師器実測図②（1/3）

武　　器　(図版17，第21図)

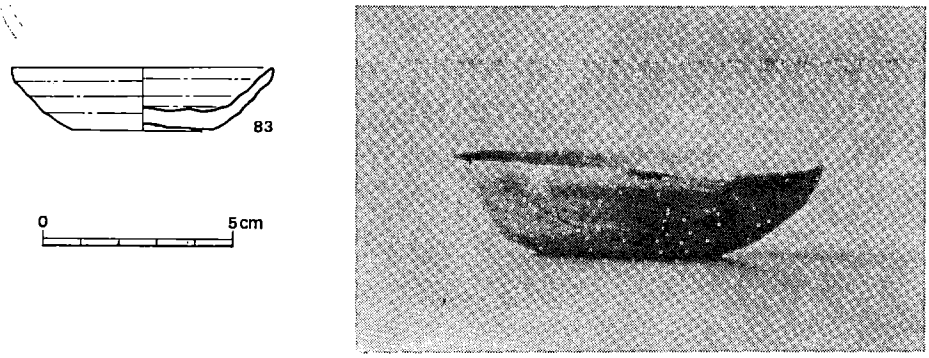
鉄鏃（第21図1～3）　すべてⅠ区祭祀土器群に伴出したものである。いずれも有茎で鏃身が三角形を呈し頸部が短かい篦被広鋒両丸造三角形式に属するが，細部の計測値は異なる。全長がわかるものは2だけで，鏃身3.2㎝，頸部3.7㎝，茎4.9㎝，全長11.8㎝を測る。鏃身最大幅は7㎝，最大厚は3㎜である。重さは19ｇある。実戦用には不向きの鏃である。



第21図　G・1号墳出土器実測図（1/2）

その他の出土遺物　(第22・23図)

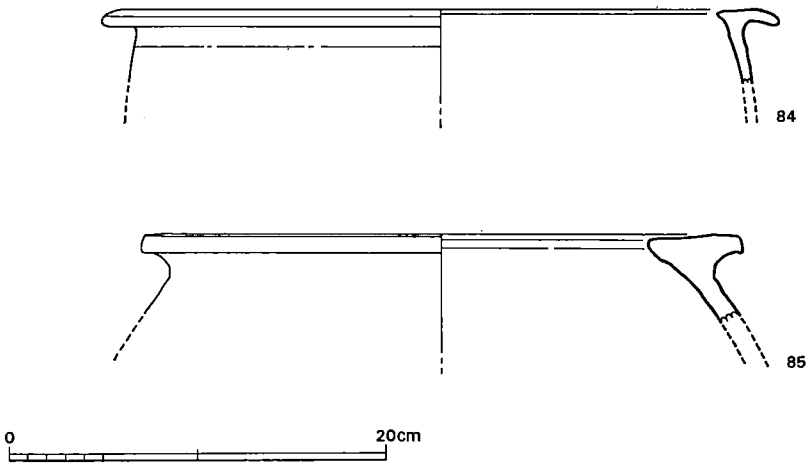
土師器杯（第22図）　玄室内攪乱土より出土したもので，盗掘時に混入したものであろう。½を欠損するが復元口径7㎝，器高1.7㎝，底径3.2㎝を測る。体部の器壁は薄く，内外面には



第22図　G・1号墳玄室内埋土出土土師器（1/2）

3段の甘い稜が入る。底部はやや上げ底となり，回転糸切り離しである。胎土，焼成とも良好で暗褐色を呈する。口縁部に2ケ所炭化物が付着して黒変した個所が観察される。灯明皿として使用されたものであろう。室町時代頃のものであろう。

弥生式土器（第23図84・85）　ともに古墳々丘下整地層から出土した弥生式土器の甕口縁部でいずれも小片である。84は復元口径36cmを測る。口縁部は「逆L字」状となるが，内面にも張り出す。端部はやや下がり気味である。砂粒多く含み，風化著しい。黄褐色を呈する。85は復元口径32cmを測る。肉厚で口縁部上面は平坦で，口唇部は角張る。砂粒多く含み，焼成も良い。黄褐色を呈す。甕棺片かもしれない。84・85ともに中期後半頃の時期のものである。



第 23 図　G・1号墳出土弥生式土器実測図（1/4）

小　結

G・1号墳は盗掘がひどく，全く見事と感心させられるごとく石室内の攪乱は入念なもので，玄室・前室・羨道部からの出土遺物は全くない。それでも，古墳の年代決定の手懸りとなる須恵器類が墳丘内や前庭部などから多数出土し，手懸りを与えてくれる。当墳出土の須恵器杯類をその法量により分類し，古墳の年代を考えてみたい。

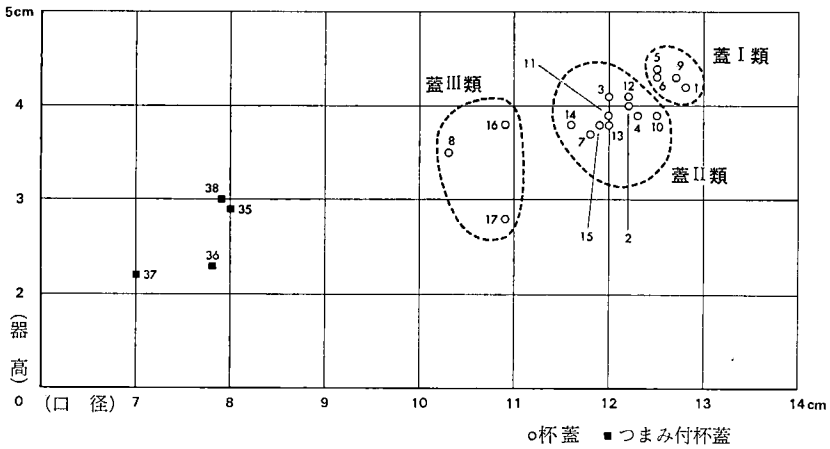
杯蓋は，Ⅰ～Ⅲ類に分けられる（第24図）。

Ⅰ類は，口径12.5～12.8cm，器高は4.2～4.5の間に含まれる大形品で，1・5・6・9が入り，これらは全てⅠ区列石前面祭祀土器群伴出品である。Ⅰ類はさらに2分できそうである。天井部のへらケズリは器高の½まで行なわれ，範囲も広く丁寧である。天井部は丸味をもち，体部との境はやや明瞭である。口縁部端は直立するがやや開き気味である。

Ⅱ類は，口径12.5cmから11.6cm，器高は3.7cmから4.1cmの間に含まれる中形品で，とくに口径は1cmの幅を有する。蓋Ⅰ類に比し，明らかに小形化を示し，造りも雑となる。器肉は全体

的に分厚く，胎土に砂粒を多く含むようになる。天井部のヘラケズリは範囲が狭くなり，未調整のものもみられる。天井部は丸味をもつが，平坦をなすものもある。天井部と体部との境は，浅い沈線が入り，口縁部はⅠ類に比しより内傾する傾向が強くなる。これら蓋Ⅱ類は，2～4・7・10～15が含まれる。

Ⅲ類は，口径 10.4～10.9cm，器高 2.8～3.8cmに含まれるもので，Ⅱ類以下の小形品であるが，まとまりはない。これらには8・16・17が含まれ，8は口径が小さく，16・17は同口径を有するが，8と16の天井部は未調整か粗いもので明らかな平坦面をつくり，体部との境には段をつくる。これらⅢ類は，Ⅰ類とⅡ類の差異よりも歴然とした差異が認められる。



第 24 図 G・1号墳出土杯蓋法量分布図

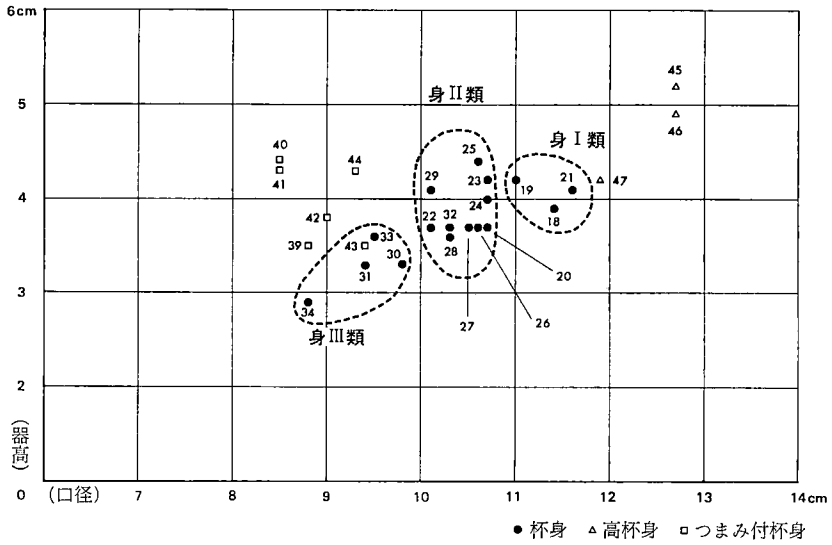
杯身はⅠ～Ⅳの4類に大別される（第25図）。Ⅰ類は，18・19・21が含まれ，いずれもⅠ区祭祀土器群出土である。口径は11～11.6cm，器高は3.9～4.2cmの間にくる。底面のヘラケズリは広範囲に行なわれ，底部は丸底気味となる。立上り高は長く，直立に近いものもあるが，Ⅱ類と変らないものもある。胎土もよく精選されており，つくりも丁寧なものが多い。18はⅠ区祭祀土器群出土の杯蓋1の上に被った状態のセットで出土している。これら杯身Ⅰ類は杯蓋Ⅰ類とセット関係をなすものと考えられる。

身Ⅱ類は，口径10.1～11cm，器高3.6～4.4cmの間のものが含まれる。器高ではさらに2分され，器高の高いものは口径も大きくなる。20・23～29・32がⅡ類に入る。底面のヘラケズリやつくりは丁寧なものと雑なものがあり，底部も丸味をもつものと平坦面をつくるものとが混在している。立ち上りは低く，Ⅰ類より以上に内傾する。これらⅡ類に含まれる杯身は，前庭部出土のものが多いが，一部Ⅰ区祭祀土器群出土のものもあり，これらはⅡ類の中でもやや大き

い。杯蓋Ⅱ類とセットになるものである。

Ⅲ類は口径9.4～9.8㎝，器高3.3～3.6㎝のⅡ類以下の小形品で，30・31・33が含まれる。底部は未調整か粗いヘラケズリで平底をつくる。器壁は分厚く，胎土には大粒砂粒を多く含む粗雑なつくりである。33は蓋Ⅲ類の16と手法や焼成，ヘラ記号の合致から，同じく34も蓋Ⅲ類の8と焼成や手法上からセットになるものと思われる。これら身Ⅲ類は蓋Ⅲ類に対応するものであろうが，どちらも平底状となり逆転しても差支えのないつくりである。杯身も杯蓋と同様に，Ⅱ類とⅢ類の間には大きな差異が認められる。

以上，G・1号墳出土須恵器杯の蓋と身をそれぞれⅠ～Ⅲ類に分類し，それぞれをセット関係として対応させた。



第 25 図　G・1号墳出土杯身法量分布図

ところで，Ⅰ区内護列石前面からは，祭祀土器群が一括出土した。これには，上記分類のⅠ・Ⅱ類のものがほとんどであるが，Ⅲ類の杯蓋も1点含まれている。更には，口径，器形ともⅢ類より一段と小形化したつまみ付蓋杯も共伴し，つまみ付蓋にはかえりがつき，逆転している。これらの組合せは，一見時期差を思わせるものであるが，祭祀に伴なう一括出土品という事で，時期差はないものと考える。また，高杯のうち，有蓋高杯の法量は，身Ⅰ類よりも大きい（第25図）。有蓋高杯類は一段と遅れて小形化するのであろうか。

こうした状況は，現在三輪町において調査されている仙道古墳群の調査でも確認されている（註）。

以上，G・1号墳出土須恵器杯の蓋と身をそれぞれⅠ～Ⅲ類に分類し，それぞれセット関係

として対応させた。そして，これらのものは，小田富士雄氏編年に拠るところのⅣ期に比定され，6世紀末前後のものであろう。

古墳の構築状況についてみると，墳丘の遺存状態は良好で，築造当初の墳丘を彷彿させるものがあったが，その理由は前項でも詳しく述べられている内護列石によるものであることが判明した。これらは石室羨道部端から両脇に延びて墳丘内を全周する列石で，いわば石垣の列石とでもいうべきものである。これに類するものは，柿原古墳群内でも数基確認されており，甘木・朝倉地方ではさほど珍らしくないものであるが，当墳のようにあたかも石垣状に高く積み上げ，しかも墳丘内を全周させているものは寡聞しない。今後の類例の追加をまって検討を加えたい。

石室は胴張りプランをなす複室両袖型の横穴式石室であった。胴張り石室もつ古墳はH地区やS地区の調査でも検出されており，石室構造の変遷などについては今後の調査に期待したい。

出土遺物は，盗掘がひどかった為，石室内からの出土は全くないが，I区内護列石前面にて，祭祀が行なわれた様子を物語る遺物の出土がある。須恵器杯や土師器高杯などとともに鉄鏃3本も同時に揃えて供献されていた。鉄鏃は石室内からの出土は副葬品として多く知られる所であるが，祭祀に伴なう例はあまり聞かない。また。鏃は大形の三角鏃で非実用的なものであり，これら鏃の供献に何らかの意味合いを感じざるを得ない。これら鏃を伴なった祭祀は，内護列石構築完成次に催された竣工記念であったと想像される。（新原正典）

（註）福岡県北筑後教育事務所石山勲氏教示による。

3　G・C—1

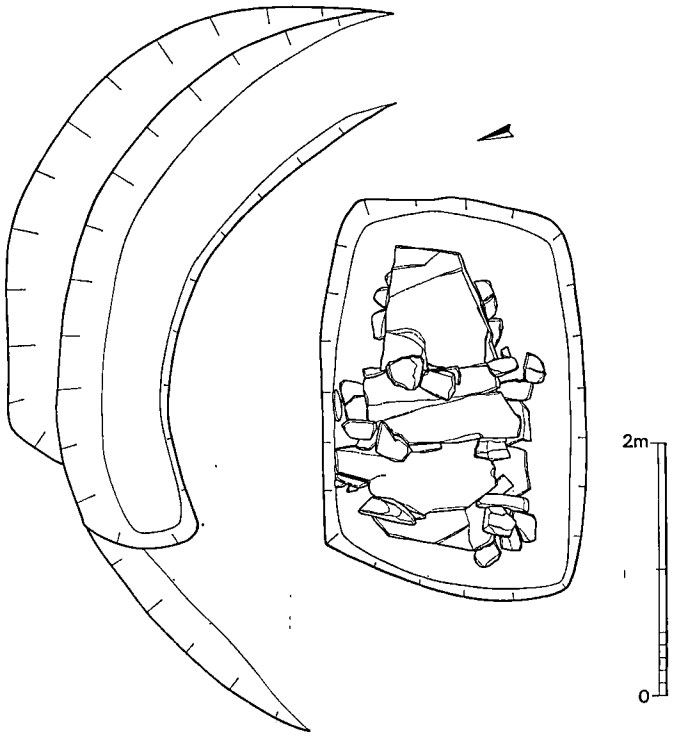
大字柿原字大谷1351—1番地に位置する。現在，堤となっている中池に面した小谷の緩斜面にC—2，D—1等とともに一群をなして占地する。なお，この一群は，今回の土取用地範囲外である，南側の中池に面した部分にも拡がり，更に数基分が存在すると推定されるものまで含まれるであろう。

これらの小支群は，改めて言うまでもないが，この直上の比高15*m*上方の尾根上に位置するものと異なり，狭小な谷に沿った斜面に立地するものであり，後述するH地区の石棺群や，更に西方2*km*の池の上墳墓群等の尾根上の占地とは明らかに異なる。

この占地の差異は何処より起因するのであろうか。G地区の尾根上は全面表土を剝いで遺構確認作業を行なったが，薄い表土直下は軟質の片岩の岩盤で，何らの遺構も発見されなかった。しかし，この西隣のH地区の尾根上では，6基が一群をなして検出されている。H地区尾根線上は岩盤の露出する部分と，粘質土が堆積する部分とがある。このH地区尾根上の各個について更に詳しく観察すると，尾根中心線上にある2基は岩盤をくり抜いて，所謂盤棺状をなし，他の4基は尾根中心線上より僅かに斜面寄りにはずれて，あたかも岩盤を避けるようにして，壁に石材を用いて石棺状に構築している。ちょうど，この差異が本遺跡のおびただしい石

棺・小石室群の各立地に関して，有効な示唆を与えてくれるよう思う。

つまり，岩盤をくり抜いてまで尾根線上に占地した集団と，それを避けて尾根下の谷に面した緩斜面に石材を用いて構築した集団と，明らかに違うと考えるのである。このことは，H地区尾根の西側の谷の緩斜面に夥しく発見されたI地区の一群においては，岩盤にかかる部分においてさえ，頑固に石材使用の構築を試みている例があることを併考すれば，更に明らかとなるところである。



第 26 図　G・C－1実測図 (1/60)

G地区の石棺群についてみると，その尾根上は全く遺構がなく，前代の墓地となっていなかったことは明らかで，時々みられるような前時代の葬地に遠慮したものではない。つまり，この占地は，岩盤を避けた集団の奥津城の選地であったと言えよう。

なお，以上述べてきた問題は，遺跡全体に関わる事であり，単に集団間の相違のみでなく，有機的な集団相互関係における時間的変遷をも加味して検討を加えねばならない重要性を内蔵する。よって本古墳群全体を考察する際に詳細に検討を加えることとしたい。

G・C－1はこの一群の中では最大・厚葬とされるもので，斜面上方側では周溝も検出されている(第26図)。周溝は，北側に半円弧を描いて検出された。主体部の主軸中心より4.0 *m*で周溝外縁となり，その幅は1.5～0.9*m*，最大深さ0.6 *m*を測る。ちょうど主体部付近は道路部分となり削平されてしまっており，周溝が全周巡ったものか確認出来ない。墳丘の有無も上記のような事情で全く明らかにし得ない。周溝が全周巡っていたとすると，直径8 *m*前後の周溝に囲繞されていた円形周溝墓とされよう。周溝埋土中よりの出土土器等は皆無である。ただ，後記する如く，瑞形陶質土器が道路工事中にこの近辺から出土しており，主体部墓壙上面，或

いは墳丘中，または消滅してしまった南半の周溝中等へ供献された土器と考えられる。

主　体　部（図版18～19，第26～27図）

主軸をN105°Eの略東西方向にとり，頭位を東とする箱式石棺との折衷様式ともいえる特異な構築法による竪穴式石室状をなす。

東西長3.2*m*，南北幅2.07*m*，深さ1.1*m*の大きな墓壙を掘る。墓壙は2段掘りとなる。腰石にあたる石材埋込みのための壙を，墓壙中心よりやや南側に片寄った位置に，溝状に掘り巡らせる。扁平な片岩質石材を，両小口部は縦長になるように深く埋め込んで，両側壁部は横長になるように，立てて据える。ここまでは箱式石棺墓と同様の構築法である。ただこの段階での石上面は揃っておらず水平にはならない。これらの上に更に扁平板石を今度は小口積みにして3～4段積み上げて深い石室を構築する。積み石上半の裏の外側部分には，石室最上面まで控え積みを行なう。側壁面は四面ともに上方へ積むに従って内側へせり出して，狭くなっている。棺内床面の内法は以下の如くである。

幅	東　端（頭位側）…61*cm*	長さ	南壁辺…… 186*cm*	深さ（石室上面より）	東　端……62*cm*
	中　央……54*cm*		中　央…… 185*cm*		中　央……60*cm*
	西　端……48*cm*		北壁辺…… 183*cm*		西　端……54*cm*

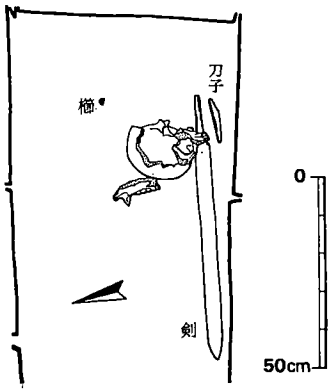
蓋石は，4板の大板石を使用し，その合わせ目等に小板石を置いて，目貼り的な役目をさせている。大板石は，西端（足位部）から順々にかぶせて少しずつその端を重ねている。頭位にあたる東端部の蓋石は特に大きな板石（98×92*cm*）を用いている。

棺内全側壁及び蓋石内面には赤色顔料の塗布が顕著である。使用石材はすべて片岩である。

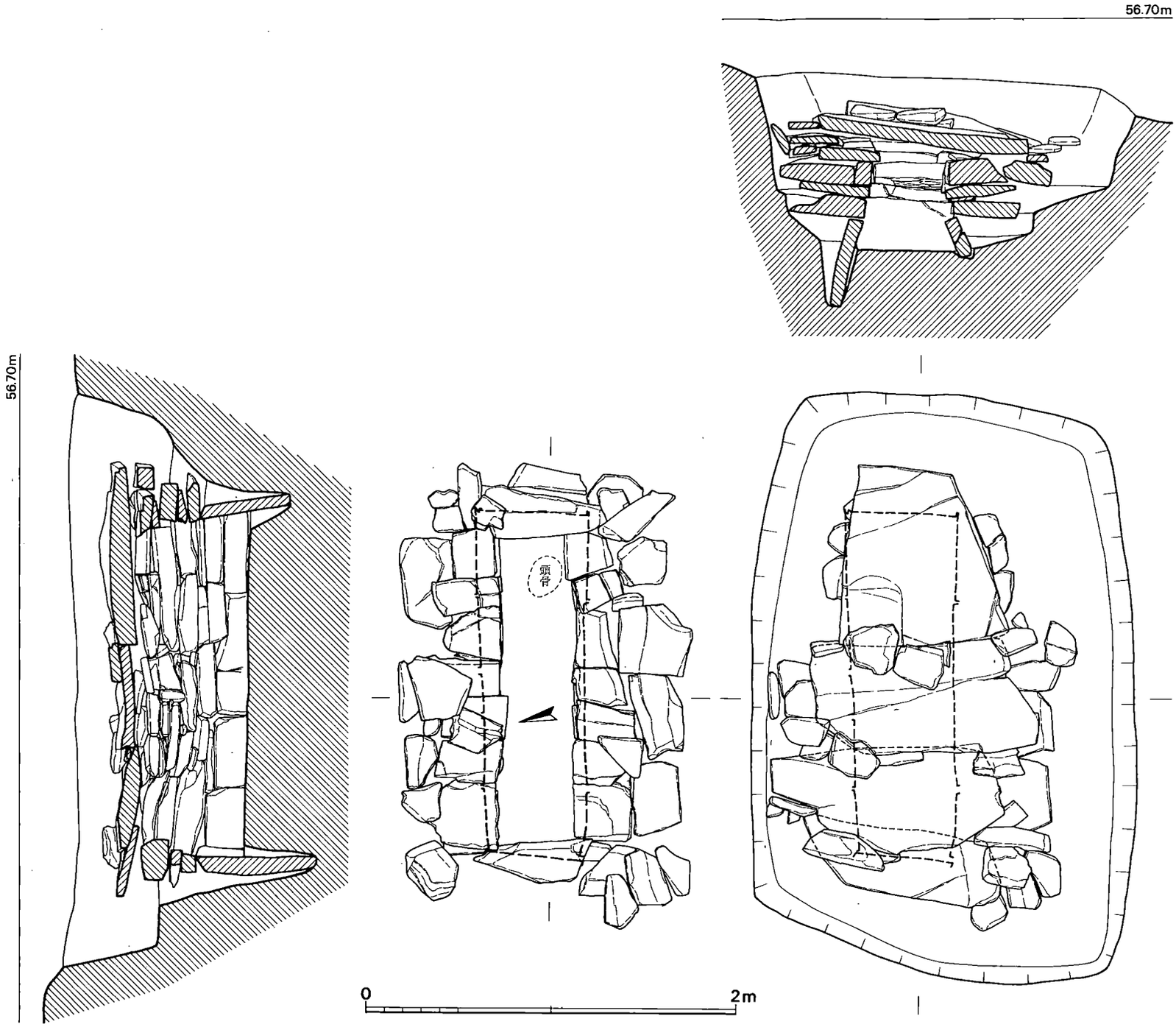
遺骨及び副葬品出土状況（図版19，第28図）

棺内床面には枕部等の特別な施設はみられない。東端近くに頭骨が検出された。それ以外の遺骨は遺存していなかった。頭骨は，横転しており，下顎骨がはずれて位置がずれている。これらの人骨そのものの鑑定は現在依頼中であり，早い時期に，続編報告書中に掲載してゆきたい。

遺物は床面に3点みられた。まず，着葬品と考えられる竪櫛1点が頭位脇より出土した。次に，南側壁際の東側に鉄剣一振が，鋒先を西に向けて検出された。これは被葬者からみると，埋葬遺体の頭～腹部の左側脇に副葬されたことになる。更に，この剣の柄部のあたりの壁際



第28図　G・C－1副葬品出土状況実測図（1/20）



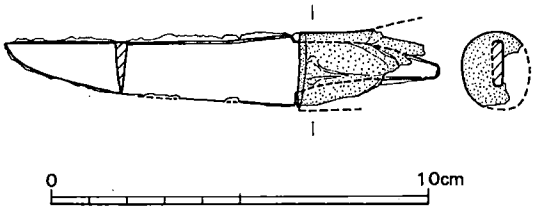
第 27 図　G・C－1主体部実測図（1/30）

に鹿角装柄の鉄刀子が副葬されていた。これも鋒先を西に向けており，剣とセットとして副葬されたものと考えられる。

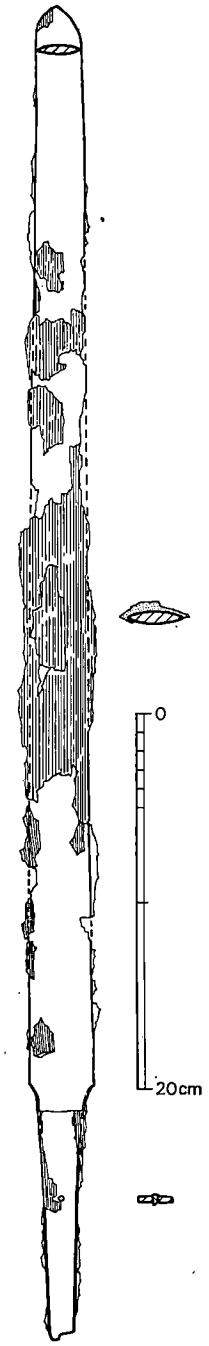
副葬品（図版19—3・4，第29～31図）

鉄剣（第29図）　全長70.1㎝，身部長57.0㎝，茎部長13.1㎝で，身幅は最大部（関際）で 3.5㎝，鋒先近くで 2.5㎝と細くなる。身部には明瞭な鎬は観察されず，両丸造的な断面形態につくる。身最大厚さ 0.7㎝ を測り，身部にはかなりの木質が残存付着している。関部分はやや両削ぎ的な感じを残す角関となる。茎尻は片側端が短かく突出しており，当該期の内湾気味の太刀の茎尻に時偶みられる形態と同形式となる。茎部の略中央に目釘穴1個が穿たれ，その中に目釘が残る。茎部の木質は，関部より，1.4㎝手前の位置から木質が遺存しており，関部との間隙に鍔等のものが装着される形態をとるものかと考えられる。なお，実測図中の刃部欠損部は，使用時による刃こぼれではなく，おそらく銹落し時の不手際による欠落部である。

鹿角装鉄刀子（第30図）　やや外反り気味で鋒先へ細くなるタイプである。全長11.5㎝，身部長7.6㎝，最大身幅1.9㎝，棟幅3㎜を測る。関部は両角関となり，茎はやや内反り気味となる。鹿角柄は関部際で径 2.1×1.8㎝の断面楕円形気味となり，柄尻へむかって長く反るタイプとなろう。

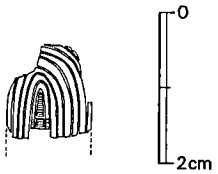


第 30 図　G・C—1副葬鹿角装刀子実測図（1/2）



第29図　G・C—1副葬鉄剣実測図(1/4)

櫛（第31図）　細身の竹を束ねて曲げた竪櫛であるが，残存状況悪く，全体の輪郭もわからず，全容は不明である。約1㎜幅の竹ひごを現存では7本を束にして，U字状に曲げており，少なくとも幅14㎜以上の大きさと考えられる。裏面には幅4.5㎜の横位に縛った痕跡が認められる。



第31図　G・C－1出土櫛
実測図（実大）

以上のG・C－1は，C－2，D－1などとともに小支群を形成するが，その中でも規模も最大級であり，副葬品もある程度有しており，中心的な位置付けが可能であろう。年代的位置付けを考えてみよう。まず石室の構造からは竪穴式石室を意図しながらも，その腰部には箱式石棺的な様相をみせる特異な構築法である。このような構造は，本遺跡全体からみても，かなり通有なものであり，甘木地方における地域性と考えられる。即ち，竪穴式石室を受容した時期及びそれ以降に当地方に盛行した構築技術であったと考える。出土遺物からみると，長い剣，鹿角装刀子・櫛などは，当地方における前期古墳の副葬品であり，最も下降しても5C中葉を下ることはない。また，この後に記述する陶質土器は，瑞1点のみであるが，出土状況から，この主体部に伴なう概然性が高い。池の上Ⅱ式の瑞に最も類似する諸点を有し先に述べた主体部の構造・副葬品の年代に矛盾するものではない。よって，当G・C－1の年代は，古墳時代前期の池の上Ⅱ式併行期と考えられる。（中間研志）

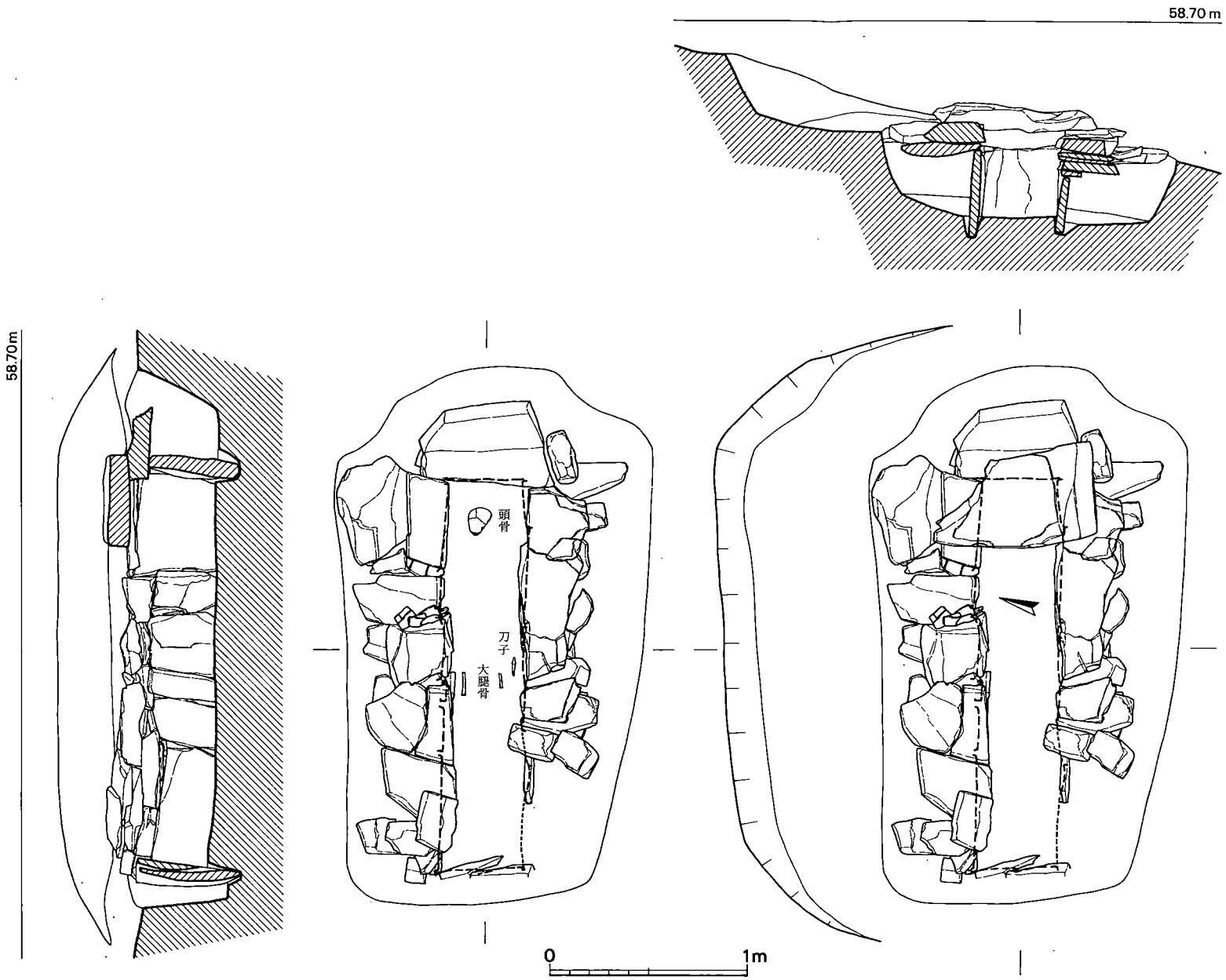
G地区出土陶質土器（図版57－1，第32図）

既存の農道からG地区への進入路造成のため，重機による掘削工事中に出土した陶質土器の瑞である。出土した場所は，G地区尾根先端部近くの，尾根筋よりやや西斜面へ下った標高57㎡付近である。

出土した層は，黄褐色を呈する堆積土からで，付近には明確な遺構などがみられないところから，尾根線上ならともかく，それよりもずっと下った傾斜面においての遺構の存在など全く念頭になく，単純に尾根上からの流れ込みによるものであろう，と決め込んでいた。

その後，道路を拡幅するに際し，付近を拡張し，遺構検出を行ったところ，石蓋土壙墓や石棺系石室などが確認された。そこで，改めて瑞出土地点を検討した結果，出土地点はD－1号土壙墓とC－1号墓の中間よりややC－1号墓寄りにあたることが判明した。C－1号墓に伴うものと考えられる。

瑞は，口径9.9㎝，胴最大径13.6㎝，器高13.3㎝を測る。口縁部は中位から強く外反し，端部上面は平坦面をつくる。口縁部と頸部との境は鋭い稜をつくって角張る。頸部はよくしまり，内外面には絞り痕が見られる。肩部はよく張り肩から胴にかけての部位にて注口をつけ，最大径は注口下端にくる。胴下半は平底状となる。肩部より上は内外面とも横ナデ，それ以下

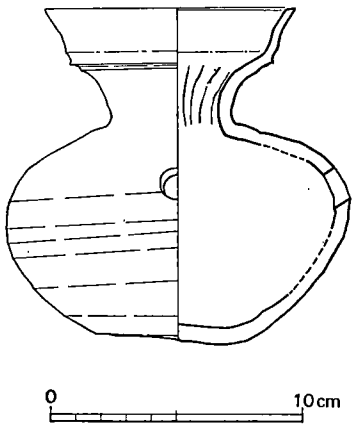


第 33 図　G・C－2実測図（1/30）

の外面は回転ヘラケズリで，底部はナデてある。内底面はタタキの痕跡がみられる。胴中位に数ケ所布目圧痕が観察される。胎土は水簸したごとく精選されており，焼成は堅緻である。灰色を呈す。

なお，この瑞は先般紹介され，池の上Ⅱ式の瑞と共通する特徴を有することが指適されている。ちなみに，池の上Ⅱ式は，5世紀初頭～前葉に位置づけられている（註）。（新原正典）

註　橋口達也　「古寺墳墓群」　甘木市文化財調査報告第14集　甘木市教育委員会　1982



第32図　G地区出土陶質土器実測図（1/3）

4　G・C—2

主体部（図版20，第33図）

本棺は尾根端の東斜面標高58.0*m*にあり，G・1号墳と尾根筋に対して対称の位置にある。

斜面に平坦な面をつくって地山整形し，その面より棺の掘り方を穿っている。掘り方は長軸で2.7*m*，短軸1.5*m*を測る隅丸長方形の墓壙で，地山整形面より0.29～0.43*m*の深さで穿っている。また地山整形の範囲は長軸3.1*m*，短軸で2.3*m*を測る。

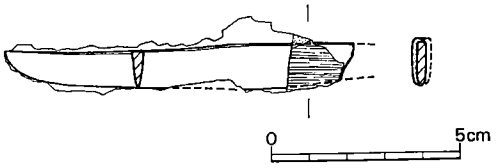
棺の主軸はN74°Eにおく。蓋石は棺東端に1枚存しているのみで本来は4～5枚の石が置かれたものであろう。棺の内法は長さ1.96*m*，東小口幅0.37*m*，西小口幅約0.42*m*であり，棺内高は0.45*m*を測る。棺内に赤色顔料が塗布されていた。棺の構築は最下部の石をほとんどが片岩割石をたて長に立て，一部をよこ長に立てている。その上に2～3段片岩割石を小口積みしており蓋石が被る。石材は緑色片岩である。頭位については，東小口より頭骨が出土し，頭位も同方向であろう。床面には枕石，敷石は見られない。

副葬品（図版20—3，第34図）

棺内より頭骨，大腿骨が出土しており，1体分であろうと思われる。副葬品としては南側壁と大腿骨の間に刀子1本が出土している。

鉄刀子（第34図）

残存長9.2*cm*，身の長さ7.5*cm*，幅0.9～1.1*cm*，厚さは背部0.3*cm*である。茎には木質の銹着が見られ，また鹿角装の残片が認められる。（平嶋文博）



第34図　G・C—2副葬刀子実測図（1/2）

5　G・D—1

G・C—1の西方4.5 *m*に位置し，同様に尾根裾の緩斜面に営まれる。道路工事中に発見されたため，主体部上面及び周辺のかなりを削平されてしまい，墳丘の有無，周溝等の確認等は全く出来ない。蓋石もかなり除去されてしまったようである。

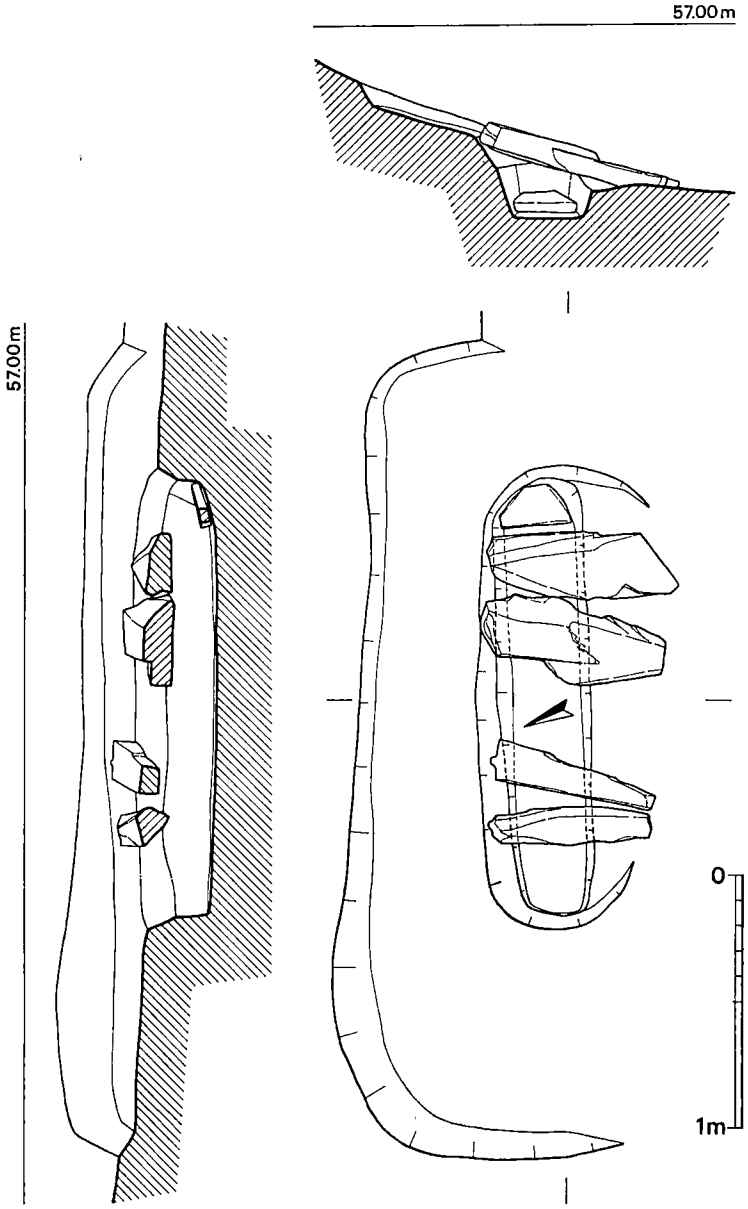
主体部

（図版21，第35図）

主軸をN110°Eの略東西にとる石蓋土壙墓である。墓壙は岩盤をくり抜くものではなく，粘質土部分における素掘りの形態である。

墓壙は長さ3.2 *m*の一段目掘方が検出されたが，削平されて再び埋められた部分での検出であり，その規模には不明瞭さが残る。長さ182 *cm*，幅45*cm*の狭長な壙を掘り，東端底部に扁平な小石を枕石として据える。床面内法は，長さ169*cm*，幅は東端寄りで28*cm*中央で27*cm*，西端で22*cm*を測る。深さは32～12*cm*と浅い。

蓋石は細長い片岩質の小さめの石材を並べるが，現状で



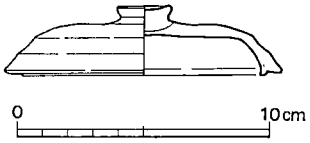
第35図　G・D—1実測図（1/30）

は4個しか残らないが，本来は7～8個で覆っていたものと考えられる。

枕石の位置から，頭位は東と考えられる。掘方自体も西端へと狭くなっている。赤色顔料は蓋石・床面孰れにも全く認められない。

遺骨は全く残存しない。副葬品等の遺物も全く検出されていない。ただ，この周辺より工事中に出土した須恵器片が1点在り，次に図示しておきたい。

D－1付近出土須恵器（第36図）



第36図　G・C－1付近出土須恵器実測図(1/3)

釦状に近い，中央の窪む小さい撮を付けた蓋である。極めて短かいかえり部分をつまみ出す。器高はやや高く，浅く扁平なタイプとはならない。口径10.8㎝，器高2.8㎝を測り，口縁周辺内外面は回転ナデ，天井外面は回転ヘラ削りの上を回転ナデ，内面はナデツケがみられる。胎土には細砂粒を僅かに含むのみで，焼成軟質で，灰色をなす。口縁近くの外面部に二本平行線のヘラ記号が施されている。全体の¼残存するのみである。

この土器は，かえり部の退化形態，小径化等からみて，7世紀中葉から後葉にかかるかという時期のものである。出土位置が確定出来ず，このG・D－1との関係は全く不明といわざるを得ない。この主体部の時期を決定するものとしては，この須恵器は従来の見解からすると不都合である。取り敢えず，現段階では当主体部には共伴しないものと考えておく。

（中間研志）

V　H地区の調査

1　調査の概要

H地区は，土取場内のほぼ中央に，G地区の尾根とともに南へ延びる尾根で，土取場では最も大きい尾根である。尾根は，標高で裾部が60m，平坦面が80mのレベルにあり，東斜面は急で谷を隔ててG地区尾根に接し，西斜面裾は緩斜面で，明治30～40年代に築堤された新池へと続いている。この新池周辺の緩斜面は土取場用地外であるが，この内にも4～5基の円墳が存在している。また新池の東岸の崖面にも石室の残骸が露頭しており，新池掘削の際に破壊されたものであろう。

H地区は字大谷に属し，尾根線上で境界線が東西に走り，1326・1327・1335・1336・1338番地である（第2図）。

この地区で，当初確認されていたのは1号墳だけであったが，尾根平坦部全面発掘の結果，尾根線上より東斜面にかけて更に横穴式石室や石棺系石室・土壙墓などが検出され，また尾根先端は，中池の東岸となるが，この部分でも横穴式石室が確認された。

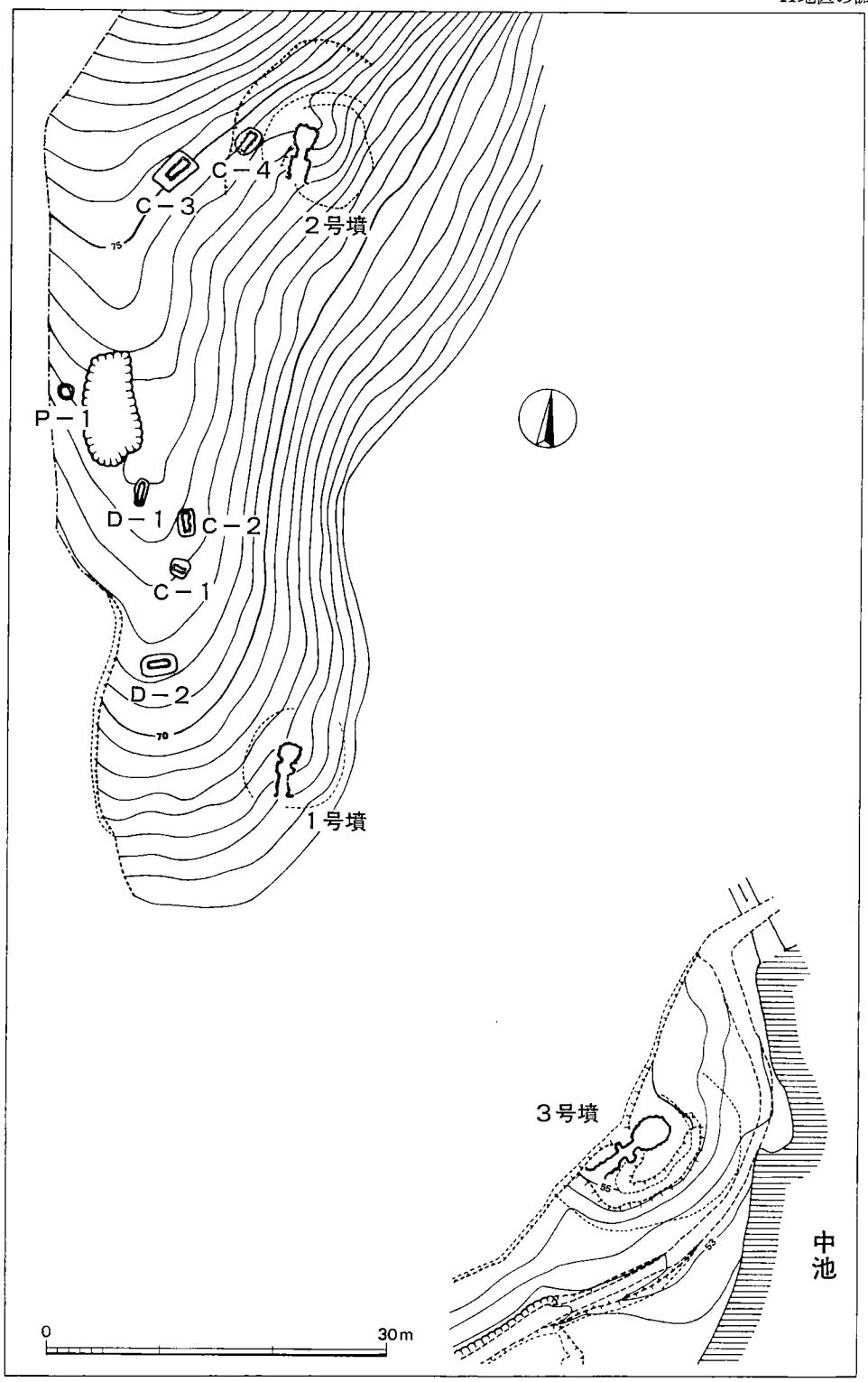
標高80m以上の尾根基部側は急斜面となり，この部分についても重機を使って試掘調査を行ったが，表土直下は硬質の岩盤で，遺構は全く確認されなかった。

また，3号墳々丘下地山面において，弥生式土器片が出土したが，弥生時代の遺構は発見されなかった。G地区にも弥生式土器の出土があり，この時期の遺構としては，現在中池になっている場所からさらに南の尾根最先端部付近に求められるのであろう。（新原正典）

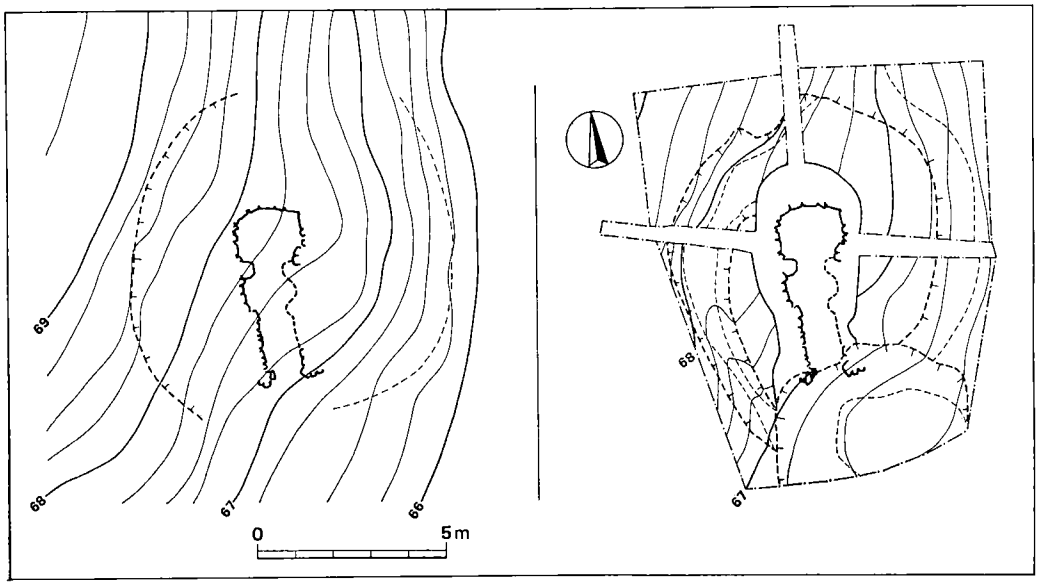
2　H・1号墳

本墳は，当初，斜面に凹みをつくり，平坦な面を形どる程度で顕著な変化ではないが，何らかの埋葬施設の存在が想定される地形であった。そこでボーリング棒による探査を行なったところ，深さ20～30cmに東西2m強の石積み列が確認され，東西両端より，ほぼ直角に曲り小口をかたちどるものと思い，南側壁の確認はされなかったけれども，箱式石棺墓を想定した。主体部を掘り下げるにしたがって，壁面がやや丸味をもち曲っており，側壁と小口が明確に分けられず，北側壁に鏡石と思われる石が立てて据られているのが確認され，当埋葬施設が横穴式石室の玄室であることが分かった。

そこで，玄室を完掘したところで石室の主軸を設定し，その延長上，玄室交点より約5.5mの長さのA・B・C各トレンチを入れ，墳丘規模，周溝，列石の有無などの確認を行なった。



第 37 図　H地区遺構配置図（1/600）



第 38 図　H・1号墳墳丘実測図（右 調査前，左 地山整形面　1/200）

それにより，東側斜面に馬蹄形の周溝を有することが確認された。

墳　　丘（図版23，第38・39図）

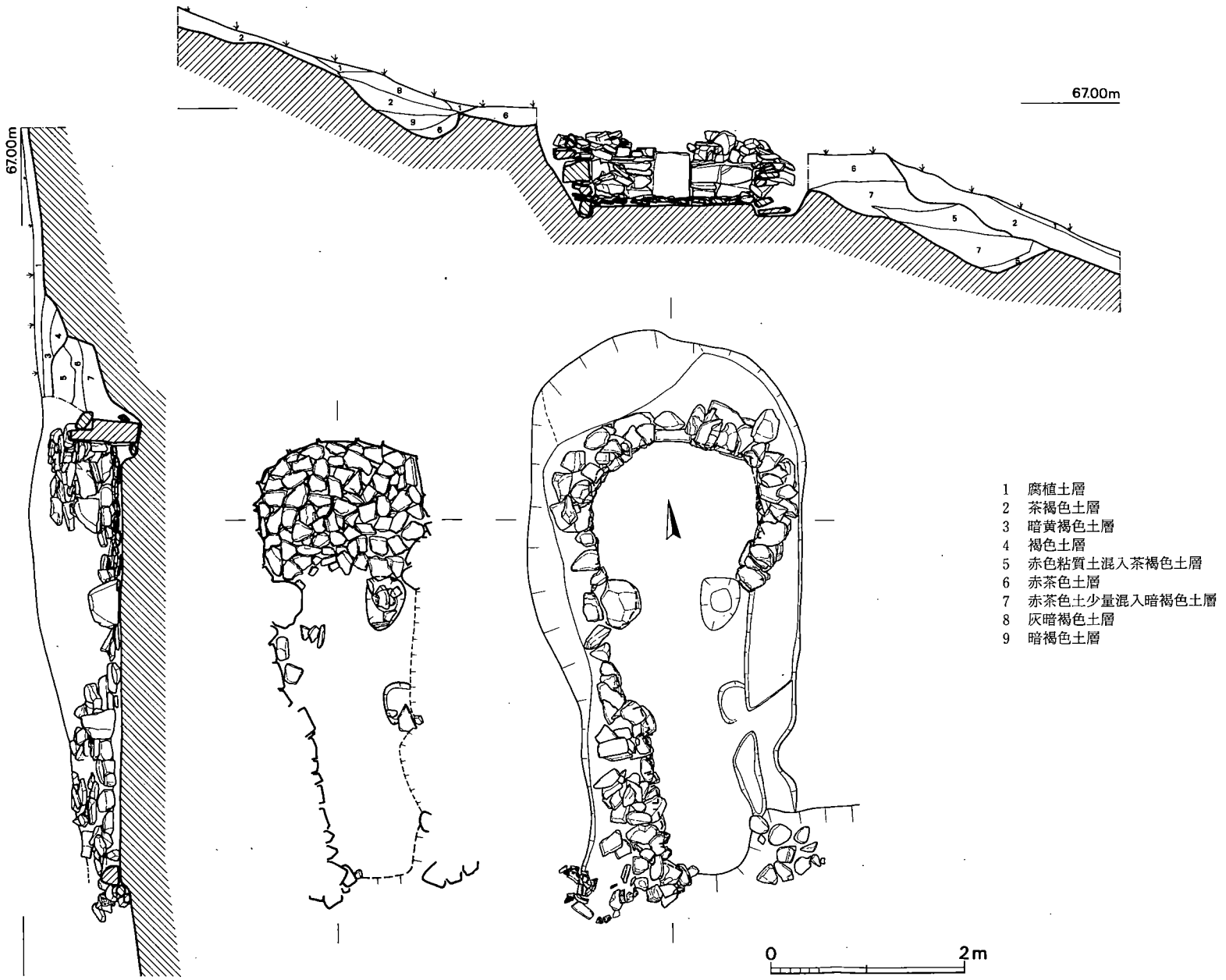
本墳は，H地区尾根の東側斜面，標高66～69*m*に立地する。平面的墳丘規模は，地山整形面の調査により，東西径5*m*，南北径約7*m*の楕円形の円墳であろうことが想定される。現存の玄室床面よりの墳丘高は約0.9*m*であるが，封土の流出も著しく，先述したごとく，石棺墓と想定し，掘り方の検出を行ない，本墳の墳丘を削平したことなどを考慮して，1.5*m*前後のものであったと想像される。

また，尾根頂部の方に馬蹄形周溝があり，周溝を含めた墳丘規模は，東西7*m*，南北9*m*となる。周溝幅は0.9～1.9*m*，深さ0.2～0.6*m*であった。

主 体 部（図版23～24，第39図）

主体部は主軸をN8°Eにおき，南に開口する複室の横穴式石室である。掘り方は地山を0.2～0.96*m*の深さで穿った長さ5.46*m*，幅2.78*m*の楕円形の平面プランである。残存状態が著しく悪く，左側玄門石より羨道部にかけてすべて欠損しており，また右側玄門石付近の積石も欠損している。

石室構築にあたっては，まず鏡石および両袖石を据え基本構造を決定し，周壁は胴張り状に，片岩割石または塊石が平積によって築かれているが石材の選定がよくなされていないので乱積の感を受ける。



第 39 図　H・1号墳石室実測図（1/60）

玄室は長さ1.4 *m*で最大幅1.66*m*の横長楕円形平面プランである。鏡石は高さ0.45*m*（実高0.7*m*）の石を立て，周壁は最下段の石より平積がなされている。玄室の残存最大高は0.5*m*でほぼ直に立っているが，残存高の上より序々に持ち送りが行なわれていくものであろうと推定される。床面には扁平割石が全面に敷きつめられており，玄室中央部敷石直上より耳環が出土している。

玄門は左袖石を欠損している。右袖石として高さ0.3 *m*の石を置く。袖石間は右袖石から左袖石掘り方までで0.64*m*であった。

前室は玄門左袖石より左側壁を欠損して，また右側壁積み石も欠損しており，最下部の石のみ存している。しかし右側壁の遺存状況により，玄門から前室袖石にかけて狭まり羨道へ続くものと推定される。

前室右袖石は玄門と同じ高さの0.3*m*であり 左袖石は玄門と同様に掘り方のみ認められた。

両門共に仕切石の痕跡は認められない。

羨道は前室袖石が中央に張り出さず，羨道と並び，前室袖石より最下部の石で8個を数え，羨道部長は前室袖石より1.5 *m*を測る。

墓道は，本墳前面の削平により，その痕跡すら確認されなかった。

遺物出土状況

原位置ではないが，玄室中央部敷石の3～4 *cm*ほど上から銅胎銀箔の耳環1点が出土しており，石室内出土遺物はこれ1点のみである。羨道部端左脇より須恵器片，また羨道部端より1.3*m*前面にて須恵器片が出土しており，遺物整理段階で1個体の須恵器甕と判明した。他に玄室中央より南西方面のI区周溝内より土師器甕が2個出土している。

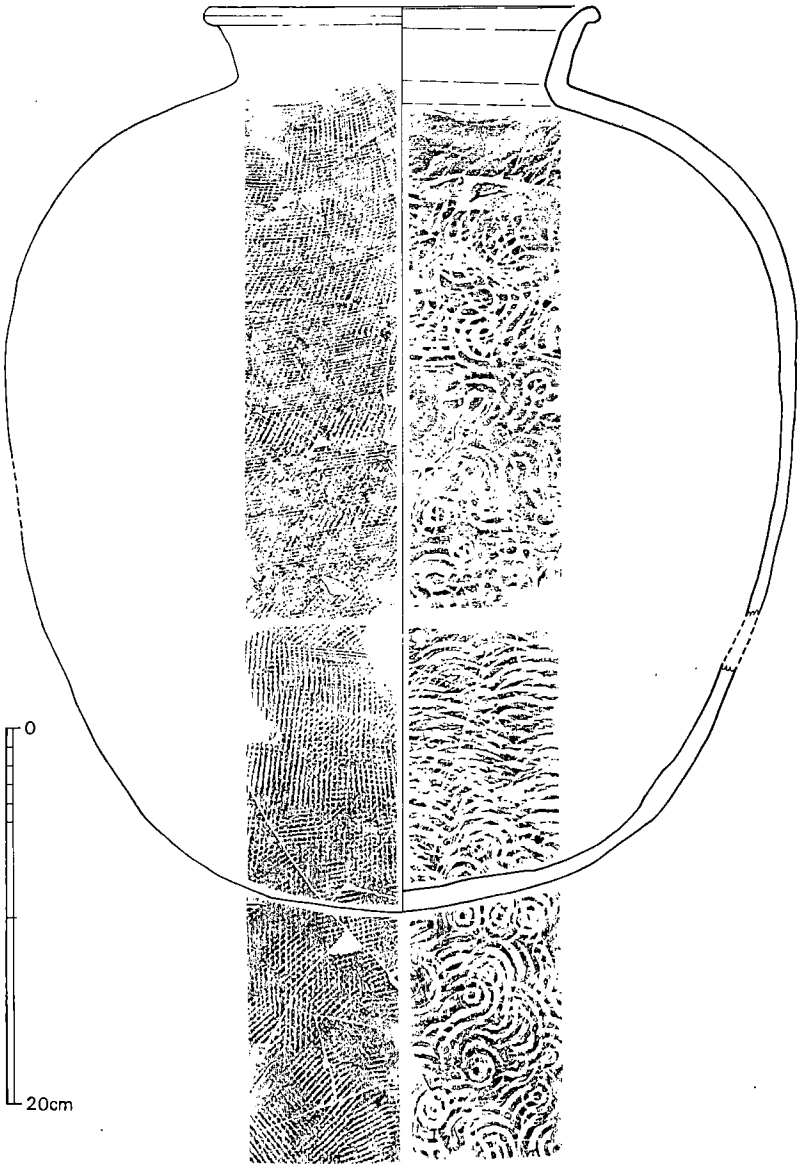
出 土 遺 物

須 恵 器（図版24—2，第40図）

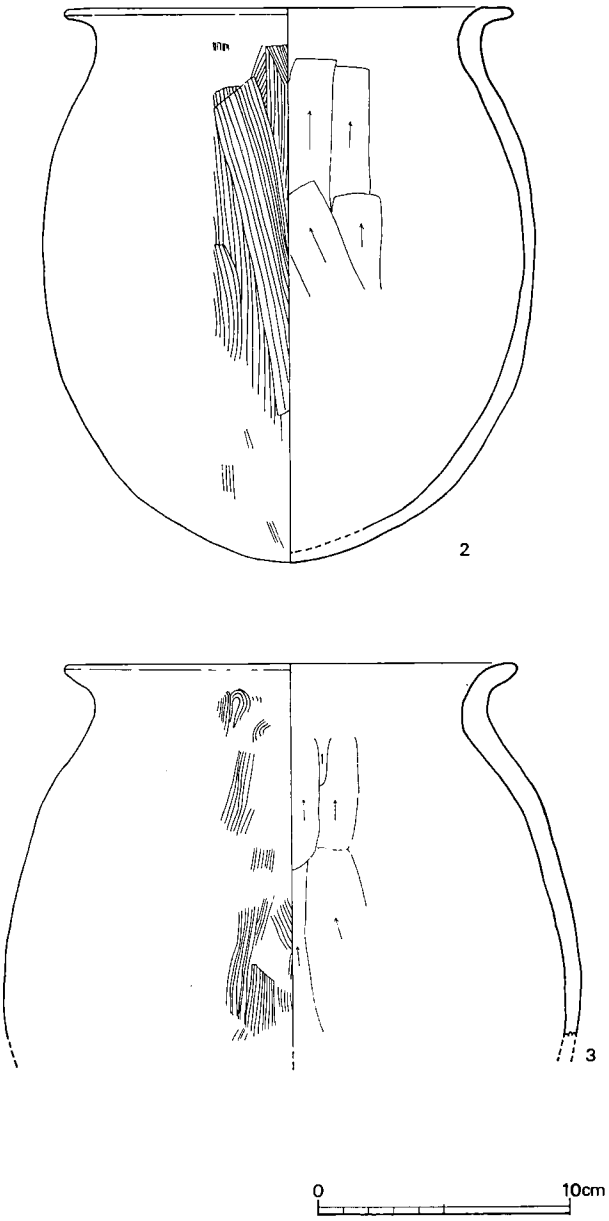
甕（第40図1） 口径20.4*cm*，器高47.9*cm*，胴部最大径42*cm*を測る中形の甕である。口縁部は外反し，端部はわずかに肥厚する。肩部を張り，やや胴長である。調整は外面肩部から胴部には縦平行タタキののち，頸部から胴中央部にかけてはカキ目調整であり，内面は同心円文が残る。他はヨコナデ調整である。胎土はやや密であり，焼成は堅緻である。色調は内外面ともに明るい紫灰色を呈する。

土 師 器（図版24—2，第41図）

甕（第41図2・3） 2は全体の⅔ほど欠損しており，口径18*cm*，器高22*cm*に復元される甕である。胎土は砂粒を多量に含み，焼成は良好である。色調は淡茶褐色を内外面ともに呈する。胴部にススが付着している。調整は外面ハケ目調整，内面縦位の上方向にヘラケズリである。



第 40 図　H・1号墳出土須恵器実測図 (1/4)



第 41 図　H・1号墳出土土師器実測図 (1/3)

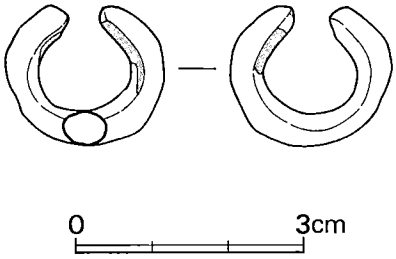
3は口縁部から胴部にかけて¼存しており口径17.8cmに復元される甕である。胎土は砂粒小量含み，焼成良好である。器面内外面ともに磨滅が著しいが，調整は2と同様である。色調も2と同様に内外ともに淡茶褐色を呈する。胴中央部にススの付着も見られる。

装身具（図版24—2，第42図）

耳環　直径 2.1cm，内径1.16cmで重さ6.8 gを測る。表面の腐触が著しいが，銀箔の残片があり，銅胎銀箔の耳環である。

小　結

本墳では，時期の分かる確実な遺物は出土していないので，明確な時期を設定することはできないが石室構造により想定することができうる。本墳は胴張り複室の石室であるが，しかし，G・1号墳のように整ったタイプの石室ではなく，小規模で，積石が粗雑化し，玄室も横長方形化している点などにより，G・1号墳とは一線を置く存在であり，後出のものであることはうたがいないであろう。また，本墳と同尾根上に構築さ



第 42 図　H・1号墳出土耳環（実大）

れているH・2号墳は，石室の積石が密に行なわれているけれども，2号墳は，単室構造であり，玄室が明らかに方形を呈し，本墳よりも後出であることがうかがわれる。以上のことから，G・1号墳などより後出し，H・2号墳より古式の構造をもった石室である。

（平嶋文博）

3　H・2号墳

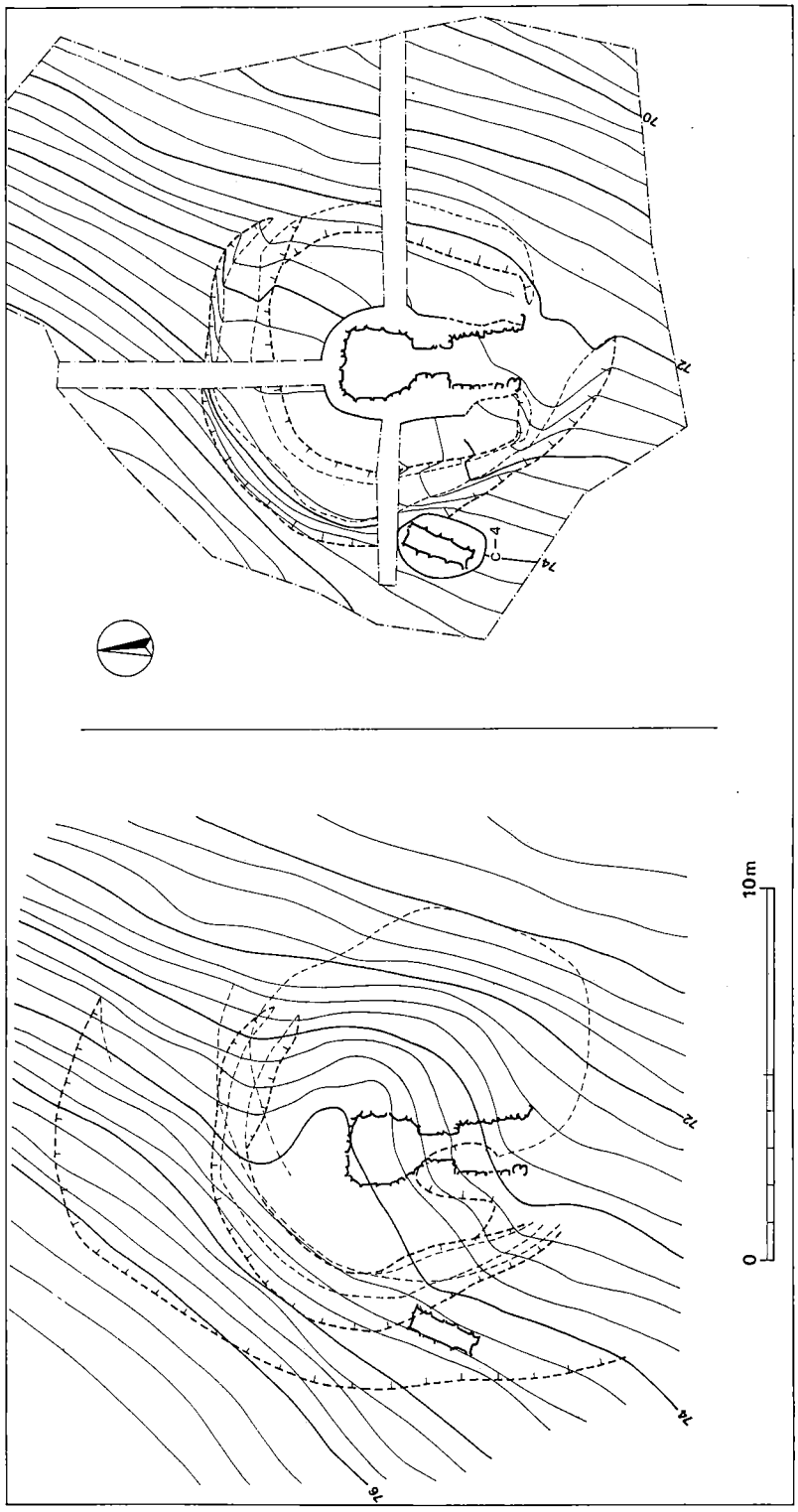
G地区の尾根から谷を挟んで真向かいのH地区尾根の東斜面に位置する単室横穴式石室の円墳である。H・1号墳とともに尾根中心線上ではなく，やや東に下がった斜面に営まれる。いずれも等高線に平行するように南へ開口している。当古墳は，当初分布調査では発見されておらず，尾根上面には近いが，どちらかというと尾根の陰にかくれるようにして位置していたため，本調査時に確認されたものである。

墳　　丘（図版25，第43・44図）

当古墳は標高72m～75mの間に位置し，斜面に営まれる古墳の通有として，斜面高位側を削り込んで周溝を半弧状に掘り，その分の土を墳丘に盛り上げている。

周溝は全周の⅔程巡っており，その底面は北西側で最も高く他方へ傾斜する。周溝外縁でみると，南北径11m，東西で径10m前後となり，周溝下端内縁からみると，南北径7.5m，東西径7.6mの墳丘規模となる。墳丘高は北西側周溝底からみると0.5m，南西側裾部からみると，2.3mとなり，斜面下方からのみかけ上の墳丘高が著しく強調されている。なお，この周溝は西側の1隅でG・C－4墓壙に切られている。

墳丘中に外面に面を揃えて石積みする部分がみられる。「墳丘内護積石」とでも称すべきようなもので，G・1号墳には顕著にみられ，本古墳群中のかなりの古墳で，大なり小なりの規模でみられる構造である。本墳では北東～東に明らかで南東側にまで一部を残す。ここでの積石は，高さ50cm内外で垂直に積んでいる。その築造順序は，主体部墓壙が掘り上がった後，石室側壁を積み上げてゆく過程で，墓壙上面まで積んで裏込め土充塡後に，墓壙上端線よりやや外方に盛土を行なわないままに石を据える。更に側壁を積み上げてゆく度に裏込め土を入れ



第 43 図　H・2号墳墳丘実測図（左 調査前，右 地山整形面　1/200）

て，外側の積石も遂次それに伴なって積んでゆく。石室をかなり穹窿状に積み上げたところで積石作業を停止して，石室天井までを構築してしまう。石室直上の盛土はこの作業に伴なって行なわれる。その後に一担作業を中止し，積石外際に土器供献等を行なう。或いはこの時に既に遺体が埋置されて羨道部の閉塞も行なわれているのかもしれない。その後，墳丘全体に，地山土（周溝，墓壙の掘削余土）を盛り上げて，こんもりと土饅頭形となす。この最終時期には，もちろんこの積石も全くかくれて見えなくなっている。当墳においては盛土そのものは現状ではそう厚くなく，顕著な版築等の作業も認められない。この内護列石は，高くなれば（例えばG・1号墳，I・2号墳等では）あたかも石垣状を呈しており，その囲繞する位置等から考えても，墳丘上に通有みられる葺石とは明らかに様相が違っており，その性格も石室構築作業と密接に関係しており，全く異質なものである。

当墳においては，この内護列石は斜面下方にあたる東半部にしか認められない。本墳より初築時期の古いG・1，I・2号墳では全周に巡らせている。この違いは何を物語るのであろうか。一つには時期の違いが考えられる。即ち，小規模化した石室に対して，手抜き工事的に形式的に踏襲した退化形態と考えられることである。次に，立地に関連してこの構造の本質的意味を示すところであるという理由が考えられる。つまり，かなりの斜面に造営するために，形式的となったことも相俟って，斜面下位の石室・墳丘が崩壊・流出しやすい部分のみに構築するという，墳丘を固めるための技法と考えられるのである。

以上のような墳丘内護列石については，本古墳群全体の発掘成果を踏まえて，その発生・展開・分布等の多岐にわたる諸問題を論じなければならない。続編報告書の中で順次明らかにしてゆくこととしたい。

主体部（図版26～29，第44図）

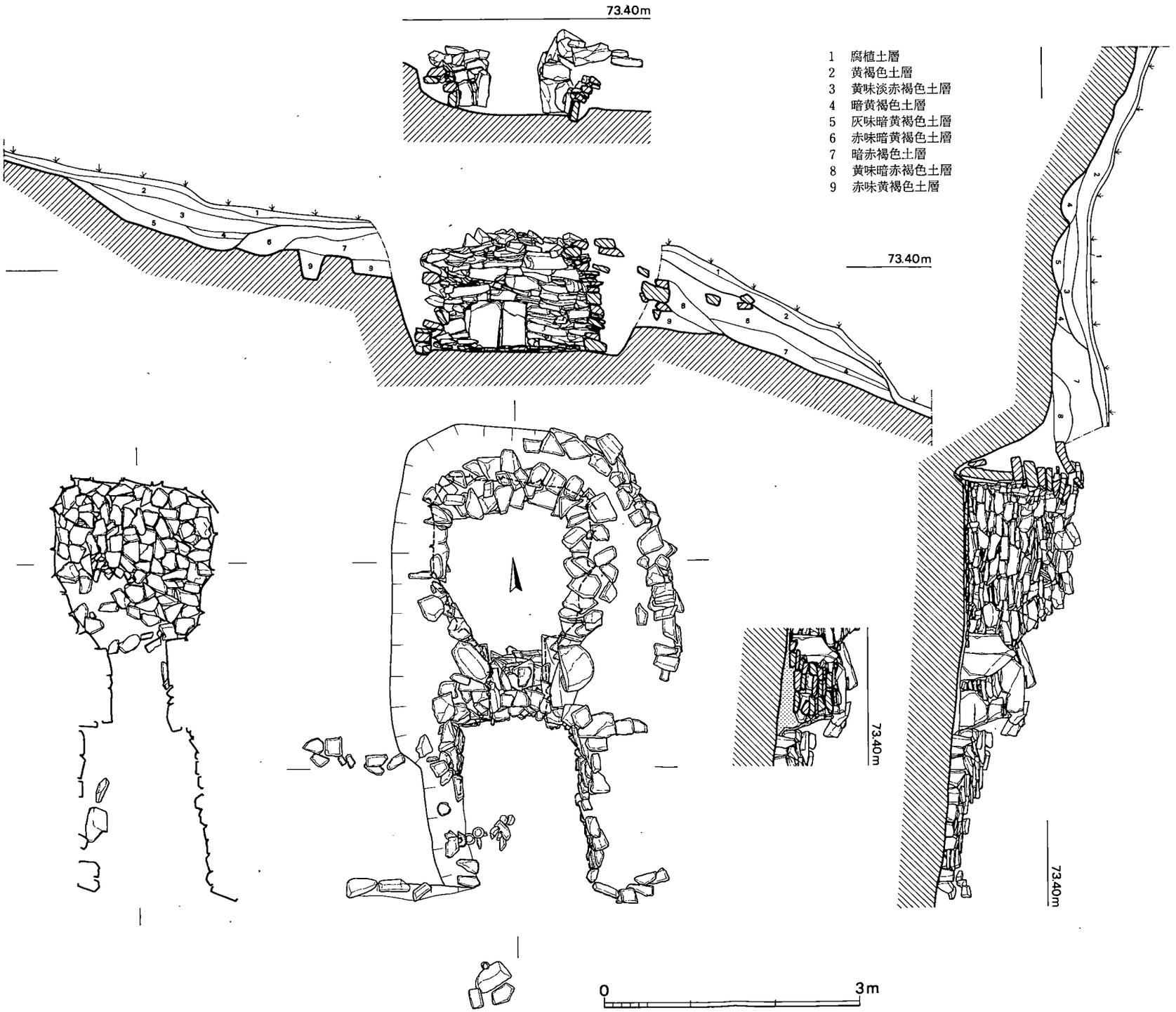
本墳の主体部は，主軸をN4°30′Eにとり南へ開口する両袖式単室横穴式石室である。当初，墳丘頂部に陥没孔が認められ，玄室内は石室西壁石材を中心とした多量の崩壊石材で充満していた。

玄室は，寸詰まりの胴張り羽子板状プランを呈するが，実際には，強い胴張りプランのくずれた退化形態と考えられる。玄室床面規模は以下の如くである。

長さ｛右側壁… 175cm／中央部… 197cm／左側壁… 195cm｝　幅｛奥壁側… 170cm／中央部… 178cm／玄門側… 100cm｝

玄室床面は20cm前後大のわりと大きめの扁平板石を敷きつめている。ほぼ全面に残存している。これは玄室床面のみで羨道部には敷かれていない。

壁の積石は，基本的には片岩板石の小口積みである。奥壁の中央に長方形板石を縦長に立



第 44 図　H・2号墳石室実測図（1/60）

て，その西側にももう一枚板石を隣り合わせて立てる。そこを中心として，墓壙底周縁に最下部から小口積みにしてゆく。玄門部の両袖石及び羨門際の側壁も縦長にして石材を立てている。壁小口積間隙には小板石を各所に充塡している。上半に行くに従って，やや塊石気味の大きめの石材を積む。玄室西壁は石積みの技術が稚拙だったためか，大きく崩壊している。

羨道部は，幅65㎝，長さ87～105㎝と短かく，玄室部との境及び羨門部には仕切のための下框石は設けられない。両側壁部は前後の立石の間隙を小板石で小口積みにして埋めている。

前庭部は，羨門際で幅120㎝，前庭入口付近で幅140㎝と広く，長さ200㎝を測る。羨門部から角張って両側へ各々20～35㎝拡がり，両側縁には入口部まで低いながらも石積を行なっている。この前庭部側壁の石積み方法は興味深く，東側（向かって右側）壁は最下段をすべて小板石を縦位に用いて立て並べ，その上に2～4段の小口積みを行なっている。しかし，西側（向かって左側）壁では，最下段から小口積みを行なっている。前庭部のこれらの積石は，更に，西側では周溝まで，東側では墳丘裾まで連続するように巡らされている。羨門部近くの側壁上端からは，前述の墳丘内護列石に連なる石材が巡らされており，これは内護列石の認められない西側でも，周溝まで配置されている。

閉塞は，羨道部の殆んどを小板石で埋め尽している。羨門側の前面はほぼ垂直に面を揃えており，羨道部上面まで，板石のみを小口積みとし，間には土砂等の充塡は行なわれない。かなり丁寧な閉塞状況を呈し，初葬時の所業の可能性も考えられる。

遺物出土状況（図版28・29）

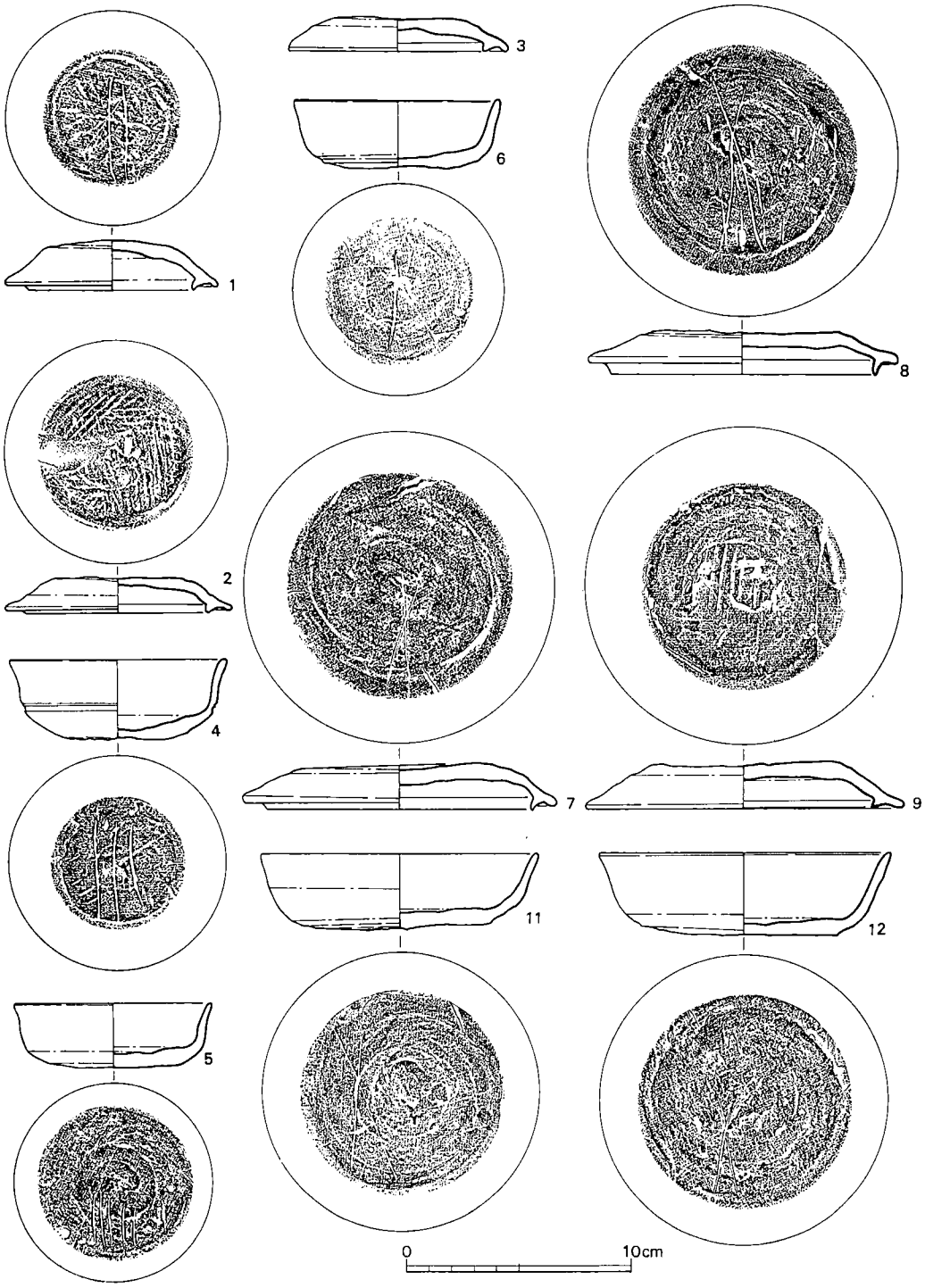
副葬品及び供献土器等の出土状況は，大きく3個所に集中する。即ち，前庭部周辺と，Ⅰ区周溝内（南西側¼半部），及びⅢ区周溝内（北東側¼半部）の各所である。出土場所別にみる各器種毎の個体数を示すと以下の如くである。

前　庭　部……須恵器杯蓋3，杯身6，平瓶1，短頸直口壺1
Ⅰ区周溝内……須恵器杯蓋7，杯身6，土師器甕1，皿2，小壺1
Ⅲ区周溝内……土師器甕2，小甕1，杯1，壺1
Ⅰ区墳丘内……須恵器杯蓋2，土師器高杯1
羨道床面……土師器皿1

以上の他に墳丘近辺で採集した黒曜石製打製石鏃1点があるが，これは本書末尾に掲載する。

上記の出土場所のうち，Ⅰ区墳丘内の須恵器杯蓋はⅠ区周溝内の杯身とセットとなったり，また，別個体の須恵器杯蓋はⅠ区墳丘内のものと前庭部のものが接合したりして，これらの3個所は密接に結びついている。

玄室内の出土遺物が皆無であることも注目される。また，有機質遺物の想定はともかくとしても，武器・馬具等の鉄製品，装飾品の玉類も皆無である。被葬者への遺体の傍へ置く純粋な意味での来世への持参物としての副葬品が皆無で，墓前祭祀的な土器若干と食器多量のみが石



第 45 図　H・2号墳出土須恵器実測図①（1/3）

室外に廃棄せられる状況は注目せねばならない。

特に，Ⅰ区周溝内出土の須恵器杯蓋・身は，すべてが焼成堅緻な小型品で簡単には割れにくいものであると思うが，それこそすべてが割れている状況である。この周溝内のものは明らかに意識して破砕されてまとめて投棄せられたものと考える。

出土遺物

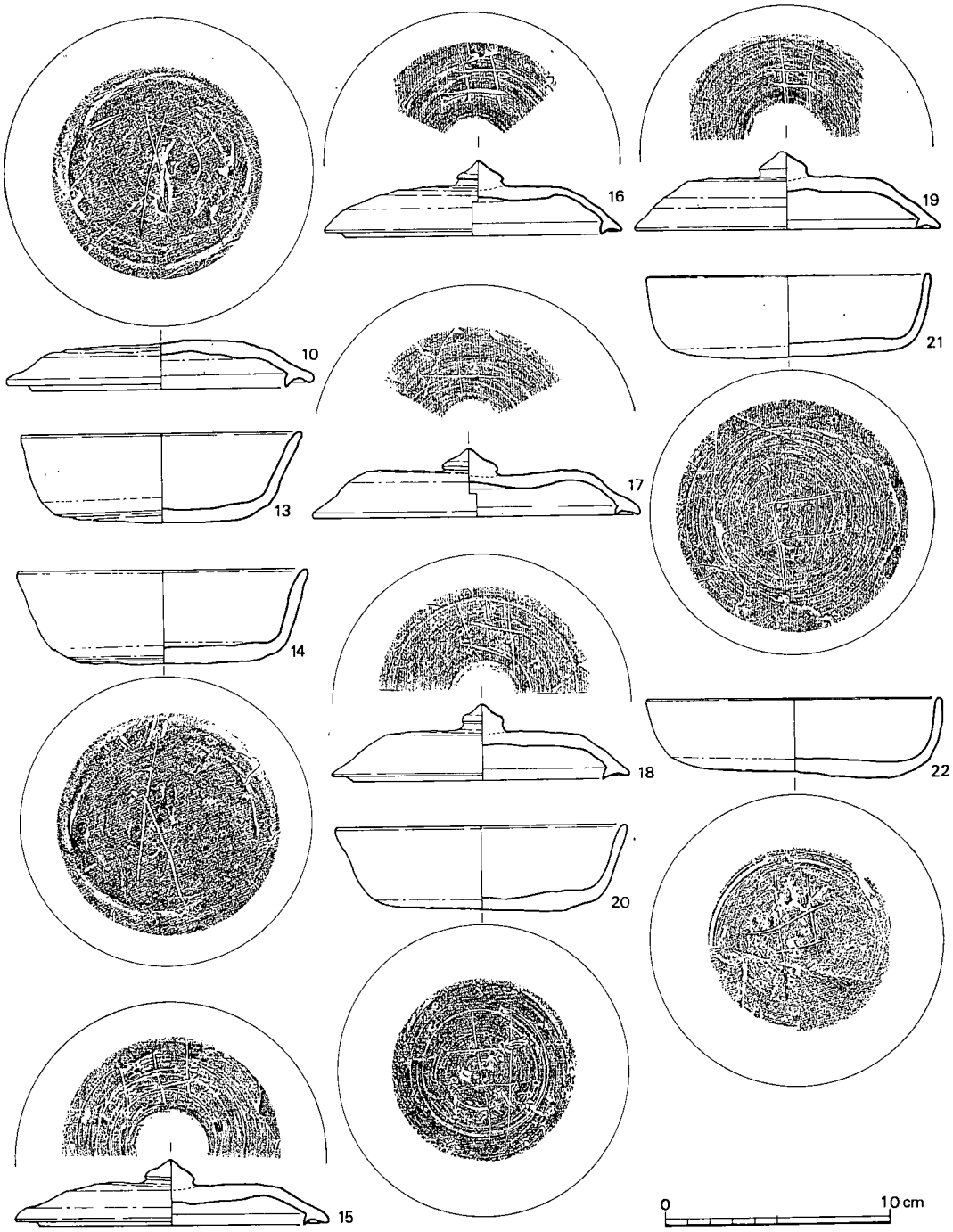
須　恵　器（図版30～32，第45～47図）

杯類の蓋・身はその法量・撮の有無・口縁部の形態等から，Ⅰ～Ⅲ類に大きく分類した。各々，出土状態・焼成等からセットと考えられるものも多く，また，各々の類中における蓋と身の個体数も全く同一で，本来すべてが蓋を伴なって使用，供献されたものと考えられる。

杯蓋Ⅰ類（第45図1～3）　口径9.5～10.0㎝，器高1.6～2.2㎝で小さなかえり部をつくるタイプである。1は，Ⅰ区周溝内出土品で，天井部がふくらみ，かえり部もまだシャープである。天井外面はヘラ切離しの後に雑にナデており，体部下半～口縁内外面は回転ナデ，天井内面にはナデツケがみられる。天井外面には2本平行線のヘラ記号が施される。胎土に粗石英粒をかなり含み，焼成堅緻で，内外面ともに暗青灰色をなす。2は，Ⅰ区周溝内出土品で，天井部が扁平となり，かえり部も鈍く短かくなってきている。天井外面はヘラ切離し後ナデており，更に縦横のスノコ状圧痕が残る。体部下半～口縁内外面は横ナデ，天井部内面はナデツケている。粗石英粒をわずかに含み，焼成やや堅緻で淡灰色をなす。3は，前庭部出土品で，1・2と比べ更に全体に扁平な感じとなり，かえり部も外部より上方へ更に短かくなっている。ヘラ記号等はみられず，胎土に粗石英粒をわずかに含むが，焼成堅緻で，内面は暗灰色，外面は青灰～灰黒色を呈する。

杯身Ⅰ類（第45図4～6）　口径9.6～8.7㎝，器高3.5～2.8㎝で大小あるが，口縁部はいずれもわずかに開き外湾気味となるタイプである。4は，Ⅰ区周溝内出土品で，体部下半に沈線を巡らし，半周分ぐらいは2本沈線となる。底部外面はヘラ切り離し後，雑にナデており，3本線の平行ヘラ記号が施される。体部内外面は回転ナデ，底内面はナデツケている。胎土に粗石英がいくらか目立ち，焼成堅緻で，内面灰黒色，外面は黒～灰色を呈する。5は，前庭部出土品で，底外面は回転ヘラ削りの上をナデており，5本の平行線ヘラ記号を施す。焼きは堅く，内面淡灰色，外面は灰黒～淡灰色をなす。6も前庭部出土品で，底外面は回転ヘラ削りの上を雑にナデており，直線1本のヘラ記号がみられる。体部内外面は回転ナデ，底内面はナデツケている。胎土に粗石英粒をわずかに含み，焼成堅緻で，内外面ともに淡灰～灰色をなす。

杯蓋Ⅱ類（第45図7～10）　口径13.6～14.0㎝，器高1.9～2.2㎝で，口縁部のかえりがやや細身でシャープさを残すものが多い。天井部は平坦面をなし，全体に扁平である。7は，前庭部左側壁裏側の墳丘中出土品で，杯身11とセットをなす。天井外面はヘラ切りの上を雑にナデ



第 46 図　H・2号墳出土須恵器実測図②（1/3）

ており，体部から口縁の内外面は回転ナデ，天井内面はナデツケる。天井外面に×印のヘラ記号がみられる。胎土に微砂粒多く含み，焼成堅緻で，内面青灰色，外面は青灰～灰黒色をなす。全体にかなり焼き歪む。8は，Ⅰ区墳丘内出土品で，全体に焼き歪みがみられ，胎土に粗石英粒をわずかに含む。焼成堅く，淡青灰色を呈する。調整手法は7と同様で，天井外面には大きく×印のヘラ記号が施されている。9は，大部分が前庭部から出土し，破片の残り僅かがⅠ区墳丘内より出土して両者が接合したものである。焼成からみて12とセットになるものと考えられる。かえり部はシャープではあるが短かく，下端線より上部にひっこんでおり，器表の調整手法は前者と同類である。天井外面にはスノコ状圧痕を残す。胎土に粗石英粒をいくらか含み，焼成堅緻で，内外面ともに青灰色を呈する。焼成からみて，杯身12とセットになる。10は，前庭部出土品で，天井部外面には部分的にスノコ状圧痕を残し，更に×印のヘラ記号を施す。胎土に微砂粒をかなり含み，焼成堅緻で，内外面ともに青灰色をなす。全体にいくらか焼き歪む。焼成の感じから杯身13とセットになると考えられる。

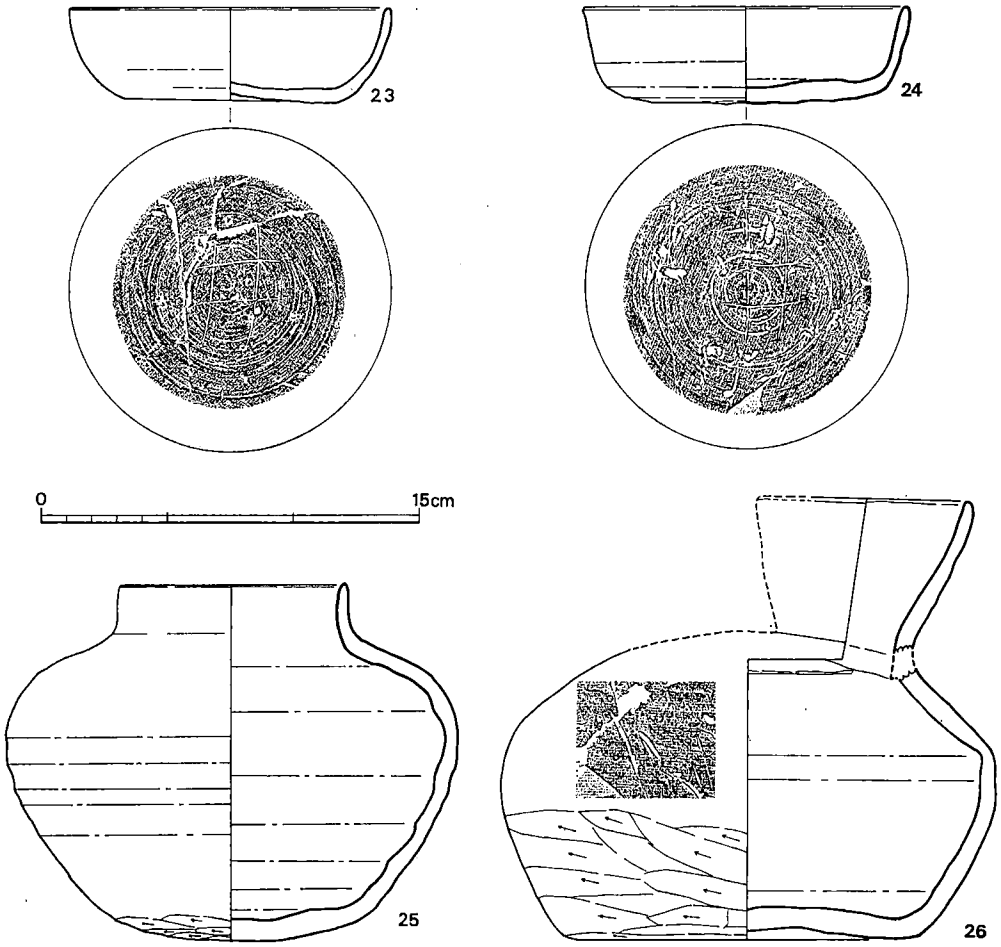
杯身Ⅱ類（第45図11～第46図14）　口径12.3～12.9㎝，器高3.4～4.1㎝で，法量からみると，杯身Ⅲ類と全く同量で区別しにくい。しかし，両者は以下の諸点で明らかに異なる。即ち，この杯身Ⅱ類は，体部が全体に外傾して開き，底外面の調整はヘラ切り離しのままの後，雑にナデており，更に底外面のヘラ記号は×印である。これに対して杯身Ⅲ類では，体部が内湾的に立ち上がり，薄手精製の感じを受け，底外面は丁寧な回転ヘラ削りを施し，Ⅱ類でみられるようなヘラ切り離し後の粘土の剰余部分等を全く残さない。更に底部外面のヘラ記号は蓋Ⅲ類と同様の井字形である。以上のことから，杯身のⅡ類とⅢ類の識別は容易である。

11は，Ⅰ区周溝内出土品で，前庭部左側壁裏側墳丘内出土品の7とセットになる。口縁から体部の内外面は回転ナデ，底内面にはナデツケがみられ，底部外面は雑なヘラ切離しのままで，×印のヘラ記号がみられる。胎土に粗石英粒を僅かに，微砂粒を多く含み，焼成堅緻で，内面淡青灰色，外面は灰～灰黒色である。12は，前庭部出土完形品で蓋9とセットとなる。底外面はヘラ切り離し後，雑にナデており，×印のヘラ記号が施されている。胎土に微砂粒をかなり含み，焼成堅緻で，内外面ともに青灰色をなす。13は，ヘラ記号もなく，やや深い器形をなすが，各部の調整手法は12と同様である。前庭部出土品で，焼成の感じから蓋10とセットをなすと思われる。微砂粒をかなり含み，焼成堅緻で，内外面ともに青灰色をなす。14は，前庭部出土品で，底外面に×印に含められるヘラ記号を施している。完形品で，胎土に微砂粒をいくらか含み，焼成堅緻で，淡青灰～灰色をなす。

杯蓋Ⅲ類（第46図15～19）　口径13.3～14.5㎝，器高2.9～3.4㎝で，わりとしっかりした擬宝珠形撮を付けるものである。すべてⅠ区周溝内出土品である。この類は口径はⅡ類蓋と変化なく，撮部を除いた器高もⅡ類の器高と同法量を示す。しからば，Ⅱ類蓋に撮部を付けたらⅢ類蓋となるか。さにあらず，細部の特徴，調整手法に差異がみられるのである。まず，天井外面

は両者同様に平坦面をなすが，Ⅲ類ではすべて左廻りの回転ヘラ削りを施し，井字形のヘラ記号を認める。更にこの類ではかえりが短かく，口縁外端も短かい。そして天井部外縁あたりで丸く内湾して口縁へ延びる特徴をもつ。これに対してⅡ類蓋では，天井外面はⅡ類杯身底外面同様に，ヘラ切離しの後に雑にナデており，粘土はみ出し等がみられ，×印状ヘラ記号が施される。更に，かえりが細身でやや長く，口縁外端も上反り気味にやや長く延びる。以上の諸差異点から，Ⅱ類とⅢ類の杯蓋は明らかに別類であり，各々が同類の身と同様の手法を有するものである。

15は，天井外面は回転ヘラ削り，体部から口縁内外面は回転ナデ，撮周辺は回転ナデ，天井内面にはナデツケがみられる。外面には井字形のヘラ記号がみられる。全体に歪みが大きく，粗砂粒をいくらか含み，焼成堅緻で，内面は暗青灰色，外面は灰黒色をなす。16は，調整手法



第 47 図　H・2号墳出土須恵器実測図③（1/3）

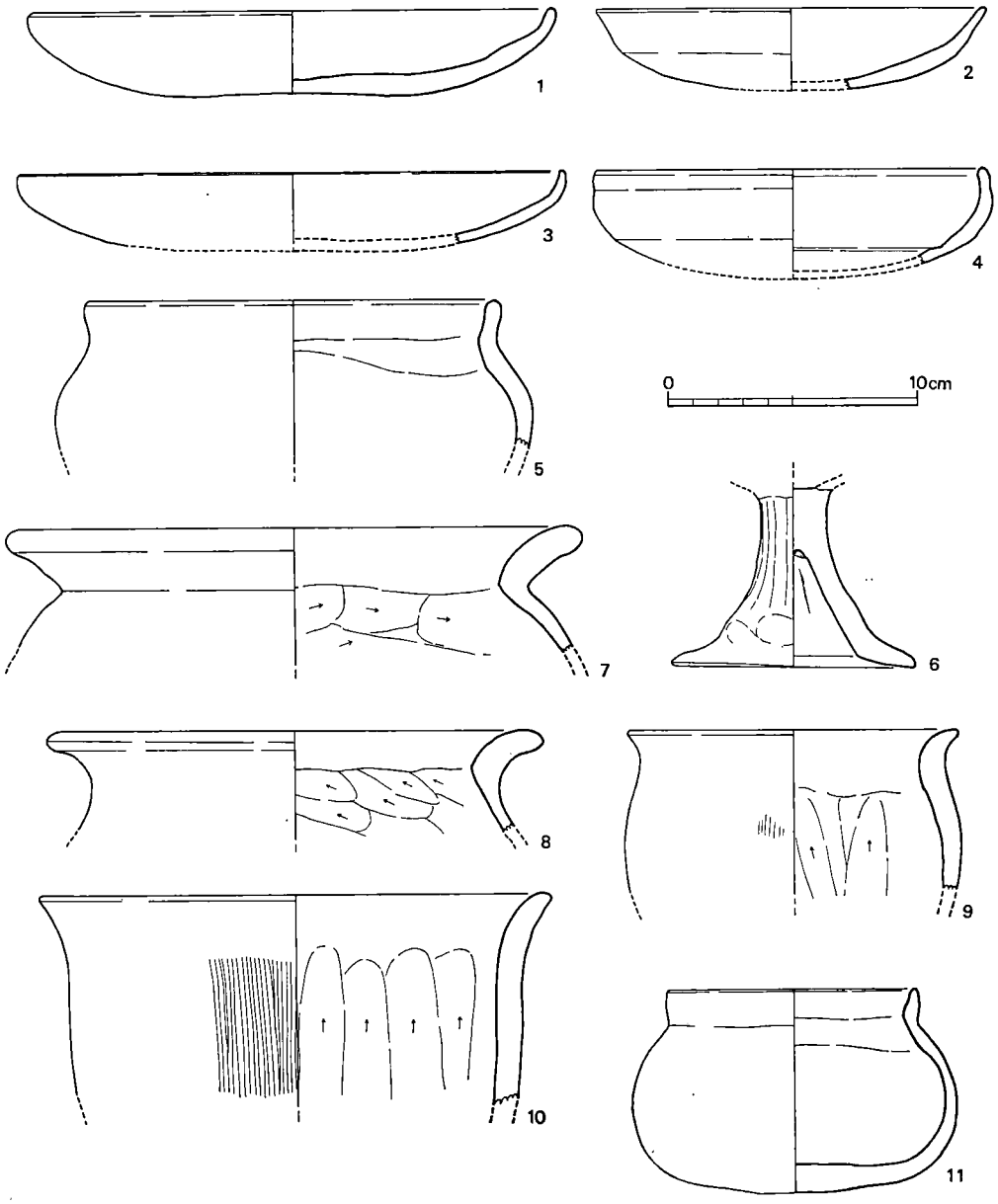
は15と同類で，胎土に粗石英粒を微量含み，焼成堅緻で内面青灰色，外面は灰青灰色（わずかに灰かぶり）をなす。17は，胎土に粗大石英粒をわずかにみる。焼成堅緻で，内面青灰色，外面は青灰～灰色（灰かぶり）を呈して，明らかに蓋・身をセットして焼成している。18は，調整手法全く以上と同様で，胎土に粗石英粒を僅かに含み，焼成堅緻で内面は暗青灰色，外面は灰黒色をなす。杯身20とセットをなし，いずれも内面には小さい焼きぶくらみが多くみられる。19は，胎土に細砂粒を僅かに含み，焼成堅く内面暗青灰色，外面は灰黒色で縁辺部分のみ茶褐色を呈する。焼成よりみて杯身21とセットとなると考えられる。

杯身Ⅲ類（第46図20～第47図24） 口径12.2～13.0㎝，器高3.4～3.8㎝を測り，細部の特徴は杯身Ⅱ類の項で既に述べたとおりである。すべてⅠ区周溝内出土品で，底外面は左廻りの回転ヘラ削りが施され，井字形のヘラ記号が付される。20は，胎土に粗石英粒をいくらか含み，焼成堅緻で，内面は暗青灰色，外面は灰黒色をなす。内面に小さい焼きぶくらみがみられる。21は，胎土に粗石英粒をいくらか含み，焼成堅緻で，内面は暗青灰色，外面は灰黒色をなし，縁辺部分のみ茶褐色をなす。22は，全体にかなり焼き歪み，胎土に粗石英粒をわずかに含み，焼成堅緻で，外面は灰～灰黒色，内面は青灰色をなす。23は，胎土に粗石英粒いくらか含み，焼成堅緻で内面暗青灰色，外面は暗青灰～灰黒色をなす。杯蓋16とセットをなす可能性も考えられるが，これはかなり不明確である。24は，胎土に粗石英粒をいくらか含み，焼成は堅緻で，内面は暗青灰色，外面は灰黒色を呈する。内面に小さな焼きぶくらみがいくらかみられ，全体に少し焼け歪む。

直口壺（第47図25） 口径9.0㎝，器高14.0㎝，胴部最大径17.8㎝を測る。短頸で肩部が張る器形をなし，前庭部入口付近の墓道といっていいようなあたりで出土した。内面と，胴下位までの外面は回転ナデを施し，底部外面は極めて雑な一方向への手持ちヘラ削り，内面はナデツケ状をみせる。胎土に粗石英粒をわずかに，細砂粒をいくらか含み，焼成堅緻で外面は暗灰黒色を呈する。内面から口縁外面～胴部上端外面までは，蓋をかぶせて焼成したものらしく，暗青灰色をなす。この痕跡から蓋の法量を考えると，口径12.6㎝，内面の深さ2.9㎝以上のものでなければならない。この法量でゆくと，杯身Ⅱ・Ⅲ類がそれにあてはまり，中でもⅢ類の口縁が内湾気味となるものは丁度これに符号する。この蓋を被せた姿態を想像すると，後代の薬壺型の火葬蔵骨器を彷沸とさせる。他の本墳出土の杯類の年代を考えると，この壺は，間に一クッションをおいてそれらの祖形となり得るものと言えよう。もちろん，当墳において，この壺を火葬蔵骨器として埋納したと考えるものではなく，未だ生活容器として使用していたものの供献と考えるところである。

平瓶（第47図26） 口頸部と，胴部以下が接合せず，同一個体であるとの確認から，図上復元を行なったものである。実は，当初，本墳が古墳であるとわからず，全体に重機により表土・根の除去を行なっていた時に出土したもので，その後の調査で，前庭部入口～前面付近出土品

と判明した。口径8.5㎝，器高17.5㎝，胴部最大径19.3㎝，底径13.9㎝を測る。口頸部～胴部内外面は回転ナデ，カキ目調整はみられない。胴部外面下半は雑な手持ちヘラ削りを施し，底部外面は雑なナデ，内面は雑なナデツケがみられる。胴部最大径近くの肩部には短かい2本線のヘラ記号が施される。胎土に細砂粒を多く含み，焼成堅緻で，灰～灰黒色をなす。



第48図　H・2号墳出土土師器実測図（1/3）

土　師　器（図版32，第48図）

皿（1～3）　1・3は，大口径の盤状土器である。1は，Ⅰ区周溝内出土品で，口径21.0㎝器高3.4㎝を測る。口縁端は僅かに短かく内湾させ，端部は，丸くおさめる。½弱残存し，器表は磨滅して調整不明である。胎土に細砂粒を少量含むが，かなり精良で，焼成良く，淡褐色をなす。3も，Ⅰ区周溝内出土品で，口径22.0㎝，復元器高3.3㎝を測り，1と同類である。口縁端部が短かく内湾気味に屈曲し，端部は丸くおさめる。器表は，全面磨滅して調整は不明である。胎土は精製されており，焼成良く，淡茶褐色を呈する。2は，唯一羨道床面出土品で口径15.6㎝，復元器高3.3㎝を測り，体部中途で屈折して，口縁は直線的に開く。口縁周縁は横ナデがみられるが，ほとんど全面が磨滅する。胎土は精製されており，焼成良く肌色をなしている

杯（4）　内湾気味に立ち上がる口縁を有し，椀とでも言うべき形状を示す。Ⅲ区周溝内出土品で，口縁端部は丸くおさめる。口径15.9㎝，復元器高4.4㎝で，口縁～体部の内外面は横ナデ，底外面はヘラ削りかと思われる。胎土精良で，焼成良好，肌色を呈する。

壺（5）　Ⅲ区周溝内出土品で，鉢・直口壺等，器種命名に困る器形をなす。頸部は短かく僅かに外傾し，内面は凹状をなす。胴部は上半で張り，口頸部内面から，外面全部は横ナデ，胴部内面は横位の強い雑なナデをほどこす。口径16.7㎝，胴部最大径19.2㎝を測り，胎土精良で，焼成良く，肌色をなす。

高杯（6）　Ⅰ区墳丘内出土品で，細い脚柱から裾拡がりに開き，内面に稜をつくる。脚端径9.8㎝，脚柱径2.6㎝，脚部高6.8㎝を測る。外面上半は面取り状の縦方向ヘラ削り，下半は指オサエの残る雑なナデ調整が施される。脚柱内面は横位ヘラ削りがみられる。胎土精良で，焼成良く，淡黄褐色をなす。

甕（7～10）　7は，Ⅰ区周溝内出土品で，頸内面に稜をつくり，強く外反する厚手の口縁となる。胴は上位でかなり張り，口縁内面から外面全部は横ナデ，胴部内面は横方向へのヘラ削りが施される。口径23.1㎝を測り，胎土に粗砂粒多く含み，焼成良好で，赤茶色をなす。8は，Ⅲ区周溝内出土品で，口径19.8㎝とやや小さめの甕で，胴部内面は横位のヘラ削り，口縁内面から外全面は横ナデがみられる。頸部外面には煤が僅かに付着する。胎土に細砂多く，粗砂粒もいくらか含み，焼成良好で，茶褐色をなす。9は，Ⅲ区周溝内出土の小型甕で，口径13.2㎝，胴部最大径13.5㎝を測る。口頸部内外面は横ナデ，胴部内面は削り上げ，外面は縦ハケがわずかに残る。胎土に細砂粒多く，粗砂粒もいくらか含み，焼成良好で，赤茶褐色をなす。10は，Ⅲ区周溝内出土品で，口径20.5㎝を測り，張らない胴部からゆるやかに外傾するのみの口縁につくる。口縁内外面横ナデ，胴部内面はヘラ削り上げ，外面はやや粗い縦ハケを施す。胎土に粗石英粒多く含み，焼成良く，淡茶色をなす。器形が前の7・8と全く異なり，器種の違いであり，甑となるかとも考えられる。

小壺 (11)　小形，丸底で直口の坩である。Ⅰ区周溝内出土品で，口径10.1㎝，器高8.0㎝，胴部最大径13.0㎝を測る。全体に磨滅著しいが，口頸部付近は横ナデかと思われる。胎土精良で焼成良好，淡茶褐色をなす。

小　結

以上の出土遺物と，石室構造等から，このH・2号墳の年代を考えてみたい。時期の決め手となるものは，出土須恵器杯類であり，ここではⅠ～Ⅲ類に分けた。須恵器の編年の際には，地域性が細部においてはみられ，細かい分類は他地域との比較が困難な場合が多い。よって，より近隣の例をとり上げて考えたい。

Ⅰ類とⅡ類の差は，法量により明確である。6C後半以降の杯類の小径化が続くなかで，Ⅰ類の段階で最小となる。次には，逆に大径化へと逆転してゆく。この状況の中で，Ⅰ類とⅡ類との間にはブランクがみられる。この空白には，例えば，小郡市干潟遺跡（第2次）第10号土壙墓副葬の一括須恵器群が充てられる。即ち，Ⅱ類身では口径12.2～13.0㎝で，干潟第10号土壙墓杯身では口径11.0～11.5㎝と差異が認められる。干潟例は，調整手法ではⅢ類杯よりもⅡ類杯と同類である。また，干潟例杯蓋は器高が高く，Ⅱ類杯よりも，より古相を示す。よって，Ⅰ類杯（7C中頃）→干潟第10号土壙例→Ⅱ類杯（7C後葉初）の順序が考えられる。また，7C後葉になると，奈良期へと連続する特徴として，高台付杯身の出現と，蓋口縁端の鳥嘴状化がみられるが，本墳出土杯Ⅲ類は未だそこまで至ってはいない。即ち，Ⅲ類杯は型式編年上，蓋の口縁の鳥嘴状化，身の高台が付く時期の直前と考えることができる。以上のことから，杯Ⅲ類は，7C後葉のうちでもより古い時期の，7C第3四半期の所産であると考える。

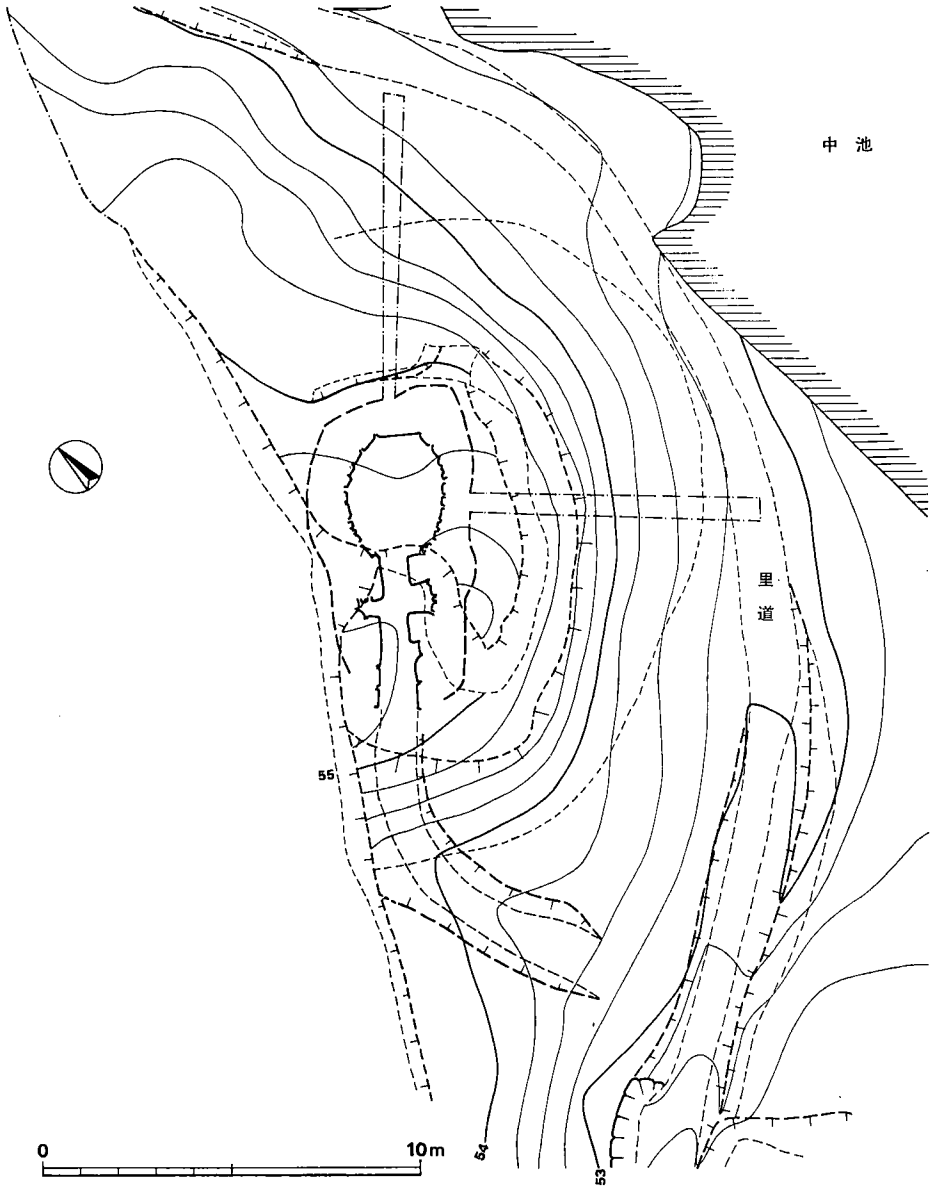
以上の須恵器の検討より，少なくとも前後3回の本墳への埋葬が考えられる。初築時期については，7C中頃以前と考えられる遺物が全くみられないことから，7C中葉に初築され，以後7C後葉までの25～30年の間に2回追葬があったと考えておく。追葬の場所等については，前庭部の供献土器も多く，その辺りの可能性もあるが，確証はない。

石室構造からみると，G・1号墳のような整った強い胴張りの複室構造のタイプからみると，明らかに本墳石室は後出するものである。今後続編報告書で掲載するⅠ地区の群集墳のうちで，斜面に占地して，玄室プランが方形に近い横長方形の極めて小規模なものがみられるが，それらとは構造上一線を画することができ，本墳の方がより古式である。また，南方の同尾根斜面に占地するH・1号墳は，構造上かなり退化してはいるが，一応複室構造を残しており，本墳よりも型式上一段階古いものと考えられる。

以上のことから，本墳石室は，6C未段階の強い胴張り複室構造のタイプが，次第に小規模化・粗雑化した段階の，更に後の段階で，倭小化した方形プラン石室の前に位置付けられるものである。（中間研志）

4 H・3号墳

H・3号墳は，土取場用地外であったが，工事に際し削平されるとの事であり，急拠発掘調査を行ったものである。地番は大字柿原字大谷1338～1350である。



第 49 図　H・3号墳墳丘実測図（1/200）

墳　　丘（図版33～35，第49・50図）

3号墳は，H地区尾根の先端部東斜面に位置し，古墳基底部は標高54m前後の高さにつくられている。

古墳がある尾根先端の緩斜面は，明治30～40年代に行なわれた新池築提の際，この場所より採土したとの事で，古墳々丘北半と尾根基部側との間は20mの幅で削り取られ，崩面を露呈している。

調査前の墳丘規模は径17mを測る円墳で，墳丘高は 2.5m前後である。墳丘西半は即に地山面まで削平されてしまっており，墳頂部も盗掘を受けて陥没していた。

墳丘の調査は石室右側壁側にAトレンチ，石室奥壁裏のBトレンチ，石室左側壁のCトレンチを設定し，盛土の観察を行った。Bトレンチでは旧地表である黒褐色土及び灰褐色土が取り除かれて地山の黄色土面で整地され，この面から石室掘り方を掘り込んでいる。

墳丘の盛土は3段階にわたって行ない，1段階の盛土は石室腰石上端付近までで，石室の下半部構築の際の裏込めの役目を果したものである。2段階は，腰石上部から天井石が構架されるまでの間になされた盛土で，かたく締っている。3段階の盛土は墳丘の形を整えるためのもので，主として墳丘裾廻りの整形を行っている。

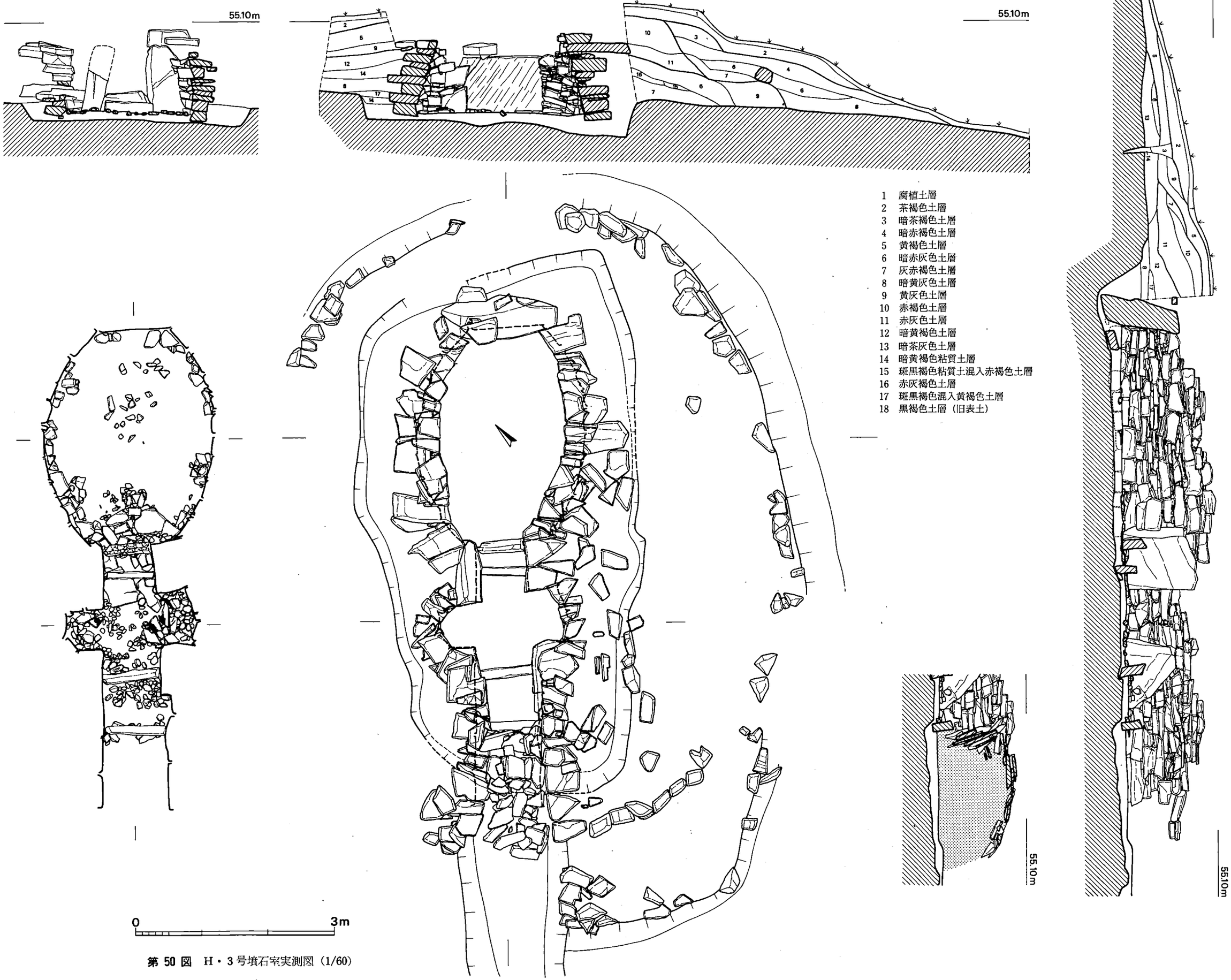
Bトレンチによる観察では，墳丘裾は玄室中心より測ると約 7.2mの距離にある。Cトレンチでは盛土は旧地表である黒褐色土上になされ，石室掘り方もこの面からである。盛土はBトレンチで観察されたように3段階に分けて行なわれ，墳丘内を巡る列石は1段階の盛土の際に並べられたものであろう。墳丘裾は玄室中心より 6.9mの距離にあり，現存墳丘高は約 1.5mをはかる。以上の事からして，墳丘径は約14m，高さは2～3m程度のものが考えられる。一方，羨道両側壁先端部より石室をとり囲む形で内護列石が墳丘内を一巡している。Ⅰ・Ⅱ区は削平のため明らかではないが，石室主軸方向で約9.6m，石室横断方向で復元径約7.8mの長円形プランを呈する。列石は1段ないし2段づみで，Cトレンチの観察で確認されたように第1段階の盛土次に伴なう構築である。内護列石に使われた石材は砂岩質の転石大のものが多い。

周溝は確認されなかった。

主 体 部（図版36～39，第50図）

H・3号墳の内部主体は複室両袖式の横穴式石室で，南西に開口し，石室の主軸はN43°30′E方位を示す。石室の掘り方は7.6×4.2mの長方形プランで，墓道へと続いている。深さは奥壁側で 0.6mを測る。掘り方内に構築された石室は，すでに盗掘をうけ天井部を全く失っており，左側壁から前室にかけての崩壊が著しく基底部から2～3段の壁体を残すのみである。

玄室は主軸長で3.21m，幅は奥壁側1.1m，最大幅2.55m，玄門側0.73mで，床面平面プランは長円形の三味線胴張りを呈す。奥壁は幅1.7m，高さ1.1m，厚さ 0.4mの大石を1個立て



1 腐植土層
2 茶褐色土層
3 暗茶褐色土層
4 暗赤褐色土層
5 黄褐色土層
6 暗赤灰色土層
7 灰赤褐色土層
8 暗黄灰色土層
9 黄灰色土層
10 赤褐色土層
11 赤灰色土層
12 暗黄褐色土層
13 暗茶灰色土層
14 暗黄褐色粘質土層
15 斑黒褐色粘質土混入赤褐色土層
16 赤灰褐色土層
17 斑黒褐色混入黄褐色土層
18 黒褐色土層（旧表土）

第 50 図 H・3 号墳石室実測図（1/60）

て鏡石としている。奥壁の上には更に1段平積みされている。両側壁は割石の平積みで，現存高 1.4mを測る。腰石は床面より一段深く埋められ，比較的大きな石が裾えられている。右側壁では奥壁側よりも玄門側の方が大きな石が選ばれており，積みも荒い。壁面はわりと不揃いで，石積みの持送りは基底部上段の石から認められ，床面からの傾斜角度は両壁とも75度をはかり，わりと急である。奥壁も約80度の角度で内傾して裾えられている。床面敷石で旧状を保っているのは周壁縁のみで，10cm大の円礫と大小の板石が混在，あるいは板石の上に円礫がのっている。この状態は前室でも変らず，前後2回の石敷きがなされたものと思われる。

玄室と前室をつなぐ通路は，右には奥行0.5m，幅0.75m，高さ1mの，左には奥行0.3m，幅0.95mの大きな袖石を立てて玄門としている。楣石は現存しない。敷石は板石である。

前室は主軸長0.8m，最大幅1.95mの横長胴張りプランで，側壁の構築手法は玄室と同様割石の平積みであるが，持送りはわずかである。床面は玄室と同様板石と円礫の敷石で，前室からは馬具の鐙が4個体出土している。

前室と羨道を仕切る前門は，前室側で右奥行 0.5m，左奥行0.35mを測り前室を区切るが，羨道部側では右前門がわずか10cm程右羨道側壁より出っぱる程度でほとんど無袖に近い。右前門高は0.75mで更にその上に2段の平積がみられる。

羨道は主軸長2.4m，幅は前門側で 0.83m，入口側で1mを測り，入口側へやや開く。側壁は基底部は大きな石を平積みし，順次上へ行くに従い小さな石の積みとなる。また羨道入口端は，羨門を意識してか大きな石を使っている。現存高 1.1mを測る。側壁上部端には，墳丘内を一巡する列石が取り付いている。玄門から羨道にかけては4個の仕切石が埋め込まれ，或いは敷石の上に置かれている。玄室側から順次第1仕切石，その次を第2仕切石と仮称すると最も入口側のものは第4仕切石となるが，第1・第2仕切石は玄門部に，第3仕切石は前門部に，第4仕切石は羨道部に置かれている。これら4つの仕切石は一度に設置されたものではなく，第2・第3仕切石は床面に埋め込まれているが，第1仕切石は板石の敷石の上に置かれ，第4仕切石は羨道床面埋土に埋め込まれている。つまり，第2・第3仕切石が石室構築次に，第1・第4仕切石はその後追葬次に設置されたものである。このことは，玄室床面にみられる板石と円礫の2種の敷石の違いとも符合し，板石の敷石は初葬次のものであろう。

羨道部にみられる閉塞は，第4仕切石から羨道入口にかけて行なわれ，一部は墓道にかかっている。閉塞状況は，第4仕切石の上端面から上において，裏込めの埋土と同時に板石を立て架け，背後の板石を少しずつ上へせり出させるようにして，天井部付近まで積み上げている。板石の裏込めは暗茶褐色の埋土を充填し，上面は板石を敷き詰めて覆っている。上面は墓道側へ傾斜している。この閉塞は追葬次のものである。

墓道は墳丘外へも孤状に延びており，全長約9mを測る。羨道部側上幅で 1.4m，深さ30cmで墓道入口側では次第に浅くなって終息する。当墳から出土した土器のほとんどはこの墓道か

らのもので，閉塞部前面には杯などの小物類が，墳丘裾にかかる墓道中央には甕類が多かった。甕は墓道脇の墳丘裾に置かれていたものが流れ込んだものであろう。

石室に使われた石材は，通称柿原石といわれている地元産の緑色片岩や，絹雲母片岩がほとんどである。

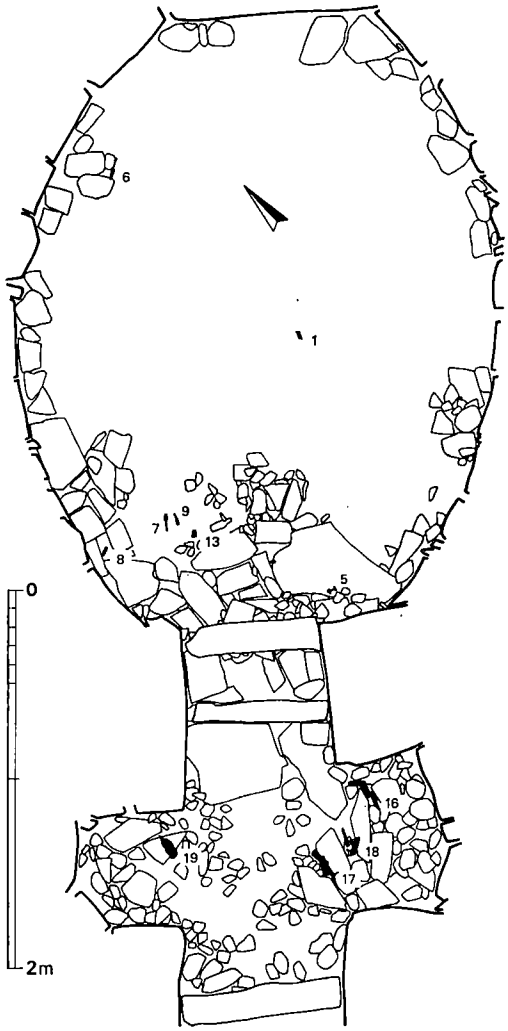
遺物出土状況 (図版38，第51図)

H・3号墳は，墳丘を半分削りとられていたため，石室も相当破壊されているものと予想していたが，調査の結果玄室が攪乱されているほかは，前室，羨道部の残存状況は良好であった。

玄室は攪乱がひどく，床面敷石も周壁縁辺部しか残っていなかったが，それでも二次に及ぶ敷石が確認された。遺物は原位置を保つものは少なく，床面より15～20㎝浮いた奥壁側にて鉄斧や鉄鏃を，左側壁の玄門側寄りにて馬具の引手金具の一部が出土した。床敷石面では中央部にて耳環1個が，左側壁寄りからは鉄鏃等などが出土し，ほぼ原位置であろう。土器類は出土していない。

前室は比較的保存状況がよく，右側壁側に1個の，左側壁側に3個の鐙が出土し，墓道からは多くの土器類が出土している。とくに閉塞石から前庭部にかけての位置で多く出土している。

その他に，鉄滓と弥生式土器片が少量出土している。鉄滓はⅡ・Ⅲ区の墳丘上及び墳丘裾部の表土下から出土しており，古墳に伴なうものかどうかは定かではないが，現在成分の分析を依頼中である。弥生式土器は，墓道の土器に混じて丹塗り土器が，Ⅳ区墳丘内において甕口縁部片が出土している。



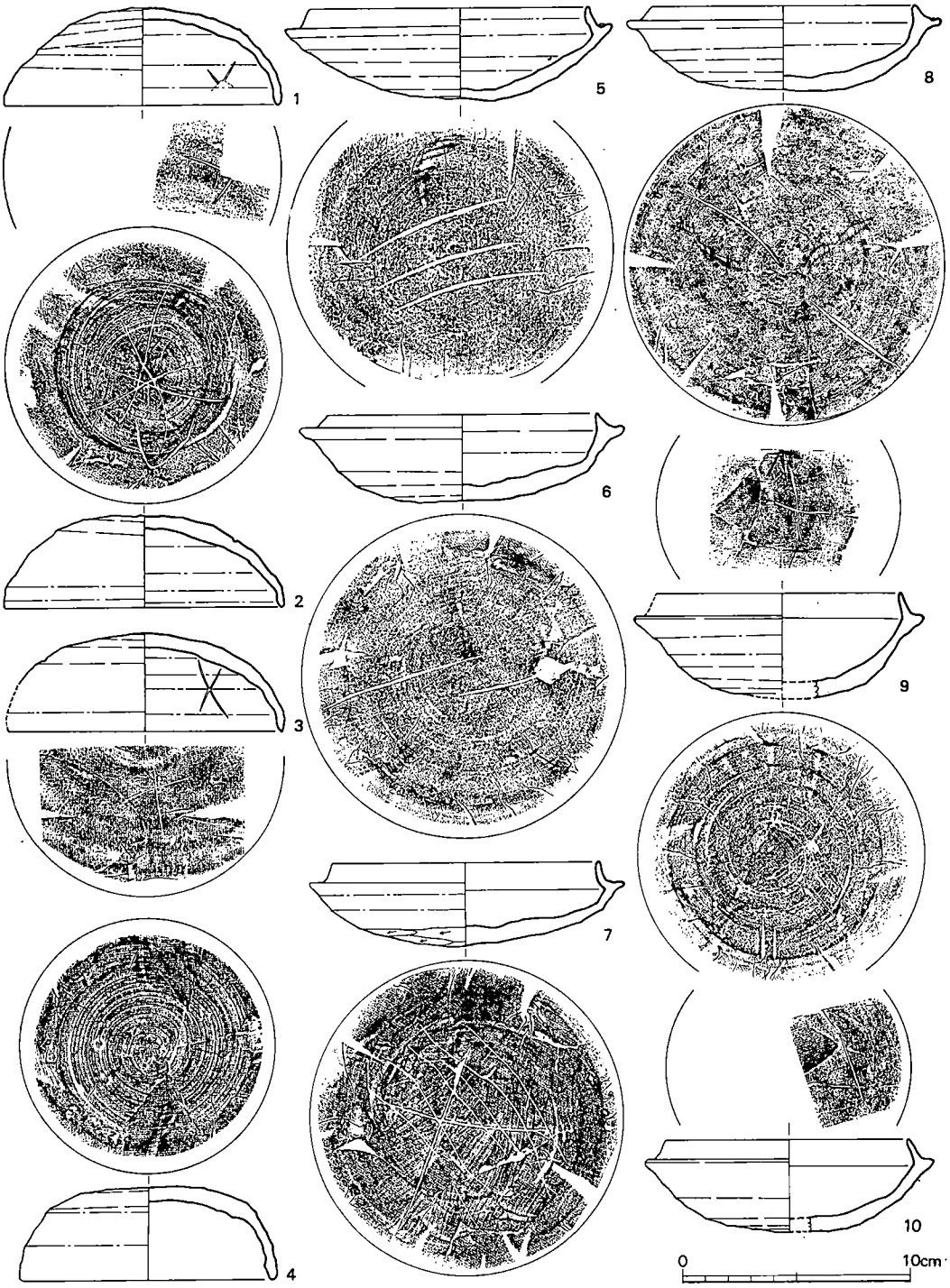
第 51 図　H—3号墳遺物出土状況実測図 (1/40)

出土遺物

須恵器（図版40～43，第52～57図）

杯蓋（第52図1～4）　杯蓋はわずか4個しか出土しておらず，いずれも墓道からの出土である。1は口径12㎝，器高 4.3㎝。薄手の造りで口縁部は肥厚し，直立する。天井部は丸く，外面体部と天井部との境は浅くて広く凹む。天井部は回転ヘラケズリ，それ以下から体部内面にかけては横ナデ，天井部内面はナデてある。以下杯蓋の成形についてはほとんど同じであるので特別な場合を除き説明を省略する。胎土には砂粒多く含み，内外面とも黒灰色を呈す。焼成良好。体部内面にヘラ記号を有す。杯身10とセットであろう。ヘラ記号は同じである。2は口径11.9㎝，器高 4.1㎝。天井部はやや平坦面を有し，体部との境は段がつく。口縁部は肥厚し，やや外方へ開く。胎土は精選されているが大粒の砂粒を含む。黄灰色を呈し焼成も良い。2種類のヘラ記号が印されている。3は復元口径11.8㎝，器高 4.4㎝。天井部から体部にかけては滑らかで，半円球状をなす。口縁部端は尖がりやや内傾する。胎土・焼成ともによく外面黒灰色，内面紫灰色を呈す。杯身9とセットであろう。4は1～3と異なり，天井部は平坦で体部は直立に近く器形は箱形を呈する。口径11.4㎝，器高 4.1㎝で器肉は厚い。天井部と体部との境は浅くて広い，凹みが入り，口縁部は肥厚する。口縁の 2/3を欠損するが，ヘラ記号はみられない。短頸壺の蓋かもしれない。

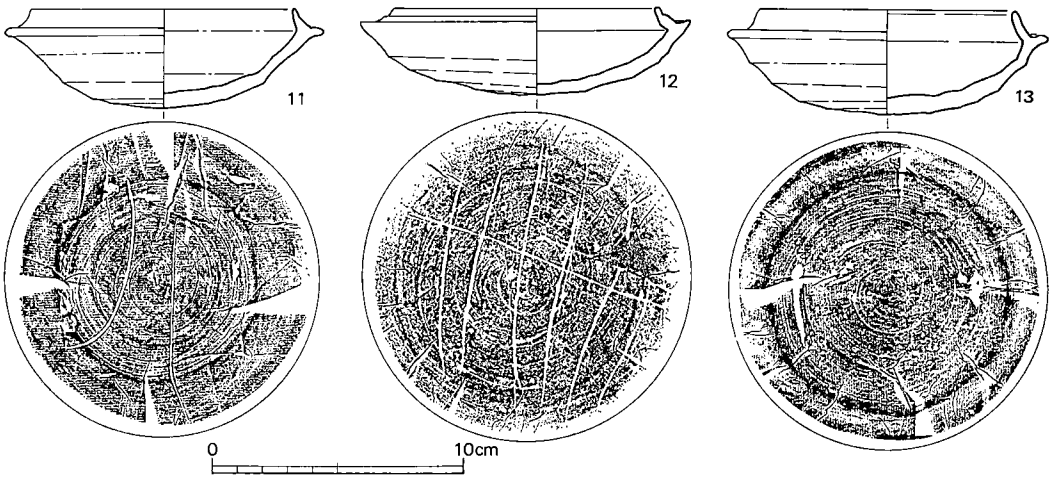
杯身（第52図5～第53図13）　杯身は全て墓道からの出土である。5は口径12.1㎝，受け部径14.3㎝，立上り高9㎜，器高 4.1㎝を測る。底部は平坦でわずかに凹み，体部との境は明瞭ではない。立上りは高く，先端は尖って直立する。受け部上面は内傾し，わずかに凹む。底部は回転ヘラケズリ，体部から内体部までは横ナデ，内底面はナデてある。以下の杯身もほぼ同じ調整である。胎土・焼成ともに良好で，丁寧な造りである。外面黄灰色，内面灰色を呈する。6は口径 11.7㎝，受け部径14.1㎝，立上り高6㎜，器高3.9㎝測る。底部は平坦面を有し，体部との境は明瞭である。体部のたちあがりは強く，受け部は強く張る。受け部上面の凹みは浅い。大粒の砂粒を含むが焼成はよい。内外面灰色を呈す。7は口径11.6㎝，受け部径13.7㎝，立上り高1㎝を測る。杯身5～8は口径の割りには器高が低く扁平であるが7は最も著しい。底部はわずかに丸味を有し，手持ちヘラケズリがなされた唯一の例である。立上りは内傾しながらほぼ直に立ち上り，薄手である。受け部上面はほぼ水平に近く，立上り基部との境は浅い1条の沈線が入る。胎土には大粒の砂粒多く含むが精選されている。内外面灰色を呈し焼成はよい。底部にみられるヘラ記号は2種類に書き分けられている。8は口径11.4㎝，受け部径13.6㎝，立上り高7㎜，器高3.8㎝を測り，器壁は肉厚である。底部はわずかに平坦面を有し，体部との境は明瞭ではない。体部と受け部との境は浅い凹みをつくる。立上りは低く，受け部上面の凹みは深い。砂粒多く含む。内外面とも灰色を呈し焼成はよい。9は復元口径10.8㎝，受け部径12.8㎝，立上り高9㎜，器高 4.6㎝を測る。底部は丸底で体部との境は明瞭である。立上りは強く，受け部上面はほぼ水平となる。砂粒多く含み焼成は良好。内外面とも紫灰色を呈



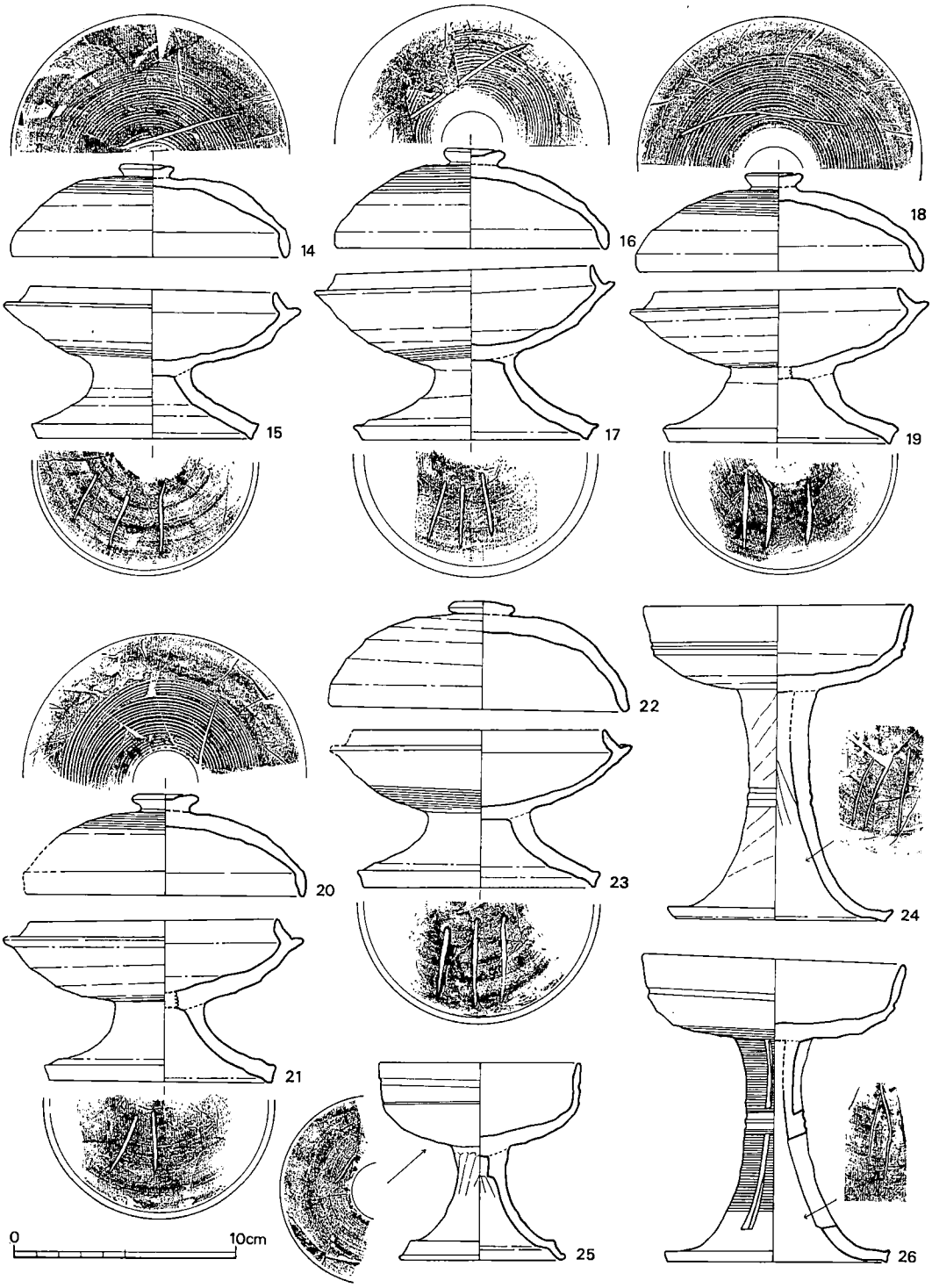
第 52 図　H・3号墳出土須恵器実測図①（1/3）

す。内底面には通有のヘラ記号がみられるが，外底面にもヘラ記号状のものがみられる。10は口径10.5㎝，受け部径12.6㎝，立上り高9㎜，器高4㎝を測る。底部は丸味をおび，体部との境は不明瞭である。立上りは内傾し，受け部上面は立上り側へ高くなる。砂粒多く含むが焼成は良好である。内外面灰色を呈す。11は口径10.4㎝，受け部径12.6㎝，立上り高8㎜，器高4㎝を測る。立上りは先端部近くは直立気味で，受け部は外へ強く張り，立上り基部との境は1条の沈線を巡らす。底部は丸底で，体部との境は明瞭である。胎土・焼成とも良好で丁寧な造りである。内面紫灰色，外面灰色を呈す。12は口径10.9㎝，受け部径12㎝，立上り高6㎜，器高3.5㎝を測るが，器形は歪んでいる。立上りは肉厚で低く，外面中位において1条の線が入る。受け部上面は水平かやや内傾し，立上り基部との境は浅い沈線が入る。体部から底部への境は明瞭ではなく，底部は平坦面をつくる。細砂粒多く含む。内外面とも灰色を呈する。底部全面にわたってヘラ記号が印されている。13は口径10㎝，受け部径12.7㎝，立上り高1㎝，器高4.2㎝を測る。立上りは強く肉厚である。受け部は外へ強く張り出し上面はわずかに内傾する。立上り基部との境は浅い沈線が入る。体部外面は凹凸がはげしく底部は丸底である。砂粒少量含み，焼成は良好である。内外面灰色を呈す。ヘラ記号はない。

有蓋高杯（第54図14～23）　14～23は有蓋高杯のセットで全て墓道出土である。14は蓋で口径12.3㎝，器高4.2㎝を測る。天井部はヘラケズリの後カキ目調整している。体部との境は浅い凹みをつくる。口縁部は肥厚し，外へ張る。胎土・焼成ともに良好で内外面濃黒灰色を呈す。15は14とセットになる高杯で，口径11.1㎝，受け部径13.4㎝，立上り高7㎜，器高6.8㎝，底径10.3㎝を測る。立上り基部と受け部との境は一条の沈線が入る。杯底部付近はヘラケズリの後カキ目調整を行う。脚柱部は直線的に開き，端部は上下につまみ出している。胎土・焼成とも良好で，濃黒灰色を呈す。16は口径7㎝，器高4.5㎝を測る。口縁部は肥厚し直に立つ。胎土・焼成とも良好で濃黒灰色を呈する。17は16とセットになるもので口径11.4㎝，受け部径13.6㎝，立上り高8㎜，器高7.8㎝，底径11.1㎝を測る。立上り先端部は直立し，受け部上面



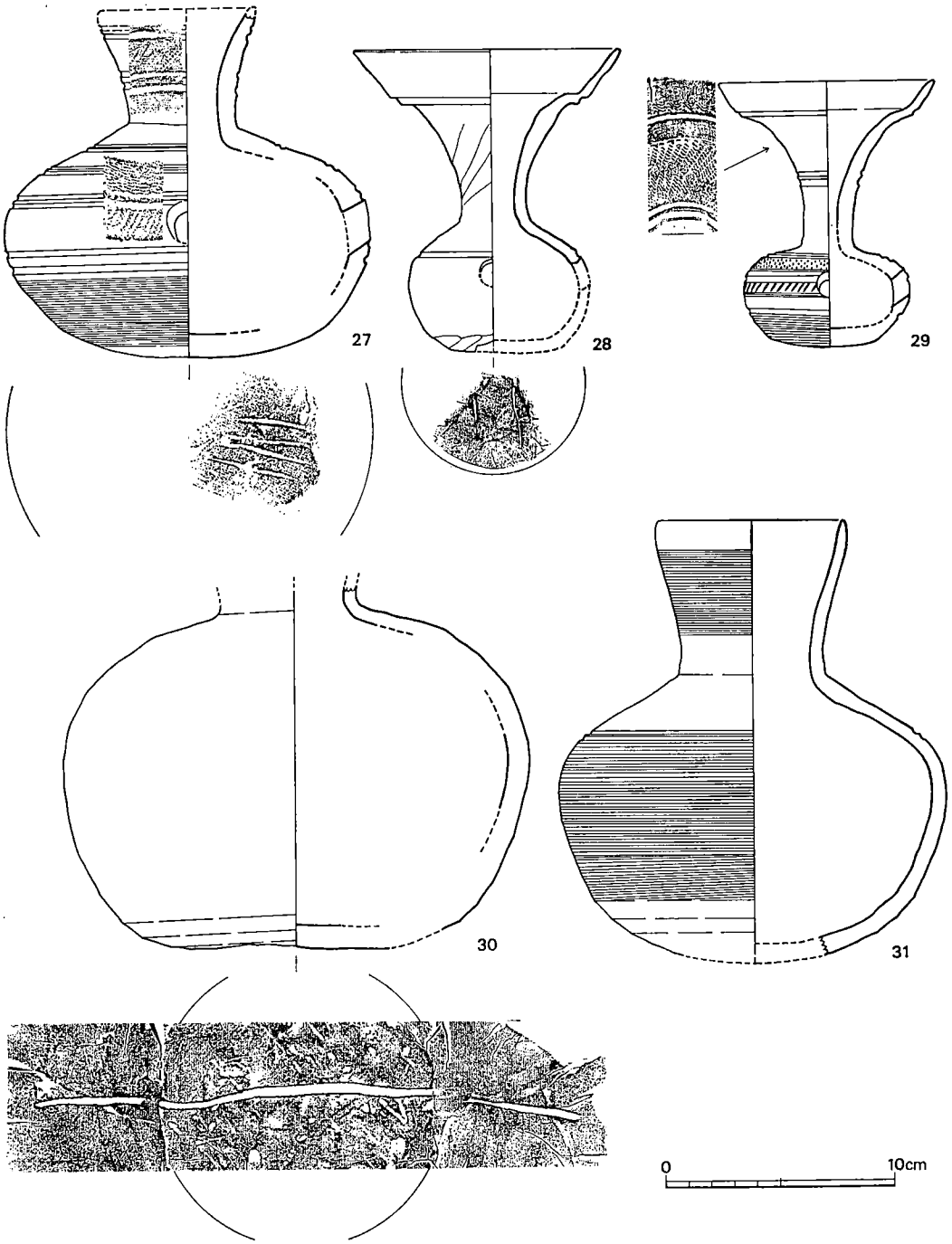
第53図　H・3号墳出土須恵器実測図②（1/3）



第 54 図　H・3 号墳出土須恵器実測図③ (1/3)

はやや内傾する。杯底部にはカキ目が入り，脚裾部は強く開く。端部は上下につまみ出す。胎土・焼成ともに良好で，濃黒灰色を呈す。18は口径12.5㎝，器高 4.4㎝を測る。天井部と体部との境には浅い凹みをつくり，口縁部は肥厚して外へ張る。胎土・焼成ともに良好で，暗灰色を呈する。19は18とセットで，口径11㎝，受け部径13.4㎝，立上り高7㎜，器高7㎝，底径10.6㎝を測る。立上りはやや内傾気味で受け部との境は浅く凹む程度である。杯底部のカキ目はわずかで，脚柱部は中位にて強く屈曲する。胎土・焼成ともに良好で，暗灰色をなす。20は復元口径12.5㎝，器高 4.6㎝を測る。体部と口縁部との境には浅い凹みをつくり，口縁部は肥厚するが先端は尖がる。胎土・焼成ともに良好で内面灰色，外面紫灰色を呈する。21は20とセットで復元口径11.2㎝，受け部径13.6㎝，立上り高8㎜，器高 7.3㎝，底径10.9㎝を測る。立上りの先端は尖りやや外反する。立上り基部と受け部の境は1条の沈線が入り，受け部上面はわずかに内傾する。胎土・焼成とも良好で，内面紫灰色，外面は黒灰色を呈する。脚内面に印されるヘラ記号は現状では2本の線しかみられないが，½は欠損している為，他の高杯と同様3本の線が入るものと思われる。22は口径12.2㎝，器高5㎝を測るが，他の蓋に比し口径・器高ともに一回り大きく，他の蓋とは差異を示している。とくに，つまみは他のものが上面なか凹みとなるのに対し，22は膨らんでボタン状となり，天井部にみられたカキ目はヘラケズリのままである。口縁部は肥厚せずに外方へ開く。胎土は精選されているが焼成は甘く，灰白色を呈する軟質な蓋である。ヘラ記号はない。23は復元口径11.2㎝，復元受け部径13.5㎝，立上り高8㎜，器高 7.2㎝，底径10.7㎝を測る。受け部から底部への移行は滑らかである。胎土・焼成とも良好で，内外面とも濃黒灰色を呈する。蓋22は形態や手法からして23や他の高杯とセットになるとは考えられないが，墓道からは他にセットとなるべき蓋も出土しておらず，別の有蓋高杯の蓋を代用して23高杯の蓋としてセットととなし，供献したのかもしれない。

高杯（第54図24～26）　24～26は無蓋高杯で大小2種がある。いずれも墓道出土。24は大形品で口径12.2㎝，器高14.2㎝，底径10.2㎝を測る。口縁部はやや外傾し杯体部と底部との境には2条の沈線が入る。脚柱部は長く，中位に2条の沈線を入れて上下を2分している。底部裾はあまり開かず，裾端部は上下に張り，内面は浅いくぼみをつける。脚柱部内外面にはしぼり痕が観察される。胎土には砂粒多く含むが，焼成は良好で内外面黄灰色斑黒色を呈する。25は小形の高杯である。復元口径9㎝，器高8.9㎝，底径7.4㎝を測る。口縁部は直立し先端は細くなる。体部と杯底部との境は2条の沈線を入れるが上段のものは浅い。脚柱内外面はしぼり痕がみられ，脚裾は肩がつく。胎土・焼成とも良好で灰黒色を呈する。26は大形品で復元口径11.7㎝，器高13.7㎝，底径10.1㎝を測る。口縁部は肥厚して立ち上り，体部中位に1条の沈線を巡らす。脚柱部は長く中位に2条の沈線を巡らして上下2分し，それぞれに長方形の透孔を3個入れるが，上段のものはいずれも貫通していない。杯底部付近から脚柱下位外面にはカキ目調整を施こしている。砂粒多く含み，焼成は良い。黒灰色を呈する。



第 55 図　H・3 号墳出土須恵器実測図④（1/3）

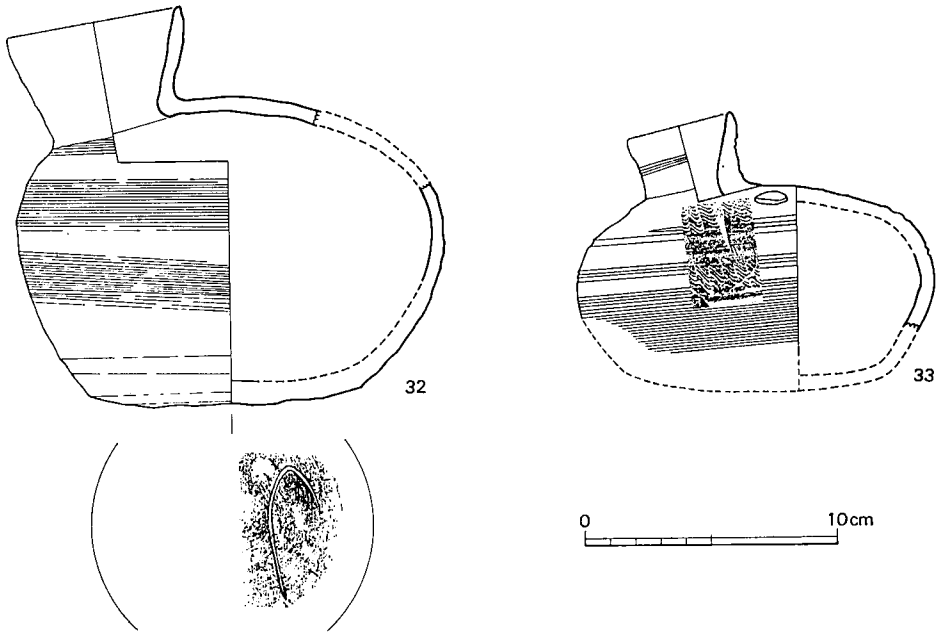
瑞（第55図27～29）　27は長頸壺形の瑞で，口縁部端を欠損するがほぼ完形品である。復元口径 6.8㎝，胴最大径16㎝，復元器高15.3㎝を測る。頸部中位には刺突文を巡らし，その上下端を2条の沈線で囲んでいる。体部は肩が強く張り，中位にて胴最大径をつくる。底部は丸底である。体部には2条1組の沈線を4段にわたって巡らし，それぞれの間を上段は振幅の小さい波状文，中段は斜位の刺突文，下段はより傾きの強い刺突文を入れて装飾している。胴下半はカキ目調整である。孔は胴最大径の部位に穿孔し，径 1.5㎝である。外底面にはヘラ記号がみられる。胎土は精選されているが焼成は軟質な土師質で，暗黄灰色を呈する。28は口径11.7㎝，復元胴最大径8㎝，復元器高13㎝を測る。口縁部は直に外反し，外面頸部との境は2段となる。頸部は胴部側で急にすぼまり，玉ネギ状の胴部へと続く。胴肩部には一条の沈線が入り，底部は手持ヘラケズリである。孔径は 1.2㎝である。胎土・焼成ともに良好で，内面黄灰色，外面黒色を呈す。29は小形品である。復元口径9.7㎝，胴最大径7.3㎝，器高11.7㎝を測る。口縁部と頸部との境は1条の沈線を入れ，口縁部の上下端は振幅の小さい波状文で飾る。頸部中位に2条の沈線を巡らして上下2分し，上段には波状文を入れる。胴部は扁球形で，肩部に2条1組の沈線を巡らし，その間は刺突文で埋めている。胴下半にも1条の沈線を入れ，その間の上半分にも刺突文を入れている。胴下半から底部にかけてはカキ目調整である。孔は径 1.1㎝で，穿孔に際してできた粘土塊が胴球内入に入り鈴の丸の役割りをしている。細砂粒多く含むが焼成は良好である。内外面灰白色を呈す。ヘラ記号は認められない。これら瑞はいずれも墓道出土品である。

壺（第55図30）　30は口縁部を欠損するが短頸壺であろうか。現存口径5.7㎝，胴最大径20.3㎝，現存高16㎝。肩部はなで肩で，胴最大径は中位よりやや上にくる。底部は平底であるが上げ底気味である。体部上半は横ナデ，下半はヘラケズリの上から横ナデ仕上げしているが底部近くではヘラケズリのままである。底部は未調整である。底部全面から体部下半にかけて一直線の太くて長いヘラ記号が印される。胎土・焼成ともに良好で灰黄色を呈す。Ⅳ区墳丘裾の出土と墓道出土のものとが接合。31は長頸壺である。復元口径 8.3㎝，復元胴最大径17.1㎝，復元器高19.3㎝を測る。頸部からゆるく外反した口縁部は端部近くでゆるく内湾する。頸部中位に 4.5㎝の幅でカキ目調整を施こす。体部は肩部に2条の沈線を巡らし，その下位にて最大径をつくる。胴下半から底部にかけては半円球状となる。丸底であろう。肩部沈線から胴下半にかけてはカキ目，下半より底部にかけてはヘラケズリ調整である。胎土は精選されているが焼成は軟質で灰白色を呈する。墓道出土

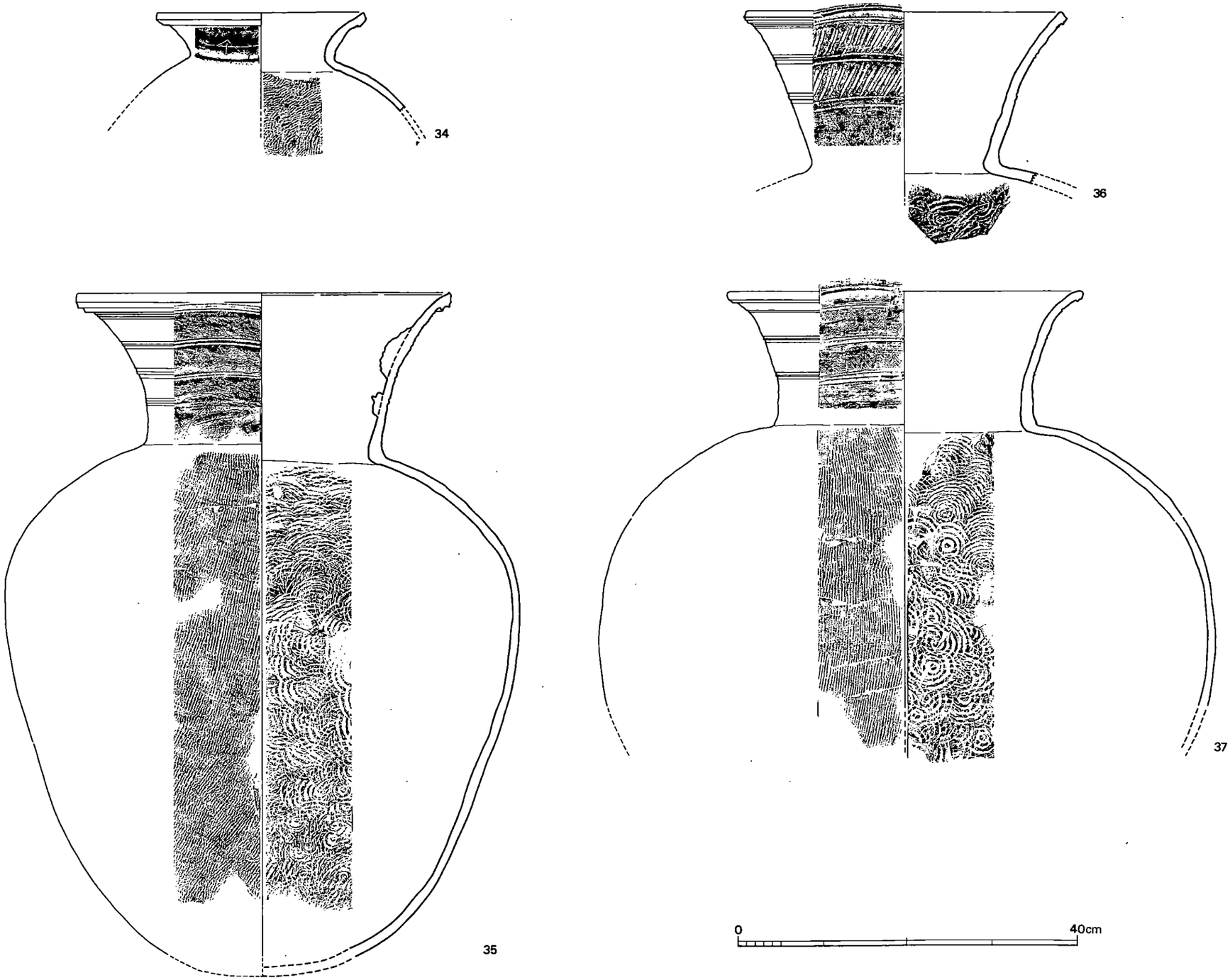
平瓶（第56図32・33）　32は口径7㎝，胴最大径16.9㎝，器高16㎝を測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。肩部から胴部にかけてはカキ目が帯状に入れられ胴下半から外底面はヘラケズリである。砂粒多く含むが焼成は良好で，灰白色を呈す。墓道出土。33は口径 4.4㎝，胴最大径14.1㎝，復元高11.2㎝を測る小形品である。頸部は肉厚で，口縁部端は内湾する。頸部

中央に2条の沈線を巡らす。肩部と胴部との境には波状文が2段にわたって描かれ，その下端は2条1組の沈線で区切っている。胴下半はカキ目調整である。肩部平坦面には円形浮文が1対つけられているが，1個は欠損している。大粒の砂粒含むが焼成は良好で，灰黒色を呈する。胴部外面には他の須恵器片が附着している。焼成次についたものであろう。墓道出土。

甕（第57図）　甕には大小2種類のものがみられる。34は口縁部だけであるが，復元口径24.5㎝をはかる小形品である。やや外湾気味に立ち上がる肉厚の頸部に，端部が角張る口縁部がつく。口縁端下面は強く折り返している。頸部内外面は横ナデ，体部外面は平行条線文タタキの上からカキ目調整を施こし，体部内面は同心円文のタタキである。胎土・焼成ともに良好で，黄灰色を呈する。頸部外面にはヘラ記号が入る。35～37は大形の甕である。35は口径44㎝，胴最大径60.6㎝，現存高78.3㎝で，復元器高は81㎝前後であろう。頸部はゆるく外反するが口縁部近くではより強くなる。口縁部上端はかるくつまみ出し，下面は三角凸帯状のものを2段貼り巡らしている。頸部外面は，カキ目調整の後2条1組の沈線を4段に巡らして3区分し，その間を振幅の大きい波状文で埋めている。肩部は強く張り，胴部との境で最大径をつくる。胴は張らずに凹みながら底部へとつづく。体部外面は斜位の平行条線文タタキ，内面は同心円文のタタキである。頸部内面には自然釉塊が付着している。胎土も精選され焼成もよく，灰白色から黒灰色を呈している。36は口縁部と体部の一部を残すのみで復元口径38㎝測る。口縁部下面は二段に凸帯を巡らし，頸部外面上位には2条一組の沈線を3段にわたって巡らし，その間



第56図　H・3号墳出土須恵器実測図⑤（1/3）



第 57 図　H・3 号墳出土須恵器実測図⑥ (1/6)

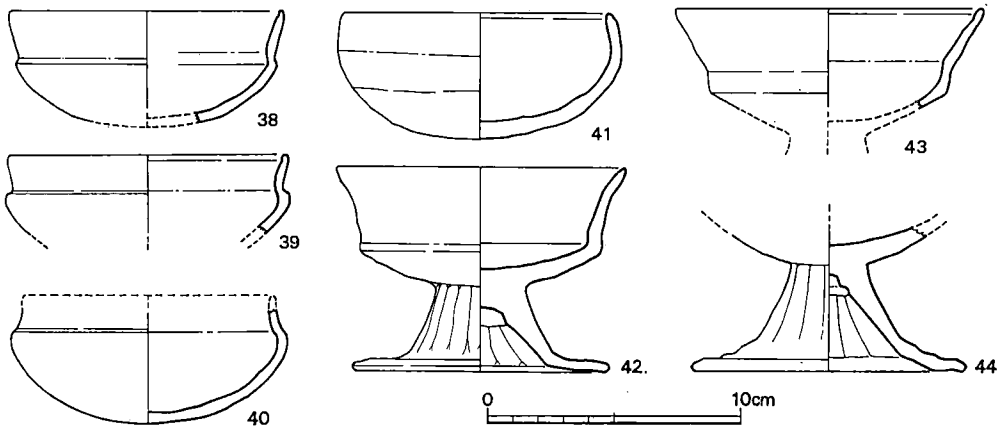
を，ヘラガキ斜行文で埋めている。体部外面は平行条線文のタタキ，内面は同心円文のタタキである。砂粒多く含み，黄灰色を呈する。焼成は良好。37は肩部より上半と下半とを図上復元したもので，復元口径42cm，胴最大径72.6cmを測る。ゆるく外反する頸部は口縁部近くで強く外反する。口縁部端は丸くおさめ，下面の凸帯は小さい。頸部には上段に1条の，中・下段には2条一組の沈線を巡らし，振幅の大きい波状文を入れる。体部外面は縦位の平行条線文のタタキ，内面は同心円文のタタキである。胎土には砂粒多く含み，焼成は良い。灰色を呈す。以上34～37の甕は墓道出土である。

土　師　器（図版44，第58図）

杯身（第58図38～40）　38は復元口径11cm，復元最大径10.5cm，復元器高 4.6cmを測る。立上りは1.8cmと長く外反する。口縁端部は内へつまみ，蓋受け部はわずかで稜が入る。外面はヘラ磨き，内面は横ナデである。胎土・焼成ともに良好で褐色を呈す。39は復元口径11cm，復元最大径11.2cm。立上りは 1.9cmと長く，端部は内へつまむ。体部内外面は横ナデである。胎土・焼成ともに良好で，褐色を呈す。40は口縁部を欠損し，復元口径10cm，復元最大径11cm，復元器高5cmを測る。立上りは内傾がつよい。内外面とも風化著しい。胎土は精選されている。39～40はいずれも墓道出土品である。

椀（第58図41）　口径10.6cm，器高5cmの椀である。口縁部は内傾し，体部との境にて最大径をつくる。体部外面から内底面は横ナデ，外底面は手持ちヘラケズリである。胎土・焼成とも良好で黄褐色を呈す。墓道出土。

高杯（第58図42～44）　42は復元口径11.5cm，復元器高7cm，復元底径10.2cmを測る。口縁部端はさらに強く外反し，杯体部と底部との境は明瞭で強く張り出す。脚柱部は低く，裾部は広く横へ延びる。体部内外面は横ナデ，脚柱外面は縦位のヘラケズリ，内面は回転ヘラケズリ，脚裾部と内外面とは横ナデである。胎土・焼成ともに良好で，黄褐色を呈す。43は復元口径12

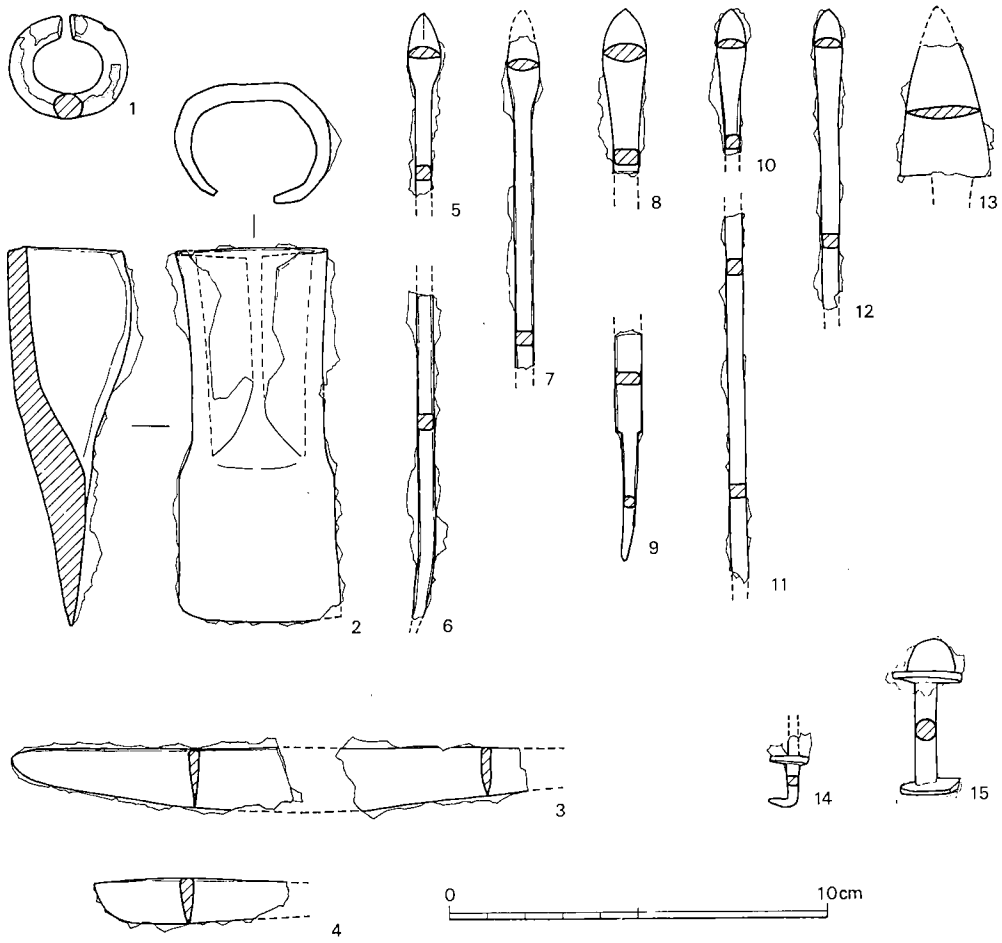


第 58 図　H・3号墳出土土師器実測図（1/3）

cmを測る。杯体部は中位で強く屈折し，口縁端部は内へつまむ。内外面とも横ナデ仕上げである。胎土・焼成とも良好で黄褐色を呈する。44は杯上半部を欠き，復元底径10.9cm，現存高5.8cmを測る。脚裾部は肉厚で凹凸が著しく，端部は下面へつまむ。杯下半は横ナデ，脚柱部はヘラケズリ，脚裾部は横ナデである。胎土・焼成ともに良好で，明褐色を呈する。43の杯上半部と接合するのかもしれない。これら高杯はいずれも墓道出土である。

装　身　具（図版45，第59図）

耳環（第59図1）　腐蝕が著しく，メッキの剝落が多い。中実の銅胎で，金メッキであろう。外形は32×26mmの長円形で，断面は径7mmと太身で正円を呈する。重さは17gを測る。玄室中央部にて出土したが原位置ではない。



第 59 図　H・3号墳出土装身具・鉄器実測図（1/2）

鉄　　器（図版45，第59図）

鉄斧（第59図2）　腐蝕が著しく，剝落したり膨れあがったりしている。全長9.9㎝，刃部幅4.4㎝，袋部径4.1×3.4㎝，重さ180㌘を測る。袋部は折り返して作られ深さ5.5㎝を測る。刃部断面は最高厚 1.3㎝で楔状となる。玄室内埋土出土。

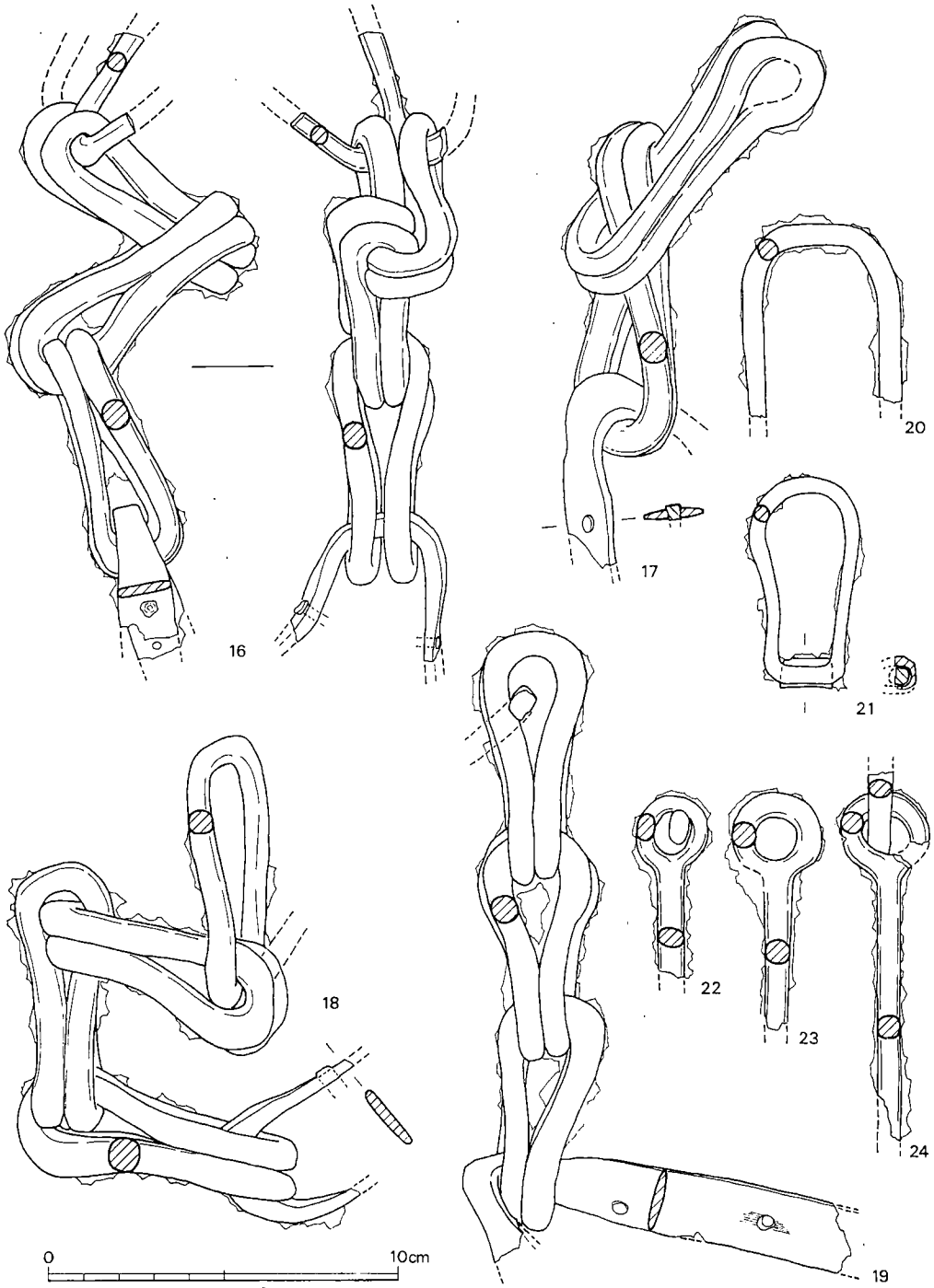
刀子（第59図3・4）　3の両者は図上復元で，関部側は欠損する。切先は尖らず丸味をもち，身幅 1.7㎝，背厚3㎜を測る。同一個体とすれば全長15㎝を超す長身の刀子となる。玄室内埋土出土。4は身の先端部のみで，現存長3.6㎝，身幅1.2㎝，背厚4㎜で，小形の部類に入る。

鉄鏃（第59図5～13）　5～12は柳葉式である。5の鋒は最大幅9㎜，厚さ3㎜で，断面半円形，棒状部断面は方形である。玄室埋土出土。6は5と同一個体と思われる。玄室内床面出土。7の鋒は最大幅8㎜，断面は厚さ3㎜，両丸式である。玄室床面出土。8の鋒は最大幅12㎜と広身で，断面は両丸式で厚さ5㎜，棒状部断面は7×5㎜の長方形である。玄室床面出土。9は茎の部分で両関である。8と同一個体であろうか。玄室床面出土。10の鋒は最大幅8㎜，断面は半円形で厚さ3㎜を測る。玄室内埋土出土。11は棒状部のみで現存長14㎝を測り，断面は4.5×4.5㎜の方形を呈す。玄室内埋土出土。12の鋒は最大幅8㎜，断面は半円形で厚さ3㎜，棒状部断面は方形で5×4㎜。玄室内埋土出土。13は先端部を欠損するが三角形になるものである。下端も茎付近は折損している。現存長3.5㎝，最大幅2.5㎝，断面両丸式で厚さ3㎜を測る。一応鉄鏃として扱う。玄室床面出土。

用途不明鉄器（第59図14・15）　14は先端を欠く。中位に円形の鍔状のものが付き，下端は直角に折れ曲る。鋲の下端か。現存長 1.9㎝。玄室床面直上出土。15は円球形の頭をもつ鉄芯に，2枚の薄い鉄板を通して座金具としたものである。鉄芯は長さ4㎝，断面円形を呈し，上の薄板は円形，下の薄板は方形に近い形状をなす。薄板間長は 2.5㎝を測る。玄室床面出土。

馬　　具（図版45～46，第60図）

鐙（第60図16～24）　16～19は木心鉄板張壺鐙である。いずれも鐙本体は遺存せず，鐙上部の金具と兵庫鎖および鐙靼を受ける鉸具の一部が残存するのみである。最も遺存状況のよい16についてみると，鉸具の大半は欠損するが輪金と棘金の一部は残存し，輪金断面は径6㎜の円形をなす。鉸具に繋がる兵庫鎖は3連であるが銹着して捩れている。一連の兵庫鎖は径8㎜の丸鉄棒を 7.5㎝前後の長さに折り曲げたもので，他の2連もほぼ同大である。3連目の兵庫鎖を受ける鐙は板状金具の上半のみであるが，この鉄板は，現存最大幅 1.6㎝，厚さ3㎜で，鎖との接続部では，幅は7㎜と狭くなり，この部位にて鉄板はU字状に折り曲げられている。U字状に曲げられた鉄板頂部から両側約 3.5㎝ほどの下の所に鋲孔があり，鋲頭が銹着している。前室右側壁側出土。17の兵庫鎖は2連しか残存していないが，径9㎜，全長9㎝を測り16の兵庫鎖より大きい。鐙板には鋲頭が銹着しているが，裏面には木質が遺存し，木目は長軸方向で



第 60 図　H・3 号墳出土馬具実測図 (1/2)

ある。前室右側壁寄り出土。18は鉸具の棘金を欠損するが輪金は完形である。それによると鉸具の輪金は全長8㎝，環状部最大幅4.4㎝，基部最大幅4.1㎝を測り，径は8×6㎜とやや楕円形に近い。棘金は基部を残すのみである。兵庫鎖の平均長は，約7.5㎝前後，断面径9㎜で，16のものに近い。前室左側壁寄り出土。19の鉸具は兵庫鎖に銹着した輪金の一部が残るのみである。兵庫鎖は，ほぼ連なった状態で出土し、その全長は17.2㎝を測る。平均は7㎝前後で，断面径7㎜である。

鐙板は環状頂部より約3.5㎝下にて一孔，さらに4.5㎝下にも1孔鋲孔があり，ともに鋲頭が銹着している。下位の鋲孔裏面には木質が遺存している。鐙板の最大幅2㎝，厚さ3㎜で，現存長1㎝を測る。前室左側壁側寄り出土。これら4個の鐙は2個1対と考えると2頭分という事ができる。

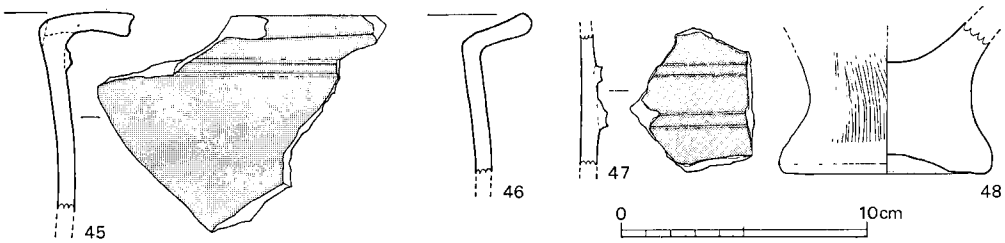
鉸具（第60図20・21）　20は輪金のみであるが基部側を欠損する。現存長5.5㎝，最大幅4.5㎝断面円形で6㎜を測る。前室左側壁側の18の鐙と伴出。21は，全長5.9㎝，最大幅3.2㎝，断面は円形5㎜を測る。頭部は環状になり，中位にて急に狭くなる。基部は，直に折れ曲り，この基部輪金部分を径1.4㎝，厚さ5㎜，断面半円形を呈する薄板が，巻き込んでいる。棘金にしては形状を異にすると思われるが，一応鉸具とし取り扱った。前室右側壁側17の鐙と伴出。

引手金具（第60図22～24）　22～24は銜または引手金具の環状部で，22・24は環状部に他の環状部片が銹着している。いずれも玄室内左側壁前面の埋土中より出土したものである。

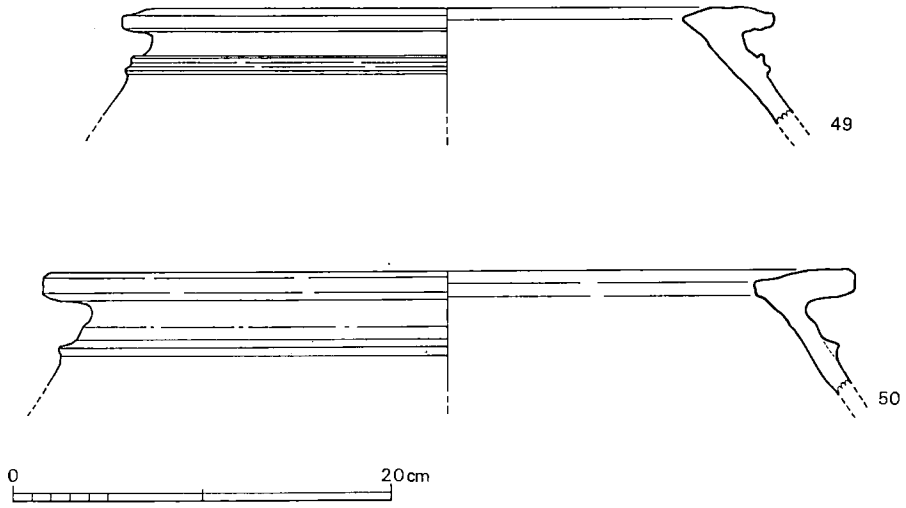
その他の出土遺物

弥生式土器（第61図45～48，第62図49・50）

45は甕口縁部で，頸部は内湾しながら立上り，口縁部は「逆L字」状に強く屈折して上面平坦面をつくる。端部は肥厚し，口唇部はやや凹む。口縁部直上の頸部には1条の「M字」状凸帯を巡らす。胎土はよく精選されており焼成もよい。丹塗り磨研土器である。墓道埋土出土。46は「逆L字」状の口縁部を有する甕で，口縁部上面は内傾し，端部は丸くおさめている。口縁部内外面はナデ，体部外面はハケ目調整である。胎土には砂粒多く含み，焼成は良い。褐色を呈す。墓道埋土出土。47は甕胴部片で，丹塗り磨研土器である。2段にわたって「M字」状



第61図　H・3号墳出土弥生式土器実測図①（1/3）



第 62 図　H・3号墳出土弥生式土器実測図②（1/4）

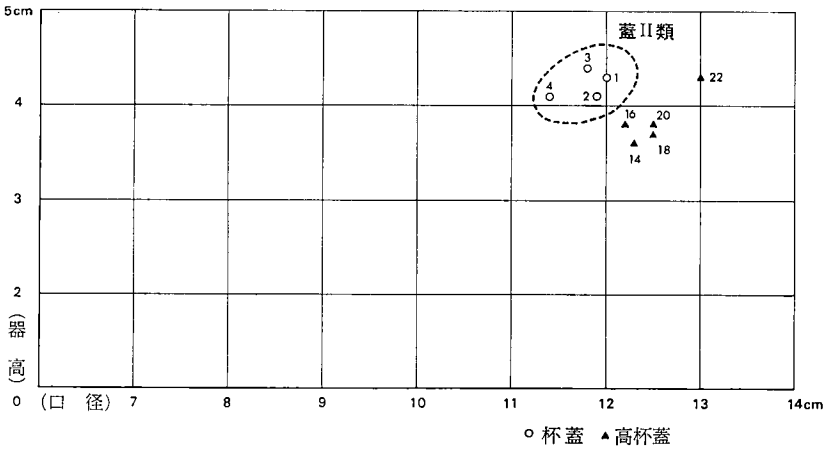
凸帯を巡らす。胎土はよく精選されているが45のものとは異なる。焼成も堅緻である。墓道出土。48は甕底部片で底径8.5㎝を測る。胴下半は底部付近にて一たんすぼまり，上げ底で分厚い底部へと続く。外面は荒いハケ目調整である。砂粒多く含み，暗褐色を呈す。焼成もよい。墳丘表土下出土。49・50は大形甕の口縁部付近である。49は復元口径約35㎝を測る。口縁部は分厚く，「逆L字」状をなし，強く内傾している。口縁部直下には「M字」状の小振りな凸帯を巡らす。胎土には砂粒ほとんど含まず，焼成も良好である。明褐色を呈する。Ⅲ区墳丘内出土。50は復元口径約43㎝を測る。口縁部は肉厚で，「逆L字」状となり，強く内傾する。口唇部は，わずかに凹み，口縁部直下に三角凸帯を一条巡らす。砂粒多く含むが焼成はよい。黄褐色を呈する。Ⅳ区墳丘内出土。これら49・50の大形甕は，甕棺への転用が可能なもので，近辺に甕棺墓群が所在しているのかも知れない。以上の弥生式土器のうち，48が中期前半，その他のものは中期後半頃のものであろう。

小　結

以上，H・3号墳の墳丘・石室・遺物の説明を個別に行ったが，古墳の年代や特色を述べて小結とする。

まず，本墳の年代についてであるが，時期の決め手となる須恵器杯類は，墓道から他の器種とまとまって出土しているので参考になる。

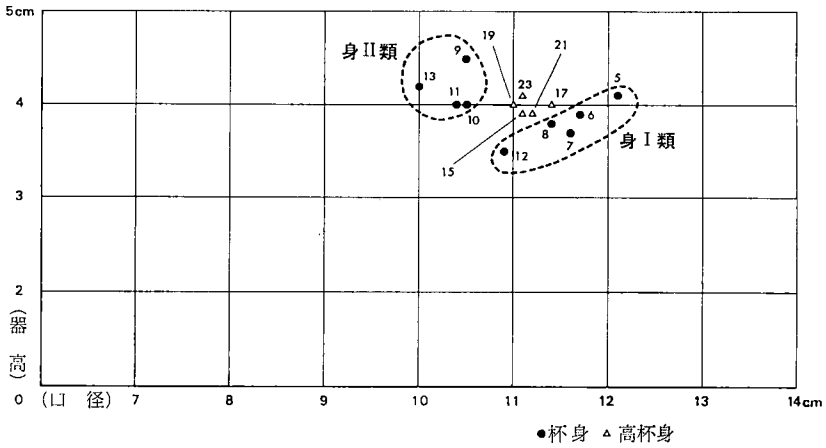
杯蓋は，1～4のわずか4個しか出土しておらず，全てⅡ類に含まれる（第63図）。いずれも口径11.4～12㎝，器高4.1～4.4㎝の間に含まれ，細分はできない。口径に比し器高が高く，



第 63 図　H・3号墳出土杯蓋法量分布図

天井部のヘラケズリは，⅓の高さまでで範囲も狭く，天井部外面は丸味を帯びる。口縁部端は直立するが，わずかに内傾する傾向がある。4の蓋は，これらの中ではやや小形で天井部は平坦面をつくり，この類から分離されるのかもしれない。これら杯蓋類は，以下に述べる杯身とのセットの関係上Ⅱ類とする。

杯身は，2類に区分できる（第64図）。Ⅰ類は，口径11.4～12㎝，器高3.7～4.1㎝に含まれるもので，受け部最大径は14㎝近くを測る大形品である。口径のわりに器高が低く，扁平である。底部のヘラ削りは器高中位までなされ，範囲も狭い。底部は平坦面をつくり，ここに大振



第 64 図　H・3号墳出土杯身法量分布図

りのヘラ記号が印されるものが多い。5～8・12がこの類に含まれる。

Ⅱ類は，口径10～10.8cm，器高4～4.5cmに含まれる。Ⅰ類に比し口径は一段と小形化するが，器高は変らないか，或いは高くなる。底部のヘラ削りは範囲が狭くなり，底部は丸くなる。造りはⅠ類に比し粗雑で，ヘラ記号はずっと小振りとなり，内底面に入れるものが多くなる。このⅡ類には，9～11・13が含まれ，9は蓋3と，21は蓋1とセット関係である。

故に，身Ⅱ類は蓋Ⅱ類とセットとなるものと思われるが，身Ⅰ類に対応するとみられる蓋類は本墳では出土していない。身Ⅰ・Ⅱ類の分離は明らかに明白であり，身Ⅰ類に対応するであろう未出土の蓋を蓋Ⅰ類として，蓋Ⅱ類と区別しておく。

高杯には，有蓋のものと無蓋のものとがあり，とくに，有蓋のものは蓋身の組合せに違和感を感じさせるものもあるが4セット出土している。今，法量についてみると，蓋は22だけを除いて他は全てほぼ同じで，22は杯蓋Ⅱ類よりも1cm以上も大きく，その他のものは22と杯蓋Ⅱ類の中間の法量を測る。これは高杯の杯についても言える事で，高杯の杯法量は杯身Ⅰ類とⅡ類の中間に位置する。

杯の蓋と身をそれぞれⅠ類とⅡ類に分類したが，有蓋高杯まで含めると3区分できそうである。

とまれ，本墳出土須恵器杯類はⅠ類とⅡ類とに分類され，小田富士雄氏編年基準によるⅣ期に比定されるものであろう。6世紀後半以降の杯類の小形化を考え併せると，Ⅰ類はⅣA期に，Ⅱ類はⅣB期に小区分できるかもしれない。いずれにせよ，H—3号墳は築造年代を6世紀末に求められるが，その後の追葬はあまりなされなかったものと思われる。

石室構造についてみると，本墳は胴張りプランを呈する複室構造をなしている。胴張り石室を有する古墳は，当古墳群内でもG・1号墳やS・1号墳などに見られ，今後の調査とともにその例は追加されるであろうが含むべき問題点は多い。石室構造で特に目をひくのが4個の仕切石である。玄門部に2個，前門部に1個，羨道部に1個の計4個のものが設置されている。これらは当初から全て設置されたものではなく，玄門部中央のものと前門部のものが石室構築次のもので，他の2個はその後追加工事されたことが確認されている。筆者は4個の仕切石を有する古墳例を知らないが，単に，追葬に伴なう追加工事というだけでは片付けられない意味合いを感じるものである。墳丘内には，羨道部端から石室外廻りを一周する内護列石ともいえる石列が延びていることが確認された。この列石を墳丘内に全周させることにより，盛土工事の一工程を期する画期があったものと思われる。

出土遺物のうち，須恵器杯類については先に触れたが，玄室内は盗掘されていたものの前室では馬具の鐙が2セット出土している。鐙は兵庫鎖付で，当地方における出土例を更に1つ増したことになる。（新原正典）

5 H・C－1

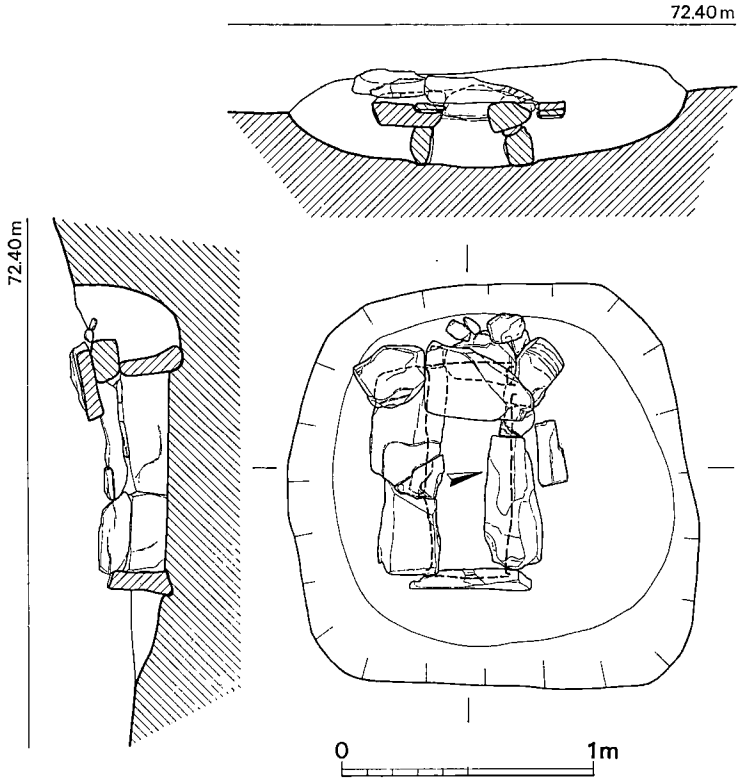
本棺は標高72*m*，尾根線のやや東に傾斜する1号墳から北西約20*m*のところに位置する。

棺の掘り方は1辺約60*cm*の正方形の平面プランで，深さは地山面より15～37*cm*に浅く穿ってある。掘り方の底面はすでに岩盤が露出している。

主体部（図版47，第65図）

棺の主軸はN77°Wにおく。蓋石は西端に1枚残っているだけで，他は欠損している。棺内の規模は内法で主軸長87*cm*，西小口幅31*cm*，東小口幅28*cm*で棺内高20*cm*を測る。極めて小型なものである。棺の構築は両小口および両側壁の最下部石をよこ長に立て，上に1段平積にし，蓋石が置かれる。石材は緑色片岩の割石である。棺床面は水平に整地され敷石はない。また棺内外の赤色顔料の痕跡も認められない。頭位は，西小口幅が東に比して広いことや，地形的にやや西の標高が高いことなどから考えて西と推察される。

副葬品は何ら認められなかった。（平嶋文博）

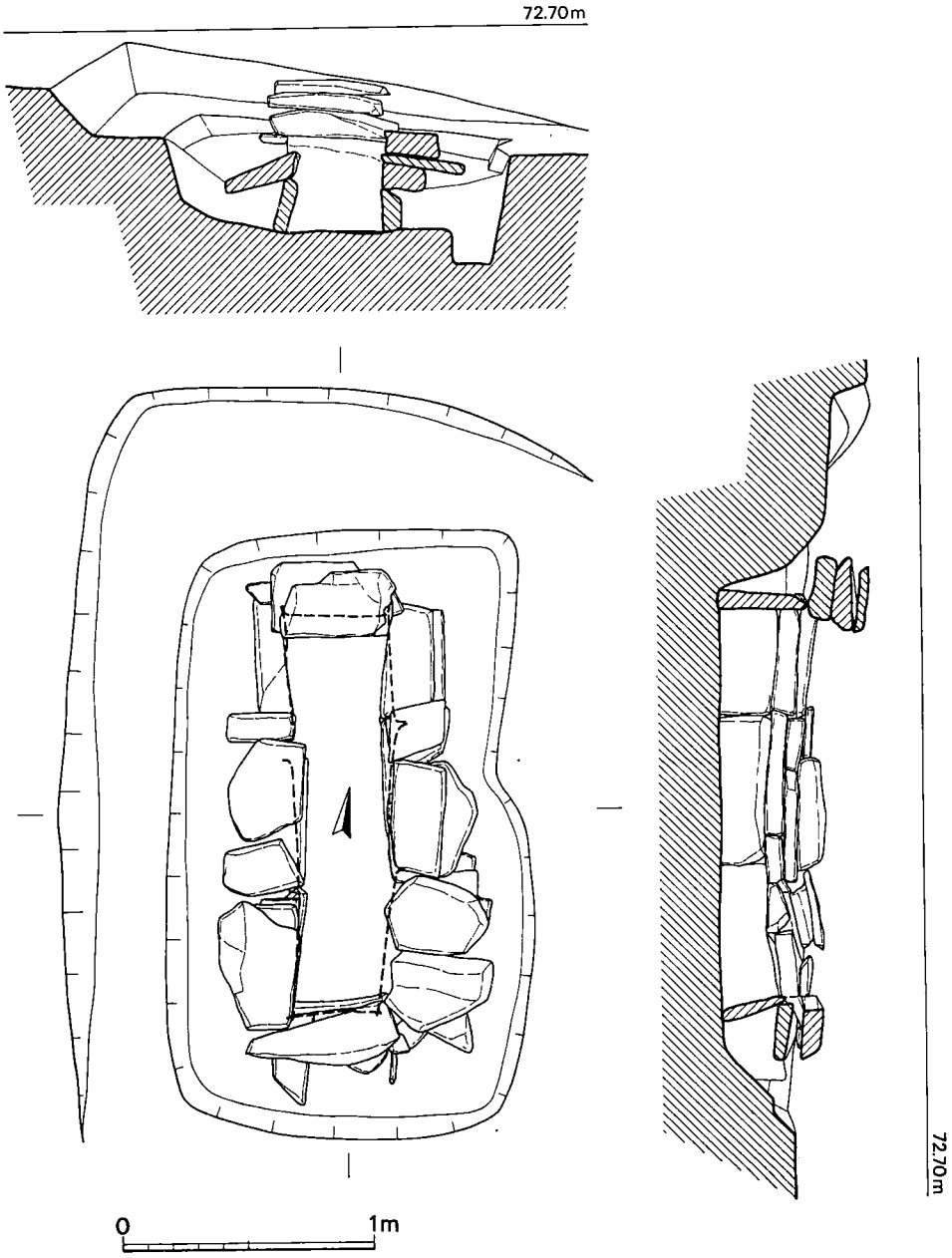


第65図　H・C－1実測図（1/30）

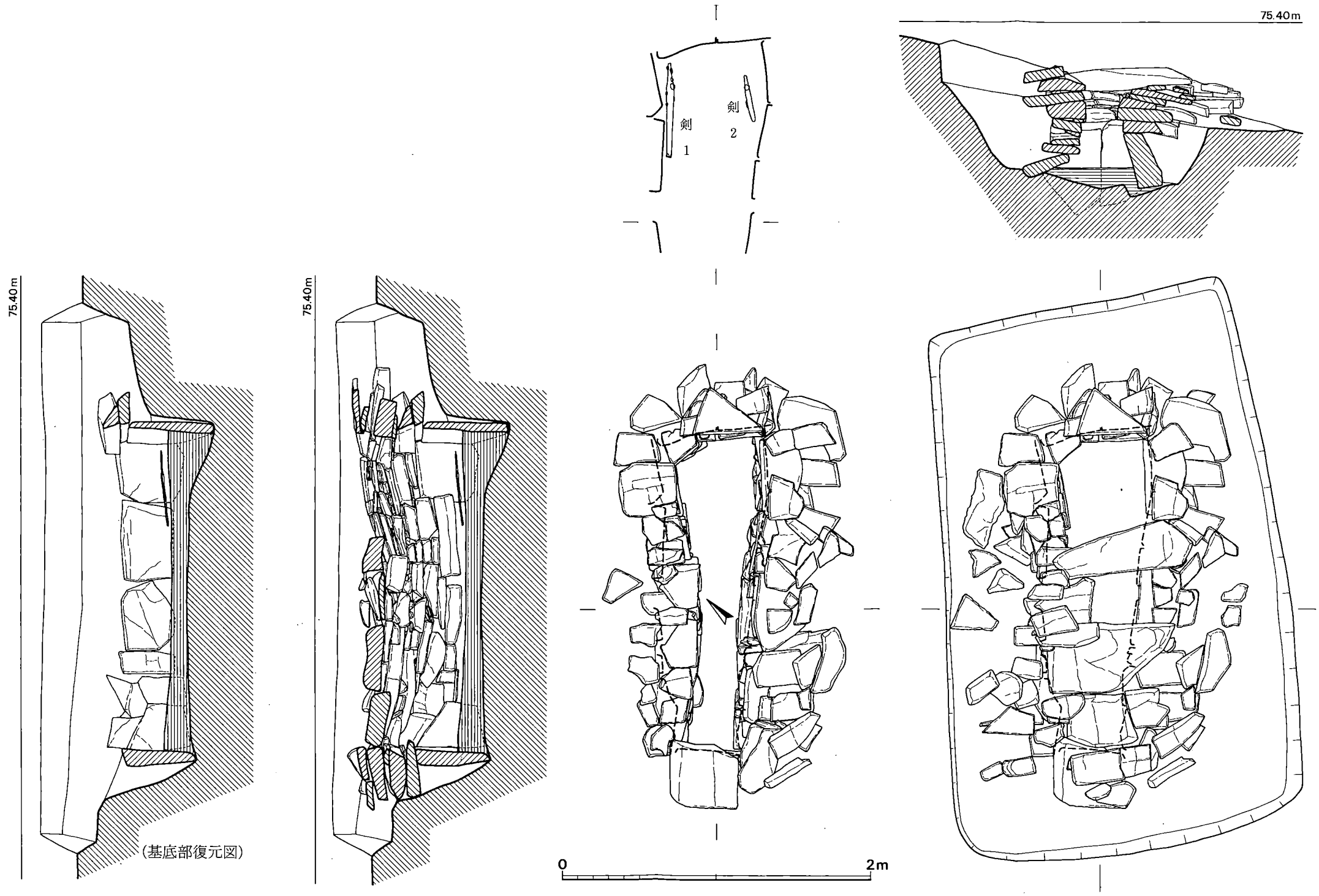
6 H・C－2

本棺は，C－1の北側約4 m，標高 72.00mに位置する。

本棺もG地区C－2と同じく斜面上方を削り平坦な面をつくって地山整形し，その面より棺



第 66 図　H・C－2実測図（1/30）



第 67 図　H・C－3 実測図 (1/30)

の掘り方を穿っている。掘り方は長軸で2.42m，短軸で1.39mであり長方形を呈する。地山整形の範囲は長軸3.0m，短軸1.9mである。地山整形面よりの掘り方の深さは 0.28～0.4mで穿っている。

主 体 部（図版49，第66図）

棺の主軸はN10°Eにおく。蓋石は残っていない。棺の内法は主軸長1.56m，北小口幅0.41m，南小口幅0.33m，棺の深さは現存0.59mを測る。棺の構築はH・C—1と同様に基底部石をよこ長に立て，その上段に2～3段小口積している。赤色顔料塗布の形跡は認められない。石材は緑色片岩の割石である。頭位は北小口幅が南小口幅に比して広いことを考え，北であろうと推定される。

出土遺物はない。（平嶋文博）

7 H・C—3

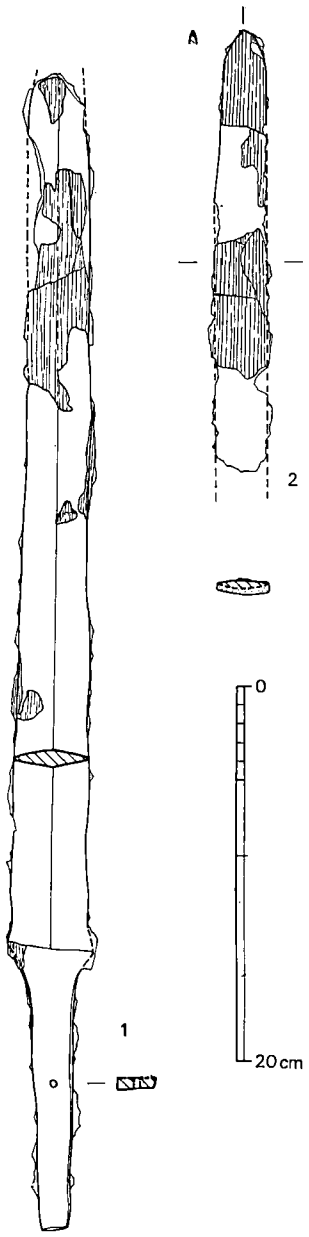
本棺はH・2号墳の西方に位置し，標高75.0mである。

棺の掘り方は長方形を呈し，長軸で3.56m，短軸2.25mであり，掘り方の深さ0.37～0.85mである。

主 体 部（図版48～49，第67図）

棺の主軸は，N46°Eにおき，蓋石は北西端より5枚存し，蓋石の接ぎ目に小石を置いている。棺の内法は主軸長2.07m，東小口幅0.72m，西小口幅0.43m，棺内高は0.62mである。棺の構築は最下部石を東小口に2枚，西小口に1枚をたて長に立て，両側壁はよこ長に立てている。その上に大・小まちまちの割石を5～6段小口積にしている。本棺はこの積み石の重みによって，最下部石左・右共に内傾していた。赤色顔料塗布の形跡は認められない。床面には粘土を敷いて整地している。

出土遺物は東小口よりの左・右側壁寄りに各々1本の剣が鋒を西に向けて出土している。この遺物の出土状態や東



第68図 H・C—3副葬鉄剣実測図（1/4）

・西の小口幅の差によって東が頭位であろうと推定できる。

副 葬 品（図版49—2，第68図）

遺物は棺内より出土した剣2本であり，1本は茎を欠損しており，鋒より23.0cmほど残っている。

鉄剣（第68図1・2）　1は棺内北側壁よりに副葬され，鋒を欠損しており，鋒を足位方向に向けている。残存長61.3cm。茎は長さ14.7cm，幅1.62～2.74cm，厚さ0.62～0.74cmで，目釘孔が1孔認められる。刃渡残存長46.6cm，刃部の身幅3.53～4.08cm，厚さ0.75～0.93cmを測る。明瞭な鎬が通る。茎や刃部に把や鞘の木質と思われるものが銹着している。

2は南側壁により茎を欠損した状態で出土している。残存長23.4cm，最大幅2.91cm，厚さ0.4cmであった。（平嶋文博）

8 H・C—4

H地区尾根の先端部フラット面から，更に尾根が一段高くなる部分の根元の東斜面寄りに位置する。即ち，C—3の北東 3.5mに隣接し，H・2号墳の西側周溝を切って営まれる。

このH地区尾根上には，石棺・土壙墓が6基検出されたが，群としては，すべてが同一とは考えられない。つまり，C—3，C—4の2基が北端に離れており，以南の平坦面の一群とは別の小支群と考えられる。

C—4には，周溝・墳丘等は認められない。H・2号墳周溝内埋土の最上層から切り込んで，墓壙が掘られている。つまり，周溝が殆んど埋没した後に造営されているのである（図版56—1）。

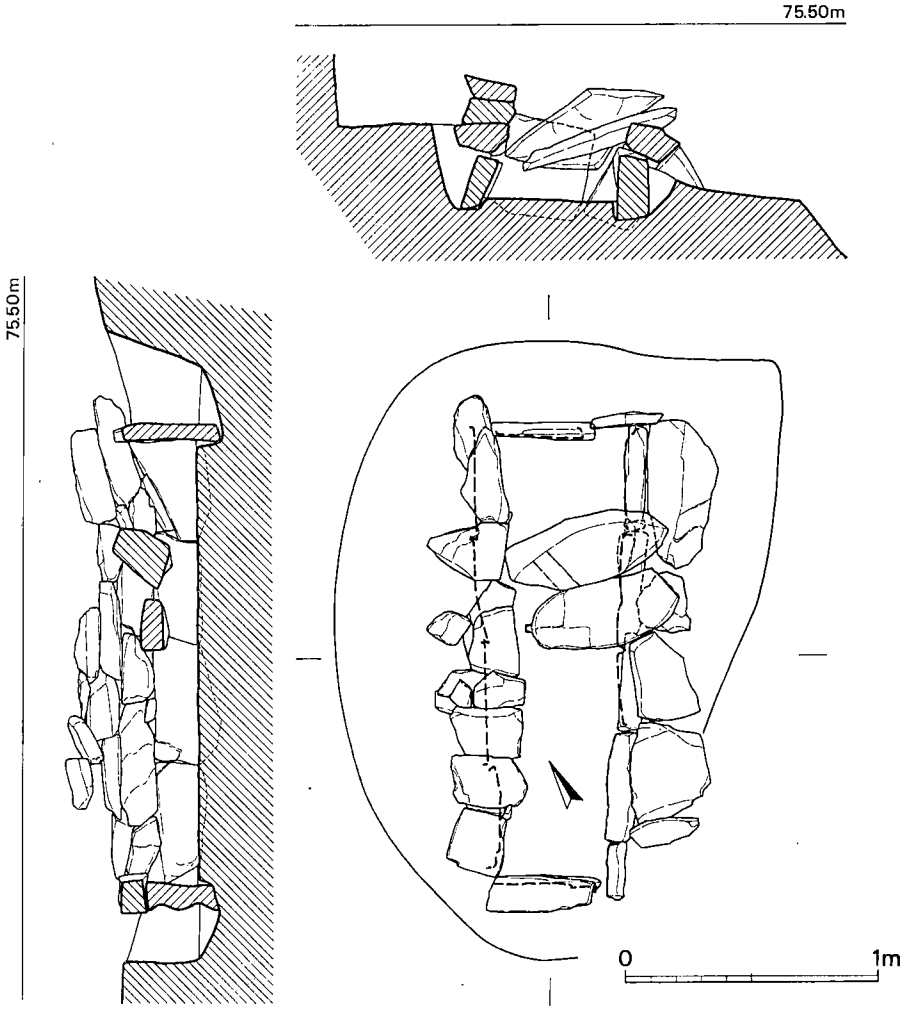
主 体 部（図版50，第69図，）

N30°30′Eに主軸をとる箱式石棺墓様の竪穴式石室である。245×180cmの楕円形墓壙を掘り，小口部分と側壁部分を埋め込むための溝を周縁に掘る。板状片岩を，北小口部は大小2枚，南小口部は1枚，いずれも縦長に立てる。両側壁は，板石を横長となるように立てる。それより上には，やや厚めの板石を小口積みとしており，西側で最大3段積む。蓋石は，北半中央寄りに2枚残存していたが，いずれも西端が棺内に落ち込んでいた。

床面の内法寸法は，以下の如くである。

長さ｛東端側…… 181cm
　　中央・西端側…… 175cm

幅｛北端……60cm
　　中央……52cm
　　南端……44cm



第 69 図　H・C－4 実測図（1/30）

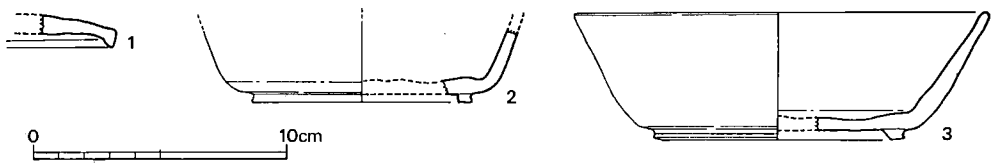
深さは，西側壁の積石最上端からみて，50*cm*弱程度であろうと推定される。西側壁最下段の立石部分は，構造上の欠陥からか，すべて内側へ倒れ込むように内傾してしまっている。

床面幅が北側で広いことから，頭位は北と考えられる。石材はすべて，この地の岩盤である片岩のうちの良質のものを使用する。棺内のいずれにも赤色顔料の使用は認められない。

遺骨・棺内の副葬品等，皆無である。なお，この蓋石上面及びその付近より出土した須恵器片を図示しおく。

蓋石上出土須恵器（図版57－2，第70図）

杯蓋（1）　短かい鳥嘴状口縁となる小片である。口縁外面上端はかなりシャープで，胎土



第 70 図　H・C－4付近出土須恵器実測図 (1/3)

に微砂粒をいくらか含む。焼成堅緻で，内面青灰色，外面は黒色を呈する。

杯身（2・3）　2は，低く小さい高台を付けるもので，体部はかなり立ち上がる。復元底径 8.6㎝を測り，体部内外面と底部～高台部分の外面は回転ナデ，底部内面はナデツケる。胎土精良で，焼成堅緻，淡灰色を呈する。3は，口径16.2㎝，器高5.0㎝，高台径9.8㎝を測る。低いが，外方へ踏ん張った高台を付け，体部はかなり外傾して開く。口縁～体部内外面から高台内縁までは回転ナデ，底部外面はヘラ切離し後にナデており，内面にはナデツケが施される。胎土に粗石英粒をわずかに含み，焼成良好で，灰色をなす。

以上の3点は，8C中頃から後葉に近い時期のものである。蓋石上面出土といっても，破片であり，明らかな副葬品・供献土器とは見做し難い。更に，本主体部の検出状況を見てもわかるとおり，上半が削平されており，蓋石もかなり除去されている。このような状況の中で，これらの須恵器を，この主体部に伴なうものと確定することには，かなり無理がある。

以上の状況の中で，この主体部の年代を考えてみたい。遺構的には，5C前半代とされる本遺跡内検出の石棺様竪穴式石室の諸例と，構造的には類似する。そういう視点から，H・2号墳周溝を切る事を確認したわけであるが，従来の見解からしてこのような構造を有するC－4が，7C中頃初築のH・2号墳周溝を切るということは，各人に自己矛盾を感じさせ，拙稚なる頭中に混乱をきたしたわけである。この両者の切り合い関係は重要な問題である。当時，筆者を含めて3名の当県文化課職員と，調査補助員2名が立ち会って確認したものである，という経過を特記しておく。

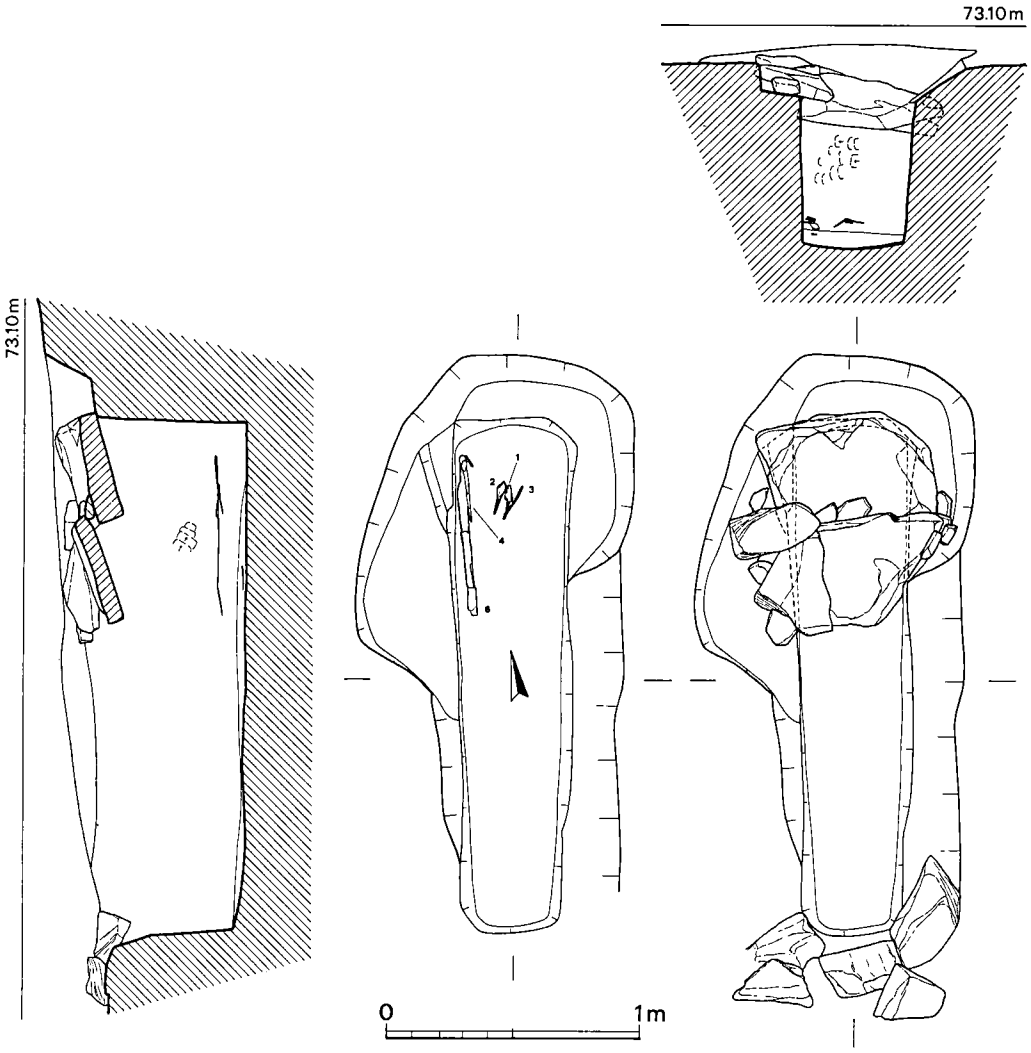
ということで，改めて当主体の年代を考えると，上記の須恵器が浮上してくる。7C中頃以降の年代が与えられるとすれば，8C代の須恵器が，あくまでも状況証拠としてではあるが，当主体の年代を示す可能性も出てくる。ここでは，とりあえず，可能性として，H・C－4の年代は，8C中頃～後半にかかる時期と考えておきたい。（中間研志）

9　H・D—1

本棺は岩盤刳貫きの石蓋土壙墓である。本棺は1号墳より北西に約27m，2号墳より南西へ35mの両墳間の尾根頂部，標高73.0mに位置する。

主体部（図版51，第71図）

棺の掘り方は素掘りで長軸2.35m，短軸1.06mを測る細長い形をしている。棺の蓋石は北端より2枚存し，蓋石の接ぎ目には小石を置く。他は欠損している。棺各部の法量は，棺上端部で主軸長2.09m，北小口幅0.49m，南小口幅0.4m，中央部幅0.45mを測り，内法は主軸長2.0

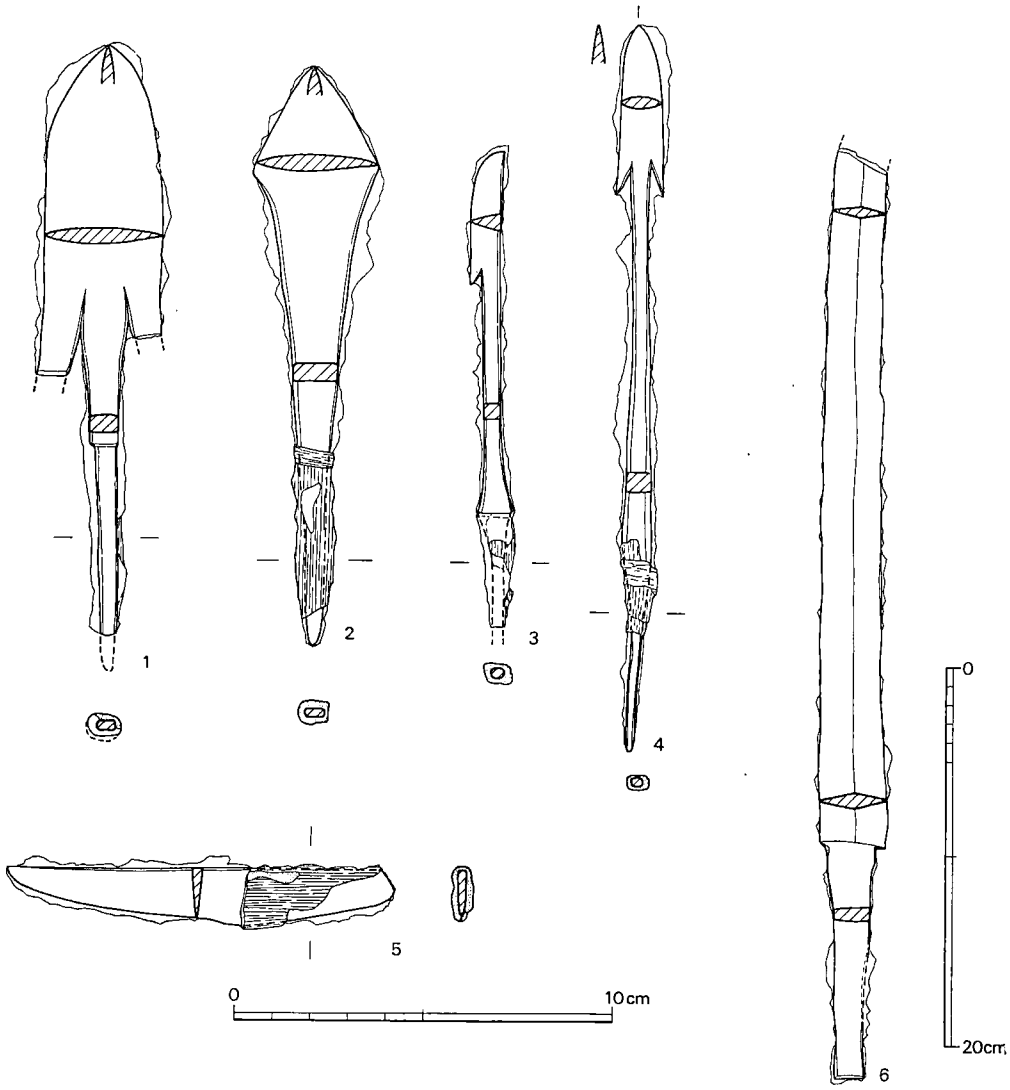


第71図　H・D—1実測図（1/30）

m，北小口幅0.45m，南小口幅0.29m，中央部幅 0.4mであり，棺内高0.48mを測る。また，棺内北小口壁と西側壁面に工具痕があり，幅5cmの先端やや丸味を帯びる工具と推察される。床面には粘土が敷かれ整地されていた。

副葬品は北側の西側壁寄りに鉄剣1本が鋒を南に向けて副葬され，その下より鉄鏃1点が出土し，剣のやや東側，棺の中央部に鉄鏃3点が出土している。また床面の粘土を除去した岩盤上から刀子が1点出土している。

頭位は剣の鋒が南を向いていることから北であろう。



第72図　H・D—1副葬鉄器実測図（1～5は½，6は¼）

副葬品（図版52—2，第72図）

鉄鏃（第72図1～4）1は箆被平造腸抉柳葉式鏃で，茎の末端を欠損する。残存高15.4㎝，身長10.6㎝，幅3.0㎝，厚さ4㎜，重さ42.1㌘を測る。2は変形圭頭斧箭式鏃である。全長15.3㎝，茎長5.3㎝，身幅3.4㎝，厚さ4㎜，重さ45.0㌘を測る。茎に矢柄の木質や沓巻と思われるものが銹着している。3は棘箆被腸抉片刃箭式鏃であり，茎末端を欠損している。残存長12.6㎝，身長9.6㎝，背幅4㎜，重さ14.1㌘を測り，茎に木質が銹着している。4は箆被両丸造腸抉柳葉式鏃である。茎に矢柄の沓巻が銹着している。全長19.1㎝，身刃部幅1.2㎝，厚さ4㎜，身長13.7㎝，重さ23.8㌘を測る。

鉄刀子（第72図5）　5は鹿角装の刀子で，茎に鹿角装の残片が認められる。全長10.3㎝，茎長4.0㎝，背部幅2㎜を測る。

鉄剣（第72図6）　6は，わずかに湾曲する鉄剣である。身中位より先端部を欠損しており，残存長49.5㎝，茎長12.5㎝，幅1.6～2.5㎝，厚さ7.4㎜であり，身幅2.7～3.65㎝，厚さ7.4㎜を測る。（平嶋文博）

10　H・D—2

H地区の尾根線上の先端に位置する。最も眺望の素晴しい場所である。C—1，C—2，D—1等とともに小支群を形成している。しかし，その中でも，当D—2は最も良い場所を占め，規模・副葬品などの厚葬な諸点からみても，一人卓越した在り方を示している。そして，本古墳群全体からみても圧倒的に数少ない，岩盤くり抜きの石蓋土壙墓として，D—1とともに珍らしい例となっている。また，尾根線上の占地という意味でも本遺跡内では稀少な存在である。

小墳丘等の存在を想定したが，現状では確認できなかった。また，周溝・或いは尾根切断状の溝等を推定して精査したが，これも明確なものは検出できなかった。

主体部（図版53，第73図）

主軸をN74°Eにとる，岩盤くり抜きの石蓋土壙墓である。この周辺は尾根線上のみに，薄く25～30㎝程粘質土がかぶっており，本主体部墓壙も，その上面から掘り込んでいる。308×186㎝の隅丸長方形プランの大きな墓壙を，70㎝（北側）～43㎝（南側）掘り下げ，更に，中心よりやや北寄りに岩盤くりぬきの棺身部分を設ける。棺身床面の長さは177㎝，幅は東端（頭位側）で45㎝，中央で50㎝，西端で35㎝となり，全体として頭位側の東端が幅広くなっている。深さは西端で79㎝，中央で75㎝，東端で69㎝と深く，床面自体は西へ傾斜している。

棺内床面東端には，小板石が枕石として置かれている。棺内壁は全体に丁寧に削っており，

あまり工具痕を残さない。ただ，北側壁上端にみられるものは，工具幅4㎝のもので細かく削り込んでいる。また，中位付近では，工具幅15㎝以上の幅広いカーブの僅かな工具で最終的に調整加工している。それらの痕跡から，前者は手斧的な工具，後者はU字形鋤先の類を使用したものであろう。

蓋石は，大きな板石を5枚並置して，東端の頭位部にやや大きめの変形石材を使用する。蓋石間の粘土目貼りは全くみられず，合わせ目と周縁付近に小板石を置いている。石蓋裏面全面と，棺内全壁・床面は厚く赤色顔料の塗布がみられる。棺内副葬鉄器類も真赤にしみつく程である。

遺物出土状況（図版54，第73図）

棺内と棺外とに別々に鉄製工具・武器が副葬されていた。各々の器種別数量は以下に示す如くである。

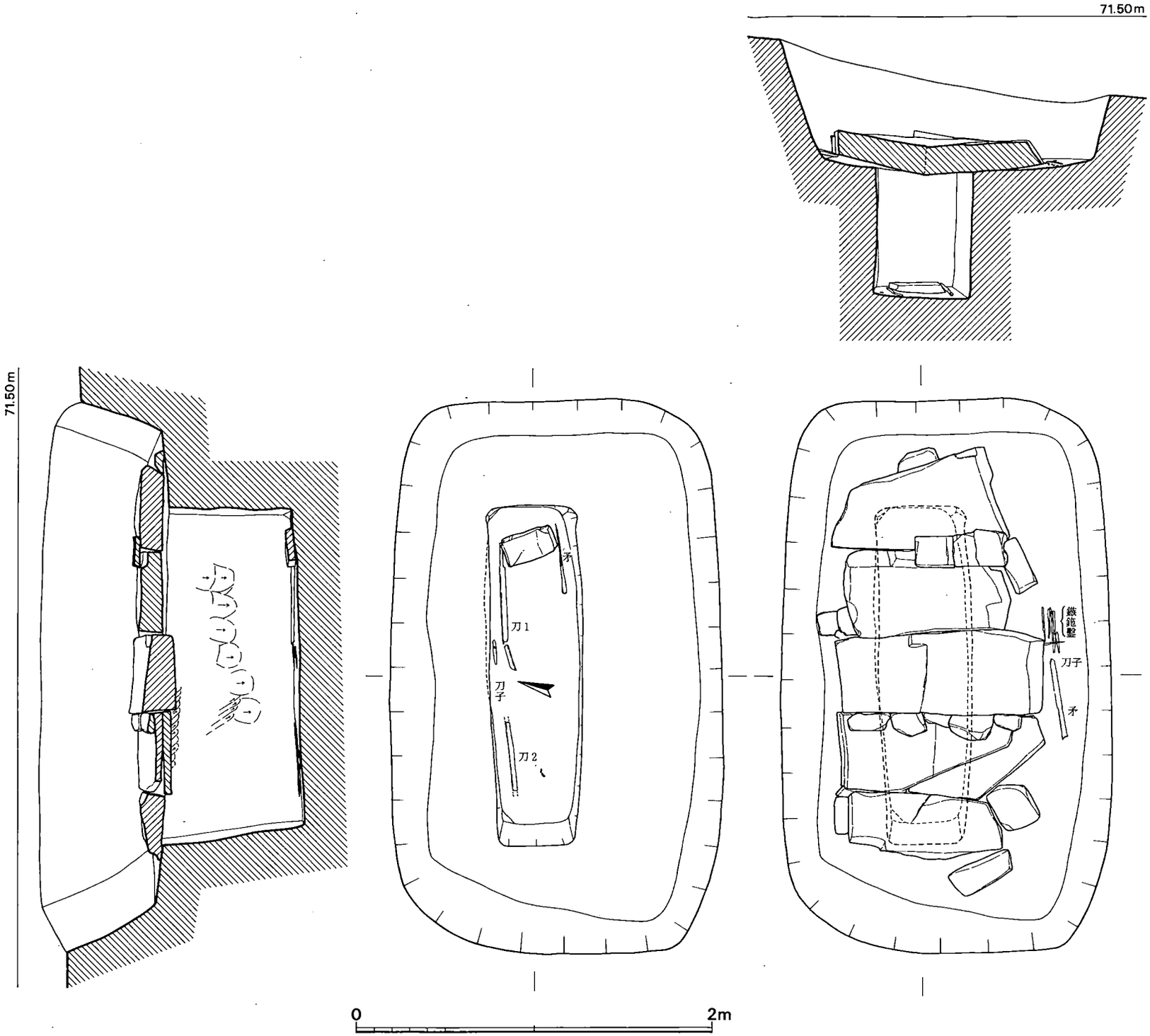
棺　内……	鉄太刀	2	棺　外……	鉄　矛	1
	鉄　矛	1		鉄　鏃	5
	鹿角柄装鉄刀子	1		鉄刀子	1
				鉄　鑿	1
				鉄　鉈	2（大・小）

棺内では，南長側壁際に鋒先を頭位側に向けて鉄矛が1本，北長側壁際に上半身寄りに鋒先を足方向に向けて太刀1振と鹿角装刀子1本が，更に下半身寄りに，鋒先を頭方向に向けて太刀1振（茎側と鋒先側は腐蝕して残存せず）が副葬されていた。

この棺内の矛は袋内部に木質が遺存しており，柄を付けたまま副葬されたと考えられる。また身部には布痕がみられ，布に巻かれたらしい。棺内出土刀子は鹿角柄装で，棺外の木柄のものと異なり，被葬者の日常愛用の品が特に選ばれて，太刀などとともに棺内の遺体の傍に副葬されたものであろう。

棺外では，蓋石をかぶせた後に，南側中央部の蓋石脇にまとめて副葬されていた。鉄鏃5本と鑿・鉈（大）は鋒先が揃っており，一束分として置かれており，ほぼ同位置に刀子も添えて置かれる。更に，異類の小型鉈がこれらと直角に，鏃等の上に置かれる。これらの西側に長大な鉄矛が副葬される。これは棺内の矛と異なり，布目の痕跡もみられず，粗大な，実用品的な感じを受けるものである。

以上の棺内・棺外の副葬品の別は，決して偶然的な結果を示すものではないと考える。つまり，棺内には，被葬者愛用の上質品を収めており，棺外には，当該期古墳副葬品として普遍的な鉈等の工具と共に，鉄鏃・矛等の死者を守護すべき武器類が収められている。即ち，後者は当時の葬送儀礼に伴なう必需品のセットとして意味付けられよう。



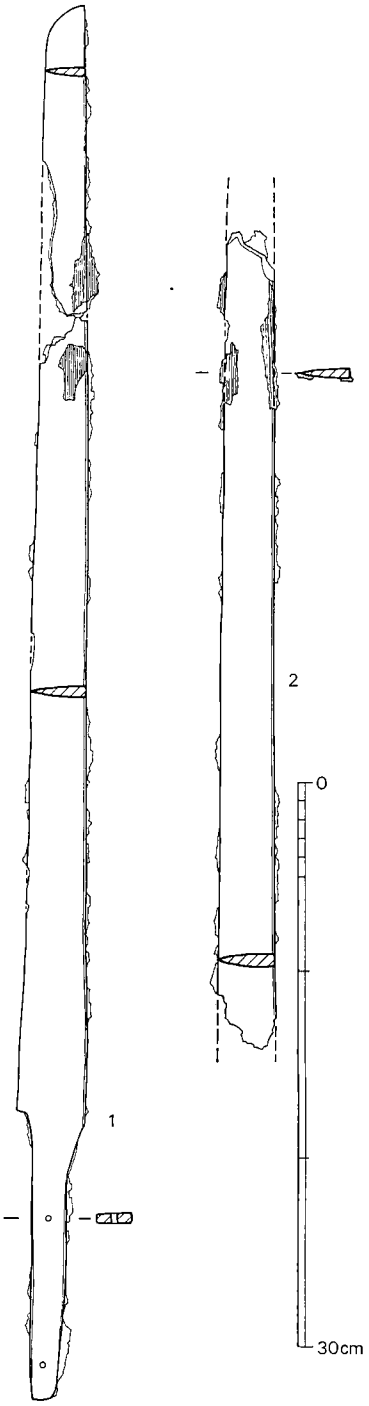
第 73 図　H・D－2実測図（1/30）

副 葬 品（図版55，第74～76図）

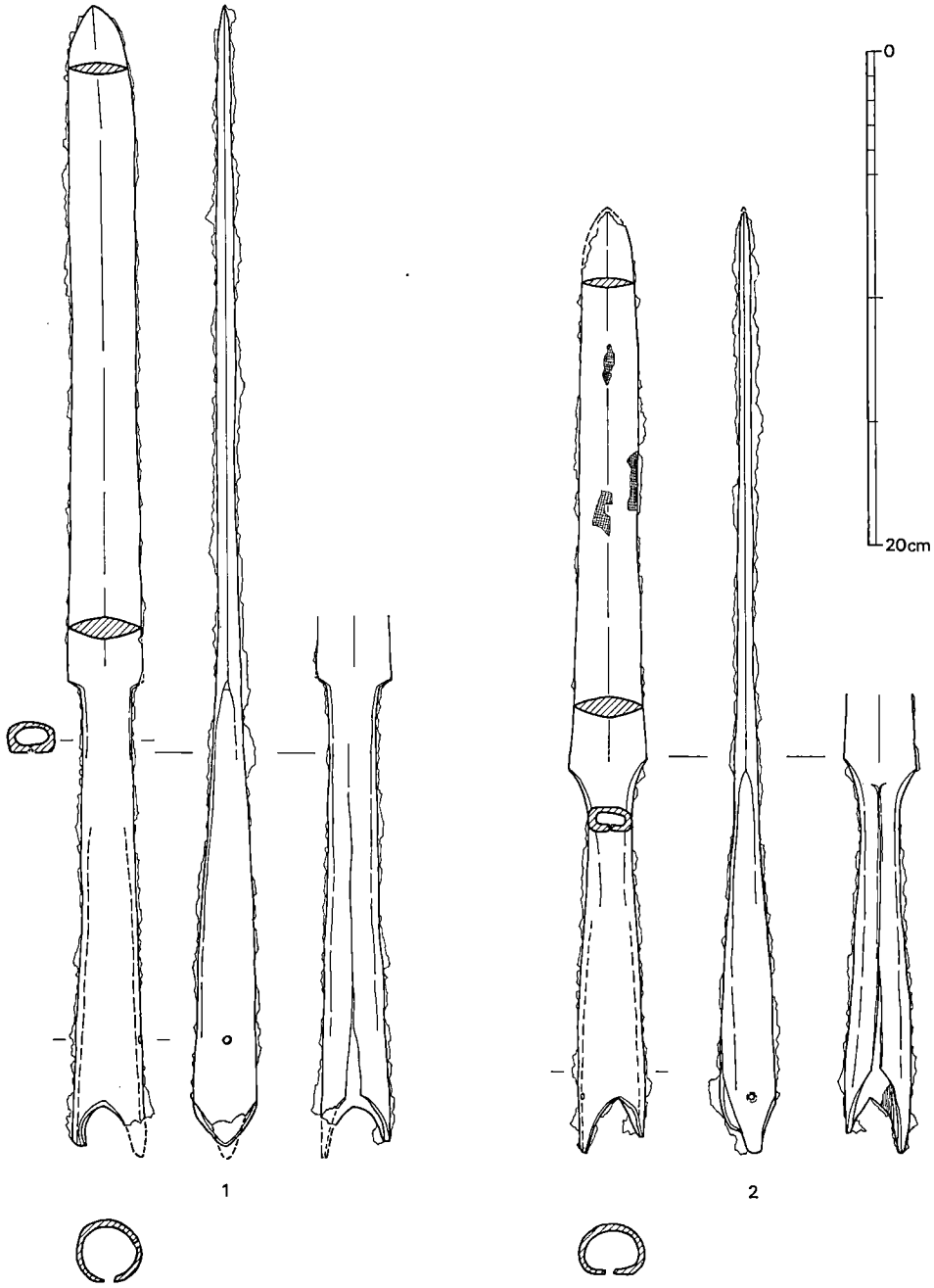
鉄太刀（第74図1・2）　いずれも棺内副葬品で，1は現存全長73.4㎝を測るが，出土当初より鋒先寄りの身部で折損・腐蝕しており，この間がもう少しすいて長くなる可能性がある。関部は刃部側は角関，棟関は片削ぎとなる。茎部長15.2㎝，厚さ0.55㎝で，2箇所に目釘穴が穿たれている。身部にわずかな鞘の木質が残る。刃部は全体に内反り状となる。刃部欠損部は当初からのものである。2は，身部のみ残存し，その長さは43.0㎝，身幅3.0～2.5㎝，棟厚さ0.75～0.5㎝となる。鞘部木質がいくらか残存付着する。

鉄矛（第75図1・2）　1は，棺外出土品で，全長45.7㎝身部長27.2㎝の長大な類である。鐏は不明瞭ながら一応認められ，身部最大幅3.0㎝，最大厚さ0.9㎝を測る。袋部は最大径3.0㎝，関際で 2.0×1.2㎝となる。関部は両角関となり，袋尻部は両側から三角形に抉られている。目釘穴が1孔穿たれる。鋒先は片寄って曲がり気味となる。袋部内側の木質の残存は不明であるが，もし柄が付いたままで副葬されていたとすると，墓壙掘方との関係で全長 130㎝内外となろう。ただ，矛本体の大きさからすると短かすぎる感もあり，柄を短かく折ったか，矛本体のみを供献した可能性が強い。

2は，棺内出土品で，全長37.9㎝，身部の長さ22.5㎝，身部最大幅 3.1 ㎝，最大厚さ 0.9 ㎝を測る。袋部は最大径2.8×2.1㎝，最細部径1.8×1.0㎝で，関部は両削ぎ関となる。袋尻部は両側より三角形に抉られている。目釘穴が1孔穿たれている。袋部内面には僅かに木質が残り，木柄を付けていたことがわかる。柄を付けた全長は，棺内法との関係から，160㎝以下と考えられる。矛本体 自体 は本例よりやや小さいが池の上D―5棺内副葬鉄矛で推定される全長は 142㎝以内であることを併考すれば，当該期鉄矛の全長はせいぜい140～160㎝ぐらいと考えられ，それほど長いものではなかったのであろう。



第 74 図　H・D―2棺内副葬太刀実測図（1/4）



第 75 図　H・D－2 副葬鉄矛実測図 (1/3)

さて，本例の身の部分には布痕が数ケ所残存する。銹着著しいが，経緯の糸本数は，10㎜あたり25本前後である。身部のみに残存しており，布を巻きつけて副葬している。

1・2ともに剣形の扁平な両刃の身に袋部を付けた形態をなし，古相著しい。

鉄鏃（第76図1～5）　いずれも棺外副葬品で，同型式である。箆被柳葉式で，身部は両丸造となる。全長で若干の差異がみられ，17.9～16.0㎝となり，身幅1.0～0.9㎝である。いずれも茎尻には矢柄の木質の上に，2㎜ぐらいずつ重ね目をずらして桜樺の沓巻きを行なっている。なお，5の茎端が曲がっているのは，出土位置が最下部の蓋石際にあり，その関係によるものかと考えられる。

鉄刀子（第76図6・7）6は，棺内副葬の鹿角装柄の刀子で，身部が内反りとなるタイプである。全長13.6㎝，身部長9.3㎝，最大身幅1.9㎝，棟厚さ0.35㎝を測る。関部は棟関のみが角関となる。鹿角はわずかしか残存しない。7は棺外副葬品で，木柄部が良く残り，径2.1×1.4㎝の断面楕円形をなす。全長12.3㎝，身部長8.1㎝，最大身幅2.2㎝，棟厚さ0.25㎝を測る。両角関部から鋒先へと急に細身となるタイプである。

鉄鑿（第76図8）　鉇9と銹着しており，棺外副葬品である。現存全長13.8㎝，刃部幅 1.2㎝で片刃となる。刃先から 9.3㎝のところから細くなってゆき，茎部となるかと考えられる。鉇9と同様に木質の付着を見ず，また両者の刃部方向が逆になって重ねられていることなどから，両者は柄を付けずに葬送儀礼必需品として供献されたものかと考える。

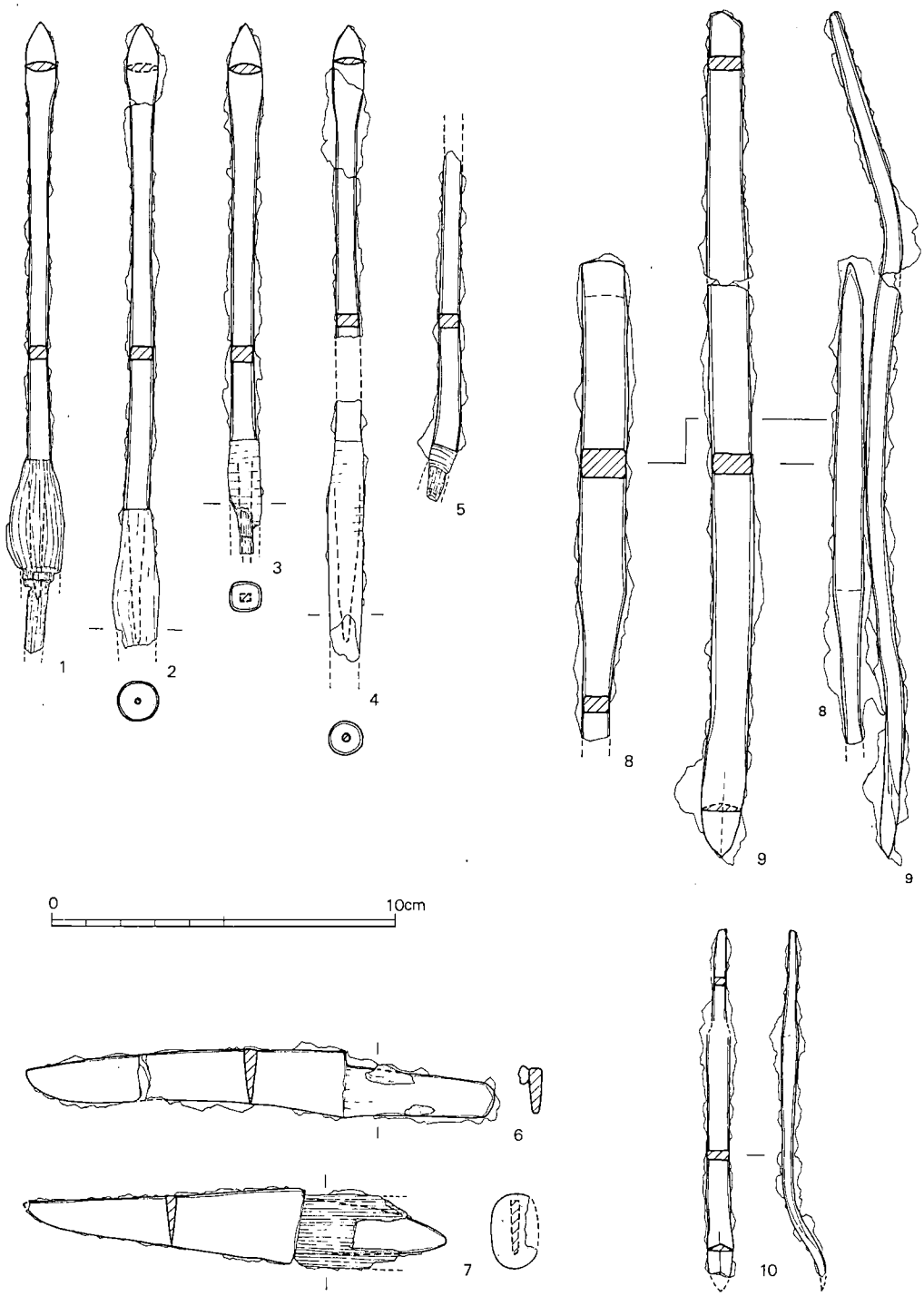
鉄鉇（第76図9・10）　9は，全長24.6㎝，身幅1.2㎝で，基部側6.5㎝付近で大きく屈折し，刃部寄り6㎝あたりで再びゆるく屈曲している。刃部鎬稜は銹着して明瞭でない。10は，細身小ぶりの特異な類であるが，鉇と判断したものである。明らかに細身の茎部をつくり，柄に差し込んで使用したものであろう。全長10.3㎝，刃部幅 0.8㎝で，刃部寄りで大きく屈曲する。仕上げ細工用の特殊なものと考えられ，鏃等の最上部に唯一直角に置かれていたもので，何か特別の意味を持つ製品かもしれない。

以上のH・D―2の年代等について一応触れておきたい。遺構の構造面からみると，池の上・古寺の墳墓群（註1）の石蓋土壙（盤棺）と同類であり，近隣という関係からも年代的にも近いものと考えられる。

遺物の面からみると，土器類の出土が皆無であり，鉄器からのみしか判断し得ない困難さはある。まず，内反り気味となる太刀は前期古墳に特徴的である。次に，鉄鏃は類似品が池の上においてⅢ式期まで伴なっている。

鉄矛について

矛は，あたかも鉄剣に袋部を付けただけのものの如きタイプで，古い様相をみせる。池の上Ⅰ式期とされる池の上D―5副葬品に類似するが，本墳例より短かく，身部も鎬高の断面菱形



第 76 図　H・D－2 副葬鉄器実測図 (1/2)

をなし，この点では本墳例の方が古様を呈する。池の上 D—5は陶質土器から池の上Ⅰ式期とされ，報告者はほぼ4C末と位置付けている。また，4C後半とされる静岡県松林山古墳（註2）では，身の先端部分のみが刃部となる異形・古相の矛が出土しており，古墳時代の最古期の形態の明らかな類であろう。また，近隣では,熊本県江田船山古墳出土例（註3）に身部断面菱形のものがみられる。江田船山古墳は，時期の決定に諸説あるが，ほぼ5C後半代を溯ることはなく,この時期には細身・菱形の例がふえる。県内では古賀町川原庵山古墳例（註4）も5C後半代とされ，同類である。装飾古墳として著名な桂川町寿命王塚出土品（註5）は,更に年代が下降するが，袋部が断面多角形となり，袋尻に抉りを持たないタイプの鉄矛が出土している。これは，やや広鋒となり両削関をなしており，また，これには鉄製の石突部分をも伴なっている。

また，本邦の弥生時代例についてみよう。弥生中期中頃から，甕棺墓・土壙墓等に副葬された例としていくらか発見されている。短かく狭鋒に近い，下伊川・道場山矛等と，長く扁平な身となる元松原・立岩2号土壙墓・中原K7等の例の2種に大別される。これらのうち，元松原・立岩例などは後述の楽浪付近の例と同類であり，彼地との密接な関係がうかがわれるところである。

古墳時代鉄矛には，本柿原例の如き剣身形の扁平な例は殆んどみられない。弥生時代矛はかなり形態の類似するものはみられる。目を転じて，朝鮮半島に類例を求めてみよう。ここでは個々の別にあたる余裕はないので，概要をみてみよう。まず，平安北道，楽浪郡地方漢墓等からの鉄矛出土品がみられ，「楽浪置郡前後から，鉄矛が主用され初めた」（註6）らしく，これらは身部が扁平な剣形で，袋部分が細長く，身部長より長いものも多い。明刀銭及び農工具多数とともに2口出土した平安北道渭原郡崇正面龍渕洞例や，平安南道大同郡斧山面中里出土の鉄矛もこの類である。次に三国時代のものとしては，古新羅・伽倻にあたる地方に多くの例がみられる。身の断面菱形の細身のものはこの地域にかなり多いらしい（註7）。また，身が扁平で剣形のものは，慶州・伽倻のあたりに多く扶余の近辺にもみられる。この中で扶余石山城付近の古墳出土とされるものは，袋部が細長く，前時代の楽浪郡近辺例から系統付けられるものであろう。昌寧の近くの桂南里1号墳出土の3口は，いずれも20cm前後と短かめの類であるが本柿原例に近い形態をなす。彼地における細かい時期的変化をたどれないので，詳さには論ぜられないが，本柿原例は，弥生期の長いタイプのもの（それはとりもなおさず，半島と密接な関係を有する）を祖形としたものであろう。ただ，日本製なのか半島製なのかという問題は今後に残る。袋尻を三角形に抉るタイプがいつごろから始まるのかという問題も重要である。ただ筆者の現在の感触を述べると，全く同類のものがみられないこともちろん，かなり大形品であることを考えると，半島例ではあまり長いものもなく，三角抉りを持つものは短かいものが多いことなどから，むしろ日本製ではないかと考えている。今後，我国における弥生

鉄矛と古墳時代のものとをつなぐものを追求する必要性が痛感される。

以上のことから，本柿原H・D－2出土鉄矛は，本邦古墳時代における最古式に近いものとして，弥生鉄矛とも系統を考え得るものと位置付けておきたい。その特徴は，剣形の扁平な身部で，それは未だ断面菱形になっておらず，袋部は既に三角抉りがみられるが，後代例の如き断面多角形につくるものではないという形態である。

本柿原例は型式的には既述の如く，池の上D－5例よりも古相を有し，その年代（4C末）より溯る可能性も考えておきたい。他の副葬鉄器類も，例えば小型鉇が和泉黄金塚（註8）にもみられる如く，以上の鉄矛の年代と矛盾するものではない。（中間研志）

註1　橋口達也他『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告　第5集　甘木市教育委員会　1979
　　橋口達也他『古寺墳墓群』甘木市文化財調査報告　第14集　甘木市教育委員会　1983

註2　後藤守一・内藤政光・高橋勇「静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告」静岡県御厨村郷土教育研究会　1939

註3　梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一冊　1922

註4　石山勲『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅳ　福岡県教育委員会　1974

註5　梅原末治・小林行雄「筑前國嘉穂郡王塚装飾古墳」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第十五冊　1939

註6　榧本杜人「考古学より見たる古代内鮮関係――古代兵器を中心として――」『朝鮮の考古学』同朋舎　1980

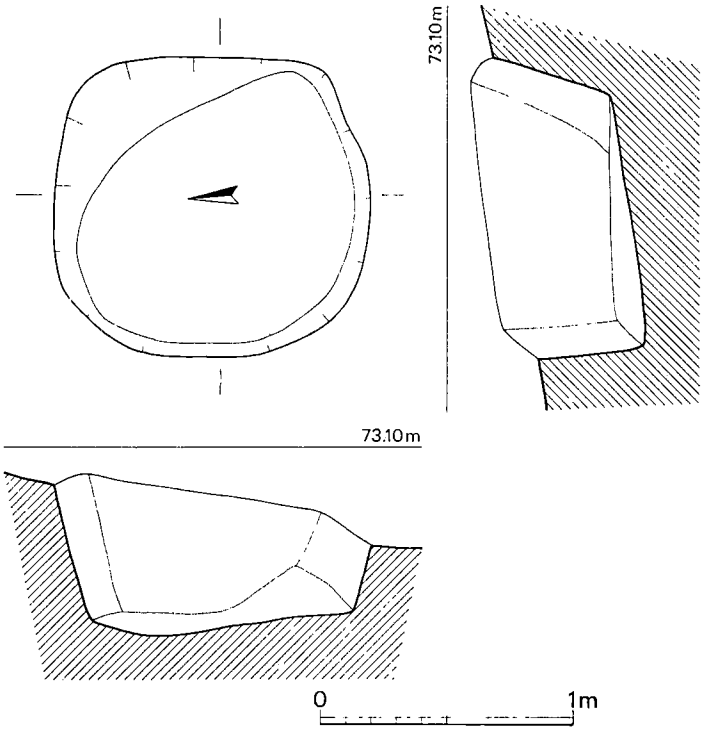
註7　李殷昌「4武具」『韓国の考古学』金延鶴編　河出書房新社　1972

註8　末永雅雄・島田暁・森浩一『和泉黄金塚古墳』東京堂出版　1954

11 H・P－1 (図版56－1，第77図)

H地区調査区の中央部にて検出され，尾根筋よりやや西斜面へ下った標高73mの位置に所在する円形土壙である。土壙規模は，1.24×1.18m，深さ0.64mを測る。土壙の西および南壁は削られて浅くなる。土壙の底面は結晶片岩の盤まで掘り込まれており，西側へと傾斜する。底面のプランは不整楕円形をなす。

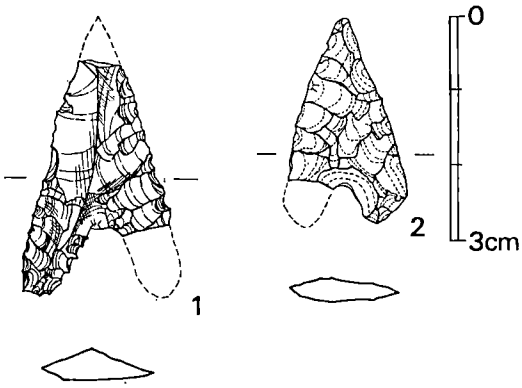
周壁の立ち上がりはほぼ直立する。周壁および底面は，熱を受けたものらしく赤変しており，壙内埋土からは炭片が，とくに下半部から多く出土している。また，須恵器壺胴下半部付近のものと思われる小片が出土している。この土壙の性格としては，出土遺物も小片でその時期もはっきりしないが，遺構の遺存状況や，池の上墳墓群の火葬墓の例などからして，火葬墓の可能性も考えられる。(新原正典)



第 77 図　H・P 1 実測図 (1/30)

12 G・H地区表採遺物

今回報告分の遺跡範囲の調査中に，石器数点が出土している。各古墳盛土中及び表土中より採集された。I地区の谷部分には縄文早期と晩期の遺構・遺物が多量に調査されている。ここに



第 78 図　H地区出土打製石鏃実測図 (実大)

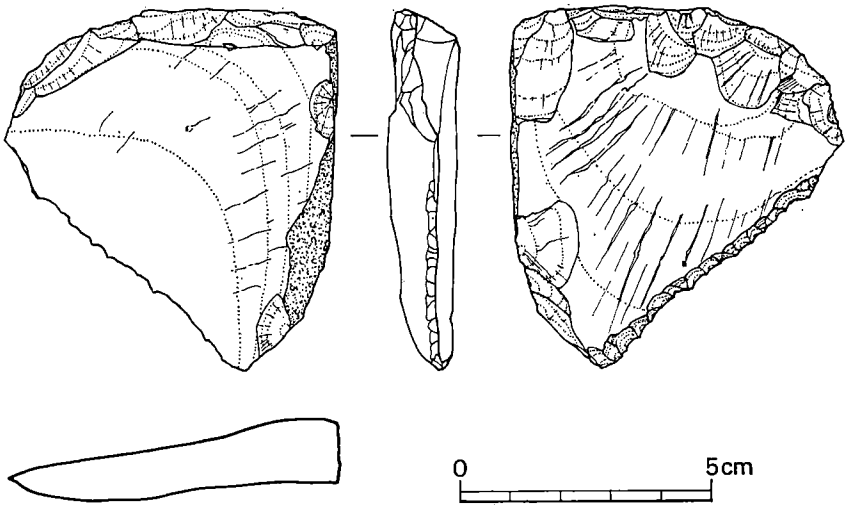
図示する遺物は，これらと関連するところの石器であろう。

打製石鏃（図版57—3，第78図1・2）　1は，H・2号墳周辺の表採品である。先端部及び片側基部端を欠損しており，漆黒色・良質の黒曜石製で，復元長 3.6㎝，最大幅 2.1㎝，厚さ 0.4㎝となる。長三角形鍬形鏃で，裏面には主要剝離面をかなり残し，縁辺を雑に加工するのみである。現存重量は1.6㌘である。

2は，H・3号墳のⅣ区墳丘出土品で，硬質の頁岩製である。表面の風化が著しい。基部の一端を欠損しており，三角形で小さな抉り部の鍬形鏃となる。長さ 2.7㎝，復元幅1.65㎝，厚さ0.3㎝で，わりと丁寧に調整している。現存重量1.0㌘となる。

スクレイパー（図版57—3，第79図）　G・1号墳の墳丘内出土のサヌカイト製品である。片側縁に自然面を残す剝片の，打面側の縁辺と刃部縁辺をわずかに調整するのみである。長さ 7.2㎝，幅6.5㎝，厚さ1.3㎝，重量62.2㌘となる。表面はやや風化している。

以上の打製石器は，打製石鏃1とスクレイパーが縄文時代晩期の所産で，打製石鏃2は，縄文早～前期のものと考えられる。（中間研志）



第 79 図　G地区出土スクレイパー実測図（2/3）

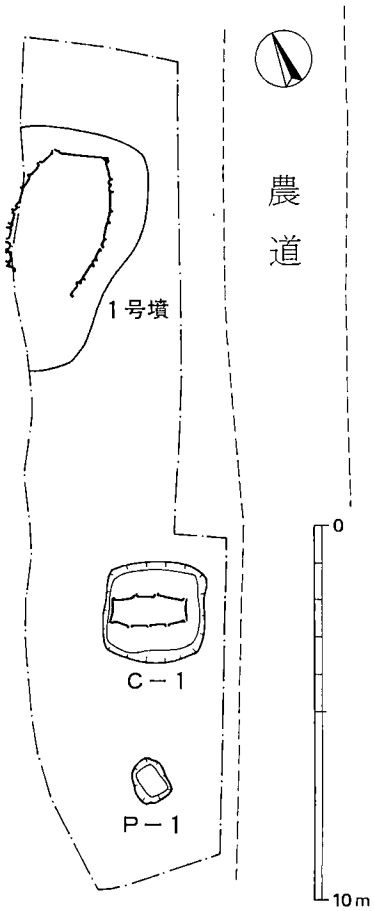
Ⅳ　S地区の調査

1　調査の概要

中池の東側の農道を拡張して，柿原土取場からの土石運搬用の進入路を設ける計画が実施されることとなって，当県文化課職員による試掘調査を実施した。佐田川沿いから，福岡県園芸農協連ジュース加工工場西側に沿って試掘を行ったが，その間は，遺構・遺物ともに無視し得る程度で，本格的調査の必要無しと判断した。

引き続き，中池の東側の柿畑に挾まれた農道の拡張部分を，重機を使用して試掘調査を行なった。農道の西側 5.5*m*程の拡張であったため，遺構は想定していなかったが，意外にも，大字柿原字大谷1348－2番地の南側にて，横穴式石室1基，竪穴式石室1基，土壙1基を調査することとなった。柿畑で上半が削平された段々畑の最下段にあたる所で，墳丘等の原地形は残されていなかった。（第2図）

なお，各遺構は，調査後に，現在市道と化した道路敷下に埋没している。この部分の調査面積は，99.0*m*²である。(中間研志)



第 80 図　S地区遺構配置図（1/200）

2　S・1号墳

調査区の北半に，横穴式石室1基が検出された。玄室部分しか調査できなかったが，他例から，その大部分の概要は推定できる。

現状が柿畑であり，上半を完全に均されていたため，墳丘の状態，周溝の様相などは全く不明である。

主体部（図版58～59，第81図）

主軸をN40°Eにとる両袖複室横穴式石室である。玄室は縦長の胴張りプランを呈する。玄室床

面の内法寸法は以下の如くである。

長さ
- 右側壁…365cm
- 中央部…約355cm
- 左側壁…340cm

幅
- 奥壁側…140cm
- 中央……240cm
- 玄門側…約140cm

奥壁に，厚い絹雲母片岩の大石を，横長になるように立てて，鏡石状とする。それ以上の積石は全く残らない。図中の奥壁石は右側壁と離れているが，これは，試掘調査時に重機により動いたもので，本来は，主軸に直角に据えられていたものである。

玄室側壁は，やや厚めの板石を用いるが，最下部から小口積みにしており，上方へと積むに従って，内側へ次第にせり出している。これらの板石積石の間隙に小板石を充塡して，補強を行なっている。

前室部は，壁石その他殆んどの石材を抜かれてしまっていたため，全容は明らかではない。墓壙南端に，深い石材抜き跡がみられ，その中には，根石も残存する。前室部壁腰石下には掘方も検出されないが，これは玄室部と同様，最下部から板石の小口積みを行なったためである。前室の旧状は，長さ1m，最大幅2m弱の胴張りの横長のものであったと推定される。ちょうど，H・3号墳のそれを思い起こして頂ければよかろう。

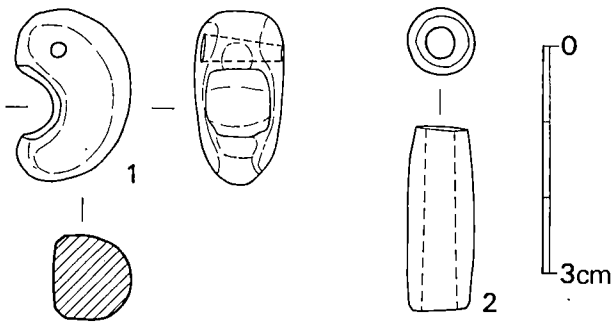
床面は，かなりの攪乱がみられ，盗掘を受けたと考えられる。玄室内は，壁際に若干の敷石が原状を保って残る。敷石は小板石を敷いて，その間隙に河原石の小円礫を敷きつめている。玄室部と前室部間の下框石は認められない。前室部床面の敷石は，当初から無かったものと考えられる。

使用石材は，敷石の小円礫を除き，すべて絹雲母片岩・緑色片岩等の片岩質板石である。壁面等の赤色顔料の塗布は認められない。

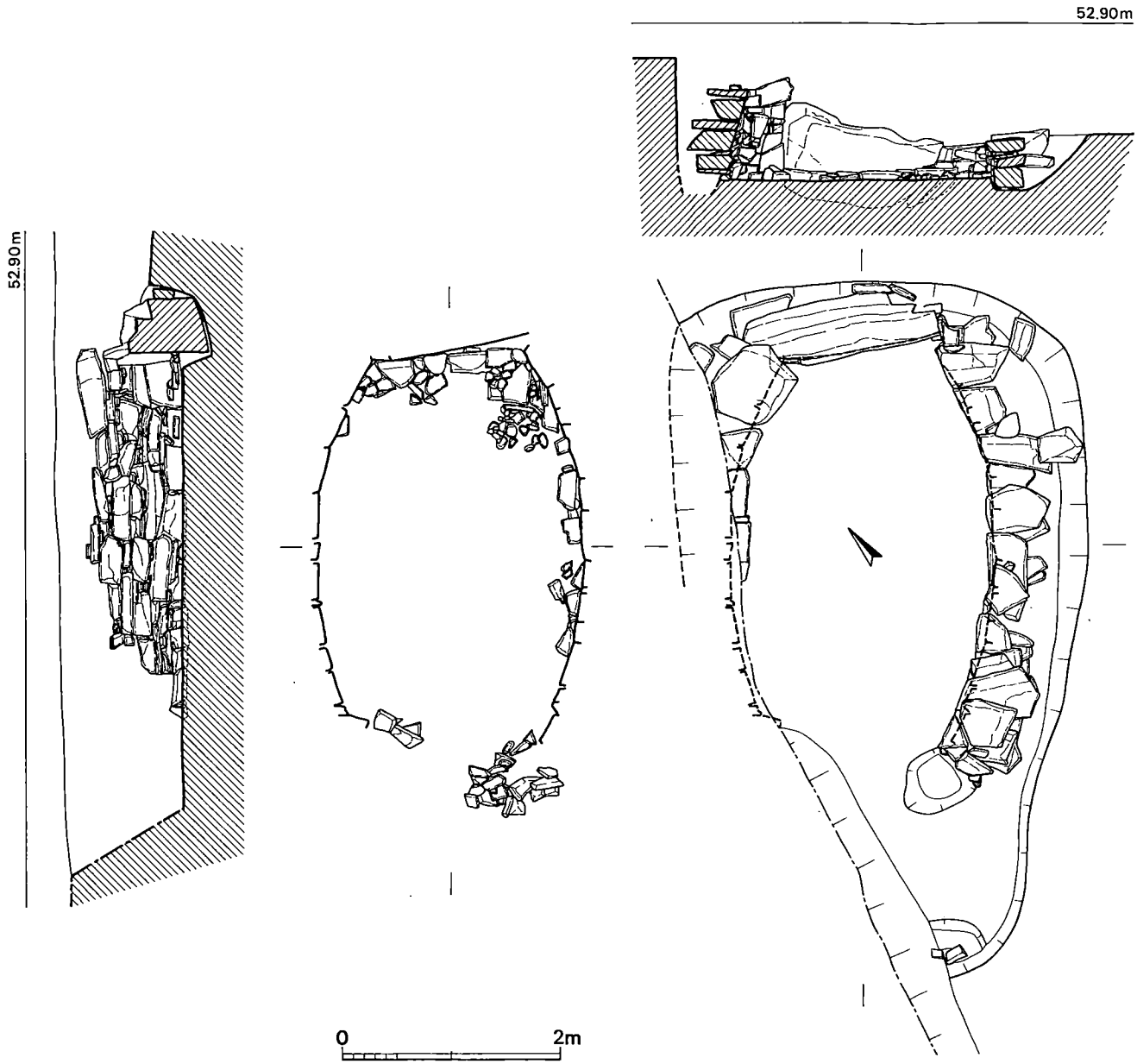
出土遺物（図版60－2，第82～84図）

石室の床面までかなり攪乱を受けており，盗掘を受けていたことは明白であった。副葬品等の出土も少なく，以下に示す遺物は，すべて玄室内の攪乱土中より出土したものであり，原位置を示すものは全く無い。

ただ，鉄器類は，全体としては，東長側壁寄りに近いものが多い。また，玉類は奥壁に近い



第82図　S・1号墳出土玉類実測図（実大）



第 81 図　S・1号墳石室実測図 (1/60)

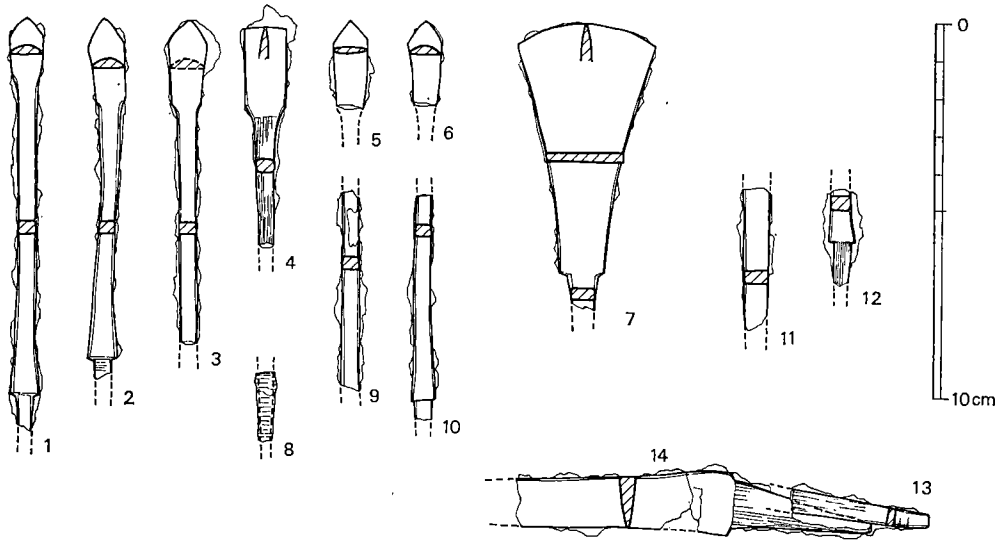
部分から出土している。器種毎の出土遺物数量は，以下の如くである。

装　飾　品	……硬玉製勾玉	1	ガラス製管玉　1
武　　器	……鉄鏃	7＋α	
工　　具	……鉄刀子	1	
混入した弥生土器片		2	

勾玉（第82図1）　硬玉製の精製品である。全長2.25㎝，最大幅1.1㎝，厚さ1.1㎝で，重量6.7㌘となる。白っぽい地に，濃緑色の縞が入るもので，石材としてはあまり良い部分を使用していない。孔は，片面から穿孔している。

管玉（第82図2）　淡青緑色のガラス製品で，長さ2.4㎝，最大径0.9㎝，孔径0.4～0.45㎝，重量は2.0㌘を量る。小さな気泡をかなり含み，表面は，わずかに白く腐蝕する。

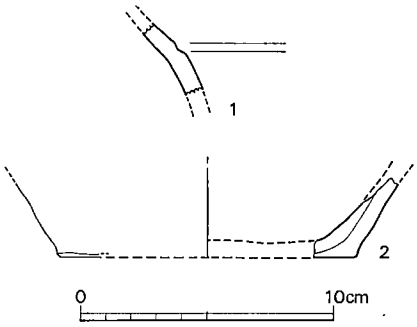
鉄鏃（第83図1～13）1～3・5・6は，箆被圭頭細根式のもので，すべて片丸造である。身幅0.4～0.5㎝，身長さ1.7～2.2㎝となり，全長は12.5㎝前後のものとなろう。茎部には桜樺の沓巻きのみられるもの（2・8）もある。5は，身部が片丸造ではないかもしれない。4は，箆被細根方頭鑿箭式で，先端の直線部のみが刃部となる。身幅1.1㎝，身部長2.1㎝で，身部直下から木質部が残っている。一応，鏃としたが，木質の残存状況から，工具としての小型鑿の可能性も考えられる。7は，箆被円頭広根斧箭式のもので，身最大幅 3.6㎝，身部長さ 6.6㎝を測る。13は，鏃の茎部と思われ，刀子茎部と銹着したものであり，鏃・刀子ともに一括して置かれていたことがわかる。



第 83 図　S・1号墳出土鉄器実測図（1/2）

鉄刀子（第83図14）　現存全長9.4㎝，茎部長3.7㎝，関際の身部最大幅 1.6㎝となる。両角関で，茎部には木質柄が残る。全体に内反り状となるタイプとなるか。

弥生土器（第84図1・2）　1は，壺肩部片で，沈線一条を施す。弥生前期の所産であろう。内面は雑な横方向のナデ，外面は磨滅して，調整不明である。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成良好で，淡黄褐色をなす。2は，平底の壺底部片で，弥生中期の所産であろう。復元底径11.8㎝で，器表磨滅しており，胎土に粗砂粒をいくらか含み，焼成不良である。色調は淡赤褐色から淡褐色をなす。



第84図　S・1号墳出土弥生式土器実測図 (1/3)

この2点は，玄室内混入品で，この近辺に弥生前～中期の関連する遺構が存在することを推定させるところである。

小　　結

以上のS地区1号墳は，発掘範囲も狭く，副葬品も少なく，その性格と年代は，それ程明確に為し難い点も多い。

石室の構造からみると，玄室プランはH・3号墳のそれに近い胴張りを呈するが，規模については，長さがやや長い。奥・両側壁の積石の構造についても，G・1号，H・3号墳の各石室の手法と殆んど同種である。

出土遺物の面からみると，本古墳群中では極めて数少ない玉類の出土例を見る。鉄鏃等の鉄器類は，後期群集墳出土品と共通するタイプである。

以上のことから，本墳は，現在「中池」となっている谷を通じて，G・1号墳，H・3号墳等と同一支群ととらえられ，これらとほぼ同時期の所産と考えられ，6C末前後の初築年代が与えられよう。なお，ここでは追葬等の様相は，全く不明である。（中間研志）

3　S・C－1

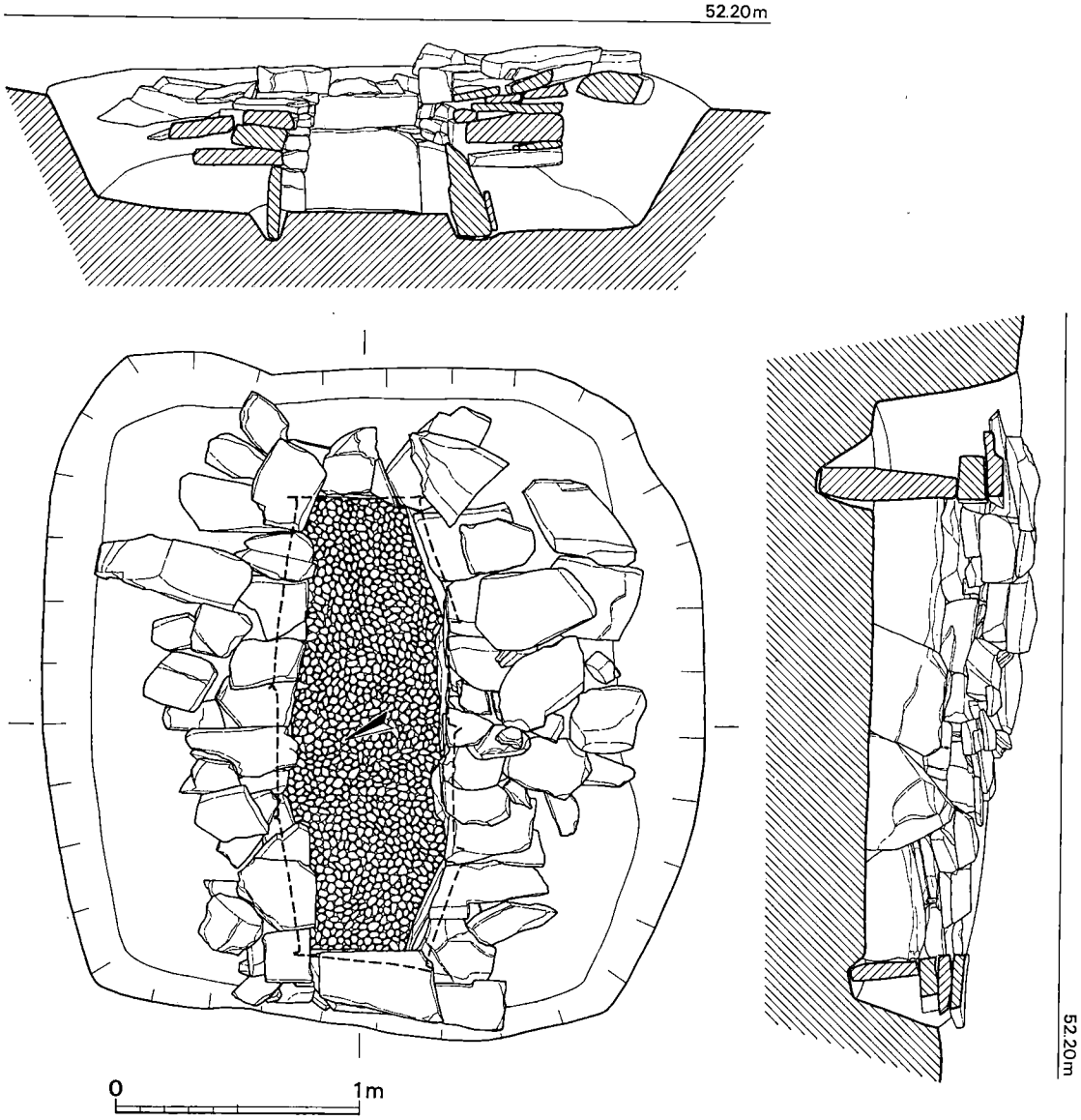
進入路部分発掘範囲中の南半に，組合わせ箱式石棺墓の構造を残した竪穴式石室が検出された。北半のS・1号墳の墳丘を想定した場合，その南側の裾より外方に位置することとなる。現状は柿畑となって削平・整地されていた部分であるが，長軸を等高線に直角にとって設けられている。

群としての位置付けは，これ一基のみしか検出していないので明らかではないが，G地区のC－1・2，D－1などの一群とは別の小支群となるのではないかと推定される。

主 体 部（図版61—1，第85図）

主軸をN115°Eにとる，組合わせ箱式石棺を下部構造に有する竪穴式石室である。長軸方向（東西）268㎝，短軸方向（南北）271㎝の大きな略正方形の墓壙を掘り下げ，石室腰石を埋め込むための溝状壙をめぐらせる。

小口部に板石を縦長になるように立て，長側壁には，板石を主に横長となるように立てる。それらの上に板石を小口積みに3～4段積み上げる。側壁部裏側の上半部には，控え積みを若



第85図　S・C—1実測図（1/30）

干行なう。使用板石はすべて片岩質板石である。

蓋石は，全部が除去されてしまっていた。棺内床面内法は，長さ 190㎝，幅は東端で50㎝，中央で70㎝，西で52㎝となる。床面プランは，中央部が胴張りとなる舟形を呈する。

頭位は，東端小口の立石が大きくて，頭位を意識した構造をみせており，東端であったと推定できよう。

床面には，0.5～2.0㎝大の極小の河原石（砂利）が全面に敷きつめられていた。このような敷石は，本古墳群例中にはみられず，特異な例である。

朱等の赤色顔料の使用は認められない。遺骨，副葬品等の遺物も全く残存しない。

本主体部の年代，その性格について考えたいが，あまりにもその材料に乏しい。石室の構造については、基本的には，本古墳群例中でも通有のものであるが，大きな墓壙，胴張りの床面，極小河原石の敷石などの諸点は，かなり特殊な様相であると言わざるを得ない。ストレートにG・C—1のような5C初頭前後のものと比定し得ない困難さを感じる。

遺物が無いので，時期についてはなんとも言えないのではあるが，I地区の同様の石室群を調査してきた現在までの感覚から，強いて言うとすれば，より時期の下降するもの，それも，少なくとも5C中頃以降の所産ではないか，と思っている。

ともあれ，構造上の諸点から，本遺跡全体からの視点が必要であり，続編報告書中で検討を加えてゆきたいところである。（中間研志）

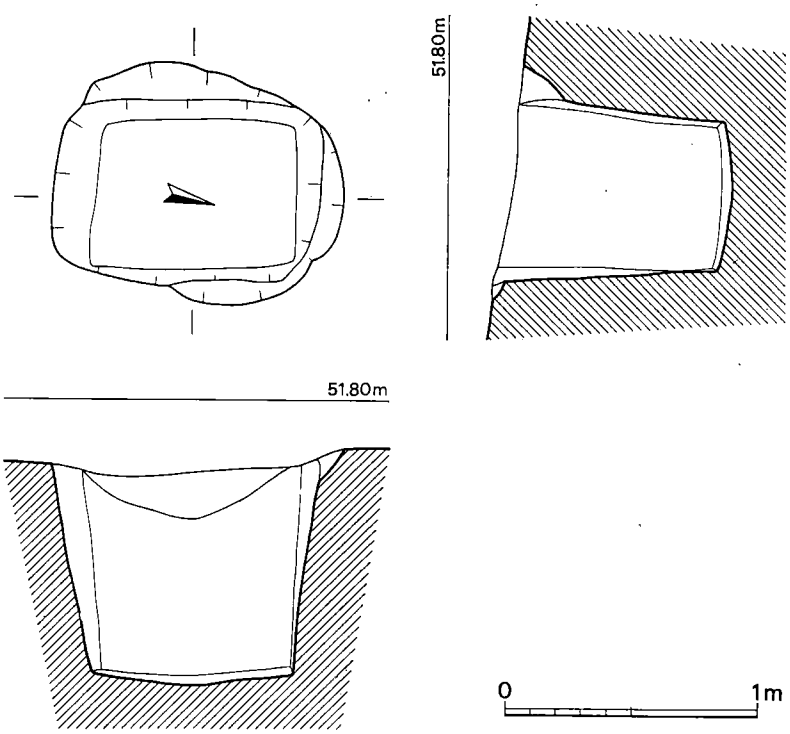
4　S・P—1（図版61—1，第86図）

進入路調査部分の南端に，寸詰り長方形の深い土壙が検出された。南北方向に長く，上端部の長さ 115㎝，幅75㎝，深さ90㎝で，四隅の角はかなりシャープで，壁も垂直に近い。底面は78×59㎝の長方形で，中央部分がいくらかへこむ。

この位置の地山である黄色粘質土中に掘り込まれており，埋土は，弥生貯蔵穴によくみられるような黒色土のレンズ状にはならず，ブロック状のややよごれた地山土が，密に埋め込まれたようになっていた。

出土遺物は，殆んど皆無であるが，埋土中から弥生土器の極小細片が僅かにみられた。

本遺構の年代，性格は，明確ではない。弥生前期頃の貯蔵穴の可能性もある。また，弥生期以前の，落とし穴状遺構と考えることも出来よう。いずれにしろ，埋土状況などからみて，弥生時代より新しい時期の所産ではないことは確実で，弥生期を含めて，それ以前の上記孰れかの性格を有する遺構であると考える。（中間研志）



第86図　S・P－1実測図（1/30）

Ⅶ　結　　語

柿原古墳群の発掘調査は，昭和58年度で3年目を迎えたが，調査は現在も継続中であり，横断道建設に伴なう土取場内の全調査を完了させるまでには，さらに1～2年の月日を要するものと思われる。

今回報告したものは，昭和56～57年度にかけて実施したG・H・S地区についての分で，他地区については，調査終了後，順次報告書を刊行していく予定である。

従って，今回の報告をまとめるに際しては，柿原古墳群における問題点の所在や，その背景，さらには今後の展望などを含めて簡単に触れるに留め，結語としたい。

今回報告の3地区において発掘された遺構は，下記のごとくである。

G地区	円墳（横穴式石室）	1基
	石棺系竪穴式石室	2基
	石蓋土壙墓	1基
H地区	円墳（横穴式石室）	3基

	石棺系竪穴式石室	4基
	石蓋土壙墓	2基
	土壙	1基
S地区	横穴式石室	1基
	竪穴式石室	1基
	土壙	1基

以上のうち，S地区の土壙1基を除いて，ほか全ては墳墓に伴なう埋葬施設であった。そして，これら埋葬施設は，形態的にも，年代的にも大まかに3つの様相として捉えることができる。

まず，第1の様相としては，石棺か竪穴式石室かで議論の分かれるところであろうが，一応ここでは石棺系竪穴式石室として取り扱うとして，その石棺系石室と，それらと混在する形で営まれた石蓋土壙墓とがつくる一群の墳墓がある。

第2の様相としては，横穴式石室を内部主体とする群集墳の流れがあり，第3の様相は，今回の調査ではわずか1基が検出されただけで確実には言い切れないが，火葬墓かと考えられる埋葬施設を有するものである。

以下，上記埋葬施設における3つの様相についての流れを少し具体的に追ってみることにする。

第1の石棺系竪穴式石室及び石蓋土壙墓としたものは，明らかな墳丘を有しない埋葬施設である。 石棺系竪穴式石室としたものは， 棺の規模・形態などは箱式石棺をベースとしているが，石の積み方などは扁平割石を小口積みにする竪穴式石室の手法を導入しており，いわば箱式石棺と，竪穴式石室の折衷形態とでもいうべき構造をなすものである。むろん，これらの中には，より箱式石棺的なものや，竪穴式石室に近いものなどもあり，一概には語れないが，これら石棺系石室は竪穴式石室受容以降の所産であろうことは想像に難くないところである。ちなみに，当甘木・朝倉地方における最古の竪穴式石室としては，当古墳群より南5㎞に位置する神蔵前方後円墳がある。その主体部は全長5.35m， 幅1.6～2mの竪穴式石室で，周壁は緑泥片岩を小口積みしているが，とくに両小口壁面は丸味をもって築かれた特異な形状をなすものである。主体部からは三角縁神獣鏡などが出土し，4世紀後半の年代が与えられ，被葬者は朝倉地方に重要な地位を占めていた首長層であろうと位置付けられている。

なお，神蔵古墳に使用された石材は「柿原石」であるが，この石材は当古墳群周辺地域に多く産出するもので，この地から搬出されたのかも知れない。とすればこの時期に両者間の交流を物語るものであるし，石室構築技術の移入が行われていても不思議ではない。

第1の様相におけるもう一つの石蓋土壙墓は墓壙が軟弱な粘質土に掘り込まれた素掘りのものと，雲母片岩の岩盤に掘り込んだ岩盤刳貫きのものとがある。これら土壙墓は，構造的には

石棺系石室より単純であるが，岩盤刳貫式のものは石棺系石室よりも造墓作業は困難性を伴なう。そうまでして造られたこれら土壙墓群は，石棺系石室と混在して営まれており，今後両者の関連性が問題となるであろう。

一方，これら石棺系石室や土壙墓などの年代であるが，年代の決め手となる土器類の遺構からの確実な出土はなく，従って周辺地域出土のものなどから推し測らねばならない。これらにより，ほぼ年代の推定される遺構としては，最も遡るものとしてG・C—1石棺系石室がある。このC—1号墓付近からは調査前に出土した陶質土器の甕があり，5世紀初頭～前葉前後の年代が考えられている。また，最も下るものとしてはD—1石蓋土壙墓は素掘りであるが，付近からの表採遺物として7世紀中頃の須恵器片があり，土壙墓はほぼこの時期に比定されよう。ただ後者については，疑問点がない訳ではないが，後述するように，H地区では8世紀中頃まで下る石棺系石室も存在しており，考えられない年代でもない。

H地区では，C—4石棺系石室とD—2石蓋土壙墓とがほぼ年代の知られるものである。C—4は，7世紀中葉から後葉にかけて営まれた横穴式石室を内部主体とする円墳の周溝が埋没した後に築造されている。また，蓋石上からは，8世紀中頃の須恵器片も出土しており，遺構の出土状況とも相矛盾することなくほぼこの年代が考えれるられる。このC—4石棺系石室墓は前述したG・C—1や他の石棺系石室と構造的にはほとんど変りはなく，規模もほぼ同一である。こうした年代の下るものとしては，筑紫郡那珂川町の観音山古墳群でも確認されており，群集墳に混在して7世紀末まで下る小竪穴式石室もあり(註1)，当C—4の年代もあながち法外なものではあるまい。

D—2は，岩盤刳貫きの石蓋土壙墓で，今回報告分では最も豊富な副葬品を出土した遺構でもある。副葬品は全て鉄器で，いずれも古いタイプのものである。とくに，鉄矛は古墳時代最古期のものに属し，4世紀末より遡る可能性が指摘されている。とすれば，今回報告した埋葬施設で，最も古い時期のものがこのD—2石蓋土壙墓といえるのかもしれない。

以上のように，これら石棺系石室や石蓋土壙墓は最も古いものとして4世紀末から5世紀初頭にかけてのものがあり，しかも一方では7世紀中葉から8世紀中頃にかけて営まれた新しいものまで見受けられる。もちろん，これらは連綿と継続して造墓された訳でないことは，6世紀後半以降に横穴式石室が採用されていることからしても理解されるが，墓制の変革は急激でもあり，かつ一方では保守的でもあったことがうかがえる資料である。

いずれにせよ，これら石棺系石室や土壙墓は，昭和58年度に調査を行ったI地区において約60基ほどが検出されており，詳細な検討はI地区報告の続編にて十分に考察したい。また，今回報告分のうち，G・C—1，G・C—2石棺系石室から人骨が出土しているが，現在鑑定中であり，併せて次回報告書に結果を報告したい。

第2の様相である横穴式石室は，今回5基の報告を行った。柿原古墳群の主流をなす横穴式

結　語

石室を主体部とする古墳は，調査区域内ではまだ40～50基が遺存しており，今回報告分はその1割にもみたない。

今回調査した5基の古墳のうち，墳丘の遺存していたのは3基のみで，それらはいずれも円墳であった。古墳の内部主体は全て横穴式石室で，石室の構造は複室と単室とがあり，玄室の平面形はいずれも胴張りとなるが，長方形と方形に近いものがある。単室のものは胴張りを残しつつも方形プランに近い形状となる。これら石室のうち，長方形で規模も大きく胴の張りも強い典型的な胴張りプランのものは，G・1，H・3，S・1号墳においてみられた。これらはいずれも6世紀末前後の築造によるものであり，今のところ，柿原古墳群内の横穴式石室としては古い部類にはいるが，G・1号墳はそれらの中でも造りが最も整美であり，前出のものであろう。

これら初期の横穴式石室につづくものとしてはH・1号墳がある。H・1号墳は石室の規模も小型化し，玄室の胴張りはわずかで方形プランに近似している。また，一応複室構造はとるものの前室は本来の機能を離れた形式化した造りで，後述するH・2号墳との間に出現するタイプの横穴式石室である。今回調査分で最も後出するのがH・2号墳である。石室はH・1号墳と同様に小型化して単室となり，プランもより方形に近いものとなる。このH・2号墳の築造時期は7世紀中葉のものであるが，その後7世紀後葉までの間に2回の追葬が確認されている。

以上のように，第2の様相の横穴式石室は，6世紀末頃に典型的な胴張りプランで複室構造をなすものが採用され，その後7世紀中頃までの間に複室から単室へ，胴張り長方形プランから方形プランへと移行するという変遷がたどれた。胴張りプランの石室を有する古墳は，主として当甘木・朝倉地方から福岡県南部地域を中心に広く分布し，熊本県北部地方にまで及んでいる。今後，それらの消長を柿原古墳群内での変遷と併せて考えてみたい。

また，今回調査した古墳のうち，G・1，H・2，H・3号墳では内護列石とでもいうべき石列が確認された。この内護列石は，羨道側壁両端よりそれぞれ左右に石列が延び，石室後方を囲って墳丘内を一巡するもので，割石や塊石を1～2段積みする石列状のものと，板石を7～8段積みして高く築く石垣状のものとがある。1～2段積みの列石は朝倉地方においてはしばしば見られる手法であるが(註2)，石垣状のものは今回が初めてである。これら内護列石は，石室構築作業との関連性や，土溜めのための機能などが考えられるが，今後類例の追加により詳細な検討が加えられるであろう。

最後に，第3の様相として，火葬墓が挙げられる。ただ，今回の調査ではH地区のP－1土壙においてその可能性のあるものが1基検出されたのみで，確実なことは言えない。ただ火葬墓との関連性として，P－1土壙より約30m北に位置するH・2号墳出土の直口壺が参考になる。H・2号墳から出土した杯類はⅠ～Ⅲ類に分類されているが，そのうちの7世紀後半頃に比定されたⅢ類の杯身は逆転して蓋となり，直口壺とセットとして火葬の蔵骨器としての利用

も示唆されている。P—1土壙から蔵骨器の出土はなかったが，以上のような状況から火葬墓としての可能性を考えた次第である。また同じH地区では8世紀中頃から後半の時期まで石棺系石室が埋葬施設として使われているという事実がある。前述したH・C—4がそれであるが，H—2号墳出土の直口壺やC—4を考え併せるとき，P—1土壙が火葬墓としてこれらの遺構とともに，第1，第2の様相に引きつづき第3の様相として再びH地区尾根上に墓所として営まれたとしてもおかしくはない。

以上，柿原古墳群の最初の報告にあたり，結語として墓制を中心に問題点などを2・3挙げたが，残された課題は多い。各種の石室の構造やその変遷，出土遺物の検討やその年代，そして，被葬者の性格やその集団の地位，さらには周辺の遺跡との関係など多岐にわたっている。これらの問題点は柿原古墳群のみでは解決できるものではないが，今後続編の報告の中で明らかにしていきたいと考えている。　（新原正典）

註1　「筑紫郡那珂川町観音山古墳群の調査」（山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集）福岡県教育委員会　1978

註2　波多野晄三「列石考」『筑紫史論』第三輯　1975

第 3 表　古 墳 計 測 表

（単位 m）

地区	No.	墳丘規模 外径	墳丘規模 内径	主体部 石室形態	主軸方向	主軸方位	玄室 床面絶対高	玄室 長	玄室 最大幅	玄室 高さ	前室 長	前室 幅	前室 高さ	羨道 長	羨道 奥幅 / 前幅	羨道 高さ	閉塞	石室全長	出土遺物	備考
G	1	17.0×16.0	13.0×16.0	複室横穴式	斜面直交	N42°30′E	58.55 m	3.32	3.25	—	1.0	2.3	—	2.82	0.95 1.25	—	○	8.0	須恵器，土師器，鉄鏃	
H	1	9.0×7.0	7.0×5.0	複室横穴式	斜面平行	N8°E	67.00 m	1.4	1.66	—	—	—	—	1.9？	—	—		4.44	耳　環，須恵器，土師器	
	2	11.0×10.0	7.5×7.6	単室横穴式	斜面平行	N5°E	72.45 m	1.97	1.78	—	—	—	—	0.95	0.68 0.64	—	○	4.75	須恵器，土師器	
	3	—	14	複室横穴式	斜面平行	N43°30′E	53.70 m	3.21	2.55	—	0.8	1.95	—	2.41	0.83 1.0	—	○	7.25	須恵器，土師器，鉄鏃 馬具，耳環	
S	1	—	—	複室横穴式	斜面平行	N40°E	51.85 m	3.8？	2.44	—	1.0	2.0	—	—	—	—		—	勾玉，管玉，鉄鏃	

註　◦規模において外径は周溝を含む径を示し，内径は周溝内墳丘径を示す。
◦主軸方向の項で「斜面平行」とは等高線に平行という意味である。

第 4 表　石棺系竪穴式石室・土壙墓計測表

（単位 m）

地区	No.	主軸方位	床面絶対高	頭位	主軸方向	掘り方 長軸	掘り方 短軸	棺内法 主軸長	棺内法 頭位幅	棺内法 足位幅	棺内法 深さ	周溝	赤色顔料	人骨	出土遺物 棺内	出土遺物 棺外	出土遺物 周溝	備考
G	C 1	S74°30′E	57.45 m	東	斜面平行	3.2	2.07	1.86	0.61	0.48	0.54	有 南北 5.56	○	頭　骨	鉄剣 1，刀子 1			
	C 2	N74°E	57.75 m	東	斜面平行	2.7	1.5	1.96	0.37	0.42 ＋α	0.45		○	頭骨片 大腿骨	刀子 1			
	D 1	S66°30′E	56.25 m	東	斜面平行	1.82	0.45	1.69	0.28	0.22	0.17							
H	C 1	N77°E	71.85 m	西？	斜面直交	1.6	1.58	0.87	0.31	0.28	0.2							
	C 2	N10°W	71.90 m	北？	斜面平行	2.42	1.39	1.56	0.41	0.33	0.57 ＋α							
	C 3	N46°E	74.35 m	北東	斜面平行	3.55	2.25	2.07	0.72	0.43	0.62				鉄剣 2			
	C 4	N30°30′E	73.80 m	北東？	斜面平行	2.45	1.8	1.75	0.6	0.44	0.45 ＋α							H・2号墳の周溝を切る
	D 1	N10°E	72.30 m	北？	斜面直交	2.35	1.06	2.00	0.45	0.29	0.48				鉄剣 1，鉄鏃 4，刀子 1			
	D 2	N74°E	69.90 m	東	斜面平行	3.08	1.86	1.77	0.45	0.35	0.7		○	骨片あり	鉄大刀 2，鉄矛 1，刀子 1	鉄矛 1，鉄鏃 5，刀子 1，鉄鑿 1，鉈 2		
S	C 1	S65°E	51.40 m	東	斜面平行	2.68	2.71	1.9	0.5	0.52	0.53 ＋α							

註　◦主軸方位は頭位を基準とする。
◦主軸方向の項で「斜面平行」とは，等高線に平行という意味である。
◦棺内法深さは蓋石が存しておれば床面から蓋石までの最低値で，蓋石が存してなくば壁面の最大高である。

図　　版

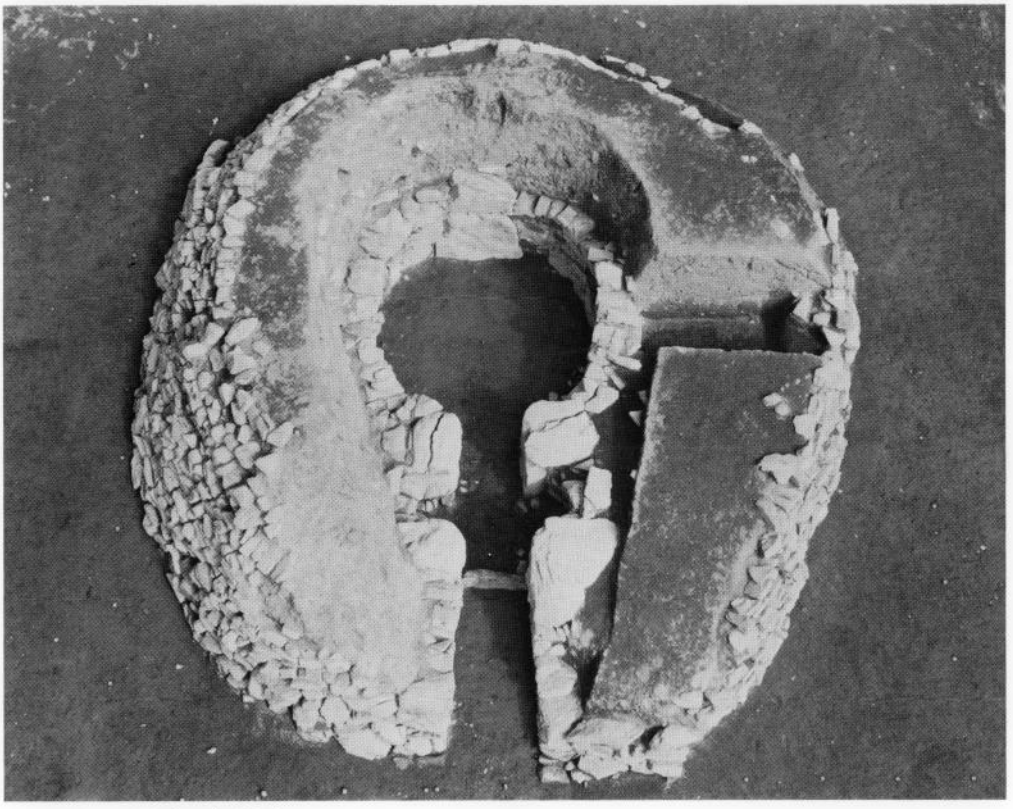
(1)　古墳群全景航空写真（南から）

(2)　古墳群全景航空写真（西から）

(1)　古墳群全景（南から）

(2)　G・H地区航空写真（東から）

(1)　1号墳墳丘（調査前）

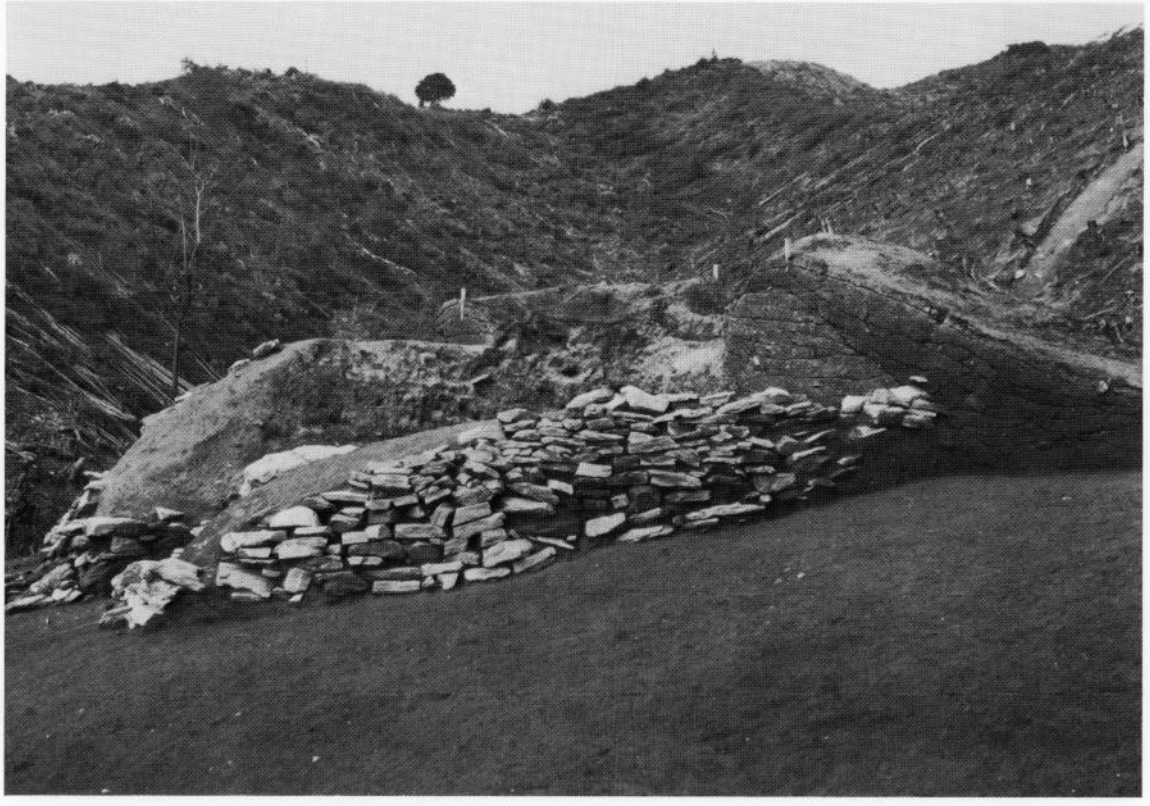


(2)　1号墳石室全景

(1)　1号墳石室全景

(2)　1号墳　Aトレンチ土層

(1)　1号墳　Bトレンチ土層



(2)　1号墳　Cトレンチ土層

(1)　1号墳　Ⅰ・Ⅳ区内護列石

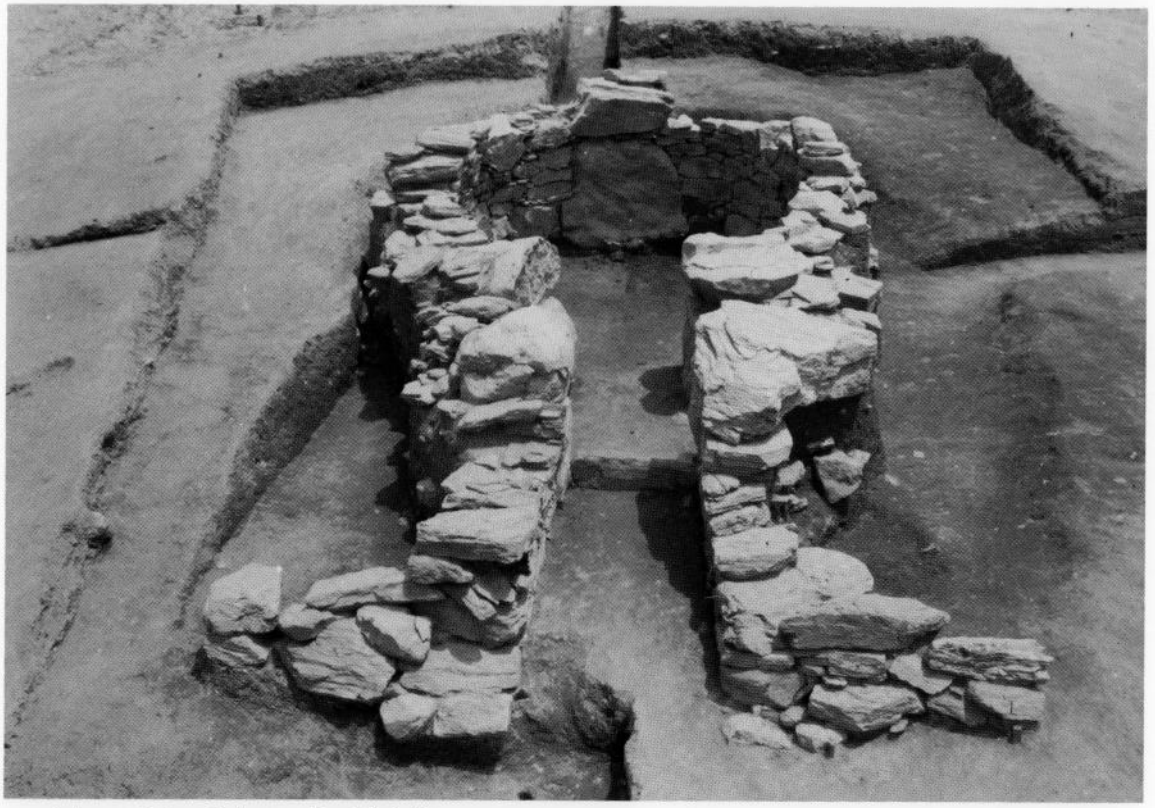
(2)　1号墳　Ⅱ・Ⅲ区内護列石

(1)　1号墳　Ⅰ・Ⅱ区内護列石

(2)　1号墳　Ⅲ・Ⅳ区内護列石

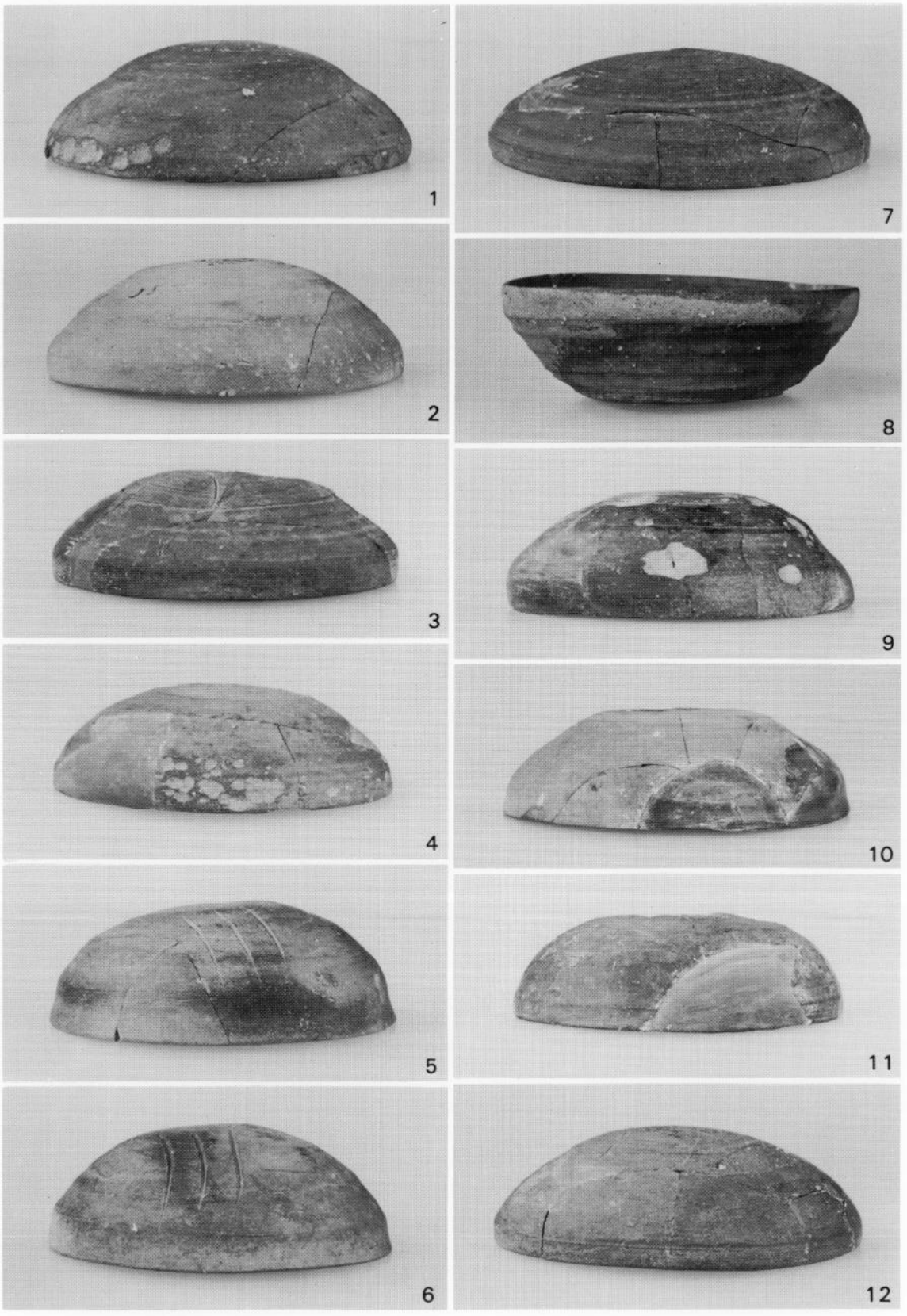
(1)　1号墳玄室

(2)　1号墳玄室右側壁

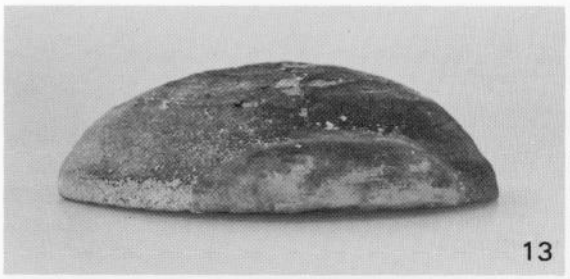


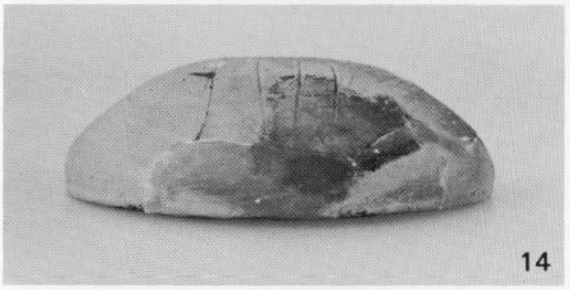
(1)　1号墳石室全景　(墳丘除去後)

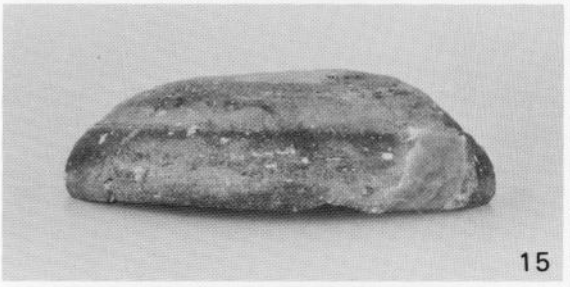
(2)　1号墳Ⅰ区祭祀土器群出土状況

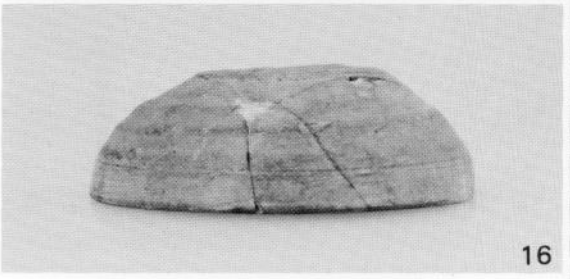


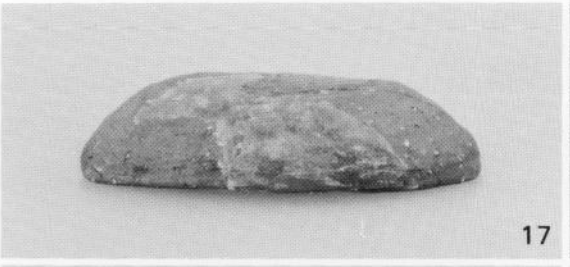
1号墳出土須恵器

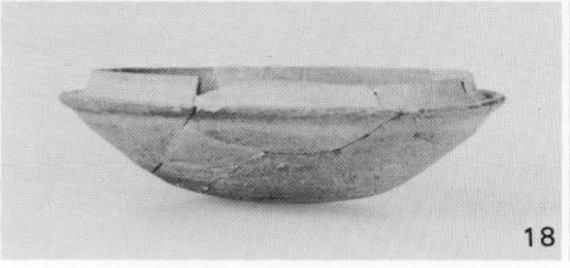




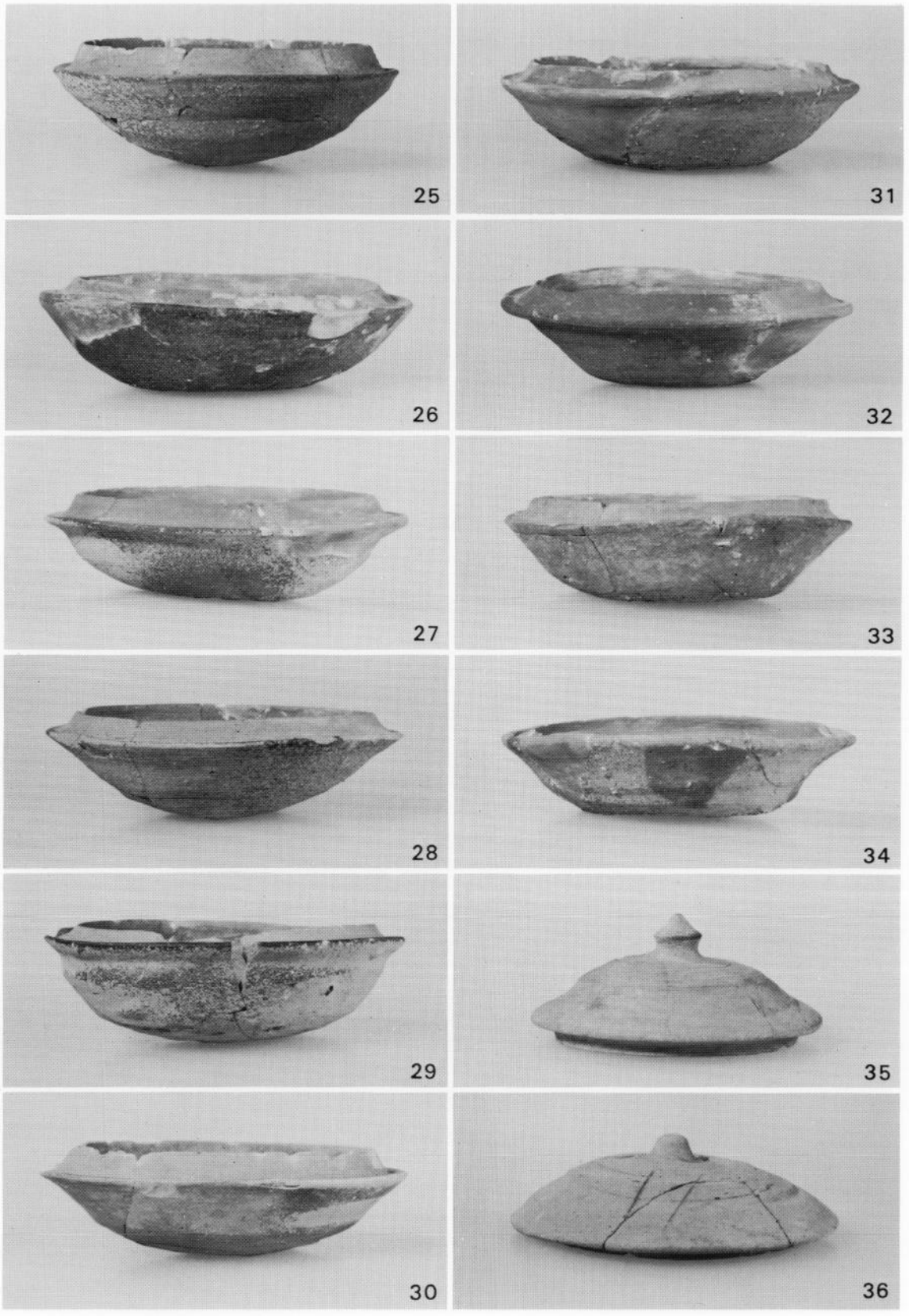




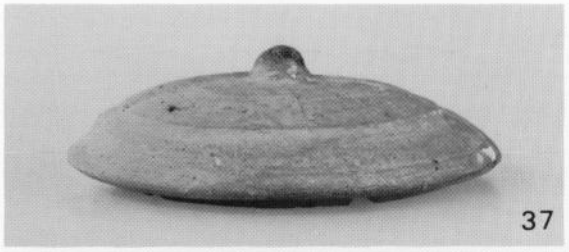


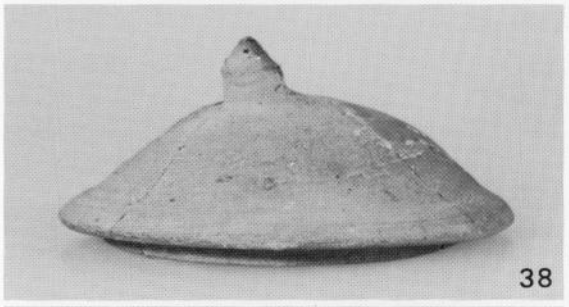


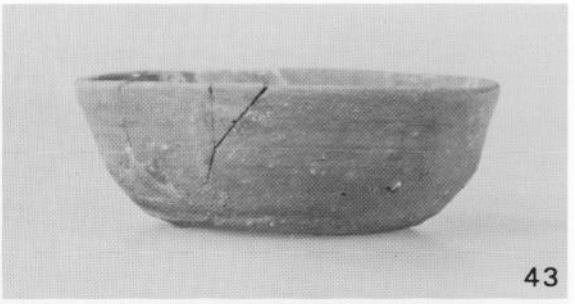
1号墳出土須恵器

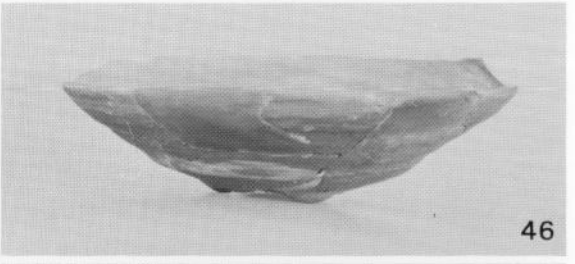


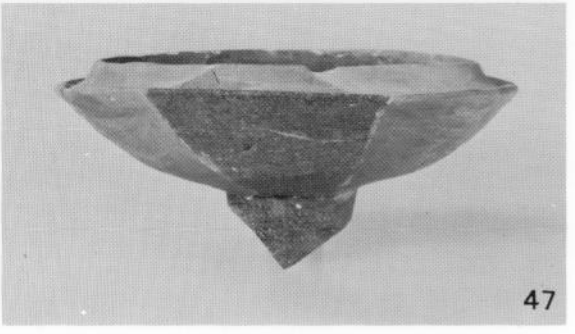
1号墳出土須恵器



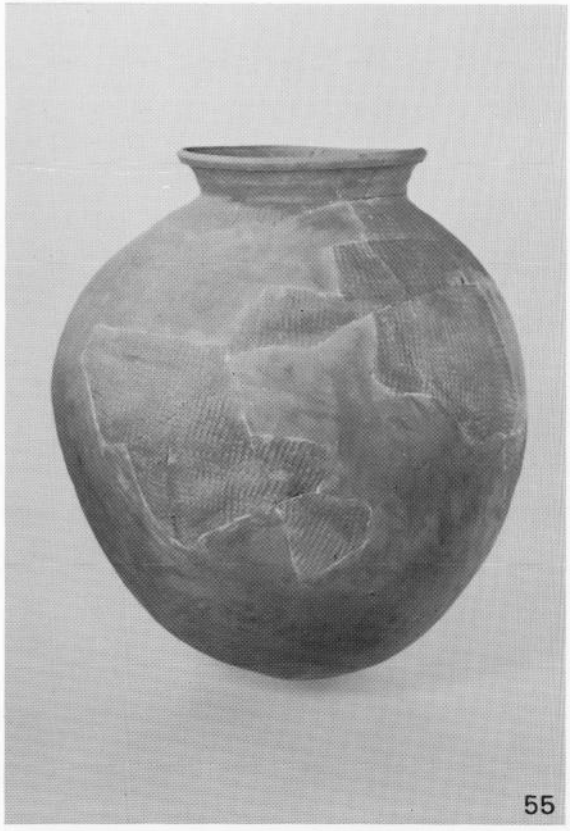


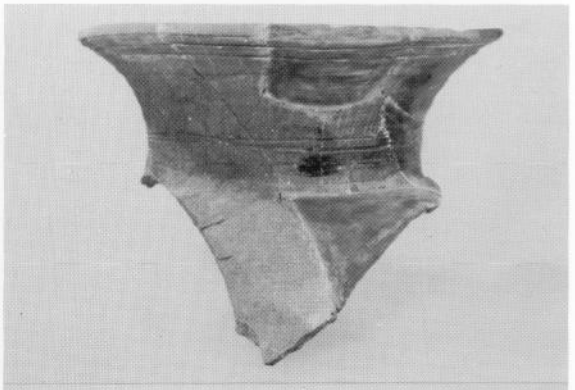


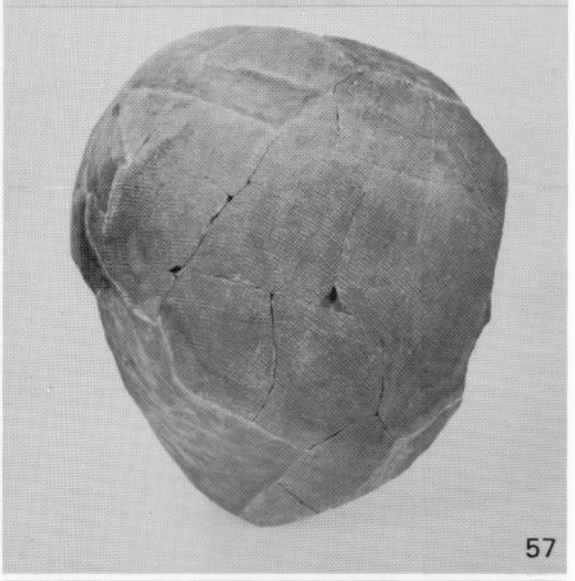


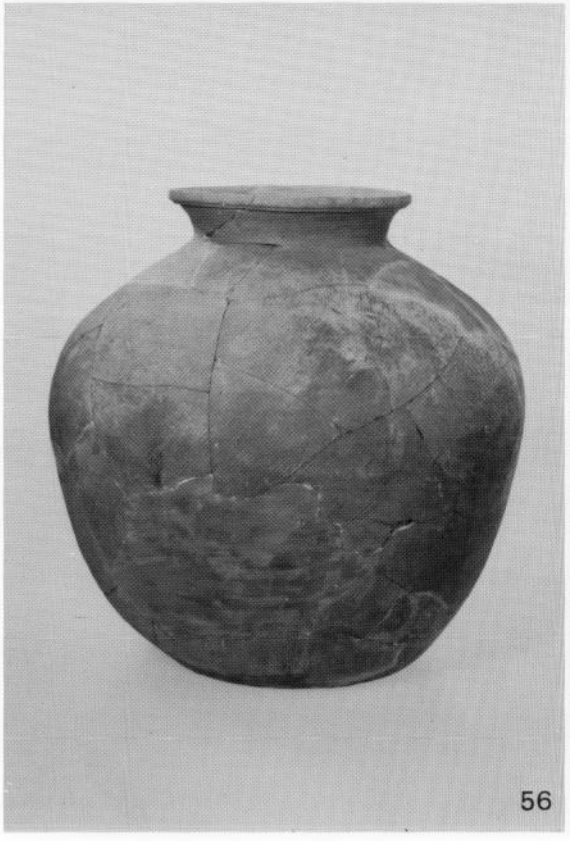


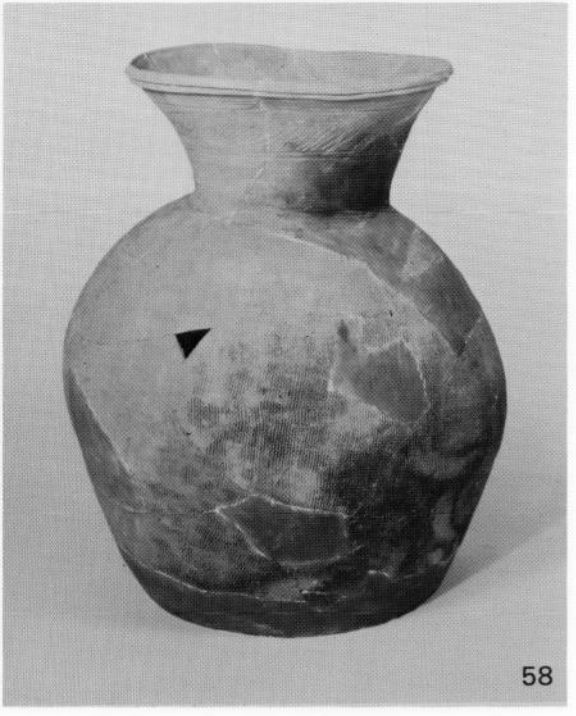
1号墳出土須恵器


55

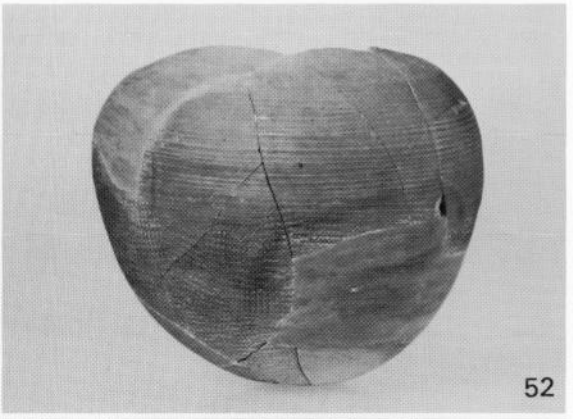



57

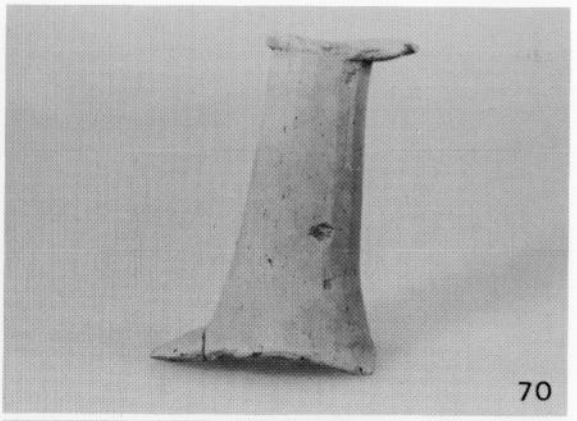

56

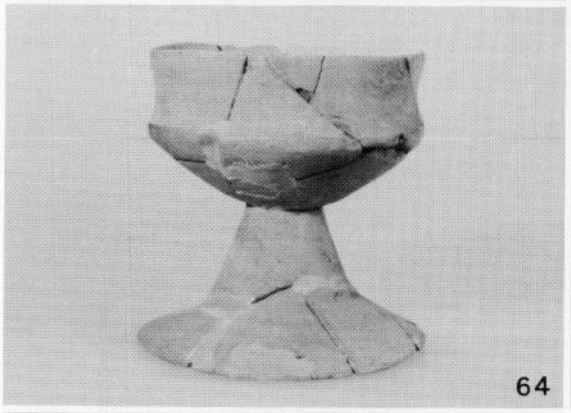

58

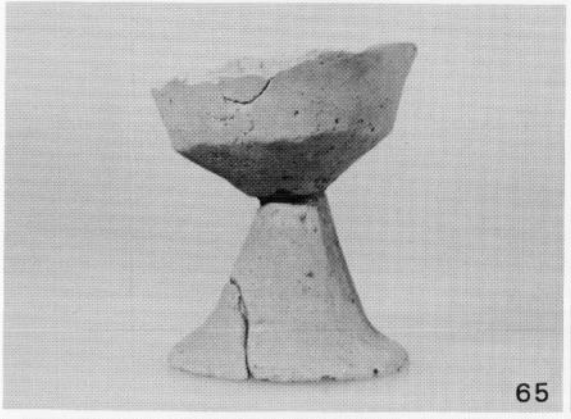
1号墳出土須恵器



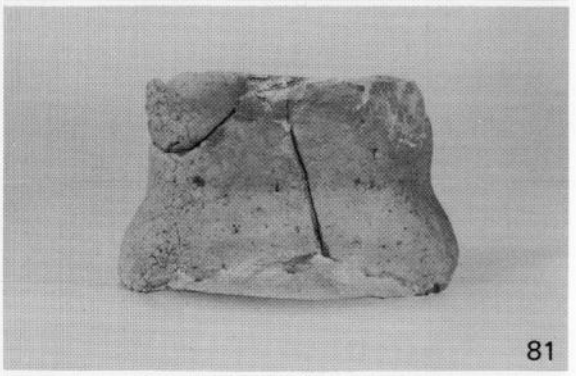
1号墳出土須恵器・土師器

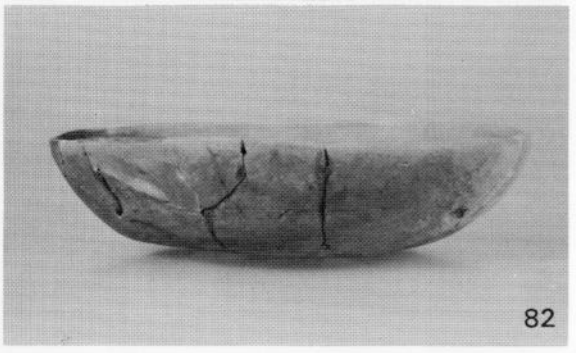


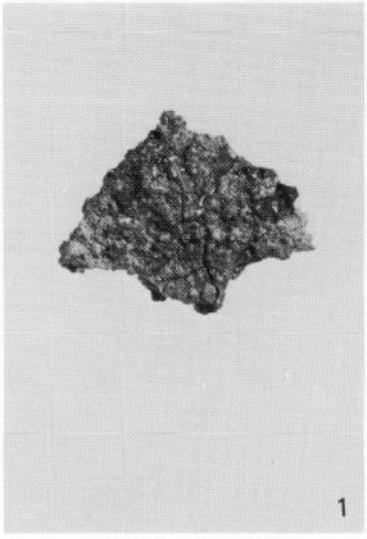


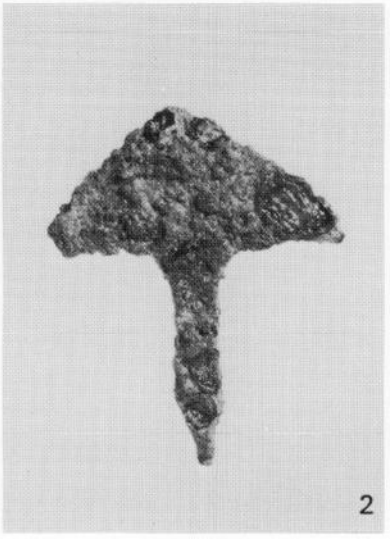


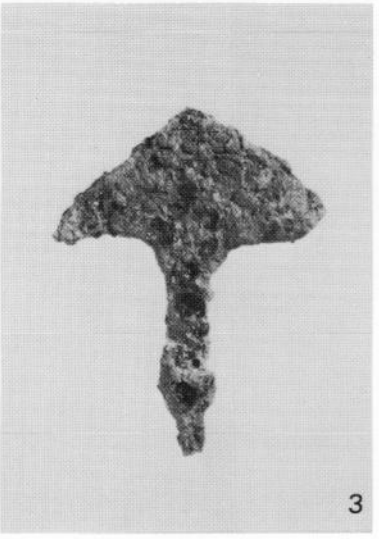
1号墳出土土師器







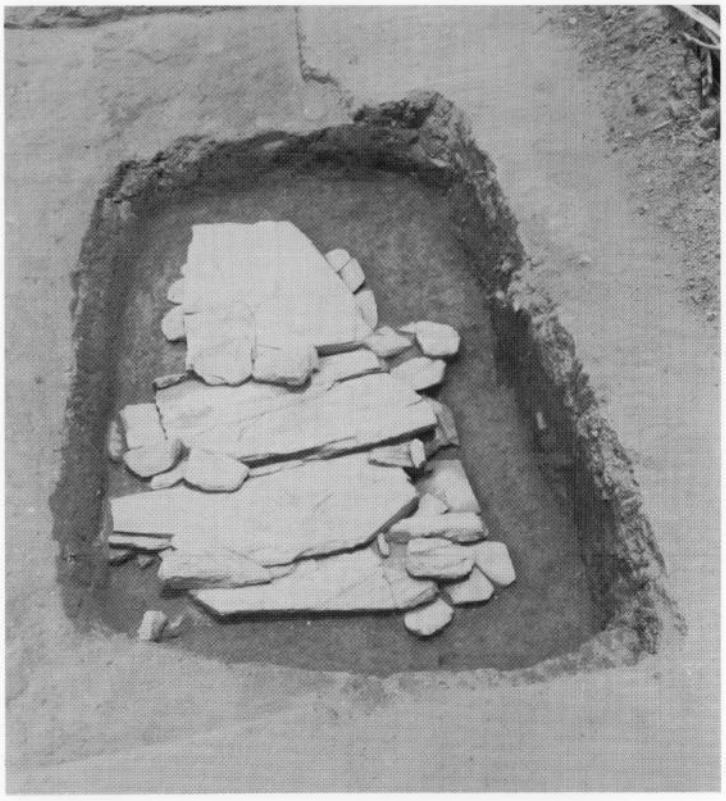




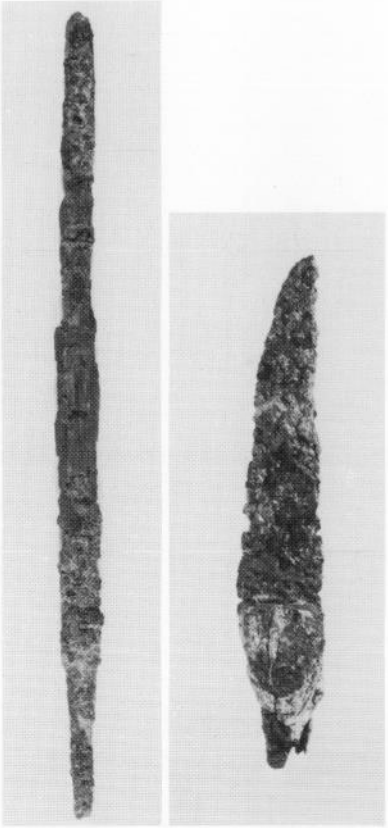
1号墳出土土師器・鉄器

(1)　C－1，C－2　遠景　（西から）

(2)　C－1　全景

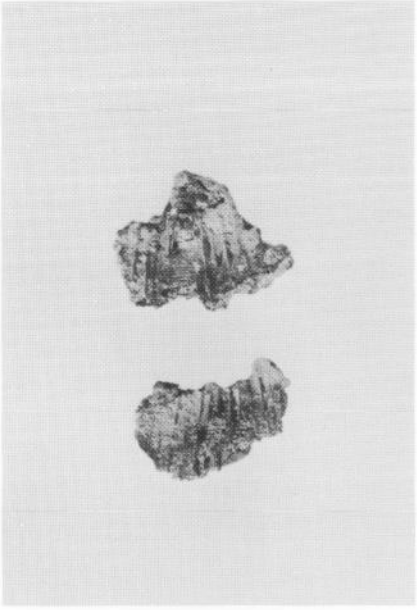


(1)　C－1



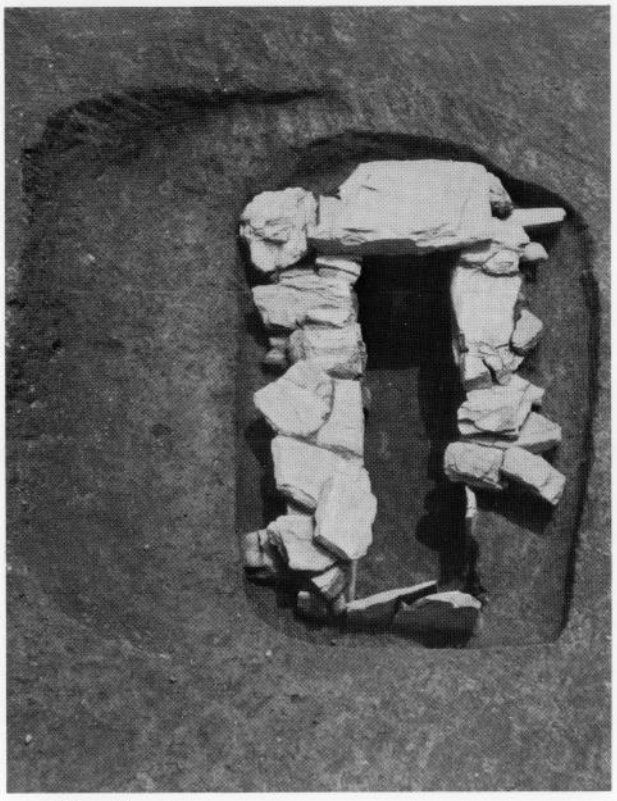
(3)　棺内出土鉄刀・鉄刀子

(2)　C－1

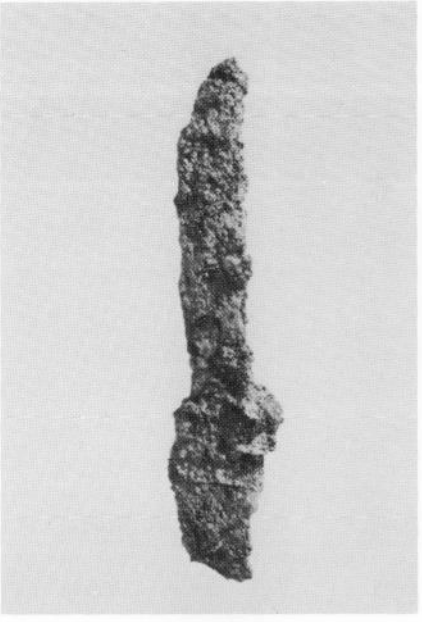


(4)　棺内出土櫛

(1)　C－2

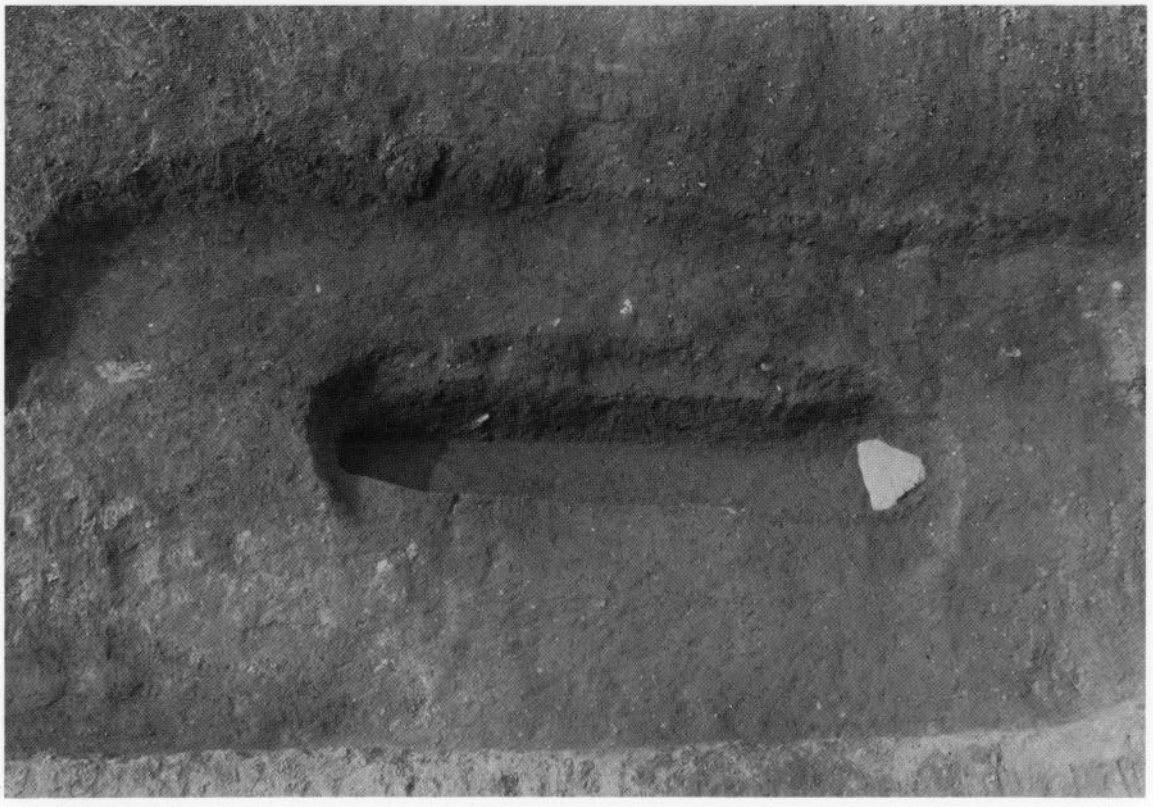


(2)　C－2



(3)　棺内出土鉄刀子

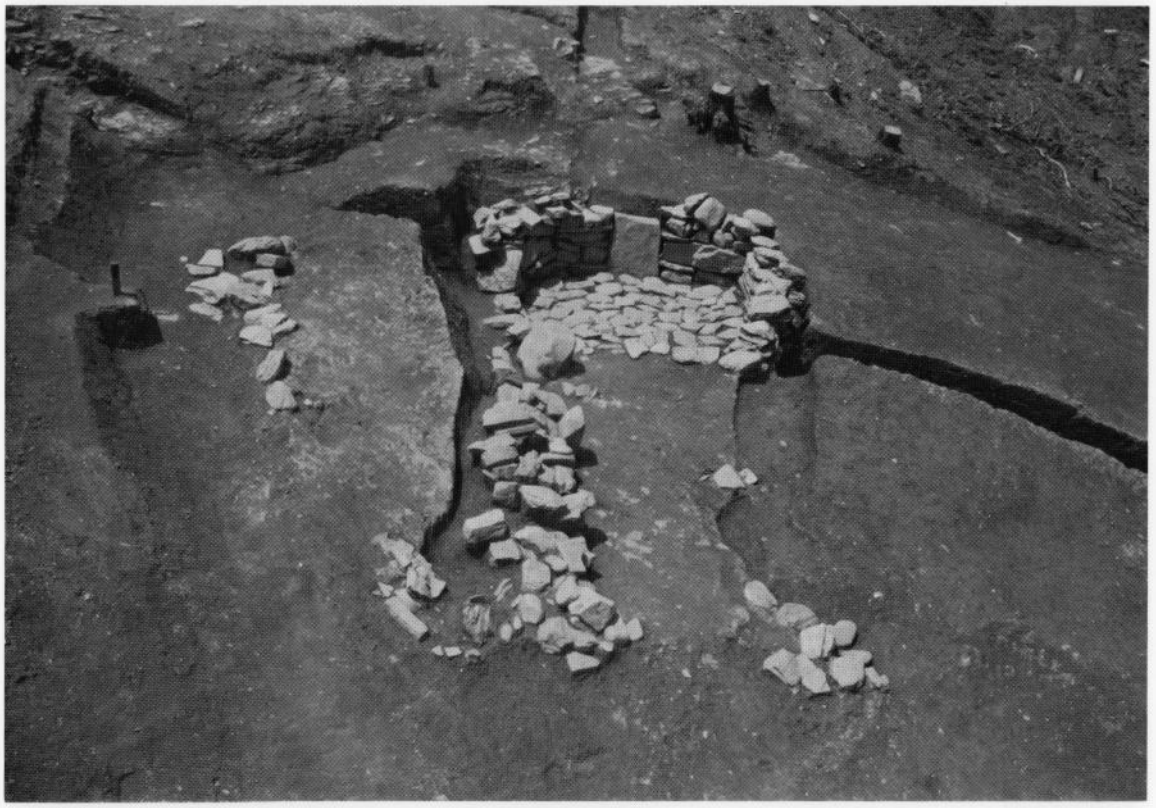
(1) D－1



(2) D－1

(1)　H地区全景（北から）

(2)　H地区全景（南から）

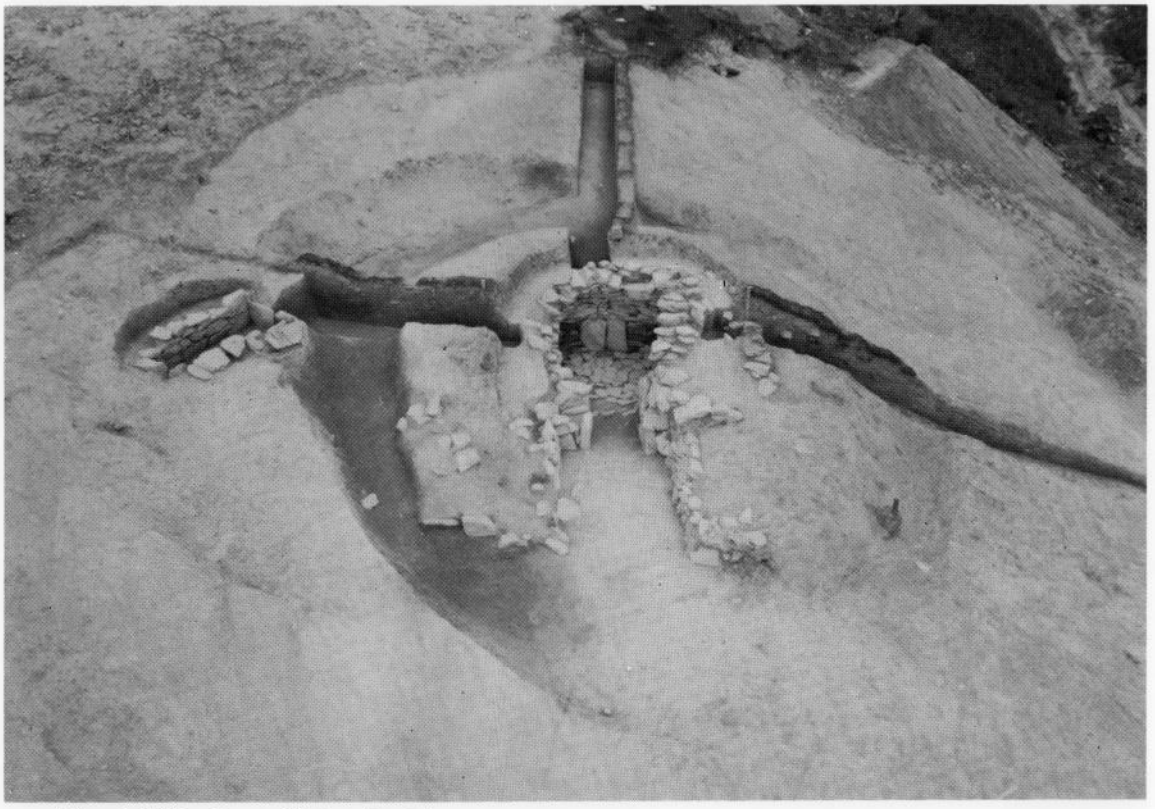


(1)　1号墳全景

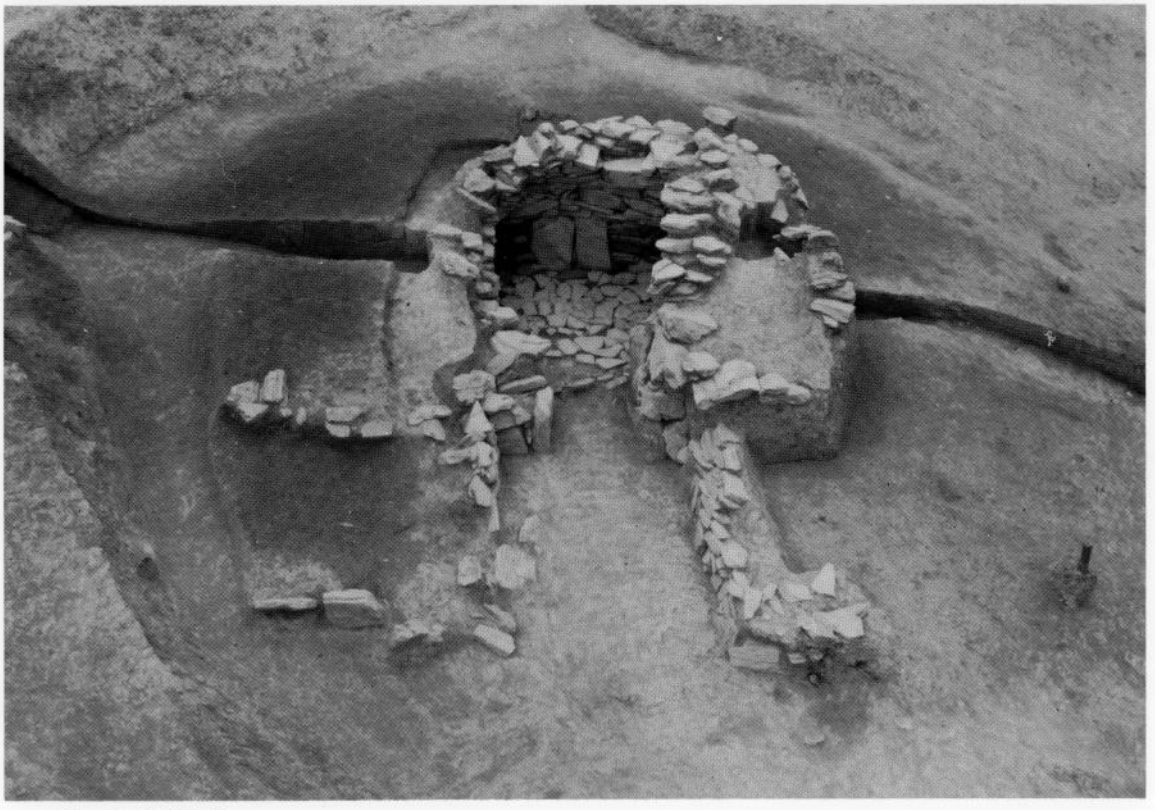
(2)　1号墳玄室左側壁

(1)　1号墳羨道部左壁

(2)　1号墳出土遺物



(1)　2号墳，C－4遠景（南から）



(2)　2号墳全景

(1)　2号墳石室前面

(2)　2号墳玄室奥壁

(1)　2号墳玄室右側壁

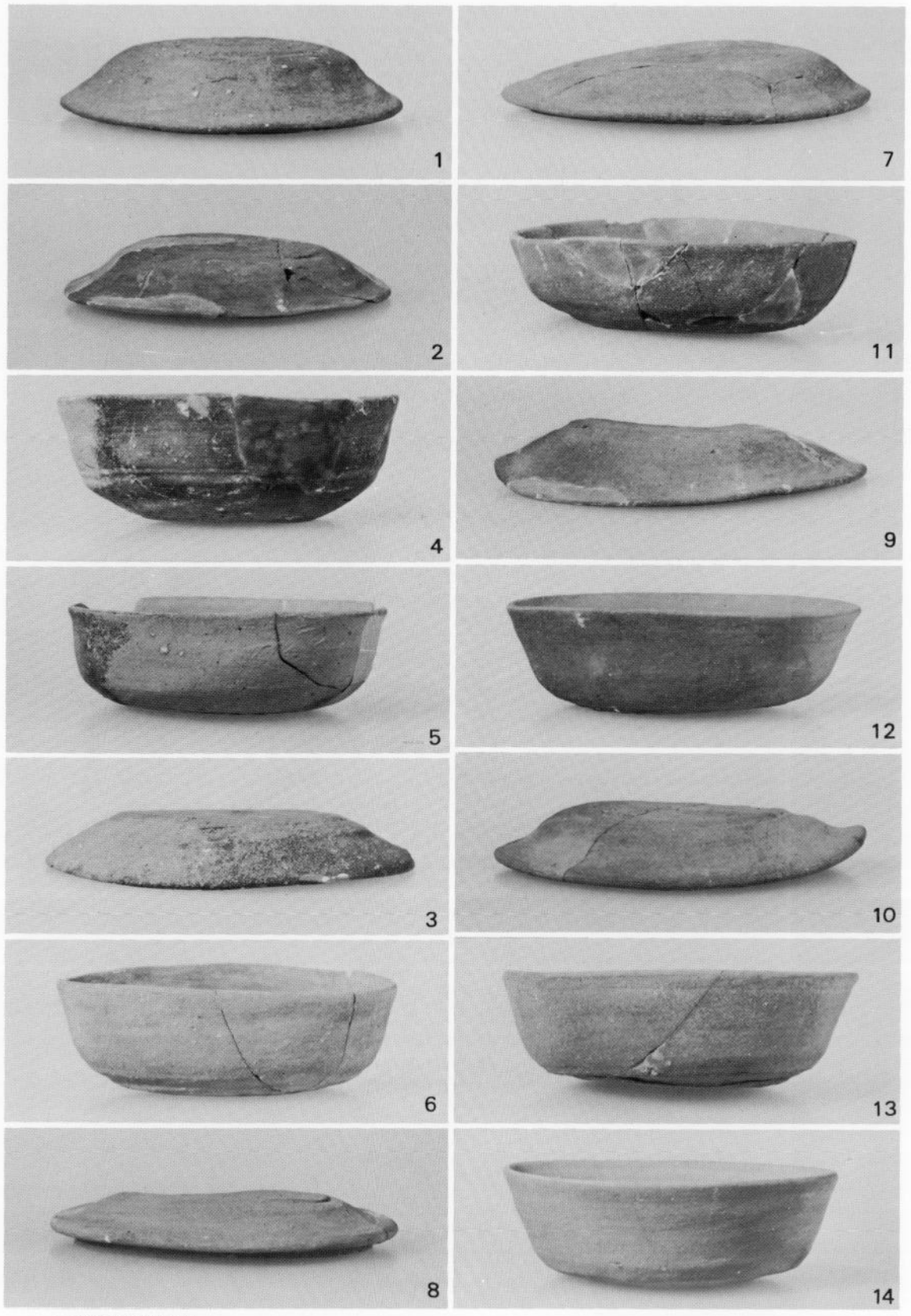
(2)　2号墳羨道部右壁

(1)　2号墳前庭部右壁

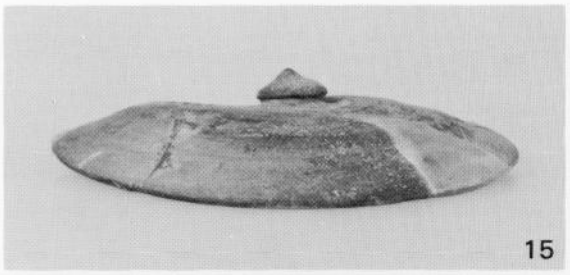
(2)　2号墳前庭部遺物出土状況

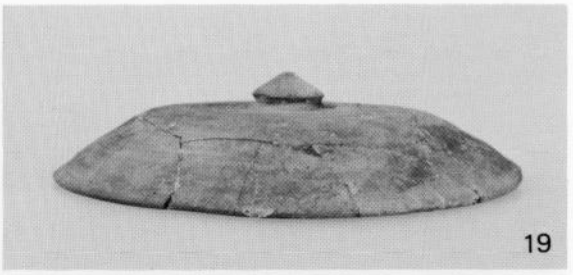
(1)　2号墳閉塞・遺物出土状況

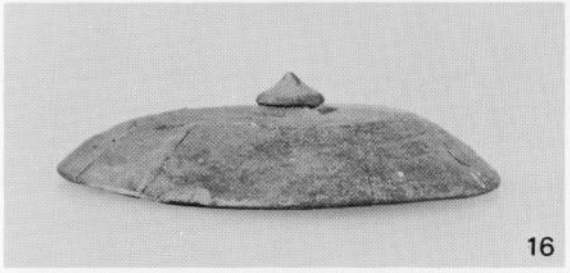
(2)　2号墳閉塞状況（玄室より）



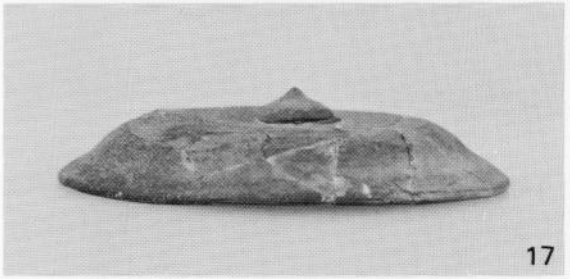
2号墳出土須恵器


15

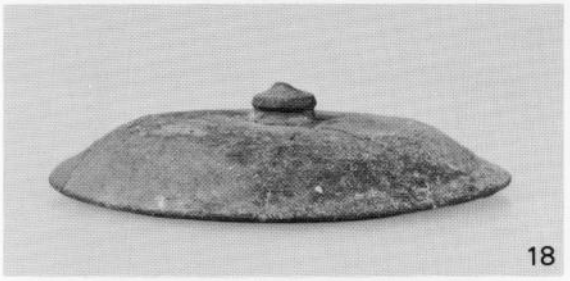

19

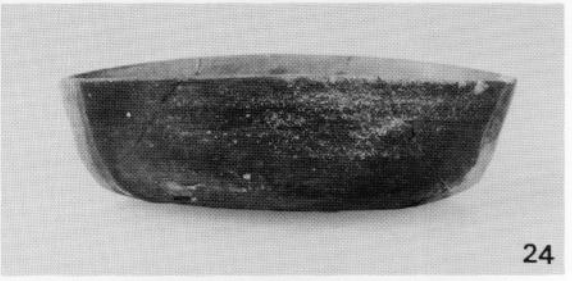

16

21

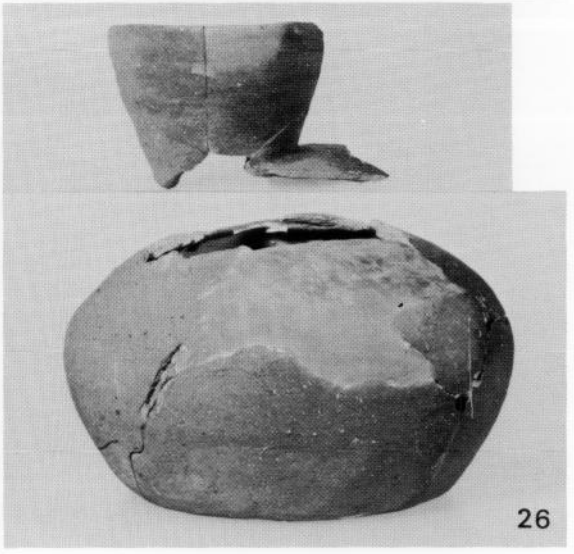

17

23


18

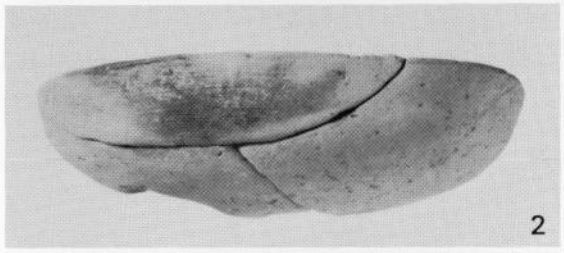

24

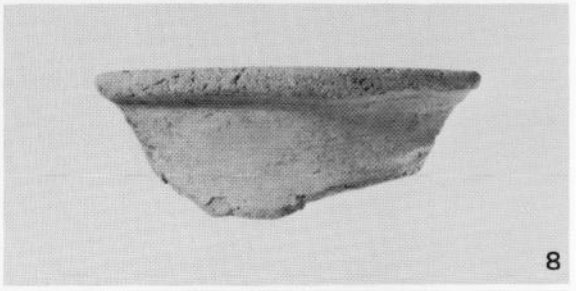
20

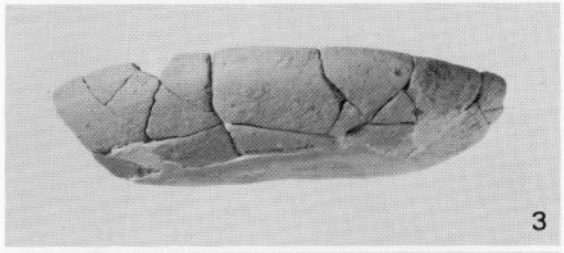

26

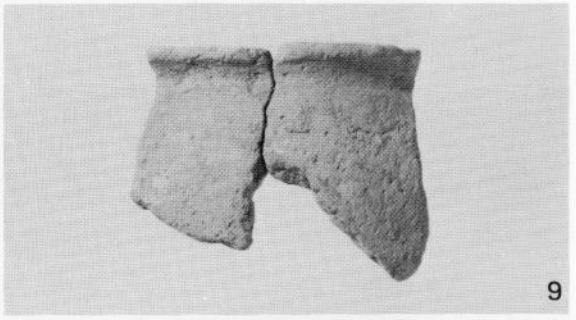
22

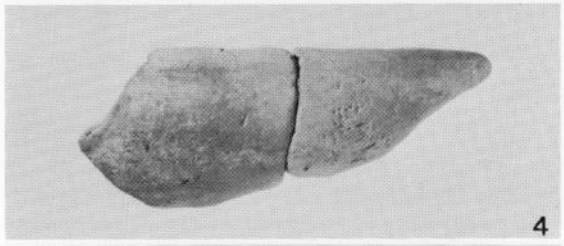
2号墳出土須恵器

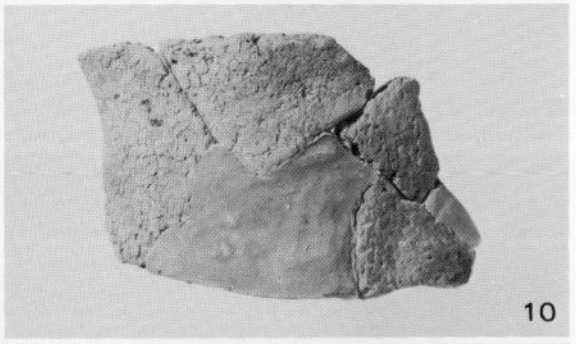


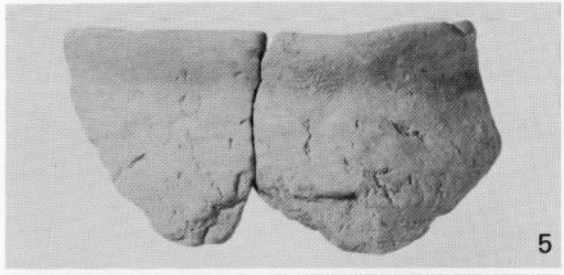


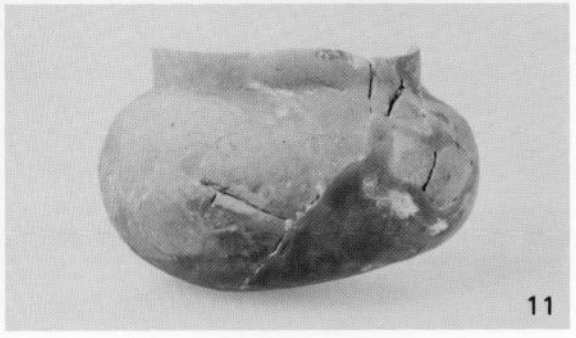


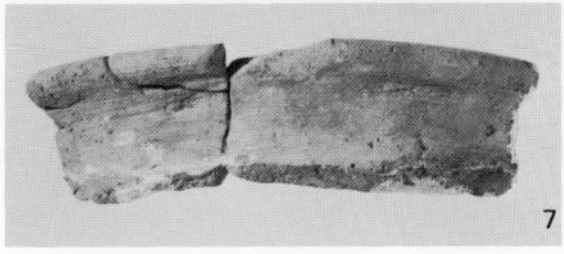












2号墳出土須恵器・土師器

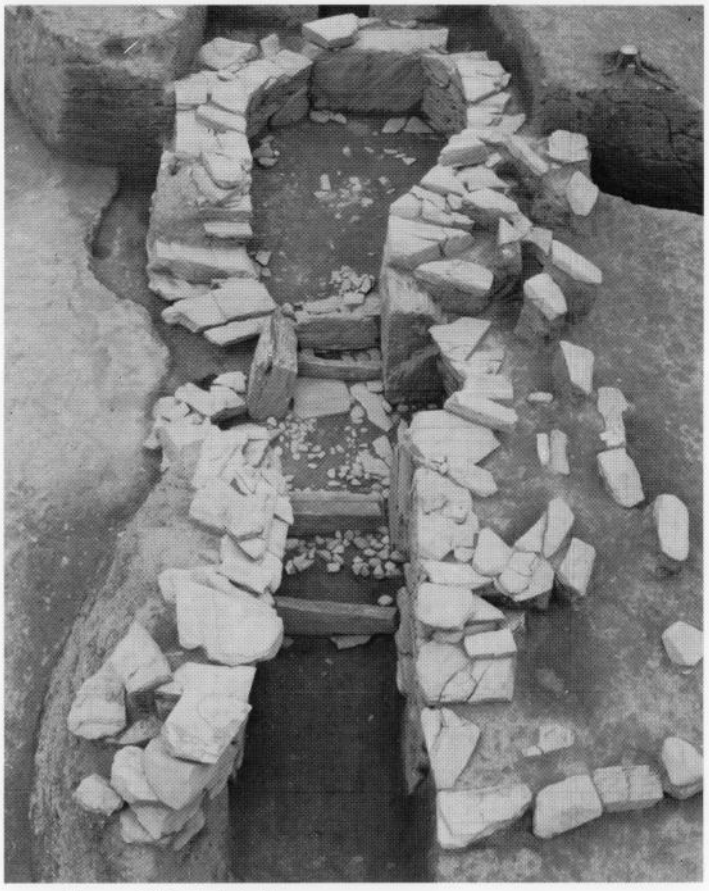
(1)　3号墳全景（調査前，北から）

(2)　3号墳全景

(1)　3号墳内護列石全景

(2)　3号墳内護列石全景

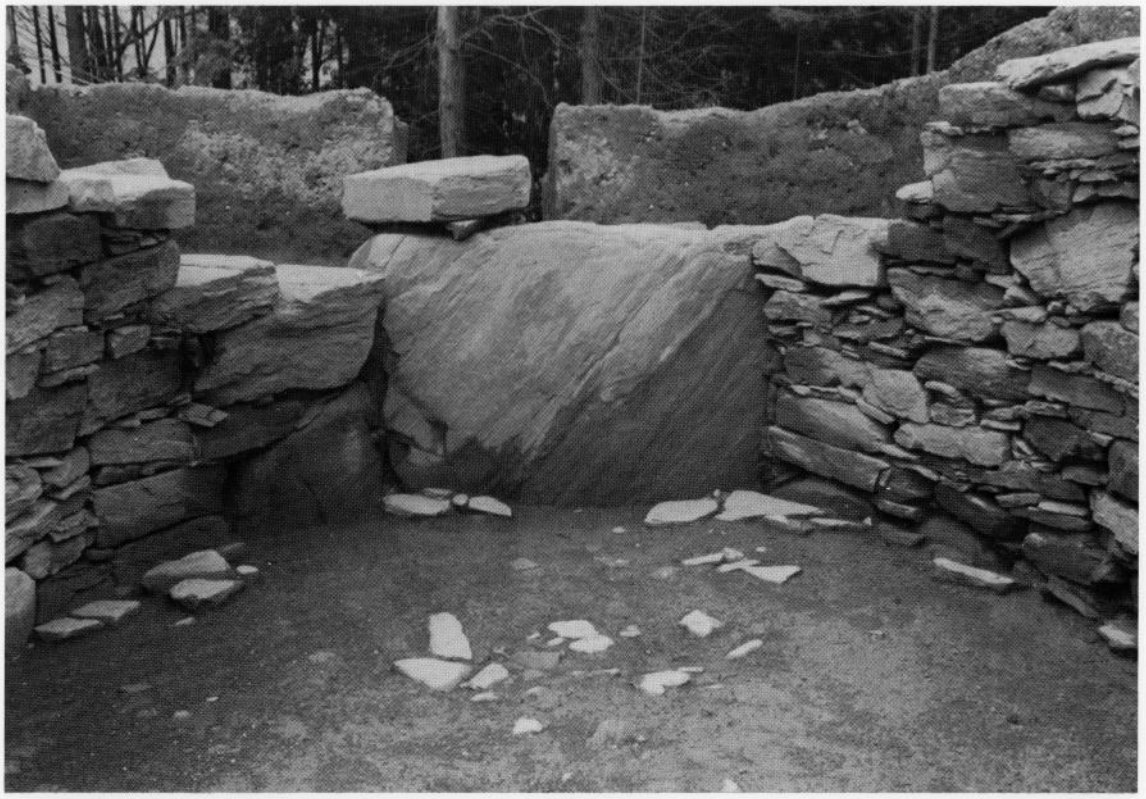
(1)　3号墳内護列石全景



(2)　3号墳石室全景

(1)　3号墳玄室右側壁

(2)　3号墳羨道部右壁



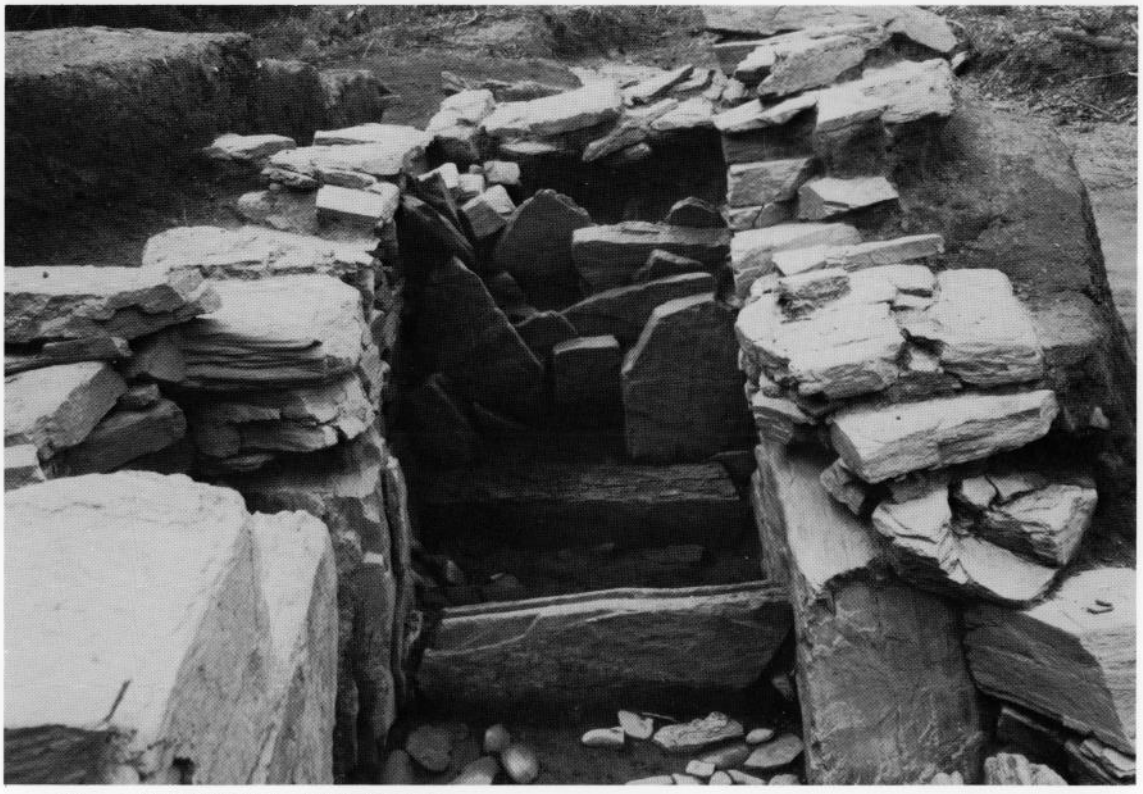
(1) 3号墳玄室奥壁

(2) 3号墳玄室玄門

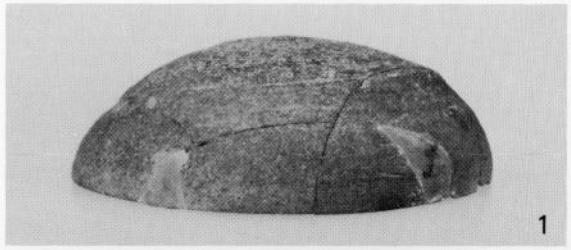
(1)　3号墳玄門部仕切石

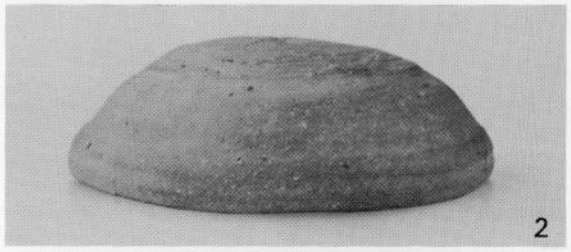
(2)　3号墳前室遺物出土状況

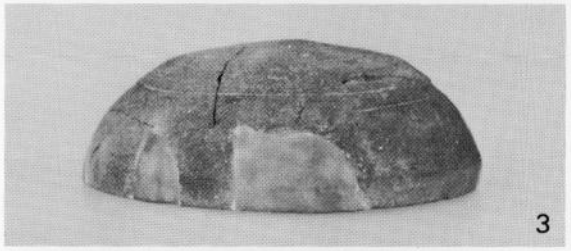
(1)　3号墳閉塞状況（墓道より）

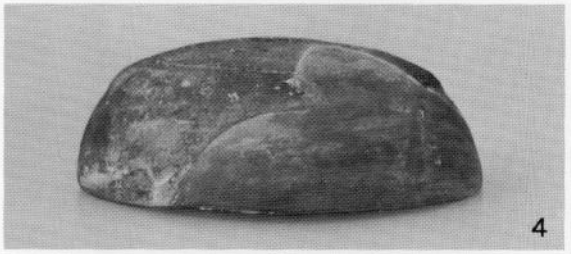


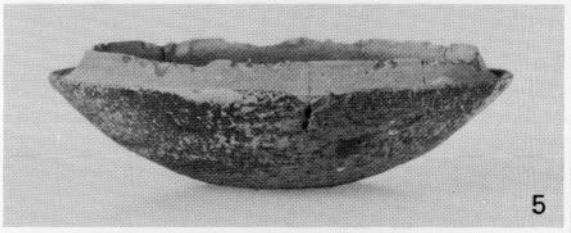
(2)　3号墳閉塞状況（玄室内より）

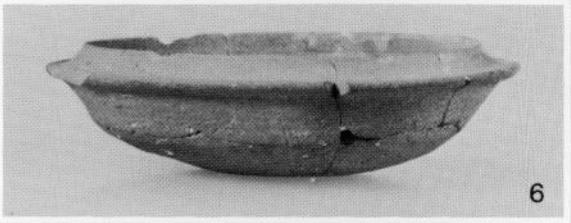


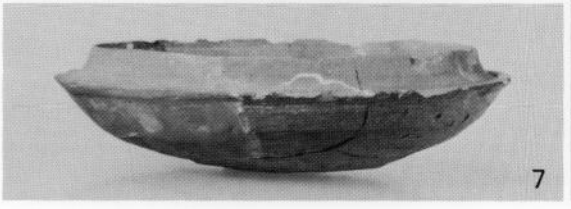


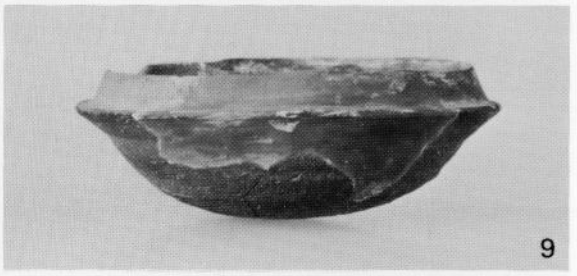


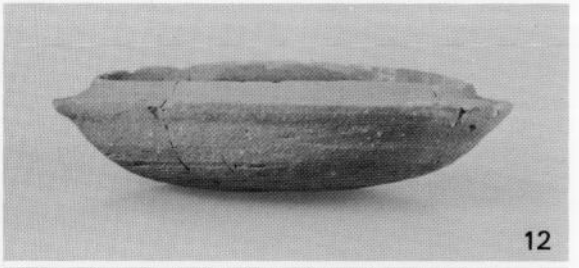












3号墳出土須恵器

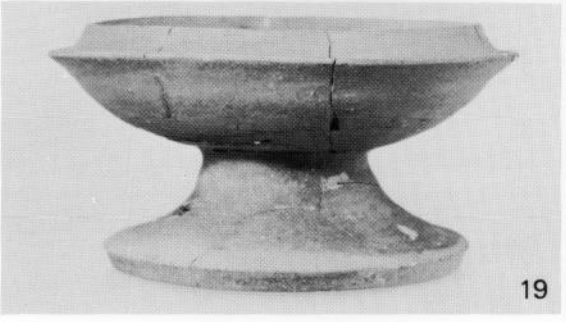
14

15

16

17

18


19

20

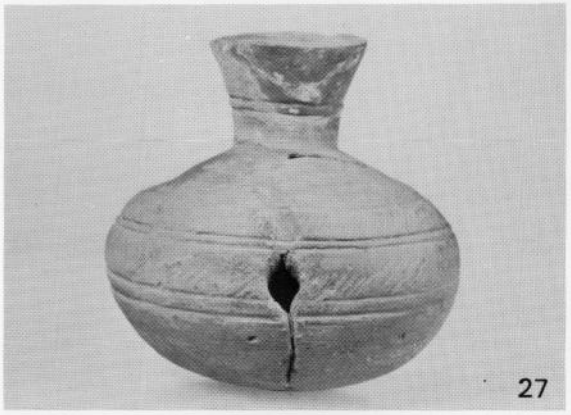
21

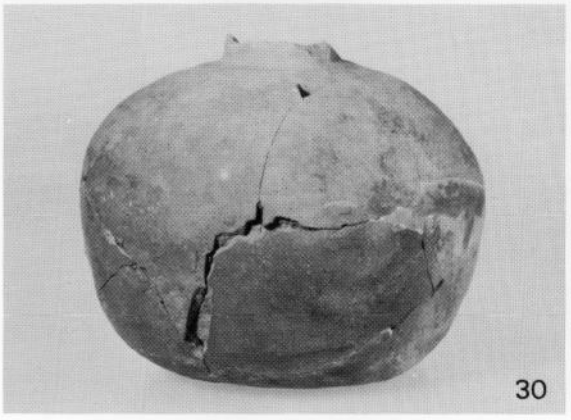
22

23

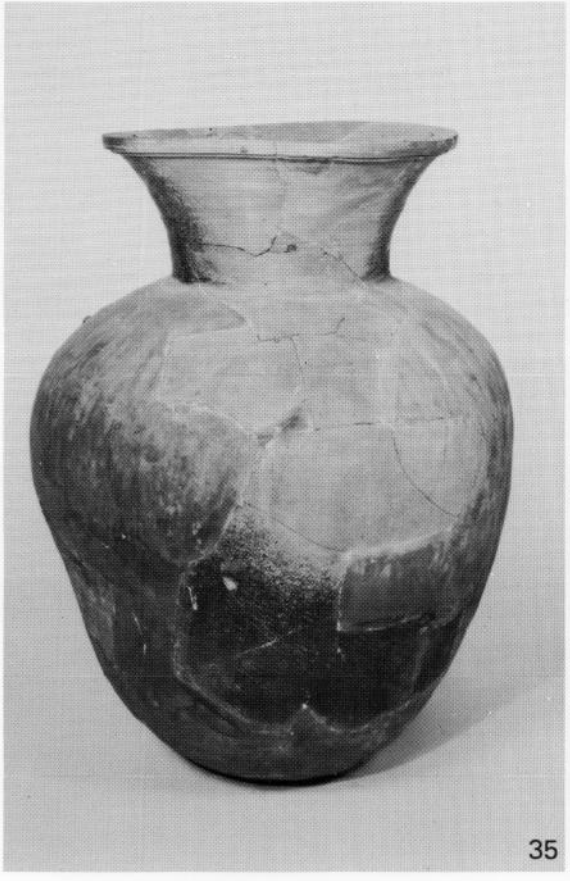
24

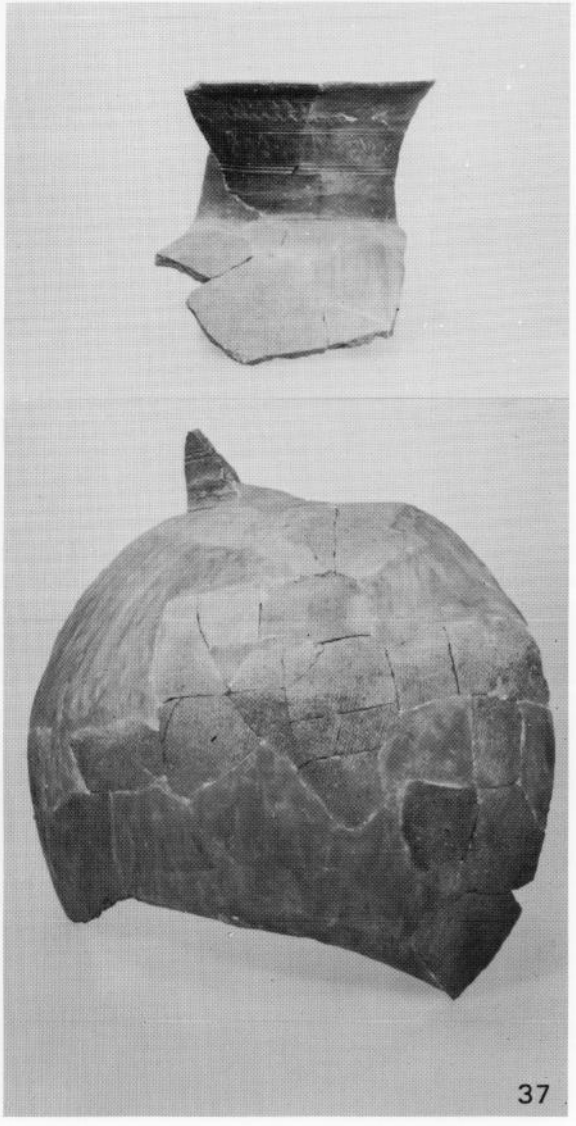
3号墳出土須恵器



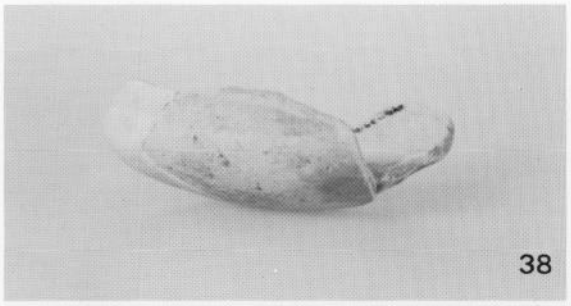


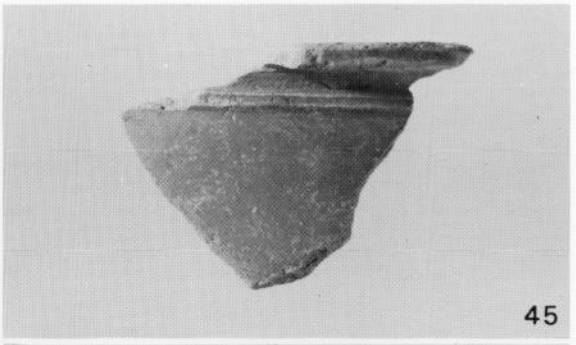
3号墳出土須恵器

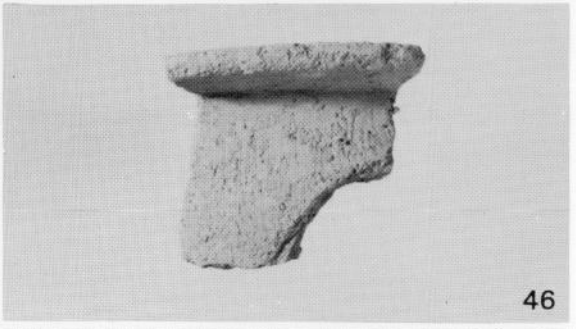


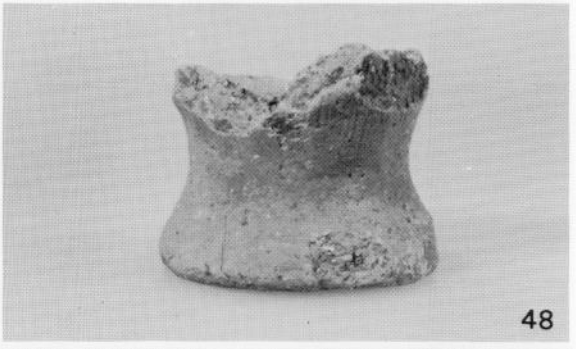


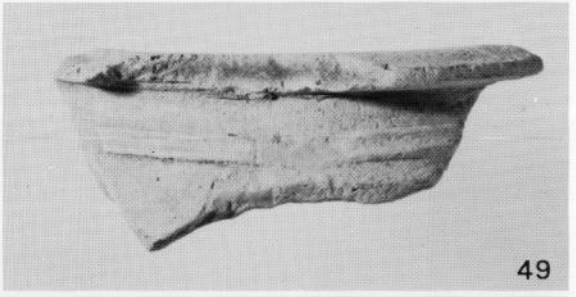
3号墳出土須恵器

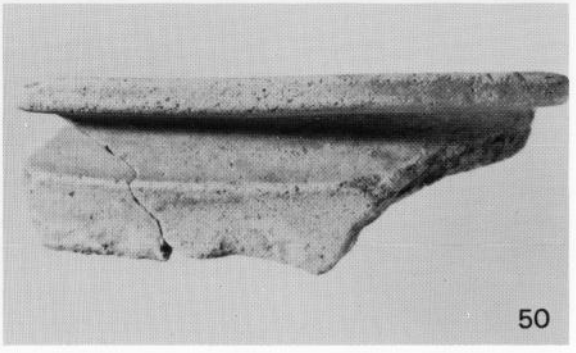




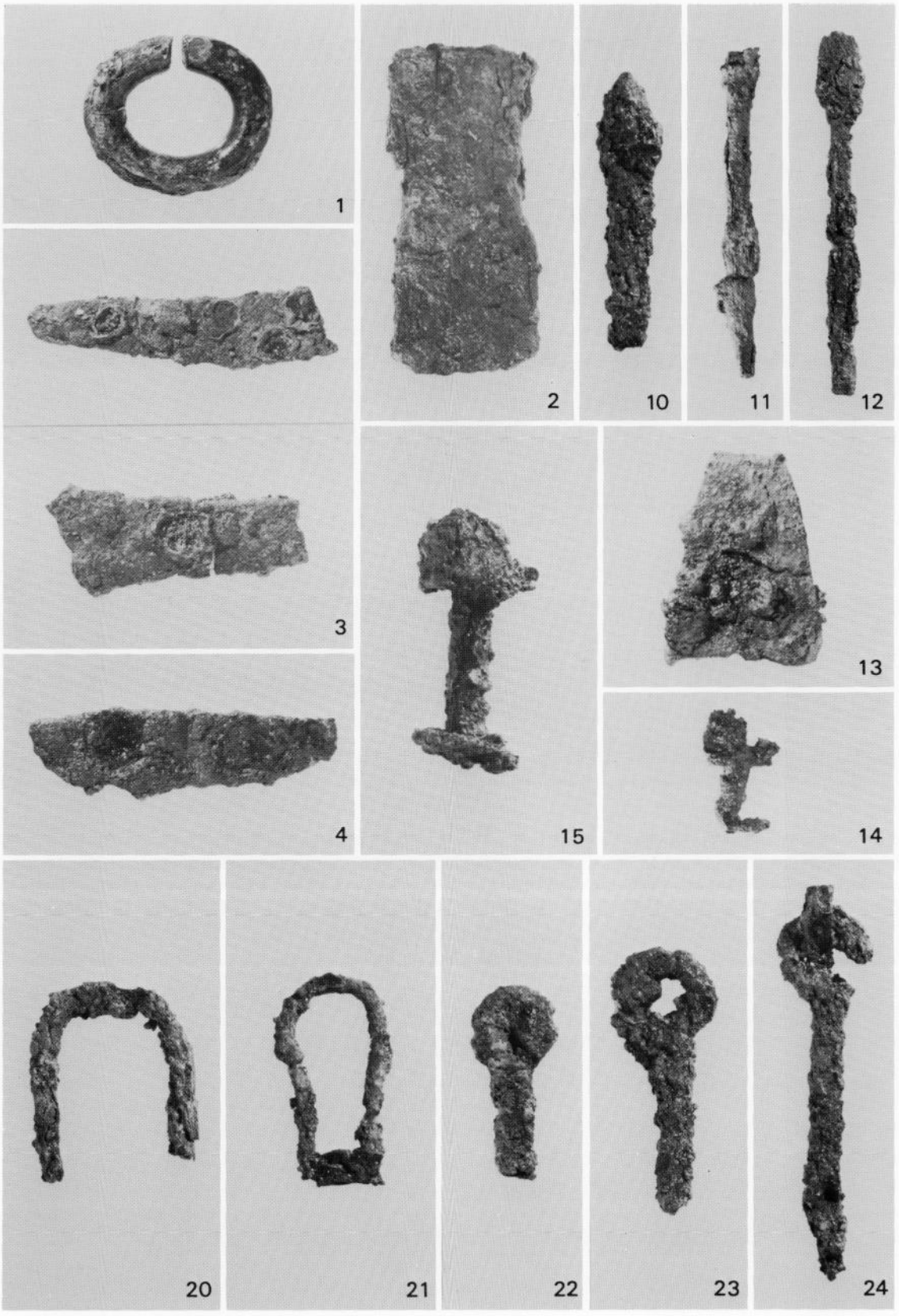




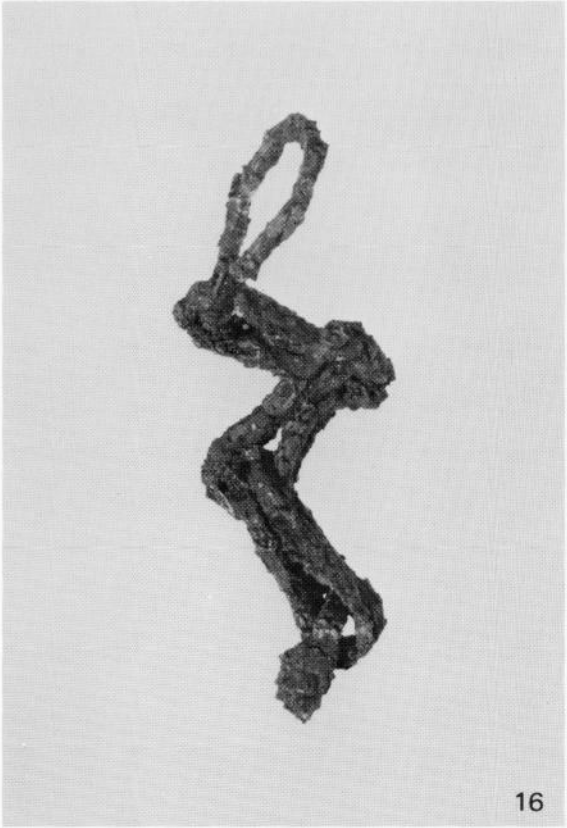


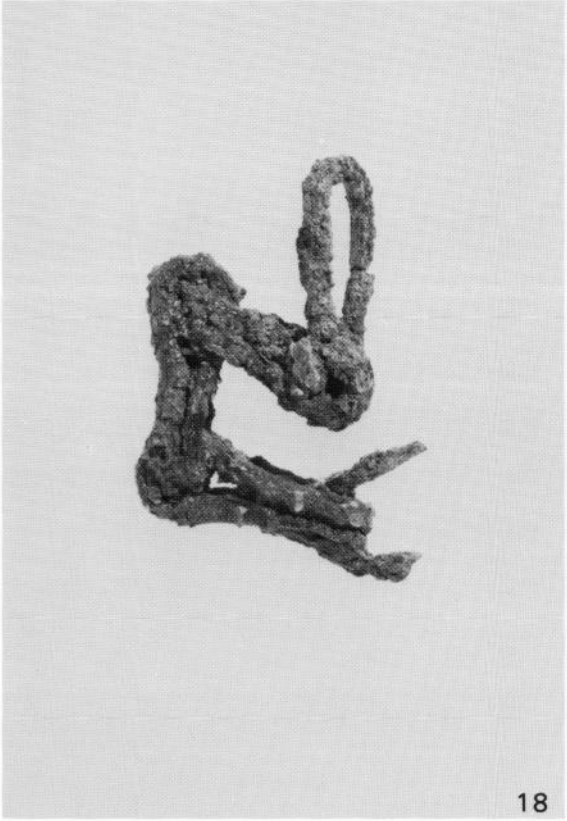


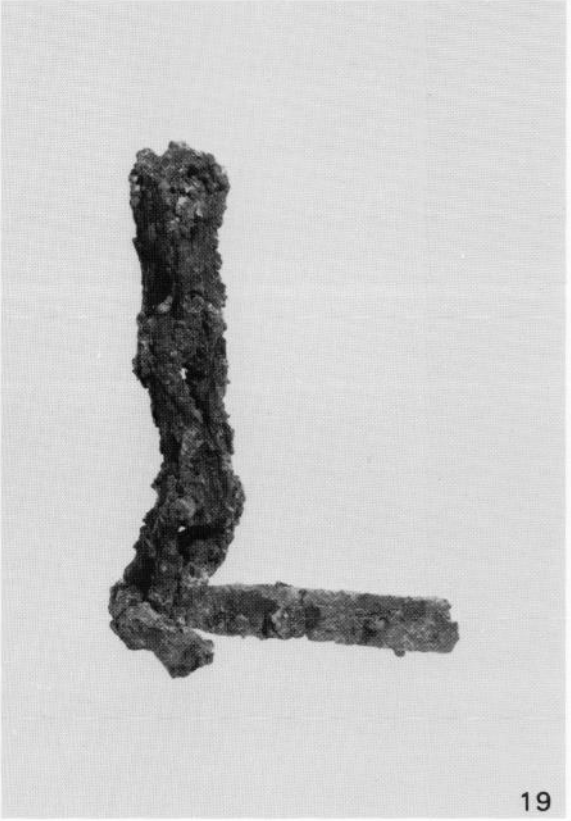
3号墳出土土師器・弥生式土器



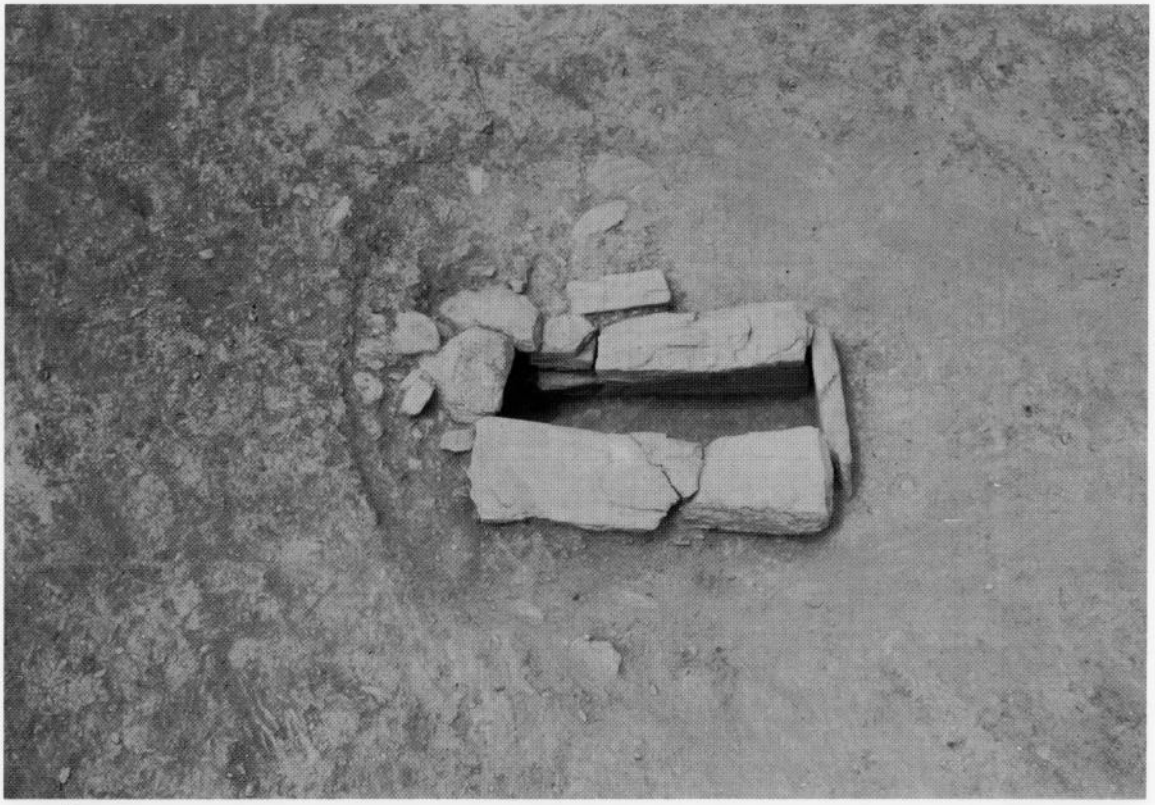
3号墳出土耳環・鉄器・馬具





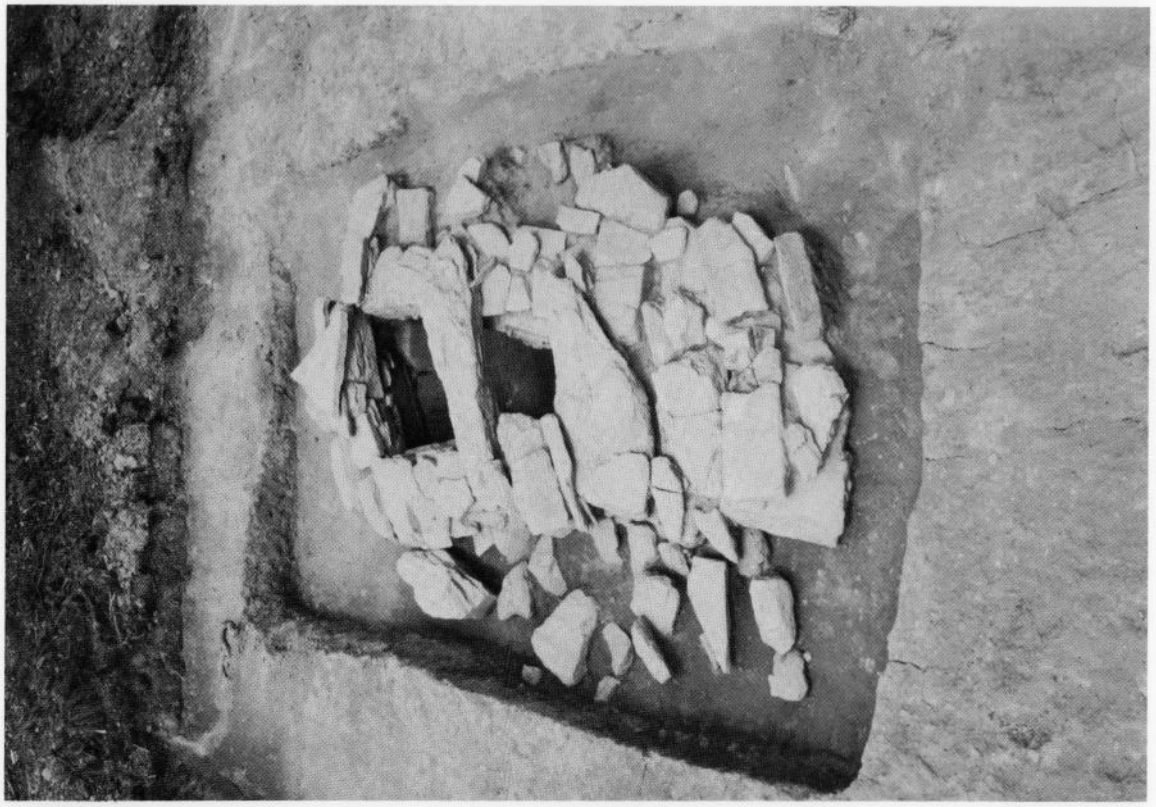


3号墳出土馬具



(1) C－1

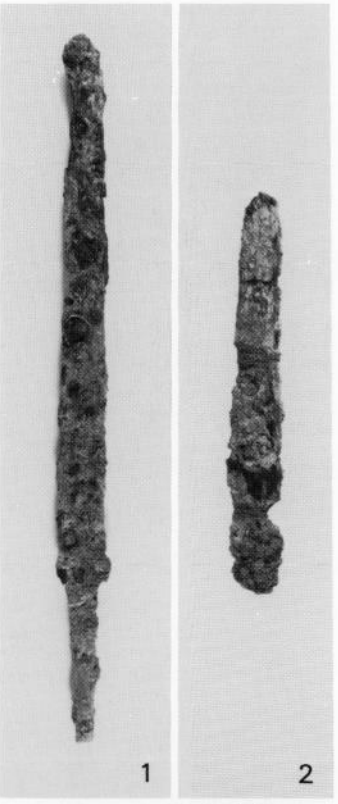
(2) C－1



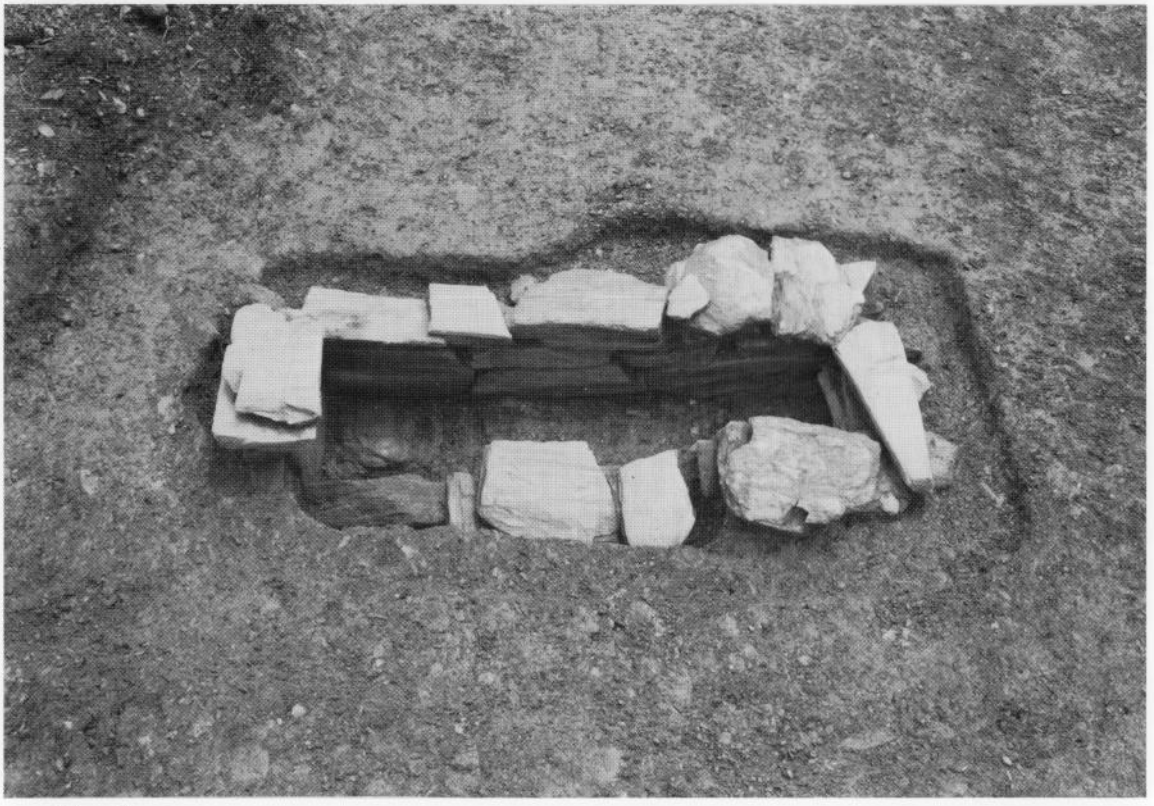
(1)　C—3

(2)　C—3

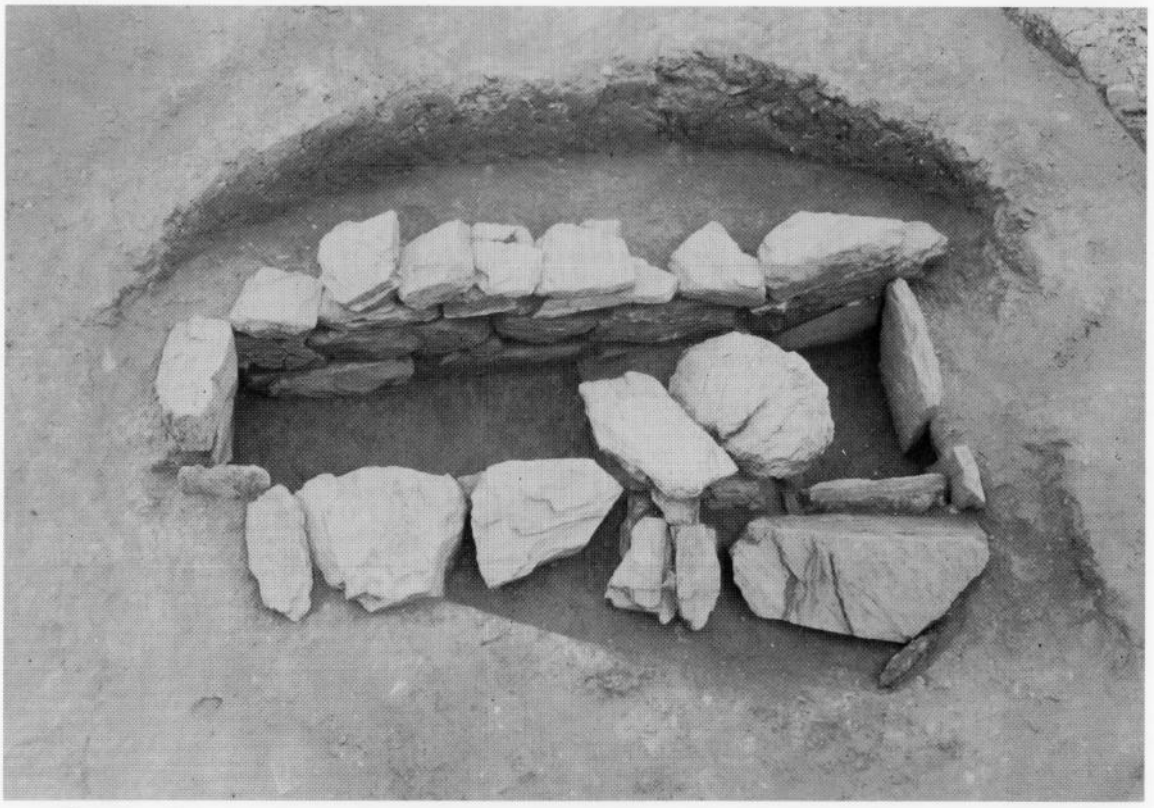
(1)　C－3



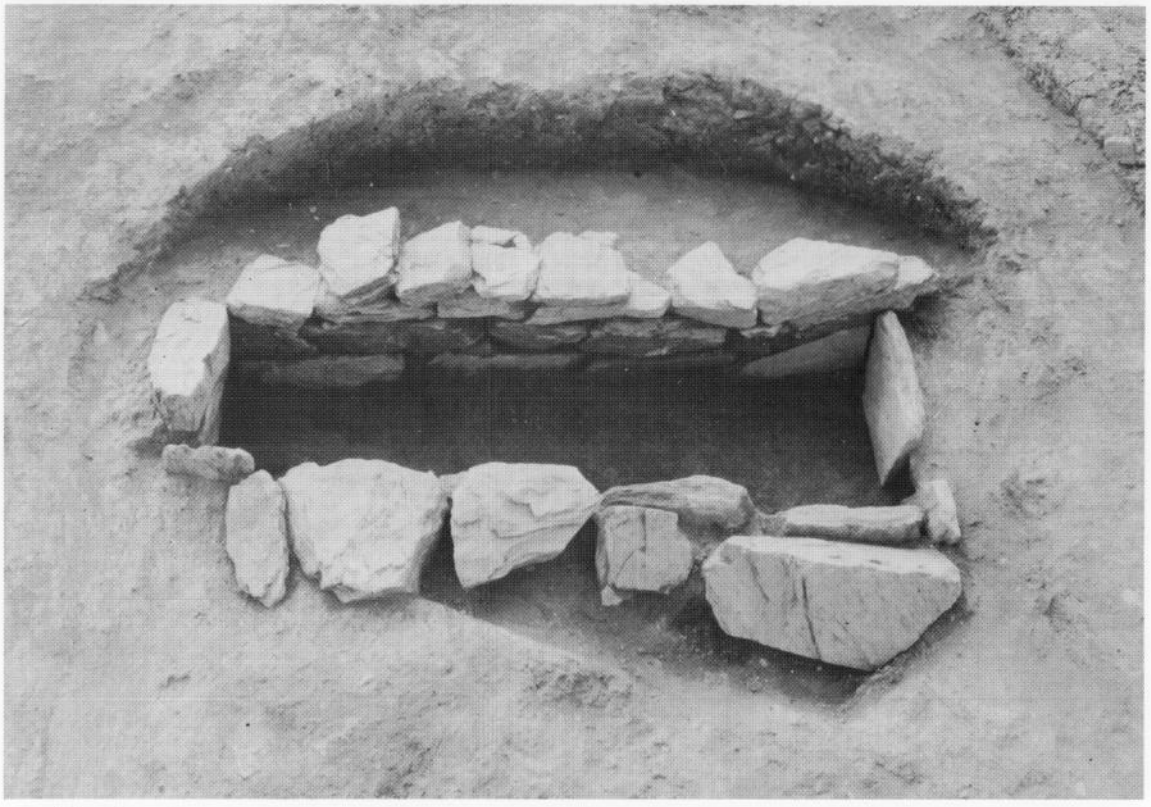
(2)　棺内出土遺物



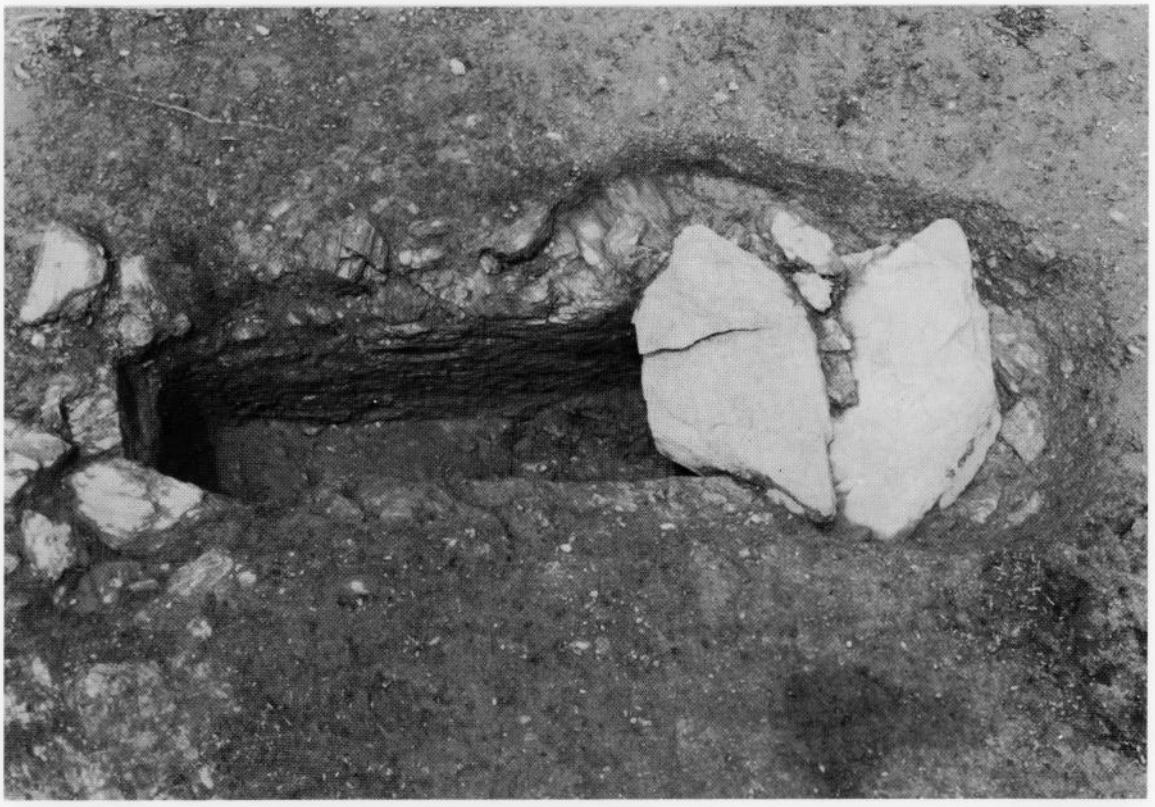
(3)　C－2



(1)　C－4

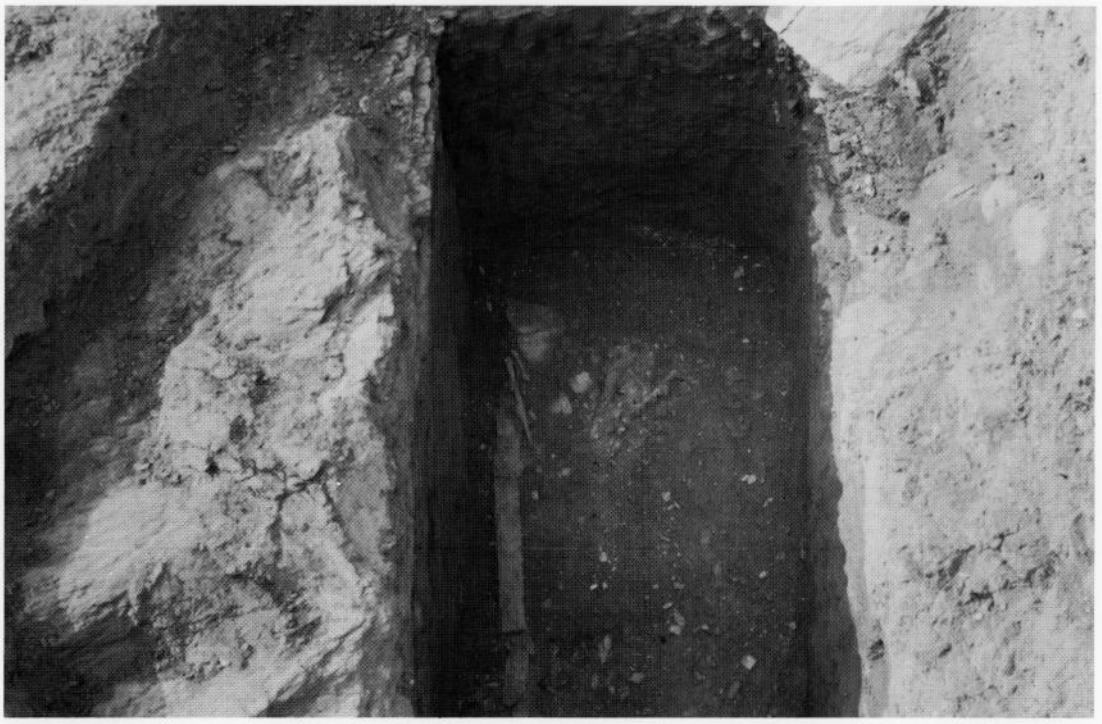


(2)　C－4

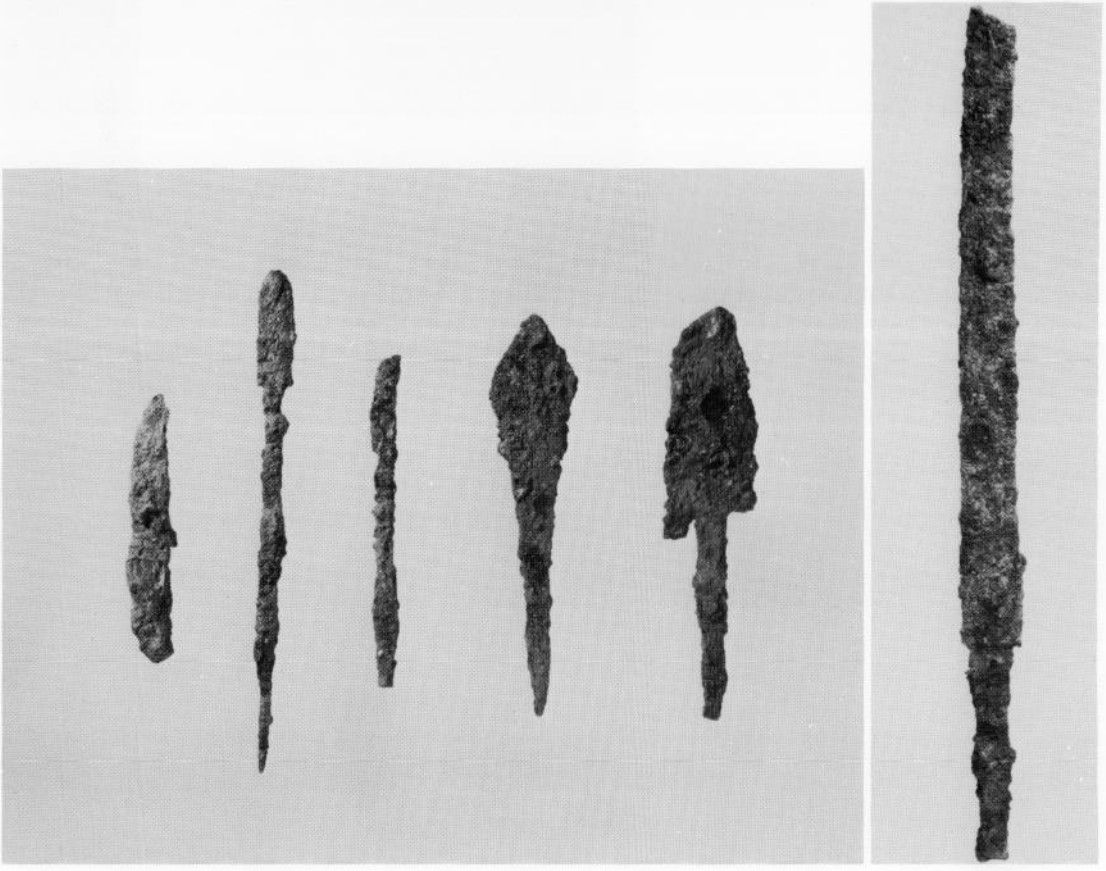


(1) D－1

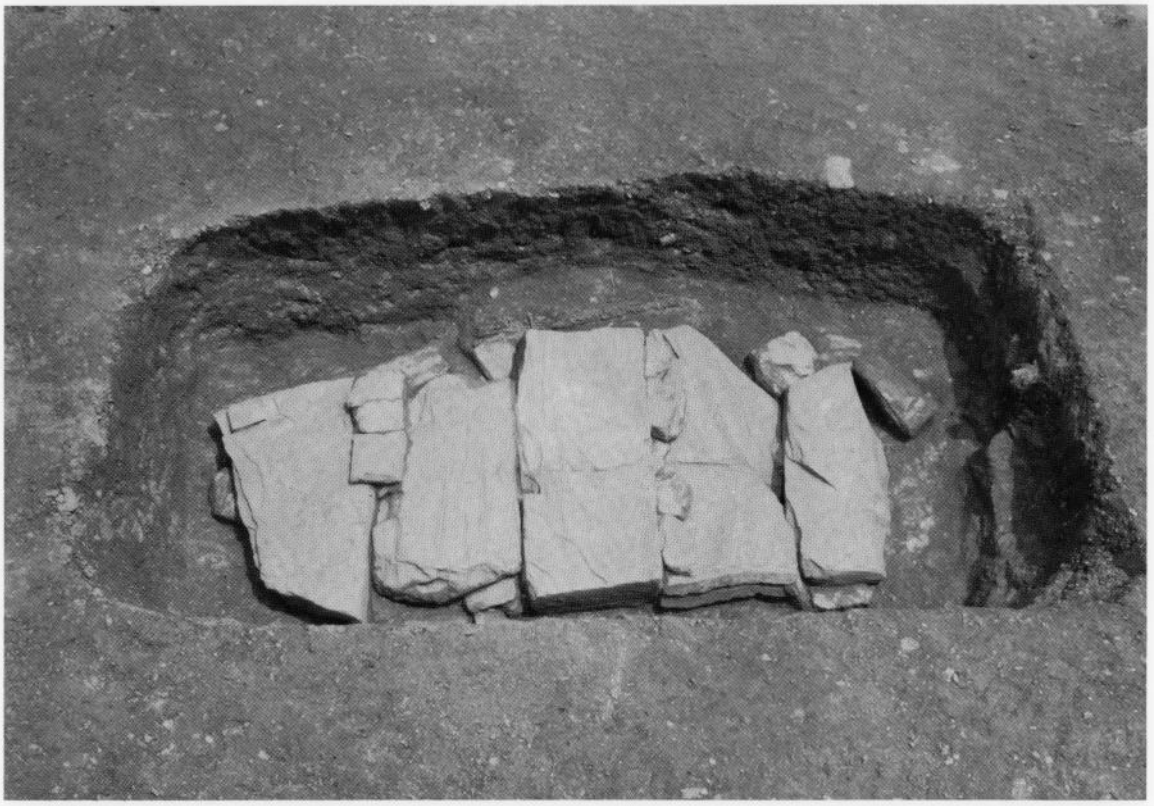
(2) D－1



(1)　D－1内遺物出土状況

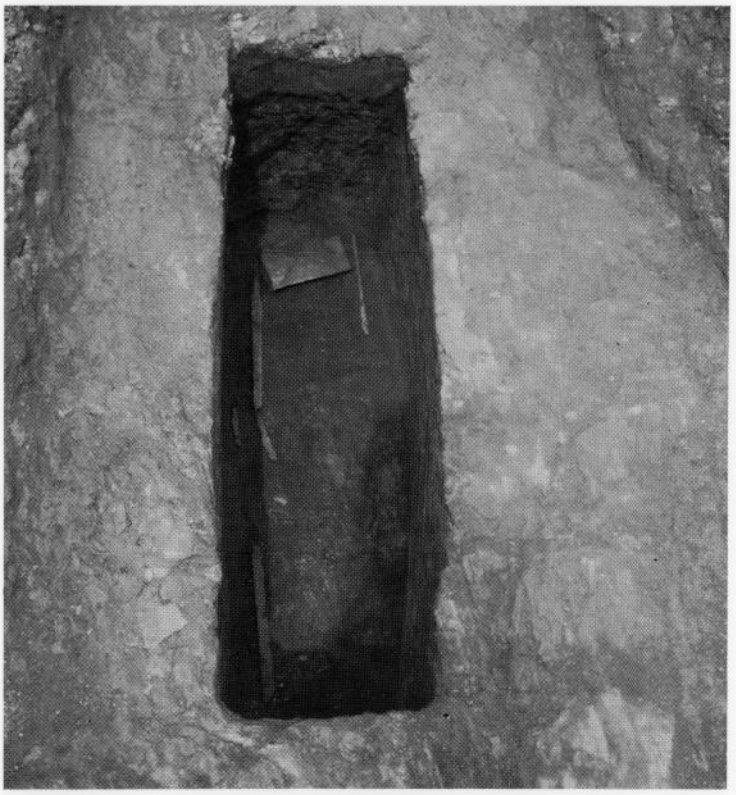


(2)　D－1出土遺物



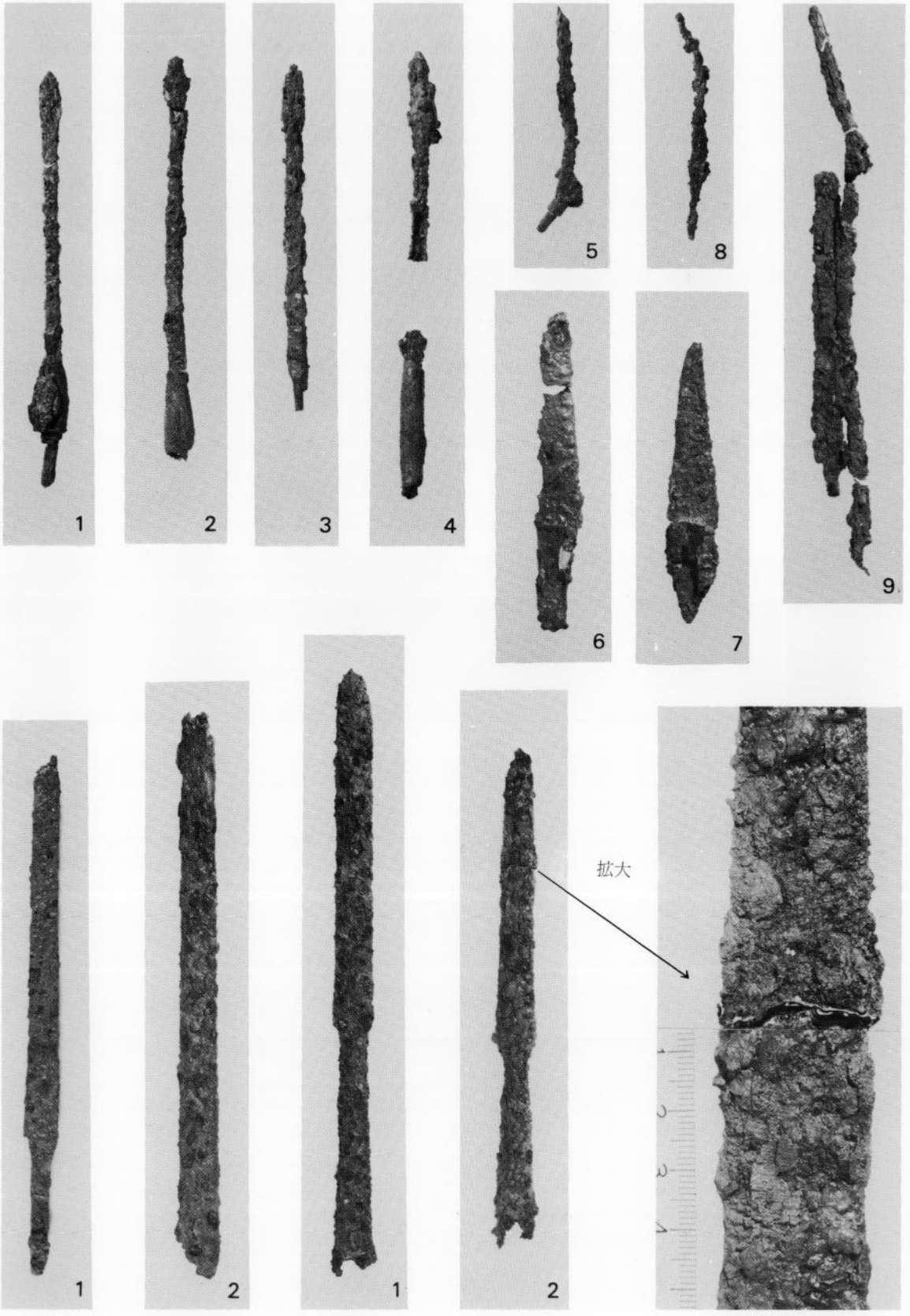
(1) D－2

(2) D－2

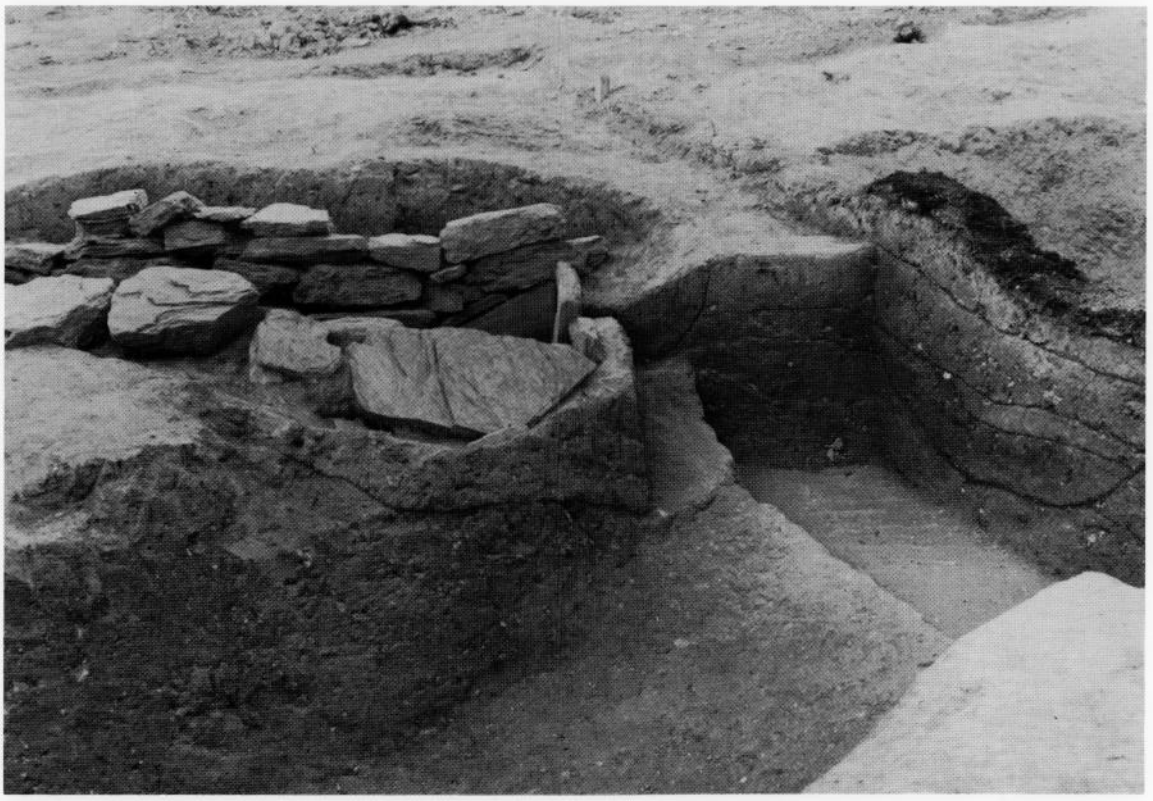


(1)　D－2棺内遺物出土状況

(2)　D－2棺外遺物出土状況

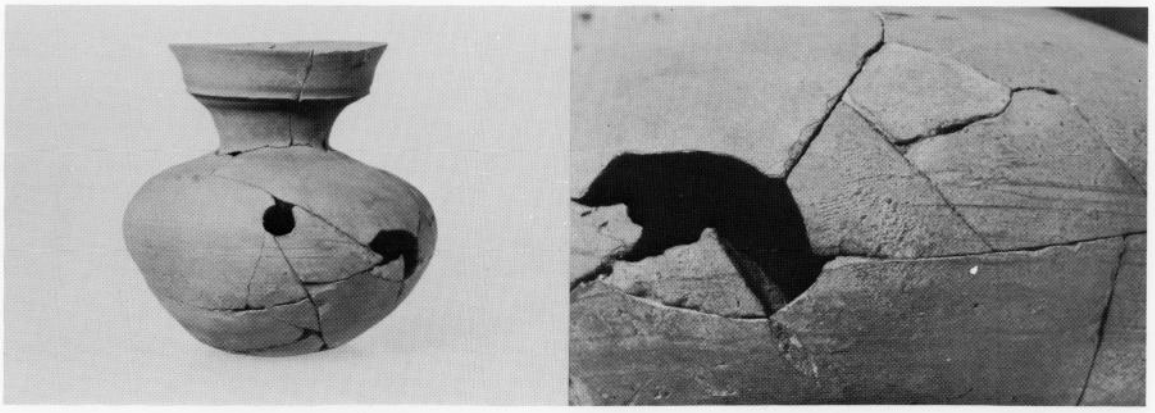


D－2 出土鉄器

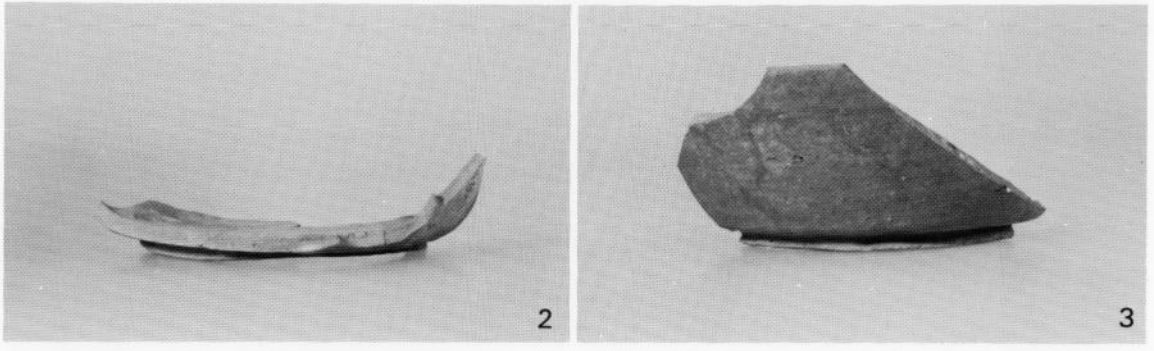


(1)　2号墳周溝とC－4の切合い状況（南東から）

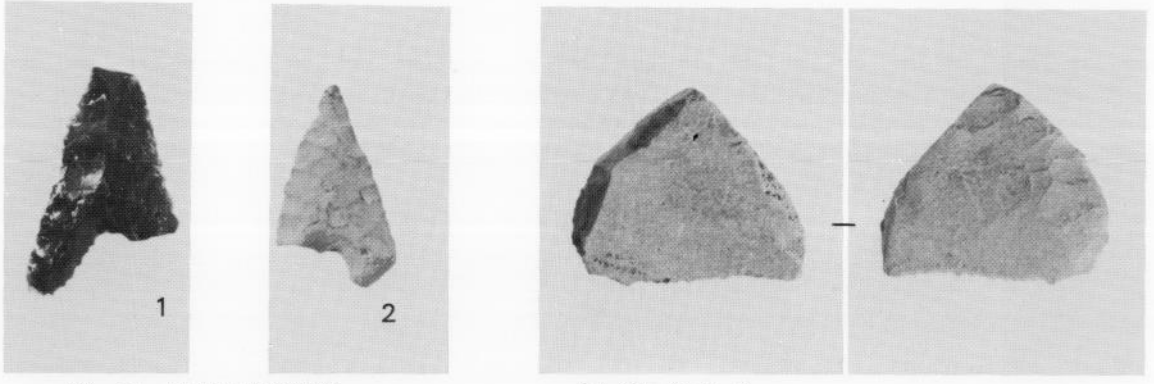
(2)　P－1



(1)　G地区出土陶質土器（右は拡大）

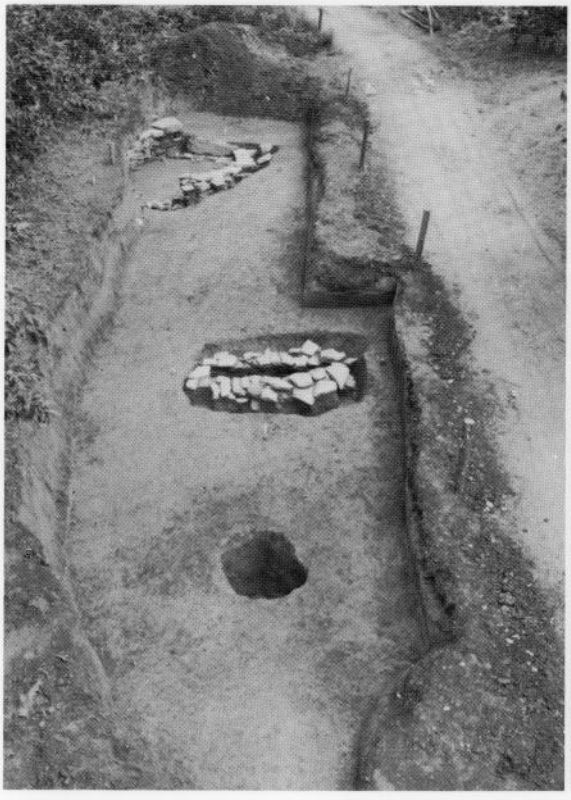


(2)　H地区C－4付近出土須恵器

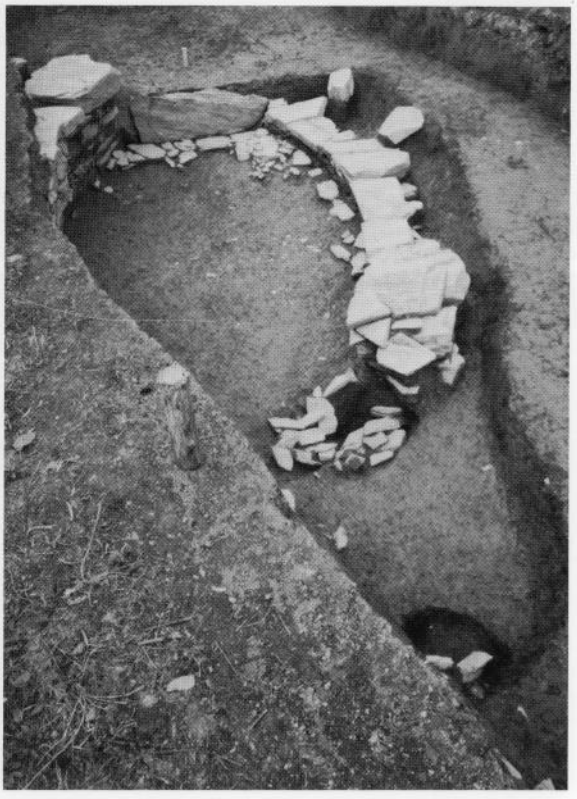


(3)　G・H地区表採遺物　　（スクレイパー）

(1)　S地区遠景（北から）



(2)　S地区全景（南から）

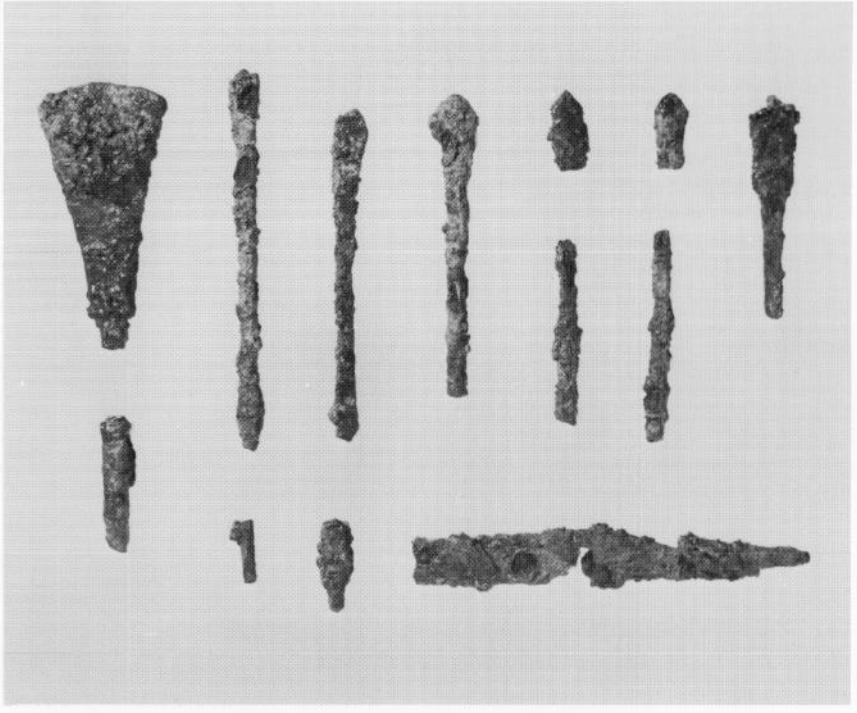


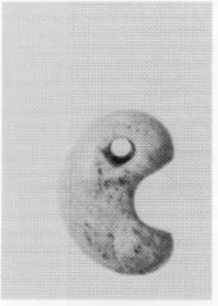
(3)　1号墳

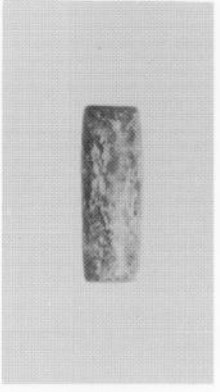
(1)　1号墳石室全景

(2)　1号墳玄室

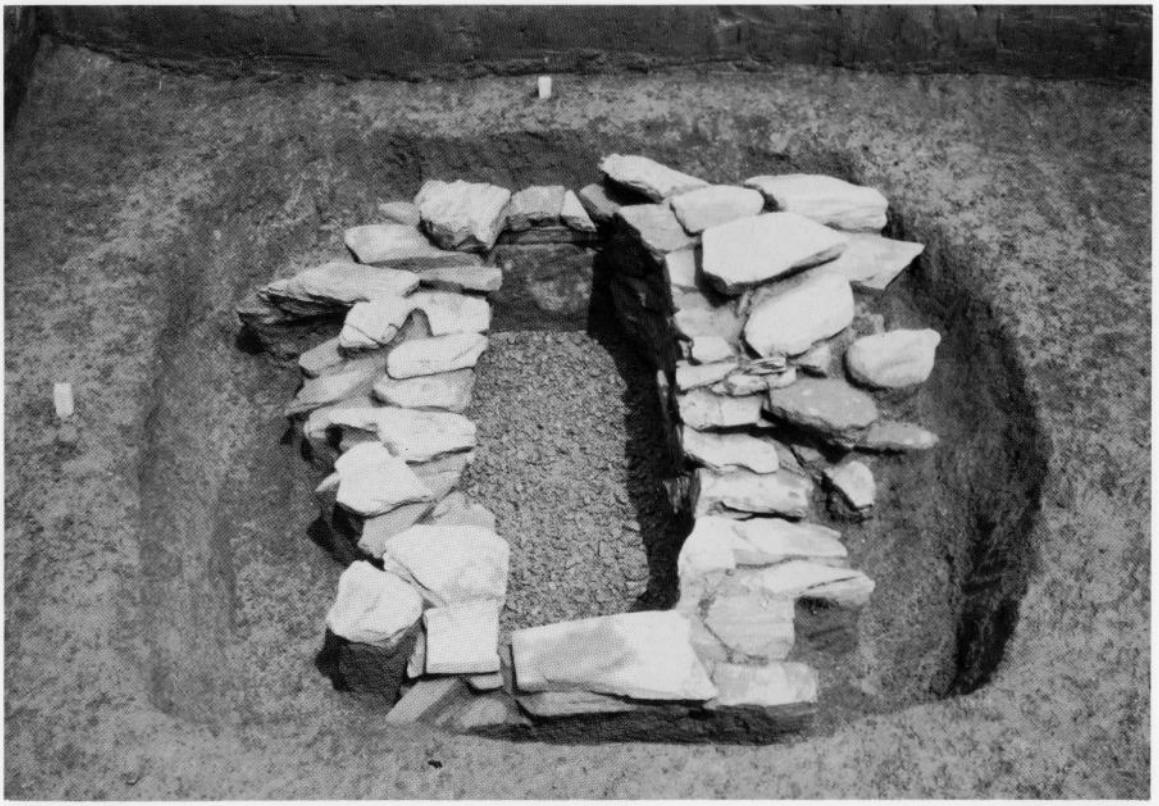
(1)　1 号墳玄室左側壁







(2)　1 号墳出土遺物



(1)　C－1

(2)　P－1

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —4—

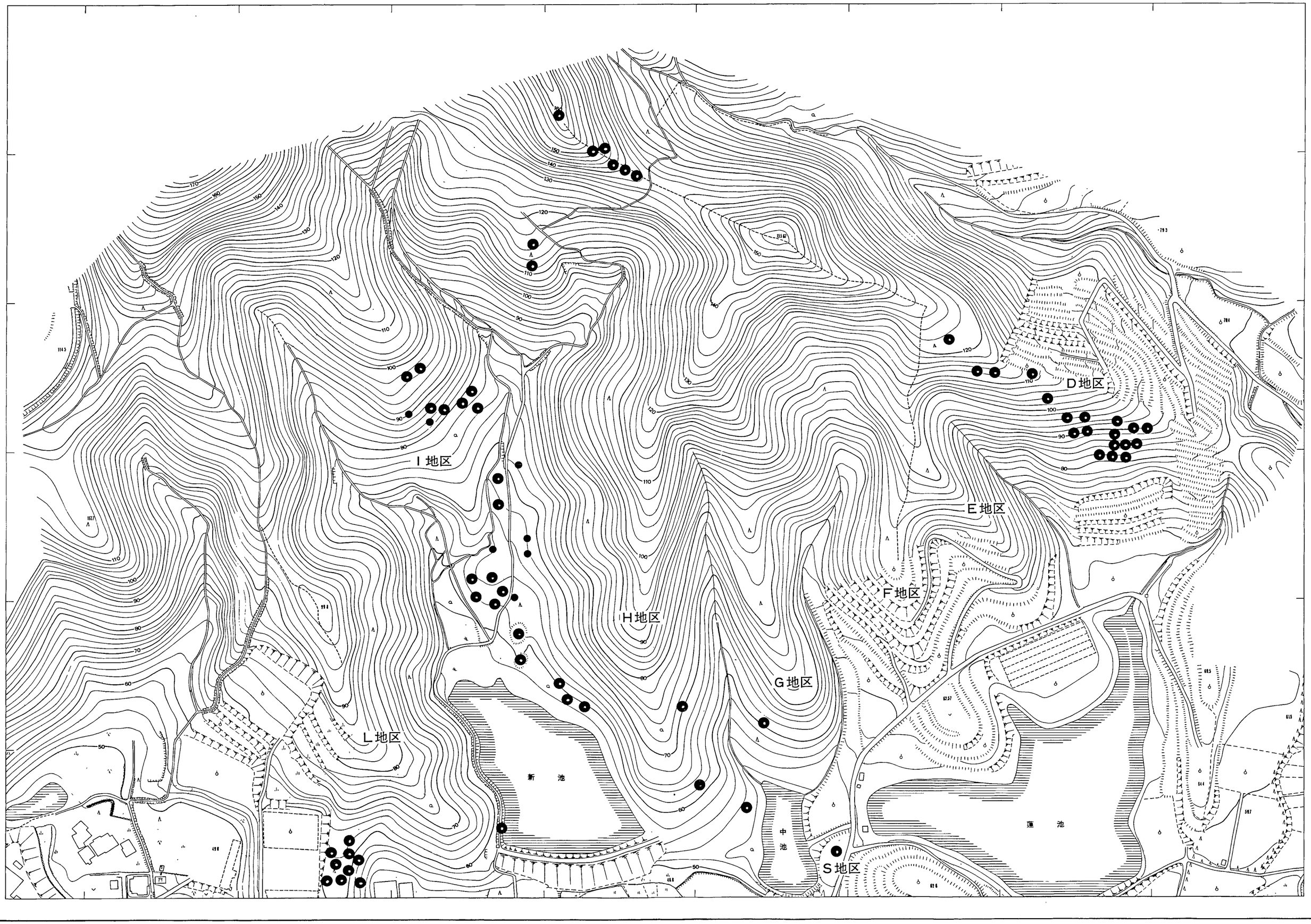
昭和59年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　隆文堂印刷株式会社

北九州市門司区畑田町1—1



付 図 柿原古墳群地形図 (1/2,000)

0 200m